THE CENTRAL REVIEW

中央公論

二月號

第廿八年第三號　第貳百八拾八號

高橋五郎先生譯

ベーコン論説集

（十一版）

要目

◎眞理を論ず ◎死を論ず ◎富を論ず ◎美を論ず ◎復讐を論ず ◎逆運を論ず ◎迷信を論ず ◎狡猾を論ず ◎自愛を論ず

◎交友を論ず ◎商議を論ず ◎猜疑を論ず ◎攝生を論ず ◎談話を論ず ◎幸運を論ず ◎稱讃を論ず ◎親子を論ず ◎忿怒を論ず

◎戀愛を論ず ◎旅行を論ず ◎貴族を論ず ◎豪膽を論ず ◎園圃を論ず ◎統治を論ず ◎忠告を論ず ◎遲疑を論ず ◎似智を論ず

◎高地位を論ず ◎無神説を論ず ◎功名心を論ず ◎習慣と教育を論ず ◎青年と老年を論ず ◎結婚と獨身を論ず ◎虛僞と假扮を論ず ◎學問及讀書を論ず ◎名譽と聲聞を論ず

◎邦國の眞偉大を論ず ◎人に於ける天性を論ず ◎事物の變遷を論ず ◎嫉妬及羨望を論ず ◎畸形及癈疾を論ず ◎仁愛慈悲を論ず ◎禮式禮儀を論ず ◎從者及朋友を論ず

◎外十四章

全一册 總クロース金字入美本 定價壹圓貳拾錢 郵稅拾貳錢

◉東京日々新聞批評『……而も警句に富み用語の自在なる咳唾悉く珠玉なりといふも恐らくは過褒ならず』

故田岡嶺雲著【三版】

數奇傳

▼序文 雪嶺博士外十五氏

▼挿畫 未醒、芋錢、月村七枚

總クロース金文字入美本

全一册 正價金九十錢 郵稅金十錢

著者自ら序して曰く『數奇傳一篇、是れ予が生きながら屍の上に建てたる自撰の墓誌也』と。著者病臥五年、纔に三尺の牀上を天地として、其轗軻數奇の半生を追懷して筆硯に遣る、即ち此篇を爲す、戀あり、貧あり、病あり、放浪あり、下獄あり、觀戰あり、多恨善愁の著者が運命に泣き、運命と闘ひ、遂に運命に安ずるの閲歷は正に詩よりも波瀾曲折に小說よりも多趣多奇也

戸川秋骨先生譯

エマーソン論文集

▼上下二册總クロース金文字入美本▼

上卷壹圓四拾錢 下卷壹圓貳拾錢 郵稅壹册拾貳錢

上卷目次〔四版〕

◉歷史論 ◉靈法論 ◉細慮論 ◉圓環論 ◉自恃論 ◉戀愛論 ◉勇壯論 ◉智力論 ◉報償論 ◉友情論 ◉大靈論 ◉藝術論

下卷目次〔再版〕

◉詩人論 ◉作法論 ◉政治論 ◉經驗論 ◉進物論 ◉名目論 ◉人格論 ◉自然論 ◉改革論

發行所 東京市神田區雉子町 振替東京七九九五番 玄黃社 ◉全國書店賣捌

名實備はれる天下獨歩の作文自習書

文學博士 芳賀矢一先生 杉谷代水先生合編

第十版

作文講話及文範

菊判上下二冊千四百頁●送料内地二十錢●臺樺四十錢鮮支五十錢

定價金參圓

特價金貳圓六十錢

時勢は進歩し、文章の必要益急切也。文學界、教育界、及一般社會の要求を合一し、生きたる實用文と強く美はしき時文を作るの腹を養ひ、立案結構の呼吸より死活細大の技術を説くに常識的斬新の方法を以てせるは本書也。古今東西の作文法、修辭學、雄辨術及内外文豪の實地經驗談を打つて一丸となし、古文、今文の大寶庫を開いて、あらゆる代表的模範文を目前に示せるは本書也。作文の自習者は最も書を選ばざるべからず。天下獨歩の名聲を擅にせる本書は。實に現代唯一の作文自習機關也。

本書は文部省通俗教育委員會の推奨を受けたり。

發行所 東京神田（振電 替本 五四一 〇一〇 一三三 番〇六） 富山房

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

五十編まで完成全部取揃高需に應ず

現代一流 八大家校訂編纂

袖珍名著文庫

寸珍美本毎編二百頁定價各冊上製卅錢並製廿三錢郵稅各四錢

一 芭蕉翁繪詞傳 附句集	一八 萬載才藏集	三五 落語選
二 近松淨瑠璃三種	一九 花月草紙	三六 續々鳩翁道話
三 雨月物語	二〇 鳩翁道話	三七 草草紙
四 假名文章娘節用	二一 綟手摺昔木偶	三八 笑談五種
五 今昔物語	二二 夢想兵衛胡蝶物語	三九 他我身の上
六 近江縣物語	二三 同 後篇	四〇 保元物語
七 狂言二十番	二四 假名手本忠臣藏	四一 平治物語
八 西行山家集	二五 慶長見聞集	四二 太平記忠臣講釋
九 風流志道軒傳	二六 源氏物語忍草	四三 芭蕉翁文集
一〇 春花五大力	二七 松乃葉	四四 因果物語
一一 俳諧水滸傳	二八 春雨物語	四五 神皇正統記
一二 よものあか	二九 世間用心記	四六 殉難前後草
一三 國姓爺合戰	三〇 をり〱草	四七 海道記 廻國記
一四 謠曲二十番	三一 和漢朗詠集	四八 忠臣藏皮肉論 外二種
一五 世間娘氣質	三二 松浦佐用姫石魂錄	
一六 日本永代藏	三三 仝	
一七 日本新永代藏	三四 東遊記	

第四十九編 **近世畸人傳** 伴信友著 饗庭篁村先生校訂

當時平安文學界の四天王の名ありし伴蒿蹊の著、碩儒碩德孝義貞烈歌人俳人百餘を採りて傳記逸話の粹を蒐む各人物既に傑物、作者亦非凡也。花實双備の名著として後代永く傳はるべきもの。

第五十編 **川柳選** 芳賀矢一先生校訂

十七文字の小詩形、諧謔腹を抱へしめ諷刺襟を正さしむ。寸鐵人を殺すとは夫れ川柳の謂乎蓋徳川盛時の特產物也。本編特に國民性を洞見したる芳賀博士の撰他集と類を同らせず粹も不粹も宜く諷玩すべし。

既刊書解題進呈 往復葉書申込

箱入五十冊・卅冊 定價解題に詳し。

發行所 東京神田 （振替 電本）五四一 〇一〇 一三三 番〇六 **富山房**

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

新春先づ開く文壇の花

文藝倶樂部

二月號 一日發行 第十九卷 三號 正價廿五錢 郵税二錢五厘 前金 郵税共 十六冊一年 金三圓九十錢

小説 **紫の鳥** (古洞畫)……生田葵

小説 **黑い手** (春汀畫)……柴田流星

▽演藝當座帳……鬼太郎

▽鬼は外……闇太郎

○東京花柳界の今昔……近藤蕉雨

○奇抜の廣告術……M T生

○電線の屑拾ひ……いちよ

●木挽町の樂屋裏……濱村米藏

●牛と馬、虻と貉……曉紅

●此頃の美味き肉食……霞城生

▽本町誌……思案

▽伊豆の溫泉……清秋庵

○花柳界覺え帳……おはる

○俳優貧乏難儀……夢の舍主人

○東京の清酒……迎月子

小説 **郭模樣巴染色** (清方畫)……生田蝶介

講談 **千利休** (桂舟畫)……細川風谷

東京本町 博文館

(前付の四)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

好評讙囂倏忽三版

現代諸名家翻譯　中村不折先生裝畫

□表紙空押及金模樣摺込　天金綠製本堅牢且地麗

近代西洋文藝叢書

●第一期刊行●　十二冊

總紙數約七千頁
大判總クロース
特製頗瀟洒函入
正價每册壹圓
小包料內地一二錢

（第一卷）

決鬪

附　生活の河

クウプリン氏著　昇曙夢君譯

中村不折畫伯裝幀
紙數五百八十頁
正價壹圓　小包料內地二十錢

『決鬪』は露國現文壇の權威ク氏の代表的傑作、現代文學の最大産物を以て聞ゆ。

主題は近代思潮を背景に、年若き少尉と美しき中尉夫人との戀を經緯として某聯隊の闇黑面を描破せるもの。期せずして露國軍隊の病所に觸れ、日露戰爭に於ける敗戰の主因を悉く指摘して當局者を戰慄せしめ一國の輿論を沸騰せしめたるもの。其主觀の徹底せる、描寫の深刻精緻なる、情味の豐麗なる、技巧の精新なる、蓋し稀に見る所。結末に附したる『生活の河』は同作家短篇中の白眉なり。

東京本町　博文館

ガブリエレ・ダンヌンツィオ著
文學士森田草平氏序文
文學士生田長江氏新譯

死の勝利

初版發行即日賣切 再版 製本出來

總洋布特製美本
定價壹圓四拾錢
郵送料八錢

近代名著文庫

第壹篇

『死の勝利』の、題材にとれるは、近代人の近代的特色を發揮したる戀愛也。悦樂の一瞬時にも洞察の眼を閉ぢがたき戀愛也。接吻せられたる額の背にも、自我の冷笑するを禁じ難き戀愛也、熱烈と冷酷と、渴望と、唾棄と、同情と敵意と、靈感と淫縱とを一にしたる病的戀愛の一切也。而して此濃厚なる題材を貫くものに『所有せむが爲に滅却する』の哲學あり、新しき『人生の肯定』あり、舊くして新しき『愛の死』あり。社會の暗黑面に對する忌憚なき暴露は巧緻を極め、性慾の衝動と犯罪の心理とに對する周到なる解剖は、讀者をして戰慄色を失はしむるものあり。近代の藝術壇に於て最も權威ある傑作として江湖に薦む。

東京麴町區飯田町三丁目二十五番地
新潮社
振替東京一七四二番
電話番町二一二三番

櫻井鷗村著●後進砥礪の俊傑傳

(三版)

リンコーン物語

菊判全一冊總布製金文字入美本●リンコルン肖像コロタイプ●挿入寫眞四葉

定價壹圓貳拾錢●送料十二錢 支那、朝鮮、臺灣、樺太四拾錢

今回日米交換教授の爲め來朝のハミルトン、メービー氏が米國人の理想的人格として擧げたるリンコルンは身を賤農に起し幾多波瀾裡に大修養を積み遂に大國の元首となり殆んど壞亂せむとせる國家を救ひ四十萬奴隷の鐵鎖を絶ち能く善政を施したる立志傳中の第一人なり彼が現代人物崇拜の中心たる所以は功業の偉大と人格の光輝との相俟つに出るべし今や我國人物を求むると甚だ急なり著者五ケ年の日子を費やし參考涉獵敢て本書を上梓す邦文に成れるリンコルン傳中にありては蓋し白眉ならんか

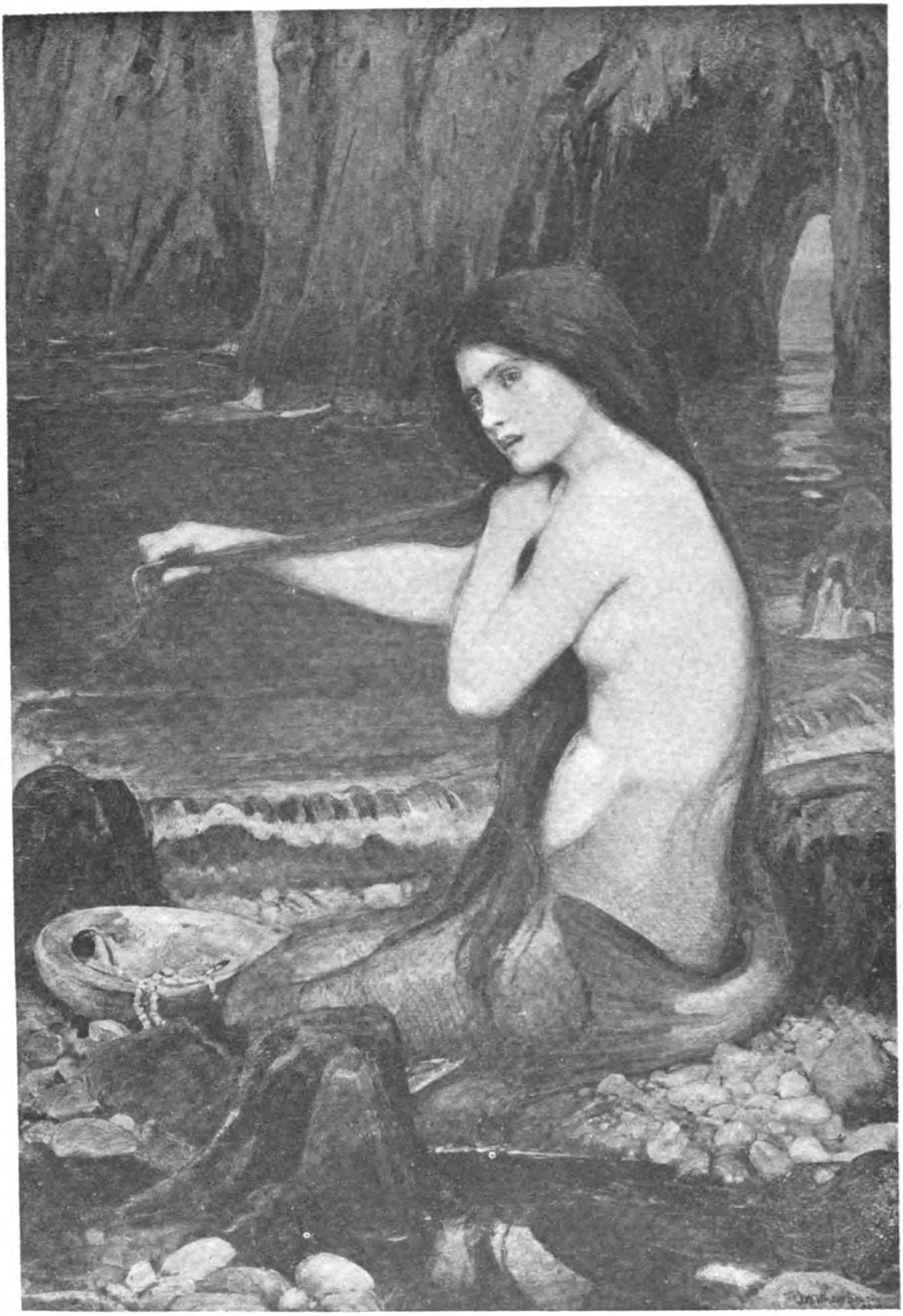
發行所 東京市麹町二丁目 振替東京七八四七 **丁未**(ていび)**出版社** ◎賣捌全國各地書店



中央公論第廿八年二月號目次



I. W. WATERHOUSE. R. A.



"THE MERMAID"

中央公論



二月號
第廿八年第三號
第二百八十八號

桂公の政黨組織

（一）

民間に聲高き憲政擁護閥族撲滅論の由て生じたる動機、及び性質の是非善惡は姑らく措くも、其の影響の輕少ならざることは、苟くも政局に心を寄するもの丶注意を逸す可らざる所也。

此の論の理由は一にして足らざるも、其の結論を要約すれば、蓋し政黨內閣の出現を以て憲政の要道に適すと爲し、政黨內閣に非ざるもの、議會（殊に衆議院）に黨與を有せざる內閣を目して非立憲內閣と爲すにあり、即ち政黨ならざる藩閥官僚の政權を握るを許さず、又藩閥官僚と雖も化して政黨とならば、則ち之を迎へて以て立憲的と爲すもの也。

吾人の見を以てすれば、政黨は勢にして理に非ざる也、我が憲法の孰れの條章にも元老と政黨とを認めざるが如く、純理よりいへば、政黨政治を以て憲法政治なりとのみ即斷す可らず、殊に少くも政黨政治に非ざれば立憲政治に非ずといふは不合理也。

且つ政黨政治は個人主義と能く適合するも、帝國主義とは往々にして相容れず、少くも事實上互ひに不便とする所なきに非ず、政治の目的が單に個人の本能と生活（殊に物質的なる）とを滿足せしむるに止まらず、國家を向上發展せしめて其の權威を進暢し、由て以て國民の崇高なる精神を滿足せしむるともまた政治の高遠なる所以たるに於て、世界列國漸く帝國主義に進向し、延きて政黨の勢力を漸減するともまた爭ふべからず、最も政黨政治の妙用を得たりと稱せらるゝ英國に於ても、今や自由統一の兩黨相對峙するに止まらず、愛耳蘭黨の外新たに勞働黨の起るあり、其の力を籍るにあらざれば、自由黨と雖も政局を奈何ともす可らざるに至れるも、亦政黨勢力の漸く減少する一兆證と視做さゞるを得ず、社會問題と共に、外交問題が政治上最重要の案件とせられ、隨つて從來主として內治にのみ重きを置ける今の自由黨政府と雖も、列國關係の複雜なるに隨つて國家利權の消長太だしく錯綜し、多くの問題を犧牲としても必らず國權を主持せざる可らざるに至れるを視るに、英國政黨政治の色彩が漸くして減少しつゝ變易し往くや明らか也。

人事の漸く密なるに隨ひ、總ての事皆專門的技術的ならざる可らず、分業益々細かにして且つ深きを致す所以にして、此の理法より視るも、軍事が軍人以外の手に委す可らざるが如く、國家の外交も、財

政も、亦皆專門家の技術に待たざるを得ざらんとす、黨派の政局に立つに隨つて、一辯護士又は一商人にして卒爾として外交官たるを例とする米國に於ては、時に優秀なる材物を擧げ得るとありと雖も、其の多くは概して外交の辭令にも嫻はず、不便甚だしきがために、今や米人等は、外交官たる進路に一定の段楷ある國の習風を佳として頗ぶる羨むの傾向あり、殊に率直なる其の國人中には、會社整理の引受を營業とするものあるが如く、一國の政治もまた請負事業と做すべしとさへ主張する學者もあり、政治が專門の智識技術を要するに於て、一部政黨員の如く、徒らに粗大なるもの、堪ゆる所にあらずして、竟に專門政事家の手に移るに至らんと、また必至の勢なるべし。

此等の理勢より考慮するに、政黨政治を以て最善の政治と爲し、之にあらざれば立憲政治にあらずといふが如きは、少くも世界の大勢を無視したるもの也。

然れども我が民間の議論は、寧ろ政黨政治を歡迎し、政黨政治にあらされば立憲政治の眞髓を得ずと爲し、政黨の組織したる内閣にあらざれば、擧げて藩閥官僚の内閣なりと做し、國民を驅りて之を嫌忌せしめんとする傾向あり、全く理にあらずと雖も、其の勢ひたるや否定す可らず、且つ此の勢ひは區々の理論を以て制遏す可らず、徒らに之を抑止せんとすれば、水流を逆するが如く、事難くして却つて險惡なる結果を來すの虞なきに非ず、茲に於てか經世に心を寄するものは、寧ろ政治の型式を一變して政黨政治と做し、努めて其の利を擧げて弊を除くを以て智なりとすべし。

（二）

我が國に於ける政黨と內閣との過去の關係を視るに、第二次伊藤內閣は、彼の對外硬を標榜せる六派の聯合に當るがため、外務大臣陸奥伯を透して自由黨の援助を受けたりしを以て、其の報酬として板垣伯を入て內務大臣となしたりき、之に繼げる松隈內閣(即ち第二次松方內閣)は、專ら進歩黨の援助を受けたりしが、間もなく相斷ち、外務大臣大隈伯を始め、神鞭、武富等の進歩黨官吏亦悉く去れり、第三次伊藤內閣の之に代るや、政黨の交渉を斥けて應ぜず、而して自由進歩の兩黨合同して憲政黨を組織するに及び、伊藤公は直ちに其の內閣を明け渡し、玆に純然たる憲政黨の內閣成り、大隈伯自から總理及び外務を兼ね、內務板垣伯、大藏松田氏、司法大東氏(義徹)、文部尾崎氏(後に犬養氏)、農商務大石氏、遞信林有造氏といふ顏觸にて、陸海軍(桂公、西郷侯)の外は、全く政黨出身者のみなりき、然るに此の內閣は不幸にして僅々六ヶ月にして倒れ、之に繼げる第二次山縣內閣は、憲政黨中より舊進歩黨(憲政本黨)を分離せしめたる舊自由黨及び國民協會と提携したり、既にして伊藤公自から自由黨を基礎として政友會を組織するや、直ちに山縣公に代りて新內閣を作り、外務(加藤高明男)、陸軍(桂公、後に兒玉伯)、海軍(山本伯)の外は、悉く政友會員を採用したりき、即ち內務末松子、大藏渡邊子、司法金子子、文部松田氏、農商務林氏、遞信星亨氏(後に原敬氏)なりしが、渡邊藏相の頑强なる消極主義のために倒れて、未だ相當の實蹟を擧ぐる能はざりき、之に繼げる第一次桂內閣は、後に政友會と妥協して其の援助を受け、之に代れる第一次西園寺內閣は、首相西園寺侯が政友會總裁として原氏を內務に、松田氏を司法(後に大藏)に据ゑしのみ、外務(始めは加藤男、後は林伯)、大藏(阪谷男)、陸軍(寺內伯)海軍(齋

藤男)、文部(牧野男)、農商務(松岡男)、遞信(始めは山縣伊三郎氏、後は堀田子)を始め、司法にも後千家男を据ゑて、純然たる政黨內閣とは距離あるものなりき、第二次桂內閣は情意投合の名義を以て又々政友會の援助を受けしが、第二次西園寺內閣は、原、松田兩氏の外に、長谷場氏を加へしのみ、重要なる大藏には山本達雄氏、外務には內田康哉子を容れて、同じく純乎たる政黨內閣を作るに至らざりき。

過去の實績に徵するに、純然政黨內閣たりし憲政黨內閣及び政友會內閣(即ち第四次伊藤內閣)を始め、最近兩次の西園寺內閣は、內外に對する威望に於ても、信用に於ても、理想を距ると太だ遠く、政黨政治の主張者をして、頗ぶる忸怩たらしむるものなくんばあらず、是れ吾人が政治の實質其のものに重きを置きて、其の型式名義を問はざる所以也。

然れども世人多く政治の型式に重きを置きて、其の實質を第二に措くは、我が政治の進步より視て悅ぶべからず、今次の政變に會ふて、直ちに憲政擁護といふが如き漠然たる意味なき議論が勢ひを得て、國民の感情動もすれば之に煽せらるゝは、是れ我が政界の風氣の太だしく幼弱なる一證にして、識者の憂ふる所、此の病弊の對症療法としても、玆に政治の型式を一變する必要なきにしもあらず、蓋し我が國民は實質よりも寧ろ多く名分に拘泥する傾向あり、支那の學風に囚はれたる一種の國民性にして、大義名分を重んずるは其の長所なれども、利害得失の打算にまでも名分に拘泥するは、支那人が共和の名を悅びて政治の實質の良否を重んぜざると齊しく、又實に我が國民の短所也、然かも國民性は容易に改むるを得ず、而して政黨政治論が假令世界の大勢に適せざるも、三十年來主張せられて、今や滔々勢ひ

を爲せる以上、之を利導するも亦政治上の一手段ならざるに非ず、之を利導して政治上の爭議を政治實質の是非得失に制限するは、實に政治の進歩也、此の點より觀て、政黨政治の實現は洵に勢ひの已む可らざるものと稱するも可也。

如何なる事物も利弊の相伴はざるはあらず、水火の欠く可らざるも、洪水となり火災となれば人を損するを測る可らず、然かも其の害を怖るゝがために全く水火を斷つべからず、政黨には多くの弊害あり、而してまた利の之に伴ふとも否定すべからず、議會に於ける是非利害の論をして歸着點を分明ならしめ時として國民を指導して其の方向を謬まらざらしめ、或は群衆をして適當なる節度に從はしめて、以て一定の秩序を保つに便なるが如き是れ也、日露媾和の事あるや、所謂輿論なるものは皆之に反對し、殊に新聞紙の如き擧げて熱烈なる痛擊を當局に加へたりしも、國民の多數が之に謬まられず、政府また其の所信を斷行するを得たりしものは、當時政友會ありし効果にして、其の末輩中には、素より俗論に雷同して媾和反對を主張するもの多かりしも、西園寺總裁等が深く時局の眞相に鑑みて媾和の已む可らざるを認め、黨員を節制したりしが如き、如何なる非政黨主義者と雖も之を否認すると能はざるべし、隨つて政黨政治の如きも、其の弊を避けて其の利のみを擧ぐるに努めば、効果大に觀るべきものあるや必せり。

我が國政變の歴史を觀るに、陰謀密策多くして其の爭ひや太だ公明ならず、近くば西園寺内閣が政友會と薩摩派と提手し、以て長州派を孤立せしめて之を壓倒せんとし、其の結果陸軍を抑へて海軍のみを

擴張せんと欲せしが如き、長州派壓迫のためには或は已む可らざる秘計たりしも知れず、然れども此がため官僚派一部の反感を激發し、殊に一二策士に乘ぜられて、竟に瓦解を免れざりしが如きは、純然たる政黨政治に於ては視る可らざる爭ひ也、若し內閣起倒の動機をして、主として議會に多數を得ると否とにあらしめば、政治上の爭ひは漸く公明となりて、暗晦陰秘なるものの跡を收むべく、隨つて近時の新聞記事の如く、信僞を顚倒するとなきを得、國民も亦徒らに感情的に教唆し煽動せらるゝとなく、明白なる理路に由て嚮ふ所を解するに至るべし、乃ち政治の局面をして公明簡易ならしむるも、政黨政治は比較的に有効なるべし。

但だ我が國體に於て、憲法の精神に於て、內閣をして議會の多數を得ると否とのみによりて進退せしめ、事實議會のみを重くして、天皇をして竟に虛器を擁せしむるが如きとは之を避けざる可らず、此の點に於て大なる注意を加へ、鹽梅其の宜きを得るを要す、而して是れ太だ難事には非ざる也。

（三）

今回の政變の與ふべき影響は、寧ろ政府側に非ずして、却つて多く政黨界にあるべし、政黨の分野には、餘り遠からざる將來に於て、大なる變化を來すべき情勢あれば也。

政友會の總裁たる西園寺侯は、器宇高朗にして風懷淡如、人品洵に淸しと雖も、政黨の首領としては執着力を欠き、また破壞的戰鬪的能力を欠くと多し、且つ其の人格及び健康に於て、永く現地位を持續せんとは問題なるべく、松田氏原氏等をして第二の西園寺侯たるまでに信望を得せしめんには、尙ほ幾

多の經歷を重ねざる可らず、其の部下を統御するがためには、素より多くの苦心を要せざるも、上は至尊の御信任を得、下國民の尊崇を受けしむるまでには、尙ほ實に苦心せざるを得ざるべし、乃ち其の間、少くも西園寺侯と匹似すべき信望高き人物を迎へて以て第二の總裁たらしめんとは、政友會のために計りて欠く可らず。

政友會は曾て桂公を迎へて總裁たらしめんと欲し、密かに畫策を費したるものありしが如く、政友會が好みて公と妥協せし原因の一もまた全く茲にありしや疑ふべからず、今や政友會の感情は非桂論に傾むけるも、若し公にして進んで政友會の總裁たらんと欲せば、或は竟に之を歡迎するに至るもまた量る可らず、公を敵に廻し、而して西園寺侯に萬一の事あらば、政友會將來の立場として太だ大なる不利なると言を俟たざれば也。

且つ政友會の內部には、桂公一派を怖るゝもの少からざるべし、吾人の了解する所によるも、政友會中東京の市政に對して、第二第三の日糖事件を生ずるが如き秘密を有するもの少からずして、其の證跡は現に公一派の掌中に握られて動かすと能はざるに似たり、公にして一び傷ける獅子の如く、政友會に對して苦戰惡鬪を敢行せば、其の結果、政友會に取て決して侮る可らず。

國民黨の多數は、其の政權を得るがため、桂公の出てゝ政黨を組織せんとを翹望すべき理由あり、彼等は公が政友會に入て總裁たるを好まず、寧ろ別に一黨を立てんとを期待すべし、現に犬養氏一派の外、憲政擁護の運動に加はらざるも、實に其の一證とす。

若し桂公にして一黨を組織せば、國民黨の過半は之に趨くべく、隨つて公は假令衆議院に過半數黨を作り得ざるも、稍々半數に近きものを得べく、或は政友會に入らん乎、其の多數は彌よ大にして、國民黨の如きは殆んど存在の基礎をも動かさるべし、乃ち公の黨界に入るは、此の既成兩黨の消長盛衰に關して大なる問題たるや爭ふ可らざる也。

現時の政爭は、桂公をして再び政友會と妥協せしめざるや明白也、政友會の決意如何に由ては、公も一大決戰の方針を定め、議會解散を斷するも亦測る可らず、否、本誌の刊行せられて世に出づるときは議會既に解散せられし後なるもまた知るべからず、議會解散を見んか、公は必らず進んで一大戰を試むべし、果して然らば其の政黨の分野に及ぼす影響の小ならざる、多言せずして明白ならずや、而して是れ政局の現狀打破也、人心を新たにする所以也、竟に政黨政治を實現する所以也。

（四）

桂公自身よりいはゞ、今新たに政黨を作らんよりも、既成政黨に入りて其の統帥の地位に即くを便とすべし、即ち政友會に入り、推されて其の總裁となるが如きは、勞少くして功多く、政友會をして益々尨大ならしめ、隨つて公の勢力彌よ高きを加ふべし。

然れども既成政黨に入るときは、其の黨は主にして新たに入るもの客たらざるを得ずして、主客の地位自から懸隔あり、黨中に蟠屈せる黨閥其の他の諸弊を刋除するにも、多くの不便を免かるゝ能はず、是れ伊藤公が其の實自由黨（當時は憲政黨）を基礎としながら、自から新たに政友會を創立して、以て

其の主位を占めたりし所以ならずや、桂公にして若し既成政黨の弊習を看破し、十分に之を掃除して、以て政黨改良の實を擧げんと欲せば、寧ろ多少の勞苦と困難とを冒しても、自から主となつて新政黨を組織するに如かず。

國民黨及び同志會中には、私かに心を桂公に寄する者あり、彼等は公が進んで新たに一黨を作らんとを欲し、公の大傘に參集せんことを希望する者多きや事實爭ふべからず、若し公にして政友會に入らんか、彼等は其の初志に反くも尙ほ政友會に入らざるべし。

或る消息通は、桂公にして新黨政を作らば、國民黨より七十人、政友會より五六十人、中央倶樂部より三十人、同志會より二十五人を網羅し得べく、即ち一擧にして百七八十人の代議士を衆議院に得べしといへり、果して然らば、公の新政黨は政友會と對峙して略々數に於て相當るべく、中立又は無所屬の向背如何によりて、議院に勝敗することとなるべし。

桂公の宮中に入るや、其の中外の政務に老熟せるに於て、洵に無比の内大臣たるべしと雖も、公其の人の眞意よりいはゞ、寧ろ政海に游泳して自由に其の尾鰭を振ふを可なりとすべく、國家社會の人物經濟よりいふも、後者を撰ぶと、世論の一致する所ならん、唯だ聖旨忤ふべからず、而して今や再び優詔を拜して政局に立つ、其の心中の苦、殊に世に對する苦慮は實に諒とすべし、卒爾として宮中を出づるの苦に併せて、政海に自由を得るの悦と、交々胸中に來往して萬感殆んど言ひ易からざるべければ也、之を目して「赤い信女の孕める」と做すは酷に過ぐ。

桂公は此の際斷じて政黨の人たるを要す、之によりて國民と共に政黨を淳良なる方向に指導し、既成政黨の宿弊を改めしむると共に、政黨政治を或る程度に制限して、以て君主政治と適當なる鹽梅を得せしむるは勿論、政治の型式一變に由て、其の性質の改良を進め、以て政局の發達を圖らば、所謂憲政の進歩に貢献すること少からざるべし、公既に位人臣を極め、功業一世を掩ふて他に求むべき所なし、然るに政局紛糾の後を承け、多くの不便不利を冒して出づ、大に決する所あるや言を俟たざらん、乃ち政治の型式を一變し、伊藤公が成さんと欲して成さゞりし所を成すは、豈公の志ならざらんや、今や大正維新に際し、人心の新を求むる急にして、何人も現狀打破を欲せざる莫し、公果して經綸の志あらば、今や大に奮つて爲すべき機會ならずや。

（五）

此の論を艸し終るや、客あり、來り告げて曰く『桂公彌よ新政黨を組織するに決し、其の黨名を立憲統一黨と定め、主義綱領は今や其の訂正加除中に在り』と、果して然らば、本誌の發刊せらるゝ時は、其の政綱また既に發表せられて、世上の批評極めて盛んなる時なるべし。

嗚呼是ある哉、桂公竟に斷ず、政友會に往かずして新たに一黨を立つ、準備すること伊藤公の如くならず、伊藤公の如く南船北馬、多くの遊說を爲すことなく、卒爾として宮中より出でゝ、政局を擔當し、未だ幾くならず、又卒爾として一黨を立つ、世或は其の應酬に遑あらずとすべし、然れども公や去年歐洲に遊ぶの以前、既に政黨に志ありしといふ、乃ち事卒爾と雖も審かに慮り遠く謀る所ありしなるべし、

吾人は世の政黨政治論者が之を歡迎し、其の主義政綱を視て公平に之を是非するを疑はざる也、彼の憲政擁護を唱ふる者の如き、また之に由て一半の志を成したりともすべし、吾人は更に希ふ、之に由て政黨の爭ひをして公平沈着ならしめ、以て所謂憲政の眞進歩を來さんことを。

若し其れ立憲統一黨其のものに對する吾人の批評の如きは、之を後號に讓らざる可らず、江湖の君子また吾人と其の研究を盡して可也、理により事實に基き、是を是として非を非とすべし、感情上の愛憎好惡を加ふべからざる也(一月十六日稿了)

國防論

(一)

一死先帝に殉じて痛く民心を感動せしめたりし乃木大將は、世上往々海主陸從といふが如き軍備論を唱ふるを慨し、軍事は　天皇の大權にして臣下の容喙すべからざる所、唯だ　天皇の諮詢に遵ひ、軍事參議官之を議決し、以て　天皇の御裁斷を仰ぐべく、內閣は勿論、議院の如き寸分も之に干與すべからず、況んや輿論が之を是非して海陸に主從を分つが如き、實に以ての外なりと爲し、死に臨んで軍事參議官の職分に對する痛切なる言說を貽せしと聞く、大將の進止を崇仰する我が愛國の士は、玆にもシリアスに此の大將の所言を味ふ所ありて可ならん。

近時の政變に於て、吾人は軍人の色彩の殊に異常なるを目睹して、大なる印象を刻せざるを得ざりき、一は西園寺侯自から其の内閣を抛ちしは、全く陸軍が强硬に二個師團增設案を主張して讓らず、ために行政財政の整理を意の如く實行すると能はざりしが故なりと演說せるとにして、一は桂公が新内閣組織の大命を拜するや、海軍大臣の留任を求め、齋藤男一ぴは之を諾せるも、海軍の元帥大將以下の大官等が、海軍擴張論の實行を主張して男の進退を要請する所あり、男はために其の初心を一變し、竟に優詔降下の已むを得ざるに至れると是れ也。

陸軍の强硬なるに對して、政黨及び多數の新聞紙は、口を極めて攻擊し、甚だしきは國民の敵なるが如く言做せるも、海軍の此の擧動に對しては、曾て非難を加へしもの少く、政黨の如きは寧ろ之を敎唆する傾向ありき、陸軍の一局長は、元老及び實業家を歷訪して增師計畫の必要を辯明し、大臣また然かする形迹はありしも、元帥大將等の大官が日夜集會して、大臣の進退にまで容喙するが如き不穩の形迹は莫かりき、勿論陸軍大官等の心中を忖度すれば、上原男の辭職後、容易に其の後任たるを諾するものなかるべく、即ち一種のストライキに似たる形迹を視るに至るべく豫想されしも、事實としては未だ寸分も現はれざりき、然るに海軍の諸大官等は、公然官署又は官邸に會合し、大臣を要請して必らず擴張案を承認せしめんとし、公然軍紀問題を生出すべき形迹の歷然たるものありき。

輿論が之に公正なる批評を下さゞりしは、吾人の嗤ふ所なるも、批評の有無は未だ以て事實を抹殺するに足らず、吾人は唯だ此の海軍の强梁なるを以て、等閑に附すべからざる問題とし、少くも陸軍と併

せて、識慮あるものゝ熟考すべきものたるを斷言せざる能はざる也。

我が陸海軍が互ひに競爭の姿にあり、和和せずして動もすれば却つて反目の趣向あるとは、憂國の士の殊に掛念に堪へざる所とす、況んや彼の輿論なるものを煽動し、互ひに之を利用（實は濫用）して其の志を成さんと欲するが如きをや、是れ吾人が茲に國防論を提唱する所以也。

（二）

國防を論ずるもの、動もすれば乃ち本國の防備といふ、然れども所謂我が本國とは何ぞや、唯だ一の島國の事乎、歴史よりいへば、皇化は中世まで未だ十分に奥羽蝦夷に及ばざりき、而して千島、小笠原、沖繩の諸島が我が版圖に入りしより未だ百年に達せず、唯だ假に島帝國のみを稱して本國とせば、而して之を防衛するためのみの國防とせば、陸軍は僅かに二三個師團あれば足る、何となれば其の必要は單に内地の動亂又は叛亂の萬一に備ふるに過ぎざれば也、敵兵が海を踰へて上陸するに備ふが如きは、是れ亡國の秋のみ、乃ち國防は主として海軍に待つべく、單に海軍あれば則ち以て足れりとす。

然れども記せよ、朝鮮は既に我が領土となれるに非ずや、而して南滿洲の利權は、十萬の生靈を殞し十五億の巨資を糜して始めて獲たりしものなることを、是れある以上、我れは最早島帝國にあらずして、半ば大陸國となれる也、少くも朝鮮は我が領土也、而して之を防衛するため、守禦線を滿洲にまで擴張せざるを得ざるや、三尺の童兒と雖も之を知り得べし、果して然らば單に海軍のみを以て國防を守る可らざるや亦明白ならずや。

（三）

我が國の人口は年々五十萬以上、甚だしきは六七十萬の增加を來すを例とす、然れども我が領域と其の產出する食物には制限あり、永く此の過剩の人口を收容する能はざるや明白也、露都ノヴヲ、ヴレミャの記者來りて日本の形勢を瞥一瞥して曰く『雞犬の聲到る處に聞へ、高山の山腹尙ほ隴畝あり、斯くして人口益々密度を加へば、勢ひ領地を海外に弘むる乎、佛國人に倣ふて生殖制限の人工法を用ゆる乎、然らずんば則ち亡國あるのみ』と、今にして佛國人を學ぶは不可能也、否、國運を衰廢せしむる所以也、亡國と共に必らず之を避けざるを得ず、即ち執るべき所の道は唯だ海外に發展するの一あるのみ。

所謂海外に發展する、必らずしも露國式に他の領土を侵奪するを要せず、平和的に我が移民を海外に出し、之をして其の勞力を用ゐて以て富源を開拓せしむれば足れり、唯だ我が此の平和にして而して已む可らざる海外の發展に對し、非人道的に惡意を以て之を阻止するものあらば、我れは我が名譽上必要上必らず之を排除せざる能はず、素より好む所に非ざるも、民族の生存上洵に已むを得ざるのみ。

此がためには海軍素より太だ必要也、而して陸軍また缺く可らざる也、我が民族の海外に向ふや、國旗之を保護せざるを得ざれば也。

（四）

陸海軍孰れが必要なりや、是れ實に問題也、海軍擴張論者は主として米國を目標とす、然れども米國が我れと抗爭するが如きは容易にあるべからず、我れ亦進んで米國と戰ふの必要あらず、近時米國の海

軍艦は、其の海軍の必要が主として太西洋方面に於けるパナマ運河の附近に在ることを明言せり、而して近く政權を得んとするデモクラット黨は、海軍擴張に反對し、甚だしきは非律賓群島の獨立をも期圖すといふ、果して然らば我が海軍が米國を目標として擴張を策する理由や薄弱也。

或は北守南進論を實行するが爲め、南洋諸島及び濠州群島に進張するに於て、海軍の擴張を要すとする乎、然れども玆に海軍を要すとせば、我が對手たるものは何の國ぞ、南洋に於ける和蘭領を爭はんと欲せば、其の背後にある獨逸と爭はざる可らず、濠洲に於てせば、現に我が同盟國たる英國を敵とせざる可らず、一は我に取つて甚だ不利也、好みて多くの敵を作り、求めて自から平和を破る也、一は同盟の義を破る破信の擧也、國の名譽としても斷じて行ふべからず。

果して然らば海軍擴張は何のためぞ、少くも西園寺内閣の計畫したりし海軍擴張のみを先にして、陸軍を第二位に措けるは非合理なりといはざるべからず、陸軍より節したる經費をも擧げて海軍擴張の資源に供すといふが如きは、單に政略としても過失たるに止まらず、また實に國防の大計に於て上策とすべからざるが如し。

（五）

我が日本の現地位は、已に半ば大陸國たるに止まらず、東洋の平和を保證するがため、支那問題解決に際して列國の卒伍たるに甘んず可らず、素より落伍者たる可らず、必らずや進んで主人たらざる可らざる也。

吾人は素より露國の復讐戰を必するものにあらず、又露國と再戰を期するものにも非ず、否、進んで露國と握手し、共に倶に斡旋して以て東洋の平和を維持せんと欲するもの也、然れども斯くするがため、東洋に於て彼我共に武力の平均を得ざる可らずと做す者也、苟くも其の平均を失すれば、彼れ伸びて我れ屈せざるを得ざれば也、彼れ假令自由專恣の主張を爲すも、我れは唯々として其の命を奉ずるの外なくして、到底親和を得るヿを得ざれば也、親和無ければ則ち平和なければ也。

世或は露國の兵力の絶大なるをいひ、我れ到底之と角す可らずと做すもの多し、然れども遠く歐露より大兵を出すヿは、其の輸送力の許さゞる所にして、之に給供すべき物資も亦足らざるあり、且つ用兵の區域にも自から制限あり、如何に多くを見積るも、彼れが東洋に於て用ひ得べき兵數は五六十個師團を踰えざる也、我れ豈之と角する能はざるの理あらんや。

夫れ支那の本土を保全して以て東洋の平和を守持せんと欲せば、我れは啻だに武力を以て支那の動亂を豫防するに止まらず、支那を侵略せんとするものゝ野心をも阻止せざる可らず、此がため大なる陸軍力を要する何ぞ多言を要せんや。

陸軍の擴張を以て、露國と再戰するものと做すヿ勿れ、彼れと勢力の均衡を保ち、之に由て彼我相重んじて相親み、由て以て協同一致して東洋の平和を期圖せんとするのみ、想へ、明治三十五六年中、露國にして日本の實力を誤算するヿなくば、彼の戰亂は必らず起らざりしヿを

此の理由よりいはゞ、國防上寧ろ陸軍に重きを置くを理ありとすべし、是れ吾人が世の俗論に反對し

て、敢て陸軍擴張を主唱して、一歩も退かざりし所以也。

* * * * * * *

然れども國防の方針も、亦一に國家の大計より算出して之を決定せざる可らず、海陸軍孰れを重しとする乎、孰れを先にする乎は、一に國の大方針によりて決せざる可らず、單に軍人のみに之を委す可らず、又政黨のみに委す可らず、必らずや國家の最高政治により、最上の智慮と經綸とに俟たざる可らず吾人は俗論が動もすれば我が國の大計方針を問はずして、輕々しく海陸軍の主從軒輊を云爲するの或は國を謬まらんとを恐るゝや深し、乃ち再説して以て識者の考慮を促がす、世の聵々者流、陸海軍人の強梁に對しても亦公正適切なる批評を下す能はず、却つて他を顧みて憲政の危機を絶叫す、果して何の心ぞや。

公論

圓熟期に於ける トルストイの藝術

中澤臨川

（一）

一八五七年に歐洲漫遊から歸つたトルストイは、故鄕のヤスナヤ、ポリヤナと莫斯科の間て目的のない月日を送つてゐた。所領地の監督のほかには、主に銃獵と社交て、其閑暇をつぶした。一八五九年に彼は莫斯科て『露西亞文學好愛者協會』の會員に推薦された。その時彼が公式にした演說の主旨とも云ふべきは藝術至上主義の辨明て、いたく當時の物議を牽いた。激越な『ルセルネ』を書いて歐洲から歸つた人の言說としては如何にしても受取にくい。要するにその頃の彼は不安定な過渡期に迷つてゐたのてある。

高加索の山の中て咲き出した天才の華はまだ充分に其確實性を保證する迄には行かなんだ。倦怠の一時期が續いた。彼は自分の才能が亂用され、徒消し盡されたと思つた。生命の太陽のもとて咲きほこつた春の野に一時の蔭が差した。それが爛熟した夏を待つまてには梅雨の期節を過ごさなければならなんだ。丁度『獵夫日記』のネフルドフのやうに、彼は『强い情熱と自己を指導する意志の缺亡』を感じた。燃ゆるやうな喝采を以て彼の二三の處女作を迎へた世間も一時全く沈

默に歸つた。

世間も疲るれば、彼も疲れた。

『私の名聲は非常に落ちた。その事實は私には打撃てあつた。併し今ては私は滿足してゐる。私は自分が世間に發表すべき或物を持つてゐると云ふ事を知つてゐる。然かも、私はそれを强い聲て現はす力をも有してゐる。世評など頓着する必要がない。』と、恁う彼はその頃の日記の中て言つてゐる。然かしそれは一時の傲語に過ぎなんだ。實際彼は自分でも自分の力量を疑つてゐたのだ。

するうちに、彼の生涯に深い影響を及ぼした一事件が持上つた。それは長兄ニコラスの死てある。後にも先にも彼の身の周圍の出來事が恁程までに强い感銘を彼に與へたものはなかつた。

好人物の敬神家のニコラスは高加索にゐるうちから泥酒の癖を作つて健康を害ねた。醫者から肺病の宣告を受けて氣候の好い南國のソーデンへ行くことを勸められた。ツルゲーネフが其頃書いた手紙に斯う言つてある。『ニコラス、トルストイの病氣を知らせた卿の手紙を見て非常に私は驚いた。斯樣に懷かしく愛すべき人が死ななければならないと云ふ事が有り得べき事てあろうか。然かし、なぜまた斯んな病氣を重らせるまて等閑にして置いたのか。例の無性を廢めて外國へ療治に出ては奈何か。馬車かそれとも他の惡い方法て高加索から遣つて來たのだろう。ソーデンへ寄こし給へ。此處ては歩々に肺病患者と出合ふほどだ。ソーデンの水は斯樣な病氣に特効があると見える。私は今二千バーストも遠い所から此手紙を卿に書いてゐるが、多少なりとも之が助になればよいがと願つてゐる。……彼がまた出發たなかつたら、それこそもう出發つ折はなかろう。……運命が我等を斃すのは渾な斯うしたものだ』と。

この手紙でも解かるやうに、ニコラスと云ふ男は皆の人から可愛がられてゐた。殊にトルストイに取つては離れがたない唯の一人てあつた。若い折に兩親を失つた彼はこの親切な長兄を杖とも柱とも賴んでゐた。

大學へも一緒に連れられて行つた。高加索へ誘ひ出して、聖彼得堡の放縦な生活から彼を救ひ出して呉れたのもニコラスであつた。友と云ふものを作るとの能きないトルストイには殊に何れだけ彼が好い侶伴であつたろう。

　ソーデンへ行つた當座、ニコラスの病氣は多少可ささうに見えたが、頓て一報は一報よりその賴み少ないとを知らせて來た。て、トルストイは驚いて妹のマリーと一緒にその地に向つた。彼がソーデンへ着いた頃は長兄の健康は餘程危い情態にあつた。弟妹は急いでその衰弱した兄を携へて、南方佛蘭西の温いイエーレの海岸へ移した。併かし既う遲かつた。一八六〇年九月廿日と云ふに、ニコラスは弟のレオの腕に抱かれたまま永い眠に就いた。トルストイは愛と死を面前に見た。

　トルストイに斯う言ふ言葉がある。『人が病氣をするとだん／＼或る緩い勾配を下つて行くやうな氣持になる。て、ある所まで行くと其處に一枚の薄い輕い幕が下りてゐて路を遮つてゐる。幕の此方には生があり、彼方には死がある。道德的價値から言へば、病身の情態は健康のそれに較べて遙かに優つてゐる。全く病氣をしたとのない人達の話は私は聞きたくない。彼等は恐ろしい人間だ。殊に女がさうだ。病氣と云ふものを全く知らない女は全然一種の野獸だ。』と。所て、トルストイ自身の一生を研べて見ると、殆んど長い病氣と云ふものをしたためしがない。僅かに高加索にゐた頃數週間病床に就いたぐらひのものだ。然らば彼自身は何に據て所謂野獸的生活から救はれえたか。

　人は自分の身の苦みに由て、または愛する者の苦み、死に由て道德的に救はれる。殊に愛する者の墓をその胸の底に持つ者は幸である。三千三人の女を抱いたと云ふドン、ジヤンに一縷の誠實を與へたものは、必ずその昔失くした愛人の面影でなければならない。我等は男女となく親愛なりし者の墓を我等の胸に築く。我等の靈魂の奥の靜かな隱れた場所に何物も犯すとの難きない靈宮がある。逝きし者よ靜かにそこに眠れ、母の

懐に抱かれた幼な兒のやうに。されど時來ればその墓は開かれる。死者は蘇つて其蒼い唇から常に〳〵愛の詞を我等の耳に囁いてくれるであろう。僅かに聞き知つた柔しい母の面影と、長兄ニコラスの思出とがトルストイの一生に何れだけ温い感化を及ぼしたかと云ふことを我等は思はなければならない。『その死はトルストイに一の強い、終生拭ふことの能きない印象を與へ、彼の思想を新しい方向に導くやうになつた。』と忠實な傳記者のバウル、ビルコフも言つてゐる。

愛する長兄の死骸を其腕に抱いたとき、トルストイは生れて初めて肅嚴な人生の事實を觀た。彼はその兄の一生を憐んだであろう。その放埒な生活が齎した結果を見ては瞿然として怖れたであろう。其處に冷え行く一塊肉は、彼と血を分けた骨肉である。彼の一部である。彼はその死骸の上にまざ〳〵と自分の姿を見なんだであろうか。徒に費された自分の過去の形相を捉へなんだであろうか。

『月の廿日に彼は私の腕に抱かれて死んだ。私の一生にこれほど深く私の心を動かした出來事はない。實際彼の言つたやうに死ほど此の世に惡いものはない。これがあらゆる物の終りとするならば、生ほど惡いものが復たとあろうか。ニコラス、トルストイたりしものより何物か殘つたかと詮議するさへ愚なことである。努力と言ひ、奮闘と言ふも所詮は空な事である。』と其時彼は書いた。神も來世も幸福も下らない夢である――昨日の麗しい空想に過ぎない。恁う彼は考へながら、絕望の餘り生を咒ひ、努力を咒つた。

然かし暫くすると、美しい夢の頽れた後から、現實に嚴めしい人生の姿が現はれて來た。『けれど人は何んな方法かて其殘つだ力を費さなければならない。卿は引力の在る所で石を上へ落すことが能きるか。卿は聞き飽きた詼謔に笑ふことが能きるか。また卿は腹の失らないのに食ふことが能きるか。……人は能く「功を立てよ、德を樹てよ、一生幸福であれ」と云ふことを言ふ。併し功用も道德も幸福も眞理が統一して居るものではないか。』然り、眞理、赤裸々な眞理、恐るべき眞理の

ほかにこの世の生活はない。『眞理は怖るべきものだ。……確かに眞理を識り、また之を語ろうとする欲望の存する限りは、何人も之を識り之を語ろうと努力する。私の道徳的觀念のうちから保留されたのはたゞこの一事だけだ。私がこれから爲さなければならないのは之れだけだ。然かし私はそれを藝術の形では爲ないであろう。藝術は畢竟一種の虛僞だ。私は最早美しい虛僞を愛するとは能きない』と。

トルストイは今斯樣に恐ろしい嚴そかな現實の前に立つた。神に求めるな、幸福に手寄るな。麗はしい夢に騙されずに眞向に眞理の方へ進め。自然を敵として戰へ。唯だ戰へ、仆れるまで戰へ。最後は死だ。死まで行け。苦め、死ね——眞理の爲めに。

ニコラスが死ぬ二日前に恁うトルストイに言つた。『私は弱いが、併しまださう弱くない。私は未だ鬪ふてあろう』と。

トルストイの一生には幾度か次のやうな轉換が起つた。生來肉の力の强い、自己解剖の銳い彼がえて懷疑に陷り易く、世間的に墮落せやうとすると、何時もそれを救ひに來たものは彼の誠實であつた。然るに彼の誠實は彼を宗教家に導かう〳〵としてゐた。それを亦救ひに來て、藝術家を取戾したのは彼の天才の創造力であつた。斯樣にして彼は幾度か棄てる決心をしながら、彼の所謂『美しい虛僞』を一生棄てることが能きずに終つた。

長兄ニコラスの死がトルストイの心に與へた深い痛痍も、彼の力强い壯年の血と、圓熟しかけた天才の創造力の前には忽ち癒やされた。日々に生ずる新しい肉がその瘡跡を蔽ひ隱した。

トルストイは莫斯科に住つてゐた宮廷醫のベールス一家と長い間親しく交際してゐた。彼は最初その家の婦人を戀し、それから次ぎづきに三人の娘を戀ひ慕つた。その後彼は高加索へ立つ前カザンの叔母の家に淹留した折、或る若い娘と戀に落ちて、樂しい思出を懷きながら旅に上つたとがある。また彼が軍人生活を廢めて外國漫遊に上る前にも莫斯科の或る貴族の娘に愛着し

て、互に許婚(いひなづけ)を以て許したほどの仲になつたともある。然かし彼の最後の撰擇は遂々(とう〳〵)バース家の第二女のソフィアの上に落ちた。其時彼は既う三十の歳を越してゐるのに、娘はまだ十六七であつた。彼は自分のやうな年老(とし)つた汚れた身體(からだ)で、斯樣な純白な淨(きよ)い少女と一緒に成る權利は無いとまで自卑してゐた。その爲め彼は申込を遲疑してゐた。「家庭の幸福」の中のセルギアスは斯う言つてゐる。「茲に一人(ひとり)のA君があると思ひ給へ。その男は既う中年で生活の味を知りぬいた男だ。それからまた一人(ひとり)の若い、幸福な、まだ世の中も人間も知らないB孃を想像し給へ。いろ〳〵な家庭上の情態から、彼は娘のやうに思つて彼女を愛してゐた。併かし彼はまだ他(ほか)の方法で彼女を愛するとが能きると云ふとには氣が附かなんでゐた。」と。て、彼は三年間も躊躇した揚句漸く自分の思ひを先方に告げたほどであつた。「アンナ、カレニナ」の中にあるやうに、机の下で彼が先方の掌に指先で思つた字の頭文字だけ書いて知らせると、女の方でも同じやうにして承諾の意を洩したと云ふ。それは丁度一八六二年の九月十七日であつた。トルストイは自分の年齡(とし)を恐れるやうにして、慌しく結婚を急いだ。同じ月の二十三日に式が擧げられた。新夫婦は故鄕のヤスナヤ、ポリヤナへ歸つた。時にトルストイは三十四歲、若い妻は十八歲であつた。

顧みれば彼が青春の氣を負つて高加索の旅に上つてから其自然生活、セバストポールの戰爭生活、聖彼得堡の文學生活に引續いて再度の外國漫遊まで、如何に多事な Wander-jahre であつたかよ。彼は今その若い妻を携えて故鄕へ行くのであつた。再び歸らぬべく、五十年の長い殘生涯をその田舍に埋むべく故鄕の地を蹈むのであつた。幼年の思出の多い、そして信心深いグリシヤのゐた故鄕へ。彼の一生の朋(とも)たりし百性のゐる故鄕へ。

その後何(ど)れだけ彼が其土地に愛着したかと言ふとに就いては色々の話がある。その書いた物に[illegible]、彼は一日でも家を明けるとをひどく嫌つてゐた。「若し

自分の新しい著作を發行するに就ての用事とか、小供の家庭敎師を傭入れる爲めとかで是非とも莫斯科へ行かなければならぬことが起つたとすると、彼は長いことその苦しい運命を咒つてぶつ〱言つてゐた。て、旅行や銃獵から歸つて自分の家の見える所までくると、時々彼は心の中の心配を口にまで出すことがある。「何卒、家中の者が無事でゐてくれれば可いが」と。』その後一八八二年に彼が家族を纏めて莫斯科に住はなければならなくなつた時にも、都會生活は非常に彼を苦しめた。

新しい相愛の人を得た結婚前兩三年から、一時沈滯してゐた彼の天才は再び蘇つて來た。一八五九年に彼は『家庭の幸福』を書いた。その翌年はニコラスの死に遇つて、再び『美しい虛僞』を弄ぶまいと誓ひ乍ら、その六ヶ月後には彼は短篇の傑作『ポリクシユカ』や『嵐』を書いた。

我等はトルストイの幸福な結婚を祝福せざるを得ない。若い伯爵夫人は彼の藝術の爲めにはまたと無い守護者であつた。彼女はその方面に對する趣味と努力に於て『眞の藝術家の妻』であつた。て、心から夫の事業を了解してゐた。彼の心の奧に深く喰ひ入つて、折があれば其頭を擡げやうと擡げやうとしてゐた彼の宗敎的の鬼を、彼女は注意に注意して十幾年間壓し付け通した。浩瀚な『戰爭と平和』の原稿は彼女の手で七たび淨書されたと云ふほどであつた。

斯樣に圓滿な家庭生活の間で、トルストイの天才は一時にその華を咲き誇つて圓熟の域に達した。

トルストイの胸には今まで一大雄篇の結構が胚胎してゐた。彼は『戰爭と平和』の稿を考へた。天才の創造力は極度に働いた。彼はその實を結ばす爲めに一八六四年から引續き六年の歲月を費したのであつた。彼がその頃友に送つた手紙に次のやうな言葉がある。

『私は今まで焦心苦慮の情態にある。私の心は過激に働いてはゐるが、まだ何んにも書いてはゐない。私が之から蒔かなければならない野を深く鋤き返す豫備的作業が、私にとつて何れだけ困難な仕事であるかと云ふことは卿には想像だも附くまい。私は之から懸ろうとす

る自分の大作に出てくる有らゆる人物に起りうべき事件を繰返し〳〵考へなければならない。またその可能な配合の幾百萬を考へて、そのうちから幾百萬分の一を撰擇せなければならない。實際それは非常に困難な仕事である。その仕事を今ま私は遣つてゐる。』

彼は創造の嵐の近づきを待つてゐるのだ。それは雷を含んだ嵐である。無限の大空から神來のゑれきを呼ぶ爲めに、彼は今ま想像の尖端を研いで待つてゐる。彼はその全身を緊張させた。幾日幾夜嵐は凝つた。蒼然たる空には赤い雲が涌き上つた。風の死んだ寂かな天の一方は燃え立つやうに見えた。地はおびやかされて萬物音を靜めた。彼の腦はわき返り、心は焦れた。恐怖の期待と不安の希望と。醱酵の困亂と分化の苦惱と。幾千の生の芽が今ま出生の努力を悶みしてゐる。丁度產婦がその胎兒の微かな動搖を感じて、神秘な恐れと望みに打たれるやうに、彼は創造の苦を感じてゐる。

漸くして靈のあらゆる隅々から雲が集つた。重い空氣を貫いて所どころから雷光が破れた。不意に百雷一時に落つると見ると、暫くして豁然と天地は開けて光風霽月の世界に歸つた。

彼は狂喜して筆を取つた。

『書き能ふと云ふ確信ほど著者に幸福を與へるものはない。殊に今年は私にこの感が深い。』恁う彼は言つた。

『私は私自身に言つた。「私は藝術家であると。」然り私は孤獨な藝術家である。』

述作は全く當時の彼の心を奪つた。彼は滿足な表現を捉へえた日には、其家族に向つて斯う言ひ〳〵した。

『今日俺は自分の生命の一滴をインキ壺に遺した』と。

斯様にして『戰爭と平和』は出來上つた。この大作は彼の天才の圓熟期の頂點に立つもので、若々しい生氣に滿ちた、一點の衒氣をも許さない作である。それは人生その物である。否な咲き誇つた人生その物である。そこには觀照は即ち實行である。著者は即ち自然である。天才のイゴォが大自然と鎔合して、反かず離

れず、手を上ぐれば雲起り、足を上ぐれば花笑ひ、水おのづから流れ、鳥歌ひ、幾千の人の子が――世界の王者もスラブの一老農も――相和して『運命』を舞ふ情景である。そこには言ふべからざる諧調がある、それは幾多の矛盾突錯の上を統べる『運命』その物の諧調である。そこには久遠の健全と生氣がある、それは常に老ひざる自然の生命である。

『戰爭と平和』を日の輝いた初夏の光景とすれば、『アンナ、カレニナ』は爛熟した晩夏の野邊を思ひ浮ばせる。日は照れど憂れたく、葡萄は色附けど淋しく、來ん秋の氣配(けはひ)が何となく紙面を覆つてゐるやうに見える。勿論、そこには多くの收穫がある。より廣い經驗の世界に我等は導かれる。然かし、またそこには倦怠の氣があり、愴涼の趣がある。著者は大自然の無心から離れて、獨り憎惡し憐愍し、理論化する傾向を生じて來た。『戰爭と平和』の初めの二卷を縮いて『驚嘆の聲』を放ち、『崇高』と呼び、『沙翁的』だと叫んだと言ふフローベルはその第三卷に到つて嫌惡の情を生じて卷を捨てたと謂はれてゐる。『彼はひどく横道にそれた。彼自彼は身の事をくどく述べ立ててゐる、そして哲理化してゐる。今まで我等は唯だ自然と人道(フューマニチー)を見せられてゐたのに、今度は貴族と作家と露西亜人を見るばかりだ』と。そして其傾向が『アンナ、カレニナ』に持ち越された。

さもあれ、『アンナ、カレニナ』は『戰爭と平和』と並んで、トルストイの圓熟期の作品を代表する二大傑作である。て、その結構に於て、題材に於て、經驗の豐富に於て寧ろ後者を凌いでゐる。

彼は一八七三年から『アンナ、カレニナ』の稿を起した。

(二)

トルストイの初期の作物を觀て誰も氣の附く事は、女といふものの殆んど描かれてゐないことである。よし、描かれてゐるにしても、それは幼年の折の追憶の中に朧氣な姿を現はしてゐる者か、『哈薩克』の中のマリアンカ位なもので、それとて皆な第二位に置かれてある。然るに結婚の兩三年前からの作物を觀ると、女

性が重要な位置を占め出したばかりでなく、冷たい自己解剖の男の周圍にまで、女性的な優美と溫順の空氣が纏はつて來て、彼の自然をしてより廣く、より溫かくより濕ひのあるものにしてゐる。我等が彼の幸福な結婚に向つて二重に感謝せなければならない理由は茲に在る。

彼が『家庭の幸福』を書いたのは丁度其の結婚より三年以前である。樂しい希望に煽られて、天才の內的經驗は未來を住んだ。彼はその想像の中で如實に兩三年後の自分の生活を先んじて生活することが能きた。か程までに想像と生活と相一致するときに、誰か天才の自由な創造力に疑を挾むことが能きやう。創作即ち行爲たるを拒むことが能きやう。

この作は戀の奇蹟である。ツルゲーネフですら嘗て斯樣に柔しくチャーミングな小說を綴りえたであろうか。純白な少女の心に萌え初めた夢のやうな情の糸、それが戀ぞと知つた後の唯だ他愛もなく樂しい〳〵幾日、憧がれ待たれた淨い言葉の熱い耳に囁かれた一刹那、『永へに去つてはまたと歸らぬ幸福』――『處女』に別れる折の涙、蜜月時代の捕獲の勝利の誇り、戀仲の我儘、『斷えざる理由もない喜び』。やがて何處とも知れず襲ひくる倦怠、取り留めもない不安、單調な生活の疲れ、徐かに〳〵より遠く別れ行く二つの心、青年の心を喫る世間の誘惑、嫉妬、誤解、離別の暗徵、悲しく淋しい心の秋。するうちに、再び微かに現はれる戀の面影――このたびは老ひて、蒼白く、併かし涙に彩られ、時に刻まれてより柔和に。さては悲しかりし時の思出、徒に過ごされし日の悔み、夕べの靜けさ。戀から友情への重々しい變遷、母の情熱…………

『初めて――恐らくば彼の一生の作中でたつた一度――その物語が女の心で考へられ、女の口から語られた。何たる巧妙な精彩と、何たる精神美を以て麗はしい人間の心がまことの謙譲の薄絹の裏から描かれたことよ。たゞ一度この作家の解剖は冷酷な光を拭つた。そこには赤裸々な眞を現はさうとする狂的努力を見ない。內生活の秘密が語られると云ふよりは寧ろ啓示さ

れてゐる。藝術家の心も技も此處ては情育され、柔げられてゐる。思想と形式が諧調の平衡を保つてゐる。「家庭の幸福」はラシヌの作品のやうな完全を有つた作だ。」と、ロメーン、ローランは評した。

我等が「戰爭と平和」に對する時は即ち我等は世界が嘗て殘した最大の文學の一つの前に立つ時である。世界が嘗て生んだ最大の天才の偉業に面する時である。

この書中の事件は一八〇五年から一八一二年迄の間に起つた歐洲の偉きな歷史的事實を中心にして編まれたものである。その周圍には有らゆる社界の人間が活躍する。輕薄と虚禮を生命とする露西亞の上流社會から、暗黑な運命に殉して信心深く無言に從順に遠い征戰に從ふ文盲な兵卒まで。世界の霸王ナポレオンから、世にも稀なほど柔しいをとめナタシヤまで。我等は聖彼得堡の豪奢な客間から、オーストリアの外交團へ、莫斯科の快活なロストフ家の空氣の中から、將軍ボルコンスキーの古い嚴めしい家庭へ、ナポレオンやクッヅフの本營から、慘めた雜兵のバラックへ、シエーングラーベンやスモーレンスクやボロヂノの戰場から、莫斯科の燒打と退却の場所へ、幸福な若い母親の育兒室から、捕虜の死刑場へ、露西亞の雪の曠原から、オーステルリッツの戰場の星の夜へ——次ぎ〳〵に搬ばれる。總て是等の變化に富んだ場景、事件、人物、所どころに現てくる插話が、何れだけ深い興味の糸を以て結ばれながら讀者の眼前に展けるかと云ふとは想像だも及ばぬ程てある。

その間に我等は幾百かの人物に出會はす。然かもその一人〳〵が各々特殊の性格と心理を有つて相會ひ相離れて、廣い運命のもとに獨自の生活を營むのである。それがよし最も輕い人物てあらうとも、概略に描かれてあらうとも、我等は必ず彼を知り彼と與に生活するてあらう——彼が亞歷一世の殊寵を受けた大臣てあろうが、名もない一士官てあろうが、否な行軍の塵の中に埋れた雜兵てあろうが。更に幾千かの單獨の性格が合して此處に微妙な群衆心理が生れる。「運命」の手が

この群衆の上に擴がつて歴史を作る。「戰爭と平和」は即ちその活きたる運命の歴史である。『近世のイリアッド』である。

あらゆる波の推寄するフユーマニチーの海の上に「聖なる手」が動いて、徐かに嵐を呼び嵐を靜める。我等は先づ斯の作物を統率する久遠の法則『運命』の恐るべきリズム、ホーマー的精神を窺ふてあろう。

開卷第一、我等は露都に於けるアンナ、パブロブナの豪奢な客室に導かれる。そこには幾十人かの紳士貴女が夜會席に集つてゐる。濁つた泰平の夢に醉ひしれた彼等の生活を覆ふものは唯だ虚禮と倦怠である。重々しい空虚である。人はいつまでか斯樣な無意義な空氣の中に生活しうるであろうか。眞摯なピエル、傲慢なアンドレー、快活なロストフのやうな青年までが斯樣にして生きながら殺されなければならなんだか。て、その空氣は最早堪えられぬまで重くなつて來た。早晩破裂せなければならない羽目に陷つてゐる。その中でも最も卑しい人物のバシル公爵までが斯う云ふとを言つてゐる。「私達は罪を犯した。私達はお互に僞つてゐる。なぜ斯う爲なければならないのか。私は既う六十の歳を超してゐる。……誰でも死なねばならないのだ。死！何と云ふ畏いとだ、」と。

泰平の恐怖と死海の沈爵と。其處には早晩波が揚げられなければならない。運命のリズムが繰返されねばならない。

徐かに波は起つた。奈翁は普魯士を超へた。露西亞の軍隊は墺太利に出懸けた。オーステルリッツの戰が始つた。著者は今我等の眼前で幾萬の軍隊を動かし、いろ／＼の兵法を弄してゐる。彼は將軍の勇氣と狐疑や、部隊々々の狂的突貫や畏ろしい恐怖や、野營の青い火で照らし出された隊伍の光景や、日々夜々の戰場の印象やを、驚くべきほど明白に語つてゐる。

誰が軍隊を率ひたのか。誰がその勝敗を決したのか。奈翁の戰略か、クッゾフの沈勇か、それともバクラチオンの信望か。否々、それはたゞ盲目な群力の擾動である。幾萬の個人の欲望の離合から生れる闇の力であ

る。『いろ〳〵な境遇の合致した單純の結果、將卒の意志、偶然の惡戯』に過ぎない。暗い『運命』の揚げた波に過ぎない。その騷擾の中で幾萬の人が、肉體的にも精神的にも、活かされたり殺されたりする。

　聖彼得堡の沈滯した社交界と、老父の馬鹿化た虛榮心と、氣の合はぬ妻のゐる家庭とから逃れ出したアンドレー、ボルコンスキーは喜び勇んで戰場へ赴いた。戰爭は彼を活かした。同樣に幾萬の生きた死骸に氣を吹き込んだ。聖い嵐が露西亞の社界を動かした。オーステルリッツの戰に傷を負つて野に倒れたアンドレー公爵は悲慘な戰場の騷ぎの眞唯中で、急に宏い宇宙の沈靜な氣を呼吸した。彼は身を橫へながら唯だ『輕い灰色の雲の柔かに動いてゐる無限に深い大空』を眺めてゐた。

『何と云ふ平和だ。何たる靜けさだ。俺が走つたり叫んだりしてゐた時とは全く違ふ。……今までなぜ俺はこの限りない深空を知らずにゐたのだろう。併し遂〳〵之に氣の附いた俺は何れだけ幸福だらう。然うだ、これ以外の總ての事は空虛だ、虛僞だ。俺はこの靜平を與へて吳れた神に感謝する。』

　で、彼は佛蘭西軍の病院へ擔はれて行きながら、其處で彼の病床の近くを通る大奈翁の姿を觀た。昨日までは超人のやうに崇めてゐたその人も最早彼の視線を牽くに足りなんだ。彼は脊を向け續えて、出立の際妹のマイアが自分の頸に掛けて吳れた聖像を注視した。て『彼に平和を齎す理想の天』のみを信じやうとした。

　やがてアンドレーは故國へ歸つた。また波が靜まつた。再び不健全な大都會の空氣の中で、彼の若い魂は目的もなくさ迷つた。彼はそのうちに美しいをとめのナタシャに遇つた。然かし何れだけ淨い、チャーミングな彼女も斯樣な社交のなかで何時迄も汚れずにはゐられなんだ。『ひろい大空はいつも地上の騷擾と汚濁の上に控へて』ゐたが、アンドレーですから最早オーステルリッツの戰場で見た其光を忘れてゐた。彼にはその同じ大空も今はたゞ空虛を包む『黑い重い天井』のやうに見えた。

疾風のやふな戰爭の波が復た襲つて來た。奈翁は長驅して莫斯科へ迫つたので、母國露西亞の危機が近いた。運命の嚴めしい手の下にボロヂノの大戰が幕を明けた。邦を擧げて愛國と犧牲の情に燃えた戀も怨みも共に忘れられた。ロストフ家の第二子ペチア（ナタシャの弟）が護衛に立つた負傷兵の中に、圖らずも重傷をうけたアンドレーと其戀敵のクラギン——ナタシャの誘惑者——がゐた。アンドレーは消え行く息の下から其怨敵の不幸な身の上を泣いた。彼の最期の枕もとては妹のアリアがナタシャに遇つた。死の近づき、靜かな夕の哀傷、昏睡の甘き痛み……。その一方にはピエル、ベッーホフが其先妻の姦夫のドロホフと相抱く所がある。愛は再び活きた。祖國への献身と聖なる法則への服從の中て、幾多の相離れた心の抱一が行はれた。

是が『戰爭と平和』の梗概てある。これが斯の書の隱れた調和てある。フユーマニチーの波は揚つては靜まり、揚つてはまた靜まつた。永へに靑く寂かな大空の下て運命のリズムが奏てられた。

この書に對する從來の批難の多くはその結構の雜駁と不調和と云ふ事てあつた。獨逸のブルクナー教授てすらその事を口にしてゐる。然かしそれはロメーン、ローランの所謂『隱れたる統一』を解せない人の言葉てある。クロポトキンも斯う言つてゐる。『私は佛人や英人や獨逸人がこの書を讀んて何んな感想を起すかを知らない——現に教育ある一英人はこの書の無趣味な事を私に話しゐた——然かし學識のある露西亞人に取つては「戰爭と平和」の殆んど何の部分てもが、言葉に盡す事の能きないほど深い藝術的愉樂を齎すと云ふ事を私は知つてゐる。私の國の多くの人のやうに、私はこの書を幾度か繰返し〳〵繙いたが、それでも其の何の部分が一番私を喜ばしたと云つて明に列擧する事が能きない』と。

善良て溫順て情深いが、然かし物臭な、いつも心の變り易いピエル、ベズーホフと、冷靜て頑固て貴族的て執着心の強いアンドレー、ボルコンスキーとは、著者

自身の性格の二方面を代表した人物だと謂はれてゐる。最愛の妻をその友人に奪られたピエルの運命には、やがて決闘と恐ろしい離婚が續いて起つた。苦がい悔恨の情を懐いて莫斯科より聖彼得堡へ行く途中て、奇妙な運命から彼は新しい生活に這入るやうになつた。それは「人道の革新」の爲めに彼の一生を捧げやうと云ふ單純な信念てあつた。然かし彼の物臭さな性格は彼をして充分實行の人たらしむることが能きなんだ。て、彼の信念は其友アンドレーの強い輕蔑に逢つた。祖先傳來の傲慢心と自分の辛い經驗から、アンドレーは冷やかな懐疑家になり濟してゐた。彼は自分の愛情の少しも乘らない若い妻君を唯だ人形のやうに迎へ、侮蔑を以て遇してゐたが、幸か不幸か彼女は産蓐の中て亡くなつた。その死はアンドレーの心に癒すべからざる傷を與へた。彼は一意たゞ頑なに運命を呪つた。彼は傲慢な士官として戰場に臨んだ。するうちに全く消えたやうに見えた彼の愛の焔も春の歌のやうなナタシャの情に再び蘇つたが、然かしそれもほんの束の間てあつた。斯うして彼はボロヂノの戰て死んだ。

「哈蘇克」の作中に盡きざる青春の趣を喜んだ我等は、再び思ひかけなくも斯の莊嚴な叙事詩の中てより廣くより豐かな人生の春に心を躍らすてあらう。ロストフ家を取卷く其若々しい光の海には永へにモッツアルトのメロヂーのやうな樂の音が聞かれる。高加索の野性の自然美が無い代りに、ここには淨い、やさしい、優華な女の世界が開ける。

ナタシャ！ 懐かしい可愛いい空想的な少女——いつも微笑めるその顔、愛に燃える其心。誰が熱心に彼女を愛せなんだか。誰が自分と一緒に生ひ立つた妹のやうに彼女を知らなんだか。彼女はその淨く若い心を以てたゞあどけなく戀を戀ひた。幾人かの青年が彼女の溫かい空想に上つた——ボリス、デニソフ、それからアンドレー。……月の明るい春の夜を二階の窓に身を寄せながら、意中の人の近いも知らず、獨り夢見心地に聲高く熱い思を語るその一節。……うれしい舞踏會、橇乘、雪の森の夜、オペラの夕べ。……ナタ

シャの戀は次第に熱した。彼女はより熱い現實の戀を欲した。そこへアナトリ、クラギンが現はれた。此の輕薄才子の容貌と大膽な告白が却てうぶな彼女の心を牽いた。彼女はアンドレーを忘れて其の甘い囁きに耳傾けた。彼女はただ戀しに戀した。無謀な駈落まで企てやうとした一刹那に、クラギンに妻のあるとが判つた。

悲み、慙ぢ、悔み。少女の身に餘る不幸。ナタシヤは重い病の枕に就いた。そこへ信仰が救に來た。斷食祭の間、彼女は毎々〳〵或る一婦人に連れられて聖母のみ像に跪くのてあつた。彼等は未明に起きては「蠟燭の光と日の出の光に照らされる黑塗」の像の前に立つた。ナタシヤは熱心に、身を任せて禱つた。漸く彼女の心は蘇つた。

「伯爵、妾は歌つても可いてしやうか。」斯うナタシヤはピエルに聞いた。て、男の眼を見上げながら顔を赤くした……「あの人(アンドレー)は妾を宥して下さるてしやうか。それともまだ憤つてゐらつしやるてしやうか。」——「何も彼だとて宥すとも無いてしやう。私がもし其立場にゐれば勿論さう思ふか。」斯うピエルは答へた。」

この時はナタシヤは既うピエルを戀してゐた。彼女の心は一時も戀を持たずには暮せなんだ。然かしこたびの戀はアンドレーに對するそれのやうな空想的なものてもなく、クラギンに對するそれのやうな狂的情熱てもなかつた。それは似通つた二つの魂の相親しむ情てあつた。著者はこの二人の中に理想的な配偶を求めたものと見える。

アンドレーの妹のマリーも好く描かれてゐる。彼女は醜い女てあつたが其善良な性質が彼女を美しく見せてゐる。至て内氣な、戀にも憶するほどの女てあつた。トルストイは自分の母をモデルにしてこの女を描いたと謂はれてゐる。彼女は露西亞流の神秘家に身を堅め、いやしい乞食や巡禮の間に忍苦の教を求めては其身の不幸を慰めてゐた。「堪忍が物を教へる」と云ふのが彼女の處世訓てあつた。「私は神信心をして他人の爲めに

盡して自分でも幸福にならう、」と。

然かし、大將軍のクッゾフは更に一層根本的にスラン族一流の性格を現はしてゐる。その不活潑な無性な態度の裏に藏んだ沈勇、東洋的な運命觀……『戰爭の畏るべき必至を眞面目に嚴そかに受取ると。戰爭とは聖なる法則に服從すべき最も苦痛の行爲だと感ずると。心の簡易生活は神の意志に服從するのほかはないとすると。』戰爭中も彼は、『彼自身の意志(戰略)よりは猶つと力強い或る物に從つた。即ち彼の眼の前を過ぐる避くべからざる事件の推移のまゝに任せた。彼はそれ等の出來事を觀て、それに隨いて行つた。そして彼自身は獨り超然としてゐた。』

丁度露西亞の名高い古英雄のスボロフのやうに、矢張クッゾフもその勇氣や勝利の爲めよりは、父老的の親愛から部下に尊敬せられてゐた。アンドレー公爵が故鄕の父の死を彼に報告したとき、彼は『その胸一杯に波うたせて深く嘆息した。て、直ぐには口もきかなんだ。』暫くしてから彼は『アンドレー公爵を捕へて長いことその頑丈な胸に抱き締めた。漸く離されたとき、アンドレーは將軍の厚い唇の震へてゐるのを見た。その眼には涙が一杯たまつてゐた。』

より深く、より自然に、より原始的に露西亞民族の宿命說を代表してゐるのは百性のプラトン、カラタエフである。丁度トルストイ自身が後年同じ百性のズータイエフに救はれたやうに、ピエル、ベズーホフはこの人から新しい生活に救ひ出された。『カラタエフは何時もピエルの心に、あらゆる露西亞的の善良と丸みの權化として、最も強く最も親しい者に映つた。……ピエルはこの人の全身の風味に丸みと云ふ感じをうけた。』

萬有神教的な信心深いカラタエフには一種の悟道があつた。世の中には誰の身の上にも自然に起つてくるいろ／＼の不幸がある。その不幸は或る大きな力の結果で抵抗するとの能きないものだ。ピエルの身の上の不幸もそれだ、今露西亞の上に覆ひかぶさつた戰爭の不幸もそれだ。明日は誰が上にそれが墜ちるか解つた

ものでない。世の中は明らめが必要だ。來るが儘に運命を甘受するほかはない——丁度、アルプス山の急斜を滑り落ちた牡牛が、始めのうちは一生懸命に岩の根に攫まらうとするが、到底その不可能なとを知つたとき、一種の明らめを附けて、溫なしく足を曲げて深い谷底へ滑つて行くやうに。

『吟薩克』の中のエロシユカと、乙のカラタエフと『暗の力』に現て來る庭守とは、トルストイが創造した同型の人物の三幅對て、一は野性のバガン、一は敬神な百姓、一は泥酒家の老兵士ではあるが、その間におのづから一脈の氣が通つてゐる。

（三）

『アンナ、カレニナ』はトルストイの作物の中でも一番に廣く讀まれ、一番に世評に上つたものである。

開卷第一、我等はこの書の女主人公に出遇ふと間もなく、彼女は必ず其身邊に或る悲劇を齎すであらうと云ふ暗示に打たれる。彼女の薄倖な一生とその悲慘な最後とがまざ〱と豫想される。それほどこの書は劇的要素に富んで居り、日常界の經驗と生活に深く根ざして、實人生の一角を寫し出してゐる。

戀の神ヴィナスには二つの神座がある。その一座はウラニアンの占めるもので、淨い純白なもの、他の一座はパンヂアンの占めるもので濁つた肉的のものと見做されてゐる。『家庭の幸福』や『戰爭と平和』の中で美しい華やかな青春の戀の囁きを聞いた我等は、『アンナ、カレニナ』へ來て、狂的なパンジアンの戀の喜び、悲み、悔みの世界に牽引けられるであらう。

黒い天鵞絨の衣物に忘れな草の花を附けたあだな人妻のアンナは、或る舞踏會の席上でブロンスキー伯爵に逢つた。戀の魔は急に彼等を捉へた。その時ブロンスキーの眼に映つた彼女の姿は、最早今迄のあどけないアンナでなくて、『殆んど凶魔のやうな誘惑力』を持つてゐた。ブロンスキーがその戀を打明けたときに、彼女の顏には溫い喜びの色でなくて、『暗の夜に放つた火の恐ろしい閃めき』のやうな光が浮んだ。貞節な賢こい妻、柔さしい母親の心には其時からパンヂアンの

魔の手が深く喰ひ込んだ。アンナは狂熱な情慾の捕虜となつた。誰でも彼女に近づく者はこの隠れた凶魔の恐ろしい力を感ずるであらう。そして慄然として彼女の未來を思ふであらう。驚き戰きつつ先づこの力を見出したものはキッティーであつた。レビンは彼女の前ではその度を失つた。相手のブロンスキーですら薄氣味惡く思ふほどであつた。

アンナ自身も亦その心中深く喰ひこんで、身も心も燒き盡さねば已まないやうな恐ろしい力を自覺しないではなかつた。然かしそれを何うすることが能きやう。彼女は焦れば焦るほど自分を制することが能きなくなつた。この見識高い女の心からは有らゆる寶が――誠實も、勇氣も――灰となつて燒け落ちた。彼女は最早娼婦のやうにその戀人に媚を呈するよりほかの術を知らなんだ。生れた兒を育てるとさへ嫌つた。虛僞をも覺えた。深い嫉妬が身を喰つた。晝も夜も苦しい淺間しい夢の捕虜となつた。その苦みを忘れる爲めにはモルヒネを飮んで寢るまでになつた。悔恨が遂々身を亡ぼした。彼女は自ら汽車の下に其生きた屍を横へた。

一方、ブロンスキーの戀は純潔であつた。彼はその戀の爲めに寧ろ向上した。彼はその高い名譽をも位置をもアンナの爲めに棄てて掛つた。然るに哀れなアンナは悔恨と情慾の奴隷となつて、一歩は一歩より墮落して行つた。その戀人との間に出來た小兒を育てるとさへ能きなくなつた。ブロンスキーの上るほどアンナは下つた。斯うした葛藤から悲劇は高められた。

なほ今一つこの悲劇を早めた事情がある。アンナと其夫との間に夙うから一人の小供があつた。それはアンナの爲めには此の世にもつ唯一の寶であつた。彼女はブロンスキーに對する愛の爲めには、その寶を棄てるとさへ厭はないと考へた。彼女はその夫を見棄てる時昂然として斯う考へた「私は總てこの世で私の最も愛してゐるもの最も貴んでゐるもの――私の小供と名譽とを此の家に殘して行きましやう」と。彼女はそれが自分の夫に對する義務だと思つた。然かし彼女は誤つた。たとへ、傲慢な彼女の自負心を折つて其社會

上の名譽を棄てるとは驚きたにしても、自然な親子の羈絆は斷つわけにいかなんだ。彼女はひたすら幼ないセロザの身の上を思つた。そのうちにブロンスキーとの間に一人の女の兒が生れた。奇妙な人情の藤葛と言はうか、アンナは肉的な母の愛情の蔭から、ひそかにこの不義の兒を嫌ひ出した。昔の淨い形見のセロザの愛を引裂かうとする赤兒を憎んだ。それがまた戀人と彼女との間に冷たい距てを造る原因になつた。斯樣ないろ〳〵の事情からアンナの心は次第に狂つた。最後の悲劇が遂々彼女の生命をとつた。

「その光のもとで彼女が、いろ〳〵の恐れ、虚僞、悲みの滿ちた一生の書を讀んだ蠟燭は、この時急に一たび輝いて、今迄闇に包まれてゐた有らゆる物を照らしたが、また瞬いて、次第に細そり、遂に永久に消えて了つた。」

「主宣はく、罰は我が所有なり。」

これがこの書の冒頭に置かれた聖書の言葉である。

然かしこの言葉の意味を以て直ちにアンナの最後の悲劇を解釋しやうとするのは餘りに殘酷な處置である。また著者の眞意に觸れたものでもない。實際、可憐なアンナの罪は斯樣に悲慘な死に値するほど重いものであつたろうか。著者はかやうに弱いものに死刑を宣告するほど無情で狹量でありえたであろうか。若し然うとすれば、アンナより先に罰せらるべき者が幾人かある――ステパンでもカレニンでも。否な々々。著者は初めからアンナを愍んでゐた。その爲め彼女に對するブロンスキーの愛を忠實に保護してやつたり、一たびは夫カレニンの怒を解いてやつたり、戀ひ憧がれてゐた愛兒の顏を見せてやつたりした。然かし自分で蒔いた罪は何時かは自分に歸らねばならない。われから責められなければならない。これが神の法則である。て、アンナの受けた罰は墮落であつた、遣る瀨ない悔恨であつた。その悔恨は彼女の身も心も喰ひ虐んで、最早一時も堪えられないものにした。死！　死よりほかに彼女を救ふものはない。この場合死は彼女の爲めには罰でも苛責でもない、唯だその苦惱を打切る貴い救ひ

主であつた。

彼女は汽車の輪の近づくのを待つてゐた。『彼女は十字を切つた。この親しい手眞似は彼女の心に青年、幼年の折のいろ〳〵な記憶を呼び起させた。今まで何もかも藏み隱してゐた闇が急に切て落された。かず〳〵の消え去らうとする喜と與に、人生が一瞬時彼女の前に輝いた。』……『神よ、總てを許し給へ。』斯う彼女は呟いた。『恐れ、虛僞、悲みの滿ちた一生の書』を彼女に讀ませた生命の蠟燭の光は、其最期の刹那に眩ゆく照らした。彼女は救はれた。

『アンナ、カレニナ』にも亦『戰爭と平和』のやうに、いろ〳〵の變化に富んだ場景がある。然かもそれが皆な日常時の出來事を題材にして寫してゐるだけに、なほ人を牽附ける。或る批評家はこんなことを言つた。普通の人に取つては、彼が一生涯のうちに觀察し經驗する事よりも、一冊の『アンナ、カレニナ』からより多くの人生を學ぶであらうと。…………………………アンナとブロンスキーが初めて逢つた時の停車場の光景、舞踏會、氣の立つた競馬場、アンナの病氣、カレニナの宥恕、ブロンスキーの悔恨、アンナの產蓐、彼女とその愛兒の再會、重なる嫉妬と恐怖、離隔、凶夢。それから最後の停車場の光景――死、ブロンスキーの旅立。さては、ドーリーの樂しい家庭生活、レビンの田園、彼の兄の死。

現はれる人物も之に應じて多いが、然かもその何れもが驚くべきほど明瞭に描き出されてゐる。快活なイゴイストのステパン、官臭を帶びた人物の好代表者カレニン――その物々しい尊大、冷笑、器械的な自制。

然かしアンナの悲劇を除いては、最も主要な人物はレビンである。レビンを中心とした生活はアンナのそれと殆んど關係なく、互に獨立して發達してゐる。我等はその二つを切り離すも決して彼等の生活の全面を觀るに差支ないほど彼等はかけ離れてゐる。この書の結構は斯樣な點に於て批難さるべきであらう。

レビンはトルストイの作品中の何の人物よりも彼自身を現はしたものだと言はれてゐる。それだけ著者は

その人物に對して極力辯護の態度を取つた。彼を自分の思想の道具に使つた。その頃の著者の哲理がその骨の髓まで浸み込んでゐる。うるさい理屈の爲めに彼の人物は死んでゐる。トルストイの描いた性格の中でも、このレビンと『青年』のネフルドフが、私に取つては一番嫌ひだ。彼は『信ずることも能きなければ、つきつめて疑ふことも能きない』人物であつた。その頃のトルストイの内心の秘密を最もよく知りぬいてゐたツルゲーネフは斯う言つて彼を評した。『彼の最も大きな缺點は精神上の自由を缺いてゐることである』と。この評はまた好くレビンの性格を穿つた言葉であらう。更にツルゲーネフはレビンに就ても或手紙の中で斯う言つてゐる。『レビンと云ふ男が少しでも他人の爲めを思ふことが能きると云ふことを、卿は一瞬間でも信じられますか。否な。愛情と云ふものは「自己」を除却した情熱でなければならない。然るにレビンは自分が他人の爲めに愛され、その爲めに幸福であると云ふことを知つてゐながら、猶且自分への忠義を忘れることの能きない男だ。彼はその骨の髓までイゴイストで固まつてゐる』と。

『私の理性は私に何事をも敎へなんだ。私に何物かを與へたもの、啓示したものは皆な心である』と、レビンは言つた。復た彼は斯うも言つた。『青天井の妄想や太陽の運行の假定のなかにも眞理がある』と。

冥想家のトルストイが玆には遺憾なく現はれてゐる。從て彼は觀照家としては失敗した。

（四）

トルストイの一生を通じて彼の心的生活には二個の獨立した潮流が流れてゐた。それは前にも述べたやうに鋭い觀照力と冥想力であつた。一たび彼が眼を開けば、自然も人間も生も死も、隱す所なくその透徹したリアズムのもとに映し出されるが、一たび彼が眼を閉づるが最後、百千の夢が一時に踊り出した。要するに彼の心中には二個の人格が平行して存在した。その二つが相犯すことなく完全に發達して行くことの能きるほど彼の性格は偉大であつた。觀照は冥想を犯さず、

藝術家は宗教家に囚へられずに、各自が其道を進んだ。『理性』と『愛』が離れて存在した。

從て彼の藝術の中に屢ば現てくる宗教觀も獨斷說も――レビンのやうな特別の場合を除いては――觀照の眼を濁らすやうなとはなかつた。說法は說法、寫實は寫實と云ふ風に嚴然と對立して、宗教家は毫も藝術家を冒してゐない。彼の觀る世界は何んなに悲慘な經驗の前ても、その神經の爲めに累せられるやうなことはなかつた。よし、彼の天才には一時的過度性はあつたにしても、その本質は飽くまても安定的繼續的の健全性てあつた。『戰爭と平和』や『アンナ、カレニナ』に現てくる二三の斷片的な僻見――例へば醫者や哲學者に對する毛嫌ひ、奈翁の運命に關する馬鹿氣た說明など――はあつたにしても、それがいろ〱な人物に對する彼の判斷や同情には尠しも影響を及ぼさない。それほど彼は眞の意味に於ける偉大の藝術家てあつた。『少年』のイルテネフが嵐の中を馬車を驅つて行くと、破れた衣物を着た一人の乞食が近いて憐みを乞ふ所がある。『私はその時私の心に浸み渡つた冷たい恐怖を忘れることは能きない。私は恐ろしさにたゞ全身を震はして其の乞食を見つめてゐた……』と。道德家乃至は幻想家としてのトルストイの態度は何時もこの『冷めたい恐怖』てあつた。彼はいつもこの嵐の中て見たやうな『神の怒』を感ずる者てあつた。然るに藝術家としてのトルストイは寧ろ健全な樂天家てあつた。彼は藝術の世界に於ては常に充實した生活に活きた。豐富な經驗の中に深い呼吸をした。無碍な眼を睜つて靜かに同情し觀照した。

實際トルストイの描寫は嘗て世界の小說家が爲し遂げた最完全のもので、彼の判斷の健全と其同情の博大とを思はざるを得ない。昔からトルストイほど明確に人間の肉的、道德的または理智的發展を藝術化した者はなかつた。彼のインスピレーションは飽くまて合理て能く消化され試鍊せられてゐた。彼の表現は明白て、不可思議もなければ微細な狂亂もない。彼は殊更に小細工を弄せないて、然かも愉快な書を書いた。なぜな

ら、彼はその作中の人物の感覺を誇大にするやうなこともなく、讀者の神經て之を曇らせるやうなこともないから。何んな悲慘な世界に出遇つても、彼の筆はその精神的苦痛の爲めにも曲げられなんだ。彼の人生の表現は飽くまで公明て、我等はその作中に働く精神を知らずに濟ますほどてある。それてゐて、其の精神の勇氣、信念、慈愛が知らず識らずに讀者の心に通ふのてあらう。

これがトルストイの藝術の健全性の證據てある。昔から或る一方面に限られた奇才や鬼才は世に珍らしくない。然かしビートーベンの音樂に於けるやうな、ロダンの彫刻に於けるやうな、またはトルストイの小說に於けるやうな安完な健全性は世にも貴く稀なものてあるといふことを、我等は深く思はざるを得ない。然らば天才の特權とも見るべき斯樣な健全性の要素とは何てあるか。それは博大な同情と、人生に對する眞の勇氣と信念と、天才の最も大きな德なる誠實とてなければならない。彼は事物に對するその深い同情と直覺の力に據らなければ完全な人生の幻像を捉へ得ないてあらう。彼に若し眞正の勇氣と信念が缺けてゐたら、そして誠實の德に據て立たなんだならば、その藝術は作家の偏見の爲めに壞はされ、彼の人生に對する恐怖心または其の人工的樂天觀の爲めに汚されるてあらう。なぜなら、よし、作家の弱點が何てあらうと、彼の人生に於ける失敗が何てあらうと、それが必然彼の藝術に感染せなければ已まないからてある。懷疑と誘惑と騷擾に充ちた近代の藝術界に於て、そこには幾多の不完全な天才が狂亂の闇の中に手索りて危い足取をしてゐる間に、トルストイの容のみが孤り高く聳えて見える——靜かに、自滿自足して、自覺の明るい光の中に。

然かり、人間としてのトルストイが左顧右眄してゐる態容とは全然別人のやうに、藝術家としてのトルストイの形相には斯の溫靜な自覺と謙讓な自滿自足があつた。ハベロック、エリスは其著「新精神」の中て次のやうに言つてゐる。

「トルストイの藝術には單に内察と現實的な觀照があるばかりでなく、他の藝術家の多くが有つてゐない所の廣さと健やかなる完さがある。……彼は如何なる事件も同樣に取扱ひ、如何なる物をも逃さなんだ。彼は何んな物をも同じ冷靜と晏易と簡潔とを以て描き出した。彼は一寸した短篇て醉漢の藝術家アルベルトの生活を巧みに寫し出した筆法で、矢張近代生活の最大な文學的畫布「戰爭と平和」を描いた。「家庭の幸福」ては彼は情熱、結婚、母、生活の轉換を、極く簡易に數章の間で書いてゐるが、然かし一つでも書き洩したものはない。これ等の秘密が奈何して斯樣に容易に彼に知れたてあらうと思ふと我等は戰慄する。彼はまた『イワン、イリッチ』では落付はらつて、決して挫まない手を以て完全に死と死の家とを解剖してゐる。彼は恰も多くの方面から人生に觸れた人のやうに、そしてそが捧ぐる喜をも悲をも最も多く味つた人のやうに事物を描いてゐる。然かし彼は始めから老人のやうに明透なそして非情熱な冷靜を以て其の上を見凝めてゐる。彼の藝術はフローベルのそれのやうに完成してゐないが、然かし彼にはフローベルのやうな强い個人的色調、その猛烈なノルマン人の虛無思想はない。彼は人生を簡易に光の中へ持出して、そして斯う言つてゐる「これが在る儘のものだ」と。」

そこが彼と佛蘭西の寫實家と違つてゐる點だ。世界の民族のなかでもラテン人ほど無理想無執着で、そして現實的な『軟心』な人種はないとせられてゐる。然かし彼等にも亦一種の因はれがある。それは彼等に共通した底意地の惡い好奇心だ。彼等は一種の犬儒派てあり、また癖の惡い虛無主義者だ。て、彼等は飽くまでも社會の罪惡を發き、その赤裸々な醜い姿を晒し出して嘲笑ふやうな傾がある。ゾラの寫實主義が誤て踏込んだ道もそれてある。トルストイがモオパッサンの『ベル、アミ』を評して非道德を責めたのもその意味からてある。彼等は罪惡を罪惡として寫すばかりに止らず、其後ろから著者自身意地の惡い快心な微笑を漾はせてゐる。

クロポトキンの書物(『一革命家之回想記』)の中に次のやうな一節がある。彼が佛蘭西でツルゲーネフを尋ねた折に斯んな話を聞いた。

『卿は佛蘭西や獨逸や其他の國民の間でいろ〳〵な經驗を積まれたことであらう。』恁う彼は私に向て言つた。『所で、卿は彼等と我等露西亞人との間に到底一致することの能きない觀念や見解のあることに氣附かれましたか。』

『これはその一例だ。或る晩私は新作の初興行を見に行つた。私の座席にはフローベル、ドーデ、ゾラ……などが一緒にゐた。彼等は皆な識見の高い人達だつた。その晩の芝居の梗概と云ふのは恁うだ。一人の婦人がその夫と別れた。彼女は新しく戀をして他の男と一緒に成つた。その男は餘程立派な人物として現はされた。幾年かの間彼等は幸福に暮してゐた。彼女の二人の小供――女子と男子――は彼女が先夫と別れる頃はまだ殆んの赤兒であつた、それが今は成人した。で、その幾年の間彼等は件の男を自分等の眞實の父と思つてゐた。女子は十八になり男兒は十六になつた。男もまた彼等を眞實の子のやうに取扱つてゐた。彼等は互に愛し合つた。夕餐の席で家族が集つてゐる。そこへ其の女の子が這入つて來て、假の父の側へ行くと、男は彼女を接吻しやうとする途端――何處からか、彼が自分達の父でないと云ふことを聞き知つて來た男の兒は、突然彼の前へ飛び出して、斯う叫んだ、『馬鹿をするな!』』

この叫びと與に見物席は煮え繰り回るやうな騷だ。大變な拍手が起つた。フローベルや他の者も之に和した。私は氣持を惡くした。『なぜです。その家庭は幸福で、その男は眞實の父親よりも子供に親切だつた……彼等の母も彼を愛し、彼ゝ與に幸福であつたのだ……この生意氣な意地惡い小僧こそへらず口の酬ひに毆らるべきだ…………』斯う私は辨明してみたが無駄だつた。私は暫くの間厭やな思をさせられたが、彼等には私の意が汲めなんだ。

斯の冗長な引例も無駄ではない。なぜならこの一插話は最も好く佛蘭西人の非人情な一面と冷酷な好奇心を説明してゐるから。若し佛蘭西の小説家に『イワン、イリツチの死』や『クロイツエル、ソナタ』を書かせたら、それこそ殘酷悽慘眼を掩ふべきものに成るであろう。

然かしそれかと言つて、トルストイは一生決して狹義な道徳的の意味で其小説の筆を採つたとはない。彼は――他の多くの露西亞の作家のやうに――人生の爲めに書いた。彼は或は"Too Human"であつたにしても、英國風の作家のやうに道徳的ではなかつた。『クロ

イッエル、ソナタ』の主人公ポスドニエシェフは斯う言つて嘲笑てゐる『殆んど何の小說を見ても主人公の感情は細かに書いてあるものだ。彼が眞面目くさつて考へ込みながら池や小藪の周圍を迂路つく所が。て、またその女主人公に對する彼の偉らい愛情も詳しく現てゐるが、さて今迄の彼の生活とか、彼が以前不潔な家へ宿り込んだことだとか、彼が自分の家の下女や飯焚女や正體の知れない女と關係したお樂みの冒險とかは一寸も小說家は話してゐない。若しまた斯樣なことまで洗ひ立てした無作法な小說があつたとしても、さう云ふ智識の最も必要な者――未婚の娘――の手にはめつたなことては渡されない。世の中と云ふものは斯うした僞善て固まつて行くうち、遂々英國人のやうに、彼等は心からその道德的人民であることを信ずるやうになり誰も道德的の世界に住む者だと思込んで了ふ』と。

て、トルストイは、佛蘭西人のやうな偏癖もなく、英國人のやうな僞善もなく、露西亞人の率直な『寛豁に出來た自然性』を以て其筆を採つた。

彼の偉大な藝術の秘訣は簡易――Simplicity――と云ふことてあつた。彼は常に素朴な人間の風采を以て、新奇とか驚異とか云ふかこつけなしに彼自身の知つてゐるだけの事實を語つた。彼はただ世の中の智識に於てのみ他の人に優つてゐるやうに見え、誰でも幸に彼のやうに多くの人間と事件を觀、彼と同じやうな經驗をした者があるならば、その人は彼と同じ物を書くことが能きたてあろうと考へられる。それほど彼の發見創造は眞に近く、我等は彼の發見たり創造たることを忘れるほどてある。彼は實にデフォーが孤島の物語を書いたと同じ簡易を以て人間の心の秘密の御伽話を綴つた。ナタシャは著者に代つて、彼女自身からその若々しい戀を語つてゐる。彼は讀者を驚かすことなく、事實その儘の興味を以て、彼の知つただけのことを話すに止ると云ふ風だ。彼は辯解がましい態度を採て自分の智識の不足を隱すやうなことがない。また結構を弄ばない。實際、彼の作品には現實界に存在する以上の結構がない。そこには人生それ自らの儘の複雜な發展がある。

、それが彼の簡易の秘訣である。彼は自然の有するやうな豊富な記臆と經驗を以てその作物を仕組んだ。彼は如何なる出來事にも常に正しい言葉と正しい行爲を撰擇することが能きた。で、彼の廣い性格の全部がその作品となり、些しも個人的の偏狹な所がない。完全な幻像（イルージョン）を現はすに完全な描寫を以てしてゐる。かくてこの天才は彼の觀た人生の像を通じて、我等の知らない間に、彼の人生に對すに信念の正しいことを我等に諒解させる。

米國のウイリアム、ホウエルは其著『余が文學上の情熱』の中でトルストイの藝術を評して次のやうに言つた。(彼は五十歳にして初めてトルストイを知つたと謂ふ。それまで彼の精神上の慰藉者はツルゲーネフであつた。彼は自分に對する文學上の最後の詞（ラストウオード）がツルゲーネフに據て發たれたと思つてゐた。すると、或時偶然な事から彼は數年間も其書架に束ねたまゝ見向もせなんでゐた『哈薩克』を取出して讀んだ。彼はその時著者の名をすら知らなんでゐた。然るに彼がこの書に對した時の感想は『一種の驚嘆』であつた。彼は文字から文字を追ひ、行から行を拾つて讀んだ。『私は長い間の私の讀書で、青年時代の熱情を以てしても、これほどまでに私を滿足させた著者を知らなんだ。然かもそれは既う私の一生に新しい情熱は愚か、新しい友情すら稀有であり失望的である時代に起つたのだ。それは丁度人生と謂ふ高尚な宴會で私の爲めに最後まで保存して置かれた最良の酒のやうなものだ。』と彼は言つてゐる。)

『私にはその理由は解らないが、偉大な露西亞人には簡易（シンプリシチー）と云ふ秘訣がある。或る者に言はせると、それは彼等が永い文學上の過去を有たない爲めで、幾代かの文人間の習慣に囚はれないからだと謂ふ。然かしそれは彼等が人生を取扱ふ友愛的な卒直を說明するものではない。經驗の缺乏は何處でも粗野の姿で現はれる。然るに簡易は智識の最後の成果である。で、トルストイは勿論彼等の中でも一番にこの優秀な珠寶を荷つてゐる。彼はたゞにツルゲーネフのやうに透明な文體をもつてゐるばかりでなく、技巧の更に目立たない筆（マンナー）をも有つてゐる。私は大概な作家の筆致を區別して之を言ひ現はすことが能きるが、トルストイの筆致だけは奈何しても形容に上らな

い。恐らく彼にはどんな鮮致もないのだらう。其處が彼の小說の如實な點である。彼は非常に多樣な人物や事件の中で、一寸した鮮で讀者の前に彼等を活かし出してゐる。それ等の人物の行爲や、それから彼等の特殊な感情思想の劇的說明に據て。多くの小說家はその人物が何う感じたとか何う考へたかと言ふことを讀者に告げる。然かし讀者はその眞僞を考察する必要がある。然るに獨りトルストイばかりはそれ等の人物が何んな風にそれてあり、またなぜそれてあろか、さうあらればならなんだかと云ふことを讀者に知らせる。トルストイに若し特徴と云ふものがあるとしたら、內面的にまた外面的に人物を現はす斯樣な技能であらう。私の說明しうるのは唯だこの點だけだ。

　同じ追臆を語るにしても、ツルゲーネフは過去と云ふなつかしく親しい空氣の中に其人物や自然を漾はせてゐるが、トルストイは直接に其生活の中に住んで、再び現實に其當時の肉の喜び苦痛までも甞めなければ已まない。『幼年』の中の母の葬式を描いた一節では、彼は斯う述べてゐる。「私はこの聖い儀式のあひだ泣いてゐた。て、十字を切つて祭壇の前に跪いた。然かし私は心の底からは祈つてゐなかつた。たゞ無感覺であつた。私は肩の邊の窮屈な私の新調の上衣ばかりを氣にしてゐた。座つた時に私のズボンを汚さないやうにと懸念してゐた。そして忙がしく私の周圍の人を盜み見した」と。て、彼は小兒ながら、人々が斯樣な場合に採る一種の虛僞な態とらしい態度を眺めてゐた。

　彼の寫實は何時も斯うした露骨のものであつた。彼の恐ろしいほど透徹した眼光は如何なる物をも見逃すまいとした。彼がその初戀であつた農奴の娘の部屋を寫した一節には斯う書いてある。「其處に棚がある。その上には一つの鐵器と、板紙で作つた鼻の缺けた人形と、汚れ物を入れる手桶と、皿とが載つてゐる。そこに窓がある。その上に私は黑い蠟の小切れと、絹の紐紐と、咬りかけの胡瓜と砂糖菓子の這入つてゐた紙の空箱とを見ることが能きる。そこに大きな赤い机がある。その上には、一端を針刺に止め更紗の布片を被せた仕懸仕事が乘つてゐる。その側にマシャは彼女の好きな石竹色の棒縞の上衣を着、青いハンケチを卷いて座つてゐる。そのハンケチが殊に私の心を牽いた」と。て、

著者は追つかけて、同じやうな精細な筆で其娘の身體を描いてゐる――讀者を諾否なしにその女の側に座はらせるまで。これがトルストイの描寫法である。斯うして彼はオーステルリッツの戰爭も書けば、奈翁も書き、美しいナタシヤも書き、野性のエロシユカも書き、アンナの最期も書き、イワン、イリッチの死も書き、『クロイッエル、ソナタ』では恐ろしい獸欲まで書いた。否な、彼は『三つの死』では樹木の死を寫し、『アンナ、カレニナ』では馬の心理まで描いてゐる。それに就て恁んな話がある。或日、ツルゲーネフと彼とが連立つて田舍を散歩したことがある。その時彼等は野の中で終日の勞働の疲れきつてゐた老馬を見た。すると、トルストイは直ちにその馬の感想の中へ這入り込んで、手にとるやうにその悲しいいろ〳〵な追憶を描き出してみた。ツルゲーネフは驚嘆の餘り斯う叫んだ。『レオ、ニコラエヴッチよ卿の祖先の中には必然馬がゐるに違いない。』

ゼネバ湖畔に立つたときの彼の『回想錄』に斯う言ふ文句がある。『或時は私は湖水と其岸とを見守り乍ら自分の眼から靈魂へ流れ込む美的肉感を感じた』と。トルストイの藝術の秘密は此處にある。彼は強い健全な官能に賴つて人間の肉を美化した。あらゆる事象を肉の附いたまゝで藝術に採込んだ。肉を通して人の靈を觀た。この點に於ては、彼はモオパッサンと並んで官能的寫實家であつた。

彼の官能は飽くまで強く健全であつた。『速い足と鷲の眼』を持つ獵夫のやうに、彼は如何なる自然の囁きをも聞き洩すまいとした。彼の感官は自然と直接に大膽な交通をした。彼の觀照はたゞ五官を通じてのそれであつた。彼はたゞ官能からばかり人生を觀た。それほど彼の肉感は強く鮮明であつた。『戰爭と平和』の中て、百姓のカラタエフを寫した句の中に、『彼の全身の風味には何處となく丸い所があつた』と云ふ節がある。肉體の風味――Bodily Savour――が彼の藝術の要素であつた。昔から如何なる藝術家もトルストイのやうに人間の肉の風味を描いた作家はなかつた。

近代人の官能は著しく進化した。我等の官能は最早在來の單純な五官を以て律することが能きなくなつた。我等の肉體にはまだ名のない第六官や第七官が働くやうになつた。我等はまた「二重官能(シチスセンシア)」を有つ。我等は早晩色を聞き、音を見、香を味ひ、味を嗅ぐことが能きるやうに成るであらう。新しい藝術は正に此處から生れなければならない。而してトルストイは實に斯樣な藝術の發足者であり、先覺者であつた。

「人間の姿態(ジエスチユア)はその言語(ことば)ほど變化に富んでゐないが、然かしそれ以上に直接で、顯著で、暗示的である。姿態や表情を以てするよりも言語(ことば)を以てする方が欺き易い。一瞥、一すじの皺、顏面に動く一つの筋肉は口に現はせないものを語る。…………ある感情には之に應じた動作がある。反對にある動作はこれに應じた內心の情態を導く。」とメレジコーフスキーは其著書(「人間及藝術家としてのトルストイ」)の中で語つてゐる。更に彼は恁うも言つた。「兎に角、トルストイの殊勳は彼が盡きず盡きざる藝術上の新方面――人間の肉的及心的自覺の融合――を表現した第一人者であると云ふとである(然かも、何たる誠實を以てよ!)。我等は正に斯う言ふべきである、彼は我等に新しい肉體的官能を與へ、新しい酒を盛る新しい瓶(かめ)を與へたと。」

私はトルストイの藝術を觀るごとにロダンの彫刻を思はざるを得ない。彫刻は肉體を形どつて其曲線、陰影の功果から――肉の風味から――人間の心靈――その感情、その思想、その憧憬、その信念、その勇氣――を表現する藝術である。肉から靈を窺ふ藝術である。ロダンは斯樣な世界に據り、新しい技術から新しい心靈を表現した。トルストイも亦別途の技術に據りロダンの成し遂げた所を成した。

彼は文字の上に於ける優れた彫刻家であつた。然り、彼はまた優れた書家であつた。なぜなら、古來如何なる書家が「戰爭と平和」のやうな偉大にして調和した畫布(カンバス)を塗つたであらうか。

(おはり)

軍人の跋扈、其匡救

須崎默堂

(一)誤られたる世論

余は本文が讀者の眼底に入る頃には、一時旺勃を極めたる閥族打破の叫聲漸く其精神を失ひ、局面一新して稍々眞面目なる政論の徐々として政界に發生し來らんを豫期す。何となれば閥族打破は誤られたる世論にして、其根柢甚だ薄弱なるものなればなり。問題の起源は、謂ふまでもなく上原前陸相が西園寺侯の節度を奉ぜず、固く二個師團増設の要求を把持し、當時の內閣をして其政綱を行ふこと能はざらしめたる事實に在り。此範圍に於ては、單に閣議の分裂と謂ふべく、表面に於ては首相の無能力と云ふ外、何等の問題を生ずべき性質のものにあらず、如何なる立憲國にも往々見る事態なり。若し一歩を進めて裏面の觀察に入れば、官僚派は當時の內閣が國民に宣明したる行政財政の整理を實行し能はざるが爲めに、本問題を取つて黨略に供し、玉碎の口實を作りたるに過ぎずと主張し、政友側は官僚派が政友內閣の成功を嫉み、陸軍を使嗾して政權爭奪の具に供したるものなりと主張す。而して適確なる證據を示して第三者を首肯せしめ能はざるは、二者共に異なることなく、公平なる傍觀者に於ては、誰か烏の雌雄を知らんやの感なきを得ず。客臘政友會代議士會に於て、西園寺侯が多少の數字を示したるは、聊か以て官僚派の非難に答へんとする意なりとも想像せらるれども、示す所餘りに漠然にして、實際には何等の價値なし。故に侯爵にして內閣の覆沒は單純なる閣議の分裂にあらずとし、將來に向つて重大な

る政爭を喚起せんと欲せば、意見の一致せざる上原君の辭職を許して、同意見の後任者を求め、其れを得ること能はざるに及びて、海陸兩相補任の官制を求むるにあらざれば、其形式を完備せりと云ふべからず。然るに西園寺侯が此等の手續を取らず、上原君の辭表提出を見て大事去れりと爲し、卒然として總辭職を決したるは、侯爵に於て甚しき怯懦なりと謂はんよりは、寧ろ當時の侯爵の胸中に、之を將來に於ける重大の爭議と爲す意圖なかりし確證と見るべし。されば其後俄然として閥族打破、憲政擁護など不思議の叫聲起りたるに就きては、之を意外とする第一人は西園寺侯爵其人ならんこと余の確信する所にして、此點に關しては余は更に確實なる證據を有す。他なし、桂公が　陛下の命を啣みて侯爵を總理大臣官邸に訪へる時、山縣公が元老會議の結果を齎して侯爵を駿臺に訪へる時、終始一貫、桂公を薦めて後圖を託したるは、則ち西園寺侯其人なればなり。是に於てか知る、內閣の覆沒に關して侯爵が如何なる感情を懷きたるに論なく、侯爵は之を以て官僚派に絕緣する決心を爲したる事なく、尙ほ桂公に因りて舊時の關係を維持する意圖なりしことを。然らば閥族打破、憲政擁護の叫聲は、侯爵の本意にあらず、又政局の自然に發したるにあらざるは無論にして、他に之を製造し、激成せしめたる者あり。

(二)閥族打破論の製造者

客臘に於て憲政擁護會なるもの丶、突如として出現したるは、世人の今に記憶する所なるべし、是れ閥族打破論の根源なり。余は發表以前に於て、同會が如何なる經路を經たるやを知らず、從つて裏面に如何なる計畫ありしやを詳にせず。然れども其結果に見れば、政友會、國民黨、法曹界の有志を網羅し、之を點綴するに新聞記者を以てするもの、同樣の團體は從來とても其成立を見たるもの二三に止まらず。其表面に現はれたる事實は、客臘の內閣更迭を以て不自然と爲し、國民の共同を以て、之が禍根たる閥族を討滅せんとするに在るが如し。而して同會の牛耳を取る者は、犬養君なるかの如く見ゆるは、同會の人物君を推して第一

とするに由るか、抑亦同會の動機は君に發したるか。其は余の與り知る所にあらざれども、官僚派に政黨組織の計畫ある以來、君の一派が頗る窮地に在りたるは爭ふべからざる所、風雲に乘じて之を一擲せんと思索するは、政治家の當に取るべき道なり。君は昨年の政變に於て其機會を發見したりや否やを知らず、兎に角事實に於て君は猛然として本問題に突進し、之を以て宿昔の希望を達し、一面閥族を打破すると共に、他面政友會と合同若くは提挈せんと策したるが如し。是に於て閥族打破、憲政擁護の叫聲は、勃然として起り、一時帝國を席捲せんとするに至れり。之を政略問題として其利害得失を研究するは、余の暫く避けんと欲する所なれども、其作爲の問題にして、時局當然の展開にあらざるは、歴々指摘すべし。閥族は打破せざるべからず、憲政は擁護すべし、無論なり。乃ち無論なるが故に、何時之を提唱するも妨なく、時に內閣の更迭に際し、人心の激動するに乘じて之を試むるは、政治家の能事とすべけんも、之が爲に時局當然の展開を妨け、帝國の政界に於て最大最重とする問題の解決の機會を埋沒するは、惜まざるべからず。

(三)問題の眞相

問題の眞相は軍人の跋扈なり、閥族の橫暴、憲政の危機と云ふ如き漠然たるものにあらず。前に說けるが如く、西園寺侯にして當時の問題を極端まで展開せんと欲せば、第一に陸相の後任を求め、之に失敗したる時、海陸兩相の任用規定を改正する順序に進むべき境遇に在りたるなり。然るに侯爵の之を敢てせざりしは、一に鏖戰の決意なかりしに職由すれども、縱令此等の手續を履みたりとも、當時に成功することなかるべきは分明の數とし、之を以て侯爵を酷評するを避けんが、當時の政局を承けて之を國民間の問題と爲さんと欲せば、矢張一の陸相を以て內閣を破壞し得る非違を中心とせざるべからず。是れ軍人跋扈の問題にして、閥族打破の問題にあらず。而して公平に國事を觀察する者は、其後に起りたる海軍の同盟脅迫をも見遁すこと能はざるべく、彼等が一相の進退を以て、內閣

を不成立の地に置かんとしたるは、少しも陸軍の爲せる所と異なることなし。然るに閥族打破を唱ふる政客等は、陸軍の暴慢を咎め、施きて其背後に在りと認むる政治家を云々すれども、陸軍と同一の事を爲せる海軍の暴慢に就きては、一言の非難を發せざるのみならず、寧ろ之を快とし、或は之を使嗾したる形跡もなからず。此の如きは明白に黨派的偏見に囚はれたるものにして、斷じて國家的見地に立ちて、誠意國事を解決せんと欲する者と云ふを得ず。彼等の非行は全く閥族と同一にして、唯之を遂行する力量を缺けりと云ふのみ。閥族打破、憲政擁護の聲が此徒の口より發せらるるは、寧ろ滑稽なり、憲政は決して此の如き方法にて擁護せられず。

(四)武人の跋扈

師團增設問題が彼が如く難解のものとなり、終に內閣を破壞して顧みざるに至れるは、一に意地の問題となりたればなり。意地の問題とは、獨り西園寺首相の之に對する態度宜しきを得ず、陸軍の惡感情を挑發したること甚しきを云ふのみにあらず、其根本に海陸軍の對抗あるに由る。陸軍は以爲らく、陸軍の費用を以て海軍を擴張するは許すべからずと。是に於て自己の節したる費用を國庫に提供するを拒絶し、却つて之を以て陸軍擴張の資に充んと欲し、自費自辨の說を擁立し來る。此關係に於て首相が軍部の整理を內閣に收めず、各省各自に之を行はしめたるは一大失策にして、此くて陸軍をして是れだけあれば年來の宿望たる師團增設を決行するに足るの念を高め、之を競爭相手たる海軍に提供して、其勢力を擴張せしむるに忍びざる執着心を痛切ならしめたり。されば客臘の政變は西園寺侯自から之を招致したる廉もあれど、其眞因は海陸軍の競爭なりと謂はざるべからず。是れ帝國政界の根本に橫はる大弊にして、識者の最も留意せざるべからざる所、大は內閣制度の完成、財政の健全より、小は軍部其物の進步發達、多くの社會的事項に至るまで、本問題の解決に待つもの勝けて數ふべからず。今や彼等の私鬪は帝國の政府を破壞して顧みざるに至り、暴慢

殆んど其極に達せり。然るに問題は一部策士の私便の爲に、漠然捕ふるなき方面に轉換せられ、國民をして其眞相を窺ひ知ること能はざらしめんとす、長大息なきを得ざるなり。乃ち余は玆に其一斑を暴露して國民に訴へ、眞個國事を憂ふる士をして、現在及將來の大問題は此點に在ることを知らしめんと欲す。蓋し弊の大原因は、軍部の閥族の手に歸したるに在るべく、政治上に於ける薩長の抗爭は、内攻して軍部の爭奪となり、漸次淘汰の結果、陸軍の長閥に歸したるに對し、海軍は薩閥に歸し、各々一方に割據して、更に抗爭を繼續しつゝあり。是に於て帝國の軍部は朋黨の巣窟と化し、薩長互に其一部を占有して、交々威力を張るに勉め、陸軍一師團を增せば、海軍は五萬噸を擴張して之に對せんとす。帝國の政界が年々軍備擴張を以て惱まされ、帝國の財政が次第に膨脹して窮極する所なきは、皆此原因より來るなり。余は常に曰ふ、帝國には長の陸軍薩の海軍ありて國防なしと、其れ然らずや。是れ到底長く忍耐すべからざる狀態にして、國家防衛の爲にする軍備には自から限度あれども、朋黨が勢力を爭ふ具としての軍備には限度あることなし。多々益々其競爭を大にし、帝國は終に之に給すること能はざるに至りて止まんとす。之を實跡に徵するに、日清戰爭以後、海陸軍の擴張は大に速度を加へ、爲に租稅を增徵するに至り、日露戰爭を經て其勢愈々急なり。戰時の非常特別稅一億六千萬圓を復舊する能はず、更に二千五百萬圓の增稅を餘儀なくしたるは、皆此が爲なり。此の如き苛斂誅求を以てして、人民は其疾苦に堪へざる中に、軍部の費す所は實に其三十四五パーセントに居り、若し行政整理を斷行し、國債の償還を相當の程度に止めば、將に四十パーセントに達せんとす。而かも彼等は決して之を以て滿足せざるなり、三十九年以後彼等は互に擴張を競ひ、累次の內閣一として其脅迫を免れたるものなし。第一次西園寺內閣然り、第二次桂內閣然り、第二次西園寺內閣尤も然り、而して第三次桂內閣も業既に然るにあらずや。而して國庫、人民の間に尚ほ取るべき餘地ある間は、彼等は之を分

描るに滿足して、未だ甚しく露骨に競爭の事實を表明するに至らざりしかども、國庫人民共に窮して、最早彼等に提供すべき好餌なきに至りて、彼等は相互の肉を取りて食はざるべからずして、茲に始めて其眞相を暴露したり。陸軍が頑强に其肉を海軍に提供するを拒絕したるは、則ち客臘に於ける政變の眞原因なるにあらずや。此關係に於て特に深刻の觀察を要するは、政友會及海軍の態度にして、西園寺內閣が陸軍費の整理を以て海軍を擴張せんとしたるは、單に海軍擴張は輿論の是認する所たるのみに由るか、或は一層深き秘計ありて然るかの點に在り。余は西園寺侯及其謀士の胸底に入りて之を捜る能はず、從つて此疑問に確實の斷定を下し能はざれども、西園寺侯及其謀士の胸中は如何にもあれ、此一事よりして海軍と政友會との間に、一脈の氣息を通ずるに至りたるは、蔽ふべからざる事實なり。閥族打破を絕叫する人士は、口を極めて長閥軍人の横暴を罵る者あり、或は全く軍人の跋扈に接觸するを避けて、知らざるまねするもあれど、未だ長閥軍人と同一の事を爲す薩閥軍人の横暴を指摘論難せる者なし。長閥軍人の横暴を罵る者は、其心術比較的正直なれども、眼孔豆より小なるものなるべく、軍人問題に接觸を避くる者は、自己の弱點を知りて他の戰場に戰はんとする老猾者なるべし。乃ち今の閥族打破論者は、短見者にあらざれば老猾者にして、短見と老猾と正當に國家の大事を解決する所以にあらず。政界の劣敗者となりたる薩派が政黨に賴りて復活せんとし、政黨が薩派に結びて重きを爲さんとするは、共に咎むべき事にあらず、寧ろ勢力の權衡の爲に歡迎すべし。然れども一歩を政界より進めて、薩派政治家に由りて薩閥軍人に通じ、薩閥軍人に賴りて長閥政治家に拮抗せんとするに至りては、是れ軍人を背後にする政戰を開かんとするものにして、其結果は深く恐るべく、國家は或は內亂の域に進むやも知るべからず。今の閥族打破を絕叫する者は、斯る事態を覺知して是に進まんと欲する者なるや、或は盲目の勇に誇る者なりや、海軍と此徒との關係は、最早回歩すべからざる域に進め

りや、海軍は一朝の過を悔ひ、斷乎方針を一轉するや、曾余の未だ明知し得ざる所なれども、客臘に於ける事態は、明に此不幸なる朕光を示せりと斷言するに躊躇せず。之を思へば何人も悽愴の感に堪へざるべく、若し今の閥族論者成功して、斯る手段を以て現內閣を顚覆し得たる時、長閥政治家は陸軍に籠城して動かずとせば、次ぎて政局に立つ者は、如何にして時局を收拾せんとするや。

(五)匡救の方法

陸軍の横暴に對し、海軍を使嗾して報復せんとしたるは誤謬なり、長閥の陸軍に據るに對し、海軍に通じて之と拮抗せんとするは、更に大なる誤謬なり。政治家も軍人も此機會に於て斯る行動の帝國を危殆の地位に導くべきを覺知し、深く戒愼する所あるにあらざれば、帝國は大なる厄運に遭遇することを免れざるべし。客臘の政變は陸軍の横暴に基づく、而して海軍が桂內閣の成立を危ふからしめたる一事は、場合によりて、海軍も亦同一の事を爲すに憚るものにあらざるを證したり。是れ陸海軍を通じて軍人の跋扈の問題にして、彼等が政治家の節度を侮蔑するの久しき、其我見を貫徹せんが爲には、帝國政府を破壞して顧みざるに至れるを示す。是れぞ客臘の政變に見たる巨大なる事實にして、國民が其善後を策する、須らく軍人の跋扈を抑制するを本旨とすべし。而して軍人の跋扈は其源を薩長の海陸軍を私占し、之を朋黨の巢窟としたるに發すること前段に述べたる如しとすれば、其拔本的匡救法は、海陸軍を解放して帝國の海陸軍たらしむるに在るは謂ふまでもなき事なり。然れども此は理論として自明にして、何人にも異論なき事ならんも、實行は容易にあらず。當局者既に十分に之を承認して、勇敢に之を決行する場合に於ても、尙ほ數年を待たざれば其効果を完全ならしめ能はざるべし。議論としては當局に之を勸告する外何等の云ふべきものあらず。余は無論此の如き無策に甘んずる者にあらず、更に客臘の政變が示したる明白の事實に基づき、國防會議の創設內閣制度の改正二項を提唱せんとす。

（六）國防會議

上原陸相が二個師團增設せらるゝあらざれば、國防の責に任ずる能はずとせるは、國務大臣として當然の事にして、如何なる立憲國にても往々生ずる事體なり。然れども陸軍廿五個師團、海軍五十萬噸は既定の國防方針にして動かすべからずと云ふに至りては、決して許容すべからず。否國家の現制に於ては、或は此く主張すべき理由あるも知らざれども、然らば其制度は改良すべきものなり。軍人等は此國防方針は軍事參議院の議決を經て、上奏裁可を得たるものなりと云へど、國防方針は軍人の議決すべきものにあらず。國家內外の大任に當る者は、獨り內閣總理大臣あるのみ、外務大臣は其指示の範圍に於て外交に任じ、大藏大臣は其指示の範圍に於て財政に任じ、海陸軍大臣は其指示の範圍に於て國防に任ず。其他の國務大臣皆然らざるなく、此の如くして始めて國務は完全なる統一を保持することを得るなり。世界列國中此主義を遺憾なく實行し居るは今尙ほ少なきも、國際の競爭激甚にして、帝國主義の風潮抗すべからざる將來に於ては、如何なる國と雖結局之を承認せざるを得ず。英國の首相が輓近漸次大宰相の地位に上りつつありと云ふも之が爲にして、前バルフォア內閣の晚年に、首相の下に國防會議組織せられ、外交、軍事、財政を一括して研究するに至りたるは、其具體的例證なり。國防の方針は國際の關係に決し、國際の關係は總理大臣が外務大臣と協議して定むべき所なり。而して之を實行するには、國家の財力を顧みざるべからざるを以て、大藏大臣の之に參加するは當然なり。乃ち國防は外交、財政と關聯して研究し、總理大臣之を決定すべきものにして、軍人の肆に指使し得べきものにあらず。是れ國防の根本義にして、若し此主義を度外して彼等の爲すに任せば、軍備は過大に赴き、總理、大藏兩大臣は、常に之が實行に惱殺せらるゝは、避くべからざる傾向なりと爲さゞるべからず。我國の近狀は此弊を暴露して餘蘊なきものにして、最近數年間の政況は明白に之を立證し、客臘に於て終に大爆發を見たり。故に總理統轄の

下に國防會議を起すは、如何なる組織に論なく、國防問題上の進一歩たるは之を疑ふの餘地なく、世には桂公の計畫に對して取止めなき非難多けれども、余は主義として之を翼賛せざるを得ず。但し事業を成功に導くには、組織の内容與りて力あるは無論なるを以て、之が爲にも精密の研究を費さゞるべからず。余は會の骨子は首相、外相、藏相、海陸兩相、參謀本部長、軍令部長に限り、元帥、遞相、殖民地總督等は、時機に應じて意見を徵せば足れりとする者にして、新聞紙に傳へらるゝ桂公の計畫とは、多少其趣を異にす。蓋し桂公の計畫は老軍人に對する氣兼ねを含むものなるべく、過渡期の政策として或は止むを得ざるも知るべからざれど、此情實累を爲して、終に會の本能を發揮し能はざるに至るなきや。夫の官民合同の國防會議說の如きは、理想に走せて實行に遠かる、余は與せざるなり。

(七)内閣制度の改善

上原前陸相が總理大臣を經由せず、直接上表骸骨を乞へるは、内閣統一の主義に背反するものにして、余は決して許容すべからざる擧動なりと思ふ。帝國憲法第五十五條には、國務大臣は天皇を輔弼し、其責に任ずとあるに由り、國務大臣は陛下に責任あるものにして、總理大臣に責を負ふものにあらずと主張する者あり。憲政の始めには此種の議論行はれ、國務大臣は個々に任命せられ、個々に進退するものなるが如く思はれたる事もありしが、此の如くんば内閣の統一なるものの有る筈なく、總理大臣は閣議の分裂にて責を引くの理なし。而して内閣の更迭は總理大臣の更迭にして、内閣の組織は總理大臣に委任せられ、閣僚撰擇の權は總理大臣の手に歸する成例成りたる今日に於ては、如何にしても此の如き主張を支持すべき理論なきなり。故に上原君の擧動の不穩なるは謂ふまでもなく、之を認諾したる西園寺侯も、亦憲政を解せざる者なりと謂はざるべからず。況んや上原君の此擧は不用意に發したる錯誤にあらずして、裡面に一層忌むべき主張を含む有心故造の所爲なるをや。蓋し國防は閣議以上の問

題なりとは、師團增設問題の漸く喧しからんとする頃より、數次官僚派より發せられたる議論にして、其根據は帝國憲法第十一條及第十二條に在り。憲法第十一條には天皇は陸海軍を統帥すとあり、第十二條には天皇は陸海軍の編制及常備兵額を定むと規定す。彼等則ち之に據りて、海陸軍は天皇に直屬し、其編制兵額共に內閣の容喙を許さずと主張せんとす。軍事參議院の議決を以て廿五師團五十萬噸說を決し、之が實行を內閣に迫るは之が爲なり。陸海軍大臣は國務大臣中に特異の地位を保持し、軍人にあらざれば其閣內に入るを許さずとするは之が爲なり。而して上原君が尋常大臣の進退の道を履まず、特に上表骸骨を乞へるも、亦實に之が爲なり。故に西園寺侯が上原君の特種の手續を認許したるは、陸海軍大臣の特異の地位を認諾したるに同じ。帝國の憲政を破壞したるは、西園寺侯實に上原君と責の一半を分つ。世の嘖々者、此の如き事體を辨せず、徒らに政友會の後塵を拜して憲政擁護を云々す、果して何をか爲さんとするや。陸海軍大臣を文官より撰任し得るの制は、固より樹立せざるべからざるに屬するも、此制成れりとしても、其根本を打破せざれば、軍部の內閣に對する關係は立定せず。陸海軍の陛下の統帥權に在るは無論とし、其編制常備兵額は、猶ほ行政各部の官制が陛下の大權に在るが如きのみ。參謀本部、軍令部を設けて陸海軍務を統るは、則ち統帥權を行使し給ふ所以にして、陸海軍大臣も關涉するものにあらず。宜しく此機に於て陸海軍大臣は文官よりも任命し得るものとし、凡て他の各大臣と同一の進退を爲すものとすべし。

八）結論

國防の方針を立定して帝國財政の根本に橫はる弊竇を塞ぎ、陸海軍大臣の位置を明確にして內閣の統一を鞏固にするは、是れ客臘の政變によりて國民の前に提供せられたる二大問題なり。國家現時の問題として是れより緊吃重要なるものなく、帝國の憲政を發達せしむる所以是れより急なるものなし。世人の正直に之を把握し勇敢に之を解決せんとはせずして、故らに漠然

たる閥族打破を絶叫するは何ぞ。余は此徒の果して何を爲さんとするやを知らざれども、近日爲す所を見れば、桂內閣を破壞するを以て目的とするが如し。此くして衆議院に與黨を有せざる內閣は存立を許さずとの主義確立せば、是亦政界の一進歩たるを失はざらんも、然る後にも前に掲げたる二大問題は、依然として國民の解決を促して存留すべし。況んや桂公の政黨組織は既に公然の秘密となりたる以上、今にして閥族打破を叫ぶは、日既に三竿にして曉鐘を撞くの感なきにもあらざるをや。問題の大小輕重、識者は必らず撰ぶ所を知らん也。（一月十四日）

政變の眞相

松井柏軒

（一）

桂公の志望も、趣味も、嗜好も總て政治にあり、公は實に天成の政事家也、西園寺侯の如き風懷襟度の雅あるなく、唯だ聊か長唄と和歌の嗜あるも素より上手といふ程に非ず、長州人は概して文雅の才に富むも、公は長人に不似合なる程雅致を有せず、然れども其の思慮も態度も才能も、政事家としては當世能く及ぶものあらざる可く、其の一旦入りて宮中の人となれるが如きは、全く適材を適處に置くものに非ず、少くも人物經濟より視て損失なりとす。

公が宮中に入れるは、世間傳ふる所の如く、山縣公其の他の策略にもあらざれば、又進んで自から之に當れるにも非ず、唯だ京都に於て先帝御危篤の報に接し、取るものも取敢へず、八月十日朝新橋に歸着するや否

や、一旦家に入りて旅裝を解き、齋戒して參內し、先帝の御靈前に拜跪して涙滂沱たりし時、皇太后、新帝、皇后の三陛下謁を賜ひ、新帝陛下は、踐祚日淺きを以て常侍輔弼を卿に俟つと宣はせ、皇太后陛下もまた御言葉添の上、先帝御在世の折、公に關する御諚ども申聞け玉ひしかば、公は唯だ益々涙に咽ぶのみ、拜辭して家に歸り、午餐の後、獨り卓に凭て沈思するに及び、御內旨の太だ重大なるに氣付き、直ちに先づ西園寺首相を訪ひ、又轉じて山縣公を訪ひ、御諚の次第を申出て丶、寧ろ老公自から進んで　陛下に常侍すべきことを勸めしに、老公は病羸其の任に非ずと辭し、公は之を老公の主治醫たる平井軍醫総監にまで確めたる上、老公の竟に起す可らざるを悟れりといふ、山縣老公もまた御內旨の次第を聽きて打驚ろき、翌十一日自から斡旋して元老會議を開き、正式に桂公を推薦し、斯くて十二日公を內大臣兼侍從長に親任し玉へる次第なれば、事は全く聖旨に出づ、去れば公自からも身を献じて其の職分に盡すべく決心したるべく、公の宮廷に仕ふるを以て、人物經濟上損失と做せる者も、又公に由りて政局に駿足を伸んとせる政客も、皆已むを得ざる成行として觀念するの外なかりし也。

（二）

一昨年八月桂公の內閣を罷むるや、從容として西園寺侯に告げて曰く『お互ひに政局に立つ玆に二回、公と僕とのみ局に當るも妙ならず、公の後年去るときは、之を寺內に讓るも可ならずや』と、侯また首肯せりといふ。

斯くて公は全く政界に意を絶てるが如きも、公の道樂は政治にあり、公は到底政治を斷念すべからず、別に政治上に何事をか試むる志望なりしならん。

公罷めて間もなく支那革命の變は起れり、公は本來支那問題に多大の興味と抱負とを有せりと傳へられ、之より推想して、公や今に及んで其の政局を捨つるの早きを悔ひしならんと噂されき、去年七月公の歐洲に遊ばんとするや、黨界の或るもの等は、公歸來新政黨を作るべしといひ、密かに待望し畫策する所ありしが

如し、思ふに公は明白地に政黨組織を豫約せるに非ざりしも、解釋の仕様次第にては、或は斯く解し得るやうの話談を爲せしやも測るべからず。

公は又歐行に就て何等使命を佩びずといへるも、其の在職當時三びまで申ねたる日英同盟の楔子を固め、且つ殊に露國との親和を策せんと期せしが如くなりしも、不幸先帝御不幸の報に接し、僅かに露都に數日を過せしのみにて匆皇引返せしが、露國の內情に就ては深く悟る所ありしに似たり、凡そ此等の事實より考察するに、公が全然覇氣を政界に斷てるに非ず、機を看て大に成さんと欲する志望ありしや疑ふべからず。

然るに聖旨忤ふ能はず、歸來意外にも宮中に入て常侍輔弼の任を拜す、公の意中を推すれば、誰か同情に堪えざらんや。

（三）

今回の政變を熟視するに、畢竟は陰謀と陰謀の衝突にて政友會、遂に西園寺侯が意外に早く引上げて、一世を瞠若たらしめしといふに過ぎず。

松田、長谷場の諸氏は全盛なる長州派を打破るためには、其の根據と目せらるゝ陸軍に一打擊を加へて以て大政黨の威望を示すべしと爲し、其の手段として薩摩派との提携を企てたり、原氏の部下には薩人あり、又薩派と目すべき策士もありて熱心に政友會との聯合を策したるも、本尊たる原氏が何樣の程度まで深入りせしかは疑問也、又海軍は其の擴張案實行のため輿論の力を借るべしとなし、或は說客を放ち、或は其の資を給して何々會などいふものをも組織せしめ、暗に海軍論を鼓吹せし證跡あるが、或は昨年の總選擧に、政友會に出資して其の選擧を內助したりとまで噂せらる、幸ひにして民間にも海軍論の聲高く、西園寺首相も前回の貴族院にて、行政稅制の整理と共に、海軍擴張をも提案すべしと明言するに至れるが、其の底には、斯くして薩摩派の歡心を結ぶと共に、彌よ陸軍に强壓を加へ、其の威力を殺ぐと共に、由て以て長州派の鼻梁を挫かんとは謀せし也。

陸軍の二師團增加案は、石本陸相以來の懸案にて、

必然次年度の豫算には要求さるべかりしものなるに、政友會も世間も、薩人たる上原陸相こそは、増師案を抑ゆべきチャンピオンなれ、此の人出づる以上形勢一變すべしと豫期せしに、何ぞ圖らん、上原男は其の實熱心なる増師論者にて、師團長時代より國庫を累せざるまでも必らず之を實行すべしと唱へ居たりしと聞く、尾崎學堂氏は上原男を大臣學に通ぜざる小僧と罵倒せしも、西園寺侯が之を任官せしむる時、其の意見をも確かめざりし手落は何と許すべきや。

政友會は増師問題に對し、主義としては贊成なるも、財政許さゞるを奈何せんといひ、上原男が再度まで山本藏相に確かめし時、藏相も首相より増師を遣れといはるれば遣ると明言したるを以て、上原男も大に意を強くしたりしといふ、然るに上原男が九月十二日増師案を提出したるに對し、西園寺侯は直ちに之を取極めず、却つて政友會及び新聞紙よりは陸軍の强梁を詬罵する議論盛んに出て、陸軍は殆んど包圍攻擊の底に陷ゐりたり、桂公が近く新內閣組織の大命を拜するや、自身に兩度まで齋藤男を訪ひ、胸襟を披きて留任を求め、男が一び諾して更に變改するに及び、竟に元老會議に訴へ、其の結果優詔降下となりて結着したり、事は三四日間に過ぎざりしも、公の奔走勞劬や努めたりと謂べし、西園寺侯が斯の如く勞劬慇懃を盡さず、九月中旬より十一月下旬までも此の大問題を捨置き、却つて陸軍をして包圍攻擊を蒙むり、面目上一步も引くとを得ざるに至らしめたるは、果して評論を挾むべき餘地なきや否や。

且つ上原男は、田中局長の奔走が或は西園寺侯等の感情を害したるべきを掛念し、十一月卅日更に増師の六年計畫を九年に延長する設計を立て、其の翌朝は更に十二年計畫案を懷にして侯を訪へるも、侯は辭色冷然として最早増師問題に就て考慮すべき餘地なしと答へしかば、男も怫然として辭職の意を明言し、其の足にて大山公を訪ひ、更に闕下に伏奏して辭表を上つれりといふ(十二年案は斯くして侯に提示するに至らざりし由)、増師案が果して主義の問題ならずば、侯は何

故九年案に耳を貸さゞりしや、更に男に求むるに再考三考を以てせざりしや。

侯は又曾て山縣公を訪へる時、公より補充案といふを提言したり、其の意蓋し露軍が機關砲隊を新設せるに對し、我れ亦機關砲隊を新設すべく、而して露軍にて飛空器自働車等を利用せば我れ亦之に倣ふべく、徒らに兵數を増加せんよりも設備に於て劣らざるを期すべしといふにあり、侯は悦びて之を政友會幹部に語り、幹部等も公さへ斯る意見なる以上、増師を抑止すると易しと安心し居たりき、然るに斯くと聞ける陸軍は大に驚ろき、極力山縣公に說く所あり、陸軍の費用を節して海軍の擴張に充つるが如き、士氣にも關すとまで痛言せしかば、根が陸軍出身なる山縣公は、到頭說伏せられて増師論に左袒するに至れり。

消極論者として軍備擴張に反對なる井上松方の兩侯また陸軍に說伏せられしが、唯だ桂公丈けは身宮中に在るの故を以て口を緘かず、上原男の如きは公一人或は反對に非ずやとて、頗ぶる胸を痛め、田中局長また種々の手段を盡したるも、竟に公の意見を明らかにする能はざりしといふ。

西園寺侯は山縣公の意見一變したるを視て、最早取るべき手段なしと斷念したるべきが、其の以前何故に自から上原男と胸襟を披きて相計らざりしやは、依然たる疑問也、况んや九年案十二年案は共に岡次官、田中局長等の一致調製せし所のものなりといふをや。

原氏は陸軍との妥協を望み、十一月廿五日夜密かに桂公を訪ひ、六時間に渉りて懇談せしも、公は其の地位に顧みて調停の依賴には應ぜざりし由(官吏増俸案提出の時、原氏は桂公を訪ふて増師如何と叩けるに、公は今二三年間増師問題を打切るべしと答へしにて、絕對に打切りといへるには非ずと聞く)唯だ松田氏は行政稅制の整理思はしからず、破綻は其の邊より生じて遠からず面白からざる瓦解を看るに至るべきが故に、世間に非増師論高きを幸ひ、此の問題のため內閣の計畫を阻止せられたりと稱し、以て內閣を投出して玉碎の名を執るべしと主張し、原氏と互に執て下らさ

りしが、侯は竟に松田氏の說に隨へる也、斯く解すれば、侯が上原男と熟議して事を定むる意思なかりし次第も始めて氷釋し得らるべき歟。

（四）

陸軍が其の說を固執する間、官僚の一角にも一種の陰謀は企てられたり、政友會と薩摩派との聯合になる陰謀挫かざる可らずとて、更に薩長聯合を策りし計略是れ也。

此の計畫者は平田子にして、其の養痾のため逗子に在るを幸ひ、密かに鎌倉にある松方侯を訪ひ、侯を起して其の財政意見を實行せしめ、併せて薩長融和し、海陸軍を統一して國家のためにすべしと說きしかば、侯も心大に動きたるらしく、斯くて平田子は侯の必らず起つべきを豫斷して、偖て彌ゝ西園寺内閣に止めを刺すも可なりと爲し、暗中に一飛躍を試みたるものの如し。

此の計略は恐らくは西園寺侯と雖も感知せざるなるべし、但だ初めより大浦子小松原氏等が此の計畫に與かれるや否やは尙ほ不明なれども、西園寺内閣の倒れし後、平田子を中心として此の人々が奔走せし形迹は明か也。平田子等が後繼内閣を寺内伯に組織せしむるの非なるを山縣公に說き、以て松方内閣の進路を拓かんとせしことは、一層明白也。

此の政變に就ては種々の揣摩臆測を下し、或は西園寺内閣打崩しの張本人あるが如く看做す者多けれども多くは想像に止まり、心の底の奧は知らず、事實としては唯だ平田子一派ありしのみ、然かも平田子の陰謀を非として怒鳴込める一政客あり、平田子をして眼前に或る方へ遣はす書面まで認めさせるに至れりといふ、世には這個の消息を度外に措き、西園寺内閣毒殺など唱へて、下手人あるらしくいふは笑止の至也、西園寺侯等は寧ろ自から引上げ方の巧妙なりしに得意を催ふして、陰にて微笑を禁じ得ざるべし。

（五）

西園寺侯は辭職の前日、山縣公を訪ひ、曩には寺内伯を推薦すべき豫定なりしも、今斯くすれば政友會員

の激昂太だしく、微力之を奈何とも致しがたければ同伯を推薦はせじ、但し自分は桂公こそ最も適任ならめと存ずる旨打語りしといふ、去れど元老會議は今更桂公を宮中より出すも　陛下に對し恐れありとて、先づ松方侯を最先に推擧したりし也。

侯が疾を勉めて上京したるは、十分に就職の志ありしが故也、平田子が既に豫め通謀し、薩長聯合の結果として內務に大浦、司法に平田、大藏に水町、農商務に平山といふが如く、總て山縣松方の直參のみにて役割を定めんと內定し置けりとも知らず、政友會の一部には、早くも松方內閣と提携せんと欲して手を廻せるものありしが、此の內定を聞くや、愕然として俄かに侯を扯留むるに熱中し奔走するなど、其の態度の急變實に意想の外にありしとは、今も尙ほ譚柄として持囃さるゝ所也。

去れど政友會幷に薩摩派の運動の効空しからずして侯も竟に斷念したるが、玆に侯は一應山本伯を推し、更に平田子を推擧することとなれり、平田子は西園寺內閣を打破るべく手を着けし發頭人なれば、義素より辭す可らず、然れども表面に立つは子の欲せざる所、子は順序上寺內伯を可とすとて自から起つことを避け、結局元老會議をしてお鉢の持往くべき場所なくして、竟に優詔の結果、桂公を宮中より出すに至れる次第なり。

今盛んに行はるゝ憲政擁護なる文字は、岡崎邦輔氏の發明し、犬養毅氏の贊成せるものにて、岡崎氏も「之が類燒して全國に普及せるは面白し、唯だ此の熱の冷却せざらんことを憂ふ」とは、氏が親しく或る人に打語れる所なりといふ、西園寺侯が巧みに玉碎の名を得てより、玆に憲政擁護の聲大に揚り、且つ政友會の腰を堅くするため一部策士の益々盛んに其の聲を張り上ぐるありて、爲めに政變の影響が意外の處にまで推し及び、筋道も殆んど分らず、恰かも火事場の混雜の如くなれるは、西園寺侯等の計略思ひの外に圖に中れるものとして、果して手を額にするや否や。

每次の政變が有意味か、無意味かは知らず、去れど

事實は斯の如し、批評は總て事實を的確なる基礎の上に立つべし、今の輿論なるものは大分に見當違ひの如く思はれるば、取敢ず余が見聞せる政變の始第を叙する斯の如し、事實は事實也。若し違ふ所あらば謹みて叱正を仰かん。

新内閣の財政方針

松山忠次郎

申すまでもなく、近來殊に日露戰爭後の日本の政界は畢竟西園寺と桂との爭に過ぎないのである。桂が引込めば西園寺が出て、西園寺が引込めば桂が出ることになつて居る。今度の政變といふものも結局桂と西園寺の爭があらはれたのに外ならない。そして其勢力はどちらが强いかといへばそれは多少の甲乙はあらう。或は常陸山對梅ヶ谷位の違ひはあらう。が然し、どちらも先方を無視することが出來ぬのであつて、先方の主張希望といふものを尊重して、自分の財政方針なり施政方針なりを決しなくてはならぬのである。詰り互に牽制し合つて居る。だからして桂と西園寺との政綱――殊に財政方針は實はもう大差が無いのである。互に牽制し合ひ、互に一致點を見出して、或は妥協したり或は情意投合したりして來て居る。從つて西園寺が内閣を取つたからとて、自分の思ふ通りのことも出來ず、今度桂が内閣を取つたからとて、又固より自分の思ふ通りは遣れない。のみならず問題によると桂も西園寺も兩方共惡るいと知りながら政綱とせねばならぬ

といふ破目にも陷る。例へば米の關稅―外國米の輸入稅の如き、これは詰度桂の內心を叩けば困つた問題と思うてゐやう。西園寺も同じ意見に違ひない。が然し之は兩方共廢することが出來ないのである。之を廢することに反對するのみならず、更らに外國米の輸入稅を値上げしやうとする論者は現に西園寺の部下から出て居るのである。又鐵道普及の如きも同樣であつて、二人共之は持て餘して居る問題であらうと思ふ。固より桂公も西園寺侯も兩方共鐵道國有論者である。國家が鐵道を普及することには大體は反對ない筈であるが、然し今日の如く損の行く新らしい鐵道を苦しい財政の中から遣り繰して敷設するといふ事は二人共本心で無いに極つて居る。之は仕方無しにやつてゐるものといはなくてはならぬ。箇樣な具合であつて、もう已に今日までに桂と西園寺は牽制し合つたり、或は妥協したり、或は双方共人氣取りの爲めに兩方の大體の意見は一致して居るのである。多少の相違はあつても今度桂が新內閣を組織したが爲めに大いに目新らしい財政方針を取ることが出來ないだらうと思ふ。

更らに桂內閣の政綱として傳へられて居るもの丶一つ〳〵について具體的に批評して見るのに、矢張結果は同じ事になるのである。先づ第一に西園寺內閣の瓦解の原因であつた國防について考へて見るのに、西園寺は陸軍を抑へやうとした。桂も矢張り陸軍の擴張には反對である。此點は兩者明かに一致して居る。海軍ては西園寺侯は海軍擴張を明かに容れて居つた。桂公は表面反對するといふ事で、容れないといふ事であつた。けれども其實際は容れる事になつて居るので西園寺侯と同じ事になる。來年度に於て六百萬圓を海軍擴張費の一部と認めて居る。之は元來繼續費の一部であつて、いはゞ首を出したのであつて、其後から尻尾が ついて來るのである。そして結局問題の九千八百萬圓の全部を承諾することになるのである。即ち六百萬圓を認めたといふ事は九千八百萬圓を認めたと同じ事になつて、從つて陸海軍共結局同じ所に落着くのである。元來西園寺侯は陸軍に對して整理と擴張とを區別

しろと主張して、それが今度の大問題となつたのである。然るに海軍に對しては整理と擴張とを混ずることを許して居る。即ち海軍で整理した金を以て海軍擴張に宛てることを許して居る。此點は西園寺侯の論理が明確を缺いて居る。そこで桂公は陸軍に對しても整理と擴張とを別にしろ、海軍に對しても整理は整理、擴張は擴張と別にしろといつた事は、理屈としては其方が筋途が通つて居る。けれども結局海軍の方の擴張を容れることに事實上なつたのであるから、結果は同じ事である。又も一つ國防論について言ひたい事は國防會議の問題である。桂は海軍擴張費として來年度分六百萬圓丈けは認めるが、あとは國防會議を開いて其上で國防の大體の方針を定めやうと主張して居る。が之も結局有名無實に畢るだらうと思ふ。只形式が異る丈けで事實は同一であらう。何となれば其國防會議の議員といふものゝ多數は之までの軍事參議官が多數を占めるのである。それに外務大臣と大藏大臣の二人が入るといふ評判であるが、此二人が入つた所で、多數は是れ迄の軍事參議官であるからして、其協議の結果は從來と同一であるは明かである。元來國防の方針を極めるといふ事には外交の方針から極つて來なくてはならんのである。日本の外交は北守南進であるか或は南守北進であるか、それによつて國防の方針が異つて來なくてはならぬ。若し蒙古の方に發展する考ならば陸軍の擴張止むを得ぬが、之に反して北の方を打擲つて南の方に發展する積ならば陸軍よりは海軍の方が肝要である。從つて國防計畫を立てるのには先づ第一に外交の方針から定めて、次に財政上國民がどれ丈けの軍備擴張に堪ゆるや否やといふ事を研究しなくてはならぬ。だから主として外務大藏兩方の意見を聽かなくてはならぬのである。軍人の意見は單に專門家の意見として參考に聞いて置くのが本當であらふと思ふ。處が今度の國防會議は矢張り相變らず軍人多數で極めるのである。外務大藏兩省の當局者の意見は單に軍人の參考として聞かるゝに過ぎない。それではもう從來と異つた事はない。今度の國防會議も有名無實に終るに違

ひない。

第二に減債基金の問題に於ても西園寺内閣と桂内閣とは同じ方針を執ることは明かである。減債基金の制度はずつと前から財政當局者の間に守られてゐたのであつたが、日露戰爭の後に第一次桂内閣の時に法律として極めたのである。それは日露戰爭に對して起した公債についての話てはあつたんだけれども、今度の第三次桂内閣に於て此計畫を變更するは自殺的てあるからやらない事は明かてある。矢張り減債基金を維持するに違ひないと思ふ。尤も西園寺内閣の時に山本大藏大臣は此制度に反對の意見を持つて居つた。が矢張り桂一派の牽制て自分の思ふ通り此を排することが出來なかつた。そして不本意ながら減債基金を維持するの外はなかつた。現に昨年の夏桂公が歐羅巴に出かける前に西園寺總理と山本藏相と内田外相と桂公と會合した事がある。會合の目的は桂が外國へ行つて外國の資本家から日本の財政方針についていろ／＼質問を受けるに違ひないから其返答の打合せをしやうといふ譯てあつた。其時に明かに減債基金は維持しようといふ事を桂は無論主張し、西園寺にも異議がなく、山本も周圍の事情自説を維持することと出來ず、之に降參した。だからして減債基金についても同じ方針を取るに極つて居る。のみならず桂は第二次の時に四分利公債て失敗して居る。從つて成るべく公債の價格を維持したい事を熱望して居る。若し公債の價格が下れば四分利附借換の失敗をいよ／＼暴露するから、どうしても公債の價格維持をやりたいといふ希望を持つて居る。況んや桂公は鐵道の建設改良費等は時機を見て外債を募集したいといふ考を持つて居る事も明白てあるし、そして一方に鐵道の資金を供給すると同時に在外通貨の補充をやりたい希望を持つて居る。公債價格の維持は寧ろ桂内閣の生命てある。減債基金を廢せざる事明かてある。

第三には鐵道電話等の事業。之も桂内閣と西園寺内閣との取る所の方針が大體に於て同じ事てある。已に前に話した如く、桂も西園寺も兩方共鐵道國有主義の

人である。のみならず兩方共鐵道を人氣取りの道具として使つて居る。少々不利益な鐵道でも人氣取りの爲めに敷設せんとして居る。現に明治四十三年頃は双方が最も盛んに之を利用したのであつて、一方で政友會の原敬其外が地方の選擧區で鐵道敷設を餌として黨勢擴張を計れば、桂派は後藤鐵道院總裁をして地方を巡回せしめて、十億圓の公債を募つて全國に鐵道の網を張ると吹聽した。從つて桂内閣は鐵道に對して今度は緊縮の方針を取るといふ噂があるけれども、到底之を遣り切らない事が明かである。矢張り財源の許す限り少々不利益でも鐵道に對しては積極方針を採ることが明かである。此點に於て西園寺内閣も同じ事である、之に反して慘めなのは電話である。電話は政治上の勢力がないが故に人氣取りとして利用されない。だから動ともすれば閑却されるのである。實は政府は電話のモノポリーを持つてゐて、そして其需要者に滿足を與へないといふのは不都合千萬の話である。のみならず電話は鐵道と違ひ餘程儲かるのである。而かも人氣取りの道具になることが出來ぬ爲めに思ふやうな擴張はせぬのである。昨年の暮に瓦解した西園寺内閣でも電話に對しては極めて小規模の擴張しか企てなかつたが今度の桂内閣も矢張り電話擴張費は餘程僅かなものに違あるまい。

第四行政整理。之は實は西園寺内閣の生命と稱せられたものだが、舊臘西園寺侯の發表した所によると、三千七百萬圓の整理だといふ。さうすると今度西園寺内閣に代つて立つた桂内閣は五千萬圓を整理するといふ。双方共相當の額である。が事實は之に反して双方共詰らぬので、實は聲ばかり大きいのである。其詰らない程度に至つては西園寺桂兩方共同じ事と思ふ。西園寺侯の三千七百萬圓と稱するものゝ中には今度節約しやうといふ見込のものも加つて居る。全部確定したものでないのである。そして全部確定したものゝ中にも冗費の節約といふものばかりでなくて、事業の繰延をも含んでゐるので、事業の繰延は文字で明かなる如く今年要る費用を來年に廻す、來年の費用を其翌年に

廻すといふ事て、只支出の年度が延びたに過ぎない。政費節約といはれない。そこて西園寺内閣の時に已に確定した政費の節約額は何程てあるかといふのに、僅かに一千萬圓と少してある。風袋は大きいが中味は極めて小さい。桂内閣の五千萬圓と稱するのも必らず同樣と思ふ。政費節約といふは其中極めて僅かてあつて大部分は事業繰延てあらうと思ふ。それは第二次桂内閣の時に二度程行政整理を企てゝ僅かに五百萬圓位しか整理しなかつたのてある。其事實から考へて、今度桂内閣が五千萬圓全部を政費節約で絞り出すといふ事は思はれない。本當の政費節約額は多分西園寺内閣同樣一千萬圓餘りに過ぎないと思ふ。桂公は西園寺は三千七百萬圓の整理てあるが、おれは五千萬圓整理すると吹聽するが、それは風袋が大きくなつた丈けて中味は必らず大差なからうと思ふ。

第五税法整理。之は少し違ふのてある。西園寺侯は前の議會に減税を意味する税法整理を約束した。そして所得税、營業税、鹽專賣に於て租税の輕減を計ることを公約した。のみならず之を實行する積てあつたことが明かてある。其實行額は大した事てなく矢張り千萬圓内外のことてあるが、其れ丈けても租税を減ぜんとする意志てあつた事は爭はれぬ。所が桂内閣は此點に於て反對の意見を有して居る。税法整理はやるが其整理は減税の意味てないといふ事てある。是に至て初めて西園寺と桂と政策は違ふのてある。それ迄は同じ事てある。そこて政綱の上から政友會が今度の内閣と爭ふならば、爭ふ點は此點しか無いのてある。そして此爭に於てどちらの方が理屈があるかといへば、之は矢張り西園寺の方がよいと思ふ。何故なれば桂の方針は從來餘り公債整理に重きを置き過ぎて居る。そして同時に租税を閑却した嫌ひがある。元來日露戰爭の費用を負擔したのは公債の所有者ばかりてなかつた。公債の所有者と租税の負擔者と此二つの階級が戰費の全部を負擔した。然るに桂公は從來から動ともすると公債の整理に重きを置いて租税の整理を閑却する傾があつた。之は片手落てある、不公平てある。政友會は此

點に於て正々堂々と爭ふことが出來ると思ふ。況んや桂公は嘗て所得稅以下の負擔が重過ぎるといふて減稅案を提出した位てあるから、此點に於て西園寺侯の主張を是とする。

第六に殖民地の財政てある。之は大いに整理の餘地がある。殖民地の中の最も大きいのは朝鮮てある。そして朝鮮ては毎年歲入不足て千二百萬圓づゝ公債を募らなくてはならぬ。處が其公債を要する主もなる理由は朝鮮て贅澤な鐵道を布くことにある。內地には到底も見ることが出來ぬ立派な廣軌鐵道を布いて居るのである。之が爲めに朝鮮ては是非共公債を募らなければならぬ必要を生ずる。勿論新義州から釜山に至る間は之は世界の大動脈になるのてあるからして相當に贅澤な鐵道を拵へてもよいか知れないが、然し湖南鐵道てあるとか或は京城から元山への鐵道てあるとかいふやうな田舍線に向つて四呎八吋半の立派な鐵道を布くのは餘り贅澤過ぎはしなからうか。それよりはかゝる枝線は輕便鐵道て一哩ても多く布設した方が朝鮮などのやうな道路のない處ては殖產上最も有利てあるまいか。且つ又鐵道經濟の方からいつても荷物も客も少いへ持つて行つて大きな鐵道を布くといふ事は非常に不所利益てある。恰度荷物のない處へ向つて大きな船舶を運轉するやうなものてある。荷物が千噸しかない時に五千噸六千噸の船を作ると同じ事てある。のみならず實をいへば朝鮮の枝線の如きは政府自ら布設するに當らず、民間に希望者がいくらもあるからそれにやらせればよい。其方が早く普及出來るのてある、そしてさうすれば朝鮮總督府は公債を募る必要がないのてある。朝鮮の殖產の上からいうても亦財政の上からいうても之が一擧兩得てある。之は朝鮮の特別會計の整理すべき最も著しい例と思ふ。次に臺灣の財政に於ても同樣てある。臺灣の歲入は年々增加して總督府の經濟は非常に贅澤てある。內地は貧乏して居るに拘らず殖民地は贅澤をして居る。然るに總督府と一般會計とは先年砂糖稅の協約を結んて臺灣に大變有利な結果を來して居る。のみならず臺灣の守備隊の費用は內地の會

計て負擔して居る。だからして近年臺灣の財政は獨立したといふがそれは嘘てある。矢張り毎年内地から澤山の補助を受けて居ることになるのてある。だからして今少し臺灣の歳入を内地の一般會計に繰込むやうに改正する必要があると思ふ。生憎臺灣ては昨年非常の風水害があつて、其善後策に巨額の金額を要する譯てあるが之は一時の事てある。永久の爲めに内地へ歳入を繰り込む方法を研究する必要があり、又臺灣は充分之に堪ゆると信ずる。

要するに政治論として或は元老の跋扈を非難するとか、桂の出處進退がいけないとか、軍人の非立憲的なるを攻撃するとかいふ事なれば之は別てあるが、單に財政上から見れば桂内閣と西園寺内閣とは殆んど同じ事をやつて居るのてある。從つて今度桂新内閣か出來たについて財政方針に大した變化あらうとも思はれないし、從つて政友會が大いに之を攻撃すべき點がないと思ふ。

桂公の新政黨組織を論ず

尾崎行雄

先づ政黨の歴史を觀するに、明治十四年に自由黨、十五年に改進黨の組織されたのが、日本に於ける政黨の始めてある。其當時藩閥官僚の徒は政黨を以て陛下の政策を妨害するものとなし、國賊と罵り、謀反人と誣ひ做し、特に朝廷に對つては上陛下をして強く其念を抱かしめ奉ることに是れ力めた。而して彼等閥族の徒は政黨を外に、超然内閣なるものを組織し、有らゆる方法手段を盡して、或は權力を以て實業家の政黨に

寄する同情に干渉妨害し、或は新聞の發行を禁止し、或は官吏侮辱の罪に問ひ、是れが撲滅に彼等の全力を傾注したけれども、到底其功を收むるとは出來なかつた。

茲に於て彼等は政黨と連絡を架して是れが操縱策に出て、廿年末改進黨の首領大隈と閥族との提携を見るに至つた。尤も是れより曩き十八年伊藤公が板垣伯を洋行せしめたこともあつたが、是れは接近とも言ふべきて、兩者の提携は此時に始まつたものと謂つて可い。其結果として二十一年の首め黑隈內閣といふべき提携內閣が現れて、黑田が總理、大隈が外務に處つたが實權は大隈が之を握つてをつた。尤も其時已に大隈は改進黨を脫し、籍を政黨に有してゐなかつたが、依然として首領たるに異りは無かつた。之を政黨の首領が政府に入つた嚆矢とする。それ以來提携競爭は行はれ、大隈は終に破れて臺閣を退いた。亞いて起つたのは山縣の超然內閣であつた。二十三年國會開けて、自由改進の聯合軍が政府に突貫するに及んて、廿三年は無事に經過したが、終に廿何人かの裏切者を出して妥協に終つた。次の內閣は松方であつた。彼は選擧干渉を行ひ、亂暴を極めて而も多數を制し得ず。內閣は紛擾して、副島、河野(敏鎌)を容れ以て其急を救はんとしたが得ず。見苦しき野仆れ死の最後を遂ぐるに至つた。

此山縣松方の慘ましき最後を目擊して、次ぎに立つたる伊藤は、陽に超然內閣を標榜したけれども、日清戰爭後、所謂肝膽相照すの名義を以て、伊藤と自由黨との提携は成立せられた。是れ公然政黨と內閣との提携した始めてあつて、內閣が政黨の力を籍らざるを得なくなつたことを證するものである。先きには國賊とさへ罵つた政黨を認めて、今は肝膽相照すに至つた。而して始めには個人と個人との提携が、次第に政黨と政黨との關係に進んて、政黨の代表者が親しく臺閣に上つて政治を宰るやうになつた。

乃亞いて起つたのが松隈內閣であつた。然しながら閥族の餘勢尙未だ立憲的行動を全うするを得ず。內から倒壞の已むを得ざるに至つて、茲に自由黨と提携し

たる山縣内閣の代るを見た。然しながら自由黨の主義政見は認容せられず、永續するを得ざるに至つて、玆に伊藤は政黨組織を宣言して、政友會の組織に着手するや、山縣は伊藤を罵つて國賊と呼び、伊藤は憤慨して朝職を辭するといふ騒擾を惹起した。此間に在つて政黨組織に力を効したるは、藩閥中實に唯一人の伊藤有るのみであつた。山縣を始め閥族の面々は伊藤の行動を百方妨害するに務めた。桂公も實に其當時山縣の下に伊藤の政黨組織を妨害するに力めた一人であつた。

時勢は變遷した。始めは國賊と目して撲滅を圖り、後提携して道具視し、再び之を認めて對當の地位におき、最後に自ら政黨を組織せざるの已むを得ざるに出てたる閥族の歴史は、吾々の見て以て痛快を感ずる所である。曩さに伊藤公の政黨組織を極力妨害したりし桂公が、今や親ら政黨を組織せんと聞く。時代の推移實に驚くべきものあると共に、恁る變遷の歴史を有てる政黨が果して能く一朝にして桂公に依つて作らるゝであらうか。

吾々は今日桂公の發奮を、既往の歴史から觀て之を咎むるものではない。否寧ろ彼が改過遷善を賞せんと欲する所のものである。然しながら今回彼の政黨を組織せんとするや其手續に於て幾多缺如せるもの有るではなからうか。今に於て政黨組織の概略を發表し、國民黨其他の黨員を拉して以て民黨の聯合軍に備へ、若し事破れたらば議會の解散を命じ、尙徐ろに聯合軍に向つて政府黨を募り、不幸にして總攻撃前に未だ多數を占むるを得ざるの時は、已むなく辭職の途を採るか或は再び議會を解散するか。彼等の赴くべき道は此外にはあるまい。斯る不正不義の手段を以てし、非立憲極まる手續に依つて、内民望に副はずして立てる内閣が、奈何に專制の餘習尙未だ脫せざる我國に於てもそれが存續の餘地は毫も認められないではないか。唯吾々は、時代の推移に漂はされて、今日の氣運に反抗するを得ざるに立至つた閥族の末路に對しては、寧ろ隔世の感を懐くと共に、政黨の勝利を歡ぶところのも

のである。

それと尚一つの意味に於て政黨と政黨との對峙は吾々の最も歡迎する所である。上陛下の信頼をだに得れば足れりとせし時代に在つては、政黨の放つ矢は玉座を冒すの虞ありし故、政府に對つて滿を引いたる弓も遂に放つを得ずして已まねばならぬ次第であつた。今や上陛下の信任と下國民の信頼を以て立つべき政黨と政黨との爭ひには、吾々は遠慮なく其政見に對して戰を挑むことを得ることとなつた。然しまだ憂ふべきは、彼等は尚多數官制の特別保護を受けることである。陸海軍大臣は現任軍人を以て當てざるべからずと言ひ、高等官は文官任用令の定むる所に依れば、廿年餘り閥族の手に養はれたる子飼の者ならざるべからざるなど、民間に在るものは此特權を有せずして、吾々の仲間が政府に入るも、内閣と同身一體たるべき政府員は七八人に止り、己が主義政策を行はしむべき政府員を有たず、僅かに秘書官一人を從へて、次官以下は自己が政敵を使はねばならぬ吾々の境遇も亦哀れなるものではなからうか。現在の行政政治は閥族にあらざれば能はざるかの如く思惟し、又閥族にとつてのみ都合良く作られてある。吾々が一朝政府を取るも働く餘地が與へられてない。同じ政黨でありながら、甲は特別保護を享け、乙は其保護を受け得ないといふが如き不合理はあるべきでない。已に内閣は閥族以外の者に依つても作られ、政黨は相對峙して政權を爭ふやうになつた以上は此陋習を更め、均しく立憲的行政機關を備へしめて以て憲政有終の美を濟すことに力めねばならぬ。

又彼の陸海軍大臣は必ず軍人の中より選ばざるべからずといふ理毫も無し。大臣は軍事行政官である。行政官である以上、法律の思想を有するを必要とする。之を文官の中に需めて些かも差支なきのみならず、寧ろ軍人を不適當とする。英米に於ては決して斯る例を見ない。大臣の職として大切なるは其省の費用に充つべき豫算を取ることである。故に議會に勢力を有することを必要條件とする。次に大切なるは、それを適當に有功に使用することである。此點に於て軍人は不適當である。

政治的手腕に乏しき怨みがある。殊に軍人は歩兵、工兵、騎兵、鐵道隊等夫々所屬の部分にのみ長じて、全般を見るの明を缺いてをる。又然らずんば恐らく軍人として何等の要をも爲さない。茲に行政としては目過すべかざる幾多の不公平が醸される。宛かも技手を鐵道會社の社長にしたやうなものである。此等の弊を知りながらも尚其規定を遵守すべき理由がないではないか。速かに芟除せなければならぬ。

顧つて立憲的見地より、彼等の爲さんとする所に對つて聊か批評を試むれば、彼等の行動や立憲の根本義に悖つてをる。政黨組織の方法に於て非立憲的である。憲政讃美の吾々の事業を凌駕するの氣勢を示し、吾々の看板を奪取せんとするの觀あるも、桂は要するに非立憲の空氣の中に生ひ立つた者である。彼等と雖も憲法の研究を疎かにする者である。政黨打破の人とは謂はぬ。然しながら研究の方法に於て自ら見る所を異にするは亦巳むを得ない。立憲的行動を爲さんとするものと、自己の政權を張らんが爲めに憲法に牴觸せざる部分を窺はんとすると、憲政の發展を圖ると憲政打破を目的とすると、宛かも三百代言の法網を潜らんとすると聖賢君子の其道を行はんとすると、判檢事の法律を研究すると詐欺取財者の法律を調ぶるとの差である。之を護らんとするものと、之を犯さんとするものとの別である。彼等の研究は奈何して憲法を潜り藩閥を維持すべきかを知らんと欲する爲めである。憲法をして空文に終らしめんとする努力である。改過遷善の第一歩の今日も、年久しく養はれたる思想は容易に之を改むるを得ず。其方法に至つては依然として非立憲的行爲に出づるものあるであらう。

抑も議會は國論を代表せしむるものである。國論を代表せざるを認むる時にあらざるよりは解散を命ずるとを得ないのである。國論と一致せる議會を解散するは國民を懲罰するものである。政府は國論を懲罰するとは出來ない。國民的意志の發現を懲罰するとは出來ない。昨年の五月に改選されたのみで、未だ何の働きをもなさない議員が果して國論と違ふや否やは知るを得

ない筈である。議員は國論を代表するものであつて、眞の意味に於ては、縱令議會が政府に賛成しやうとも、國論を代表しない場合にのみ解散すべきものである以上、今回の議員が國論を代表しないといふ證據も無くして、假ひ攻撃の態度に出たからとて、之を解散すべき謂れはない。眞に立憲的態度を採る者は到底忍びざる所である。總攻撃が國民多數の意嚮を代表してをつて、議會は國論と違つてをるとは想像だも出來ない今日、之に解散を命ずるが如き非立憲的態度に出づるものは、終身政治界に出づるを許さない位世間から葬らるゝのが歐米の常である。佛蘭西に於ては內閣にして議員の信任を有するや否や、其信任案は內閣から呈出せらるゝとさへある。今日桂內閣の執るべき適當なる處置は議會に對して信任の有無を問ふとてある。假令夫れを敢てせぬまでも、議會が不信任の決議を爲す時には、直ちに辭職すべきが、彼の最も當を得たる立憲的行動である。之を解散するが如きは非立憲の極度である。憲法中止に亞ぐの暴擧であると謂つて宜い。不幸にして日本に於ては、專制政治尙未だ充滿して國民自覺に到らず。桂公は勿論、憲法を遵守する爲めに研究したる者も之を知らない。此間隙に乘じて必ずや彼は、口に立憲的態度を標榜して、此最大罪惡を敢て行ふてあらう。昨日の停會の如きも、憲法を潛らんとする彼輩には通常事であるかも知れぬが、眞に憲法を遵守せんとする者にとつては同じく非立憲の罪を免れざるものである。

それは尙恕するとするも、根據なき解散を敢てし、政權と金權とを濫用して、腐敗せる醜類を狩集めるならば、新政黨は實に罪惡の凝結物であると謂ふも適評てあらう。憲法を解せざるか、眞に之を發達せしむるの誠意無き者かにあらざれば、よもや立憲的思想の人にして、斯る政黨に馳參ずる者は一人も有るまい。

更に一步を讓つて、理論上罪惡で無いとした處が、朝廷に在つて政黨を組織する場合には、常識者から見て權勢に阿るの譏を受くるが故に、國家に貢獻する分量相同じきならば、朝に在る桂に行くよりは、野に在る

西園寺に趣くのが至當である。故に桂公としては内閣に處りながら政黨を組織するとは、立憲的見地から觀て非なるのみならず、政略上に於ても眞に人物を蒐めると不可能てある。桂公にして若し誠意を以て立憲的態度に出づるならば須らく一度野に下つて政黨を組織すべきてある。眞の政黨を組織するには少くとも十年廿年は要する。桂公は今日の政黨中其人物に乏しく、金力に於ても權力に於ても、自己に優れる者無しとしてをるやうてある。是れ甚だしき誤解てある。今日の政黨の地盤は民權論が始めて唱へられた明治七年頃から今日まで四十年間の根柢を有してをる。其間に使用した精力なり、知慧なりは桂公の廿人を集めたものより多い。西園寺は豪くないとするも、今日までの政友會の地盤には、後藤、西郷、板垣、大隈、福澤等桂の二三十人の人が働いて出來たものてある。金力に於ても各個人、地方の有志者の使つてゐる金は何千萬圓か知れぬ。議員計りて民黨の爲めに働く者百人や二百人てはないが、假りに百人の使つた金が平均一萬圓とすれば、十年に千萬圓に騰る。選擧の際に使つただけても何千萬圓、殆ど一億に近い。桂公が百萬や二百萬の金を以て政界を風靡せんとするは全く計算を知らざるものてある。成程數に於ては腐敗議員を拾ひ集めるとは出來るてあらうが、其地盤をまで作るとは出來ぬ。議員の動靜は多年作上げたる地盤を迄動かすことは出來ない。此等の議員は選擧から選擧迄僅一回の勢力てあつて、次回の選擧に於ては排斥せらるゝと明てある。斯る不法なる方法手段を盡して成立せらるべき新政黨は必ず非立憲的罪惡を犯すの外はないてあらう。今に於て桂公が非立憲的行爲を飜すにあらざれば、新政黨の運命や實に憫むべきものてあらうと思ふ。

憲政擁護、閥族打破の運動と政界の變動

△新民黨の成立と其中堅人物

本多精一

今日の形勢を以てすれば衆議院の解散は到底免るべからざる運命と思はれる。それで只疑問は議會解散後即ち總選擧後の政局——今一度換言すれば總選擧後に於ける官民兩黨の狀態如何である。此點に關しては今日未だ民黨の勝利を逆睹することが出來ない。倘委しくいへば桂公が果して自ら首領となつて政黨を組織するや否や、組織するとすれば其時期如何が一の疑問であり又同時に今日の民黨聯合が更らに一歩を進めて民黨の合同となり新政黨の組織となるや否や是れ亦他の一つの疑問であるといはなくてはならぬ。

吾々の希望する所からいへば今後桂公が一日も早く新政黨を組織してそして政界の表面に打つて出ることである。さうすれば新民黨の組織は桂黨の勢に激せられて比較的に容易に成立を見る事になる。何となれば新民黨の成立は政界に於ける大勢であるけれども、事實に於ては政友會にも國民黨にも舊來の感情があり又傳說があつて、動もすると此等の感情傳說に囚はれて合同の機運を遲くする傾向がある。彼等は理論に於ては民黨の合同に對して反對することが出來ぬが、いよ〳〵事實問題に入ると黨員の多數は動ゝすれば感情に支配されんとする傾がある。殊に地方に於ては地方政治に對して從來の反感が、場所によつて甚しい所がある。此等の地方では兩黨合同は沮礙さるゝ傾向がある。故に此等の黨員をして共同の目的の爲めに速かに一致せしめて今日の聯合をして更らに一歩を進めたる合同に至らしむるには出來るならば外部より促進せしむるの外はない。外部より促進するものは桂の政黨組織である。桂が政黨を組織すれば今日の民黨は之に激せられて合同の機運を進めると思ふ。此見地よりして我々は速かに桂黨の成立を希望したいのである。

而していよ〳〵新民黨成立といふ場合になるといふと、民黨の勢力がどれ位のものになるかは是れ亦一の疑問である。今日の勢を以て進むならば總選擧後に於て民黨の勢力は今日の如く衆議院に過半數の椅子を占めて優に桂黨を凌駕することが殆んど疑を容れない。人或は政友會の軟派を數へて五十人或は六十人といひ、是等の軟派は桂黨の成立と同時に桂公の下に馳せ參じて、其結果著しく民黨の勢力を削ぎ、又桂公の議員買收手段が總選擧後に於て盛んに行はれて、民黨は遂に衆議院に於て其勢力を失墜すべきやに豫想するものあるけれども、吾等の見る所にして誤りなしとすれば、今日の政友會内に於ける多くの危險分子も、桂黨が組織せられたからといつて直ちに桂黨に降服せぬだらうと思ふ。何となれば彼等は其心持に於ては純然たる桂黨であるが、選擧區の關係もあり

又世間體もあるから俄かに旗色を變じて、桂黨に降服する程無神經でない。寧ろ彼等は席を民黨に置いて内輪より民黨を軟化させる所の手段を取つて、そして民黨の懷柔策を試み、事實に於て桂黨と民黨の聯鎖となることを以て自ら任じ、桂公も亦此任務を勤めさせるだらうと自分は豫想する。即ち此等の軟分子は民黨に取つては必らず獅子身中の虫となつて總選擧後に於ける民黨の勢力を鈍らす所の一つの力になるだらうと思ふ。此點が實に民黨に於て最も氣遣はしき所であつて、今後の政局即ち民黨勢力の消長を豫想するものは第一に此點に着眼する必要がある。

我等の希望をいへば假令民黨の議席は衆議院に於て少くなつても是等の軟分子は悉く民黨外に排斥して名實共に桂黨となることは今後の民黨にとつて最も望ましい處である。前にいつたやうな關係からして席を民黨に置いてそして内輪より民黨の勢力を殺ぐといふ事が民黨にとつての最大危險であると思ふ。

今後の民黨が如何なる活動を政界に試み得べきやの問題は、此等の軟分子の多少と及び此等の軟分子が民黨に止つて桂黨との聯鎖になる程度の如何によつて決定せらるると思ふ。而して尚今後の民黨に於ける人物の勢力如何について豫想するに、今後の民黨は事實に於て犬養、尾崎の二氏を以て中堅とすべき事は殆んど疑を容れぬ所である。西園寺侯は政界より隱退せざる限り今日の政友會總裁である關係上尚暫くは新民黨の總裁として止るかも知れんが、それは只看板丈けに止つて新民黨の實力は犬養、尾崎の二氏によつて代表せらるゝに違ひない。而して今日の政友會の領袖たる松田、原の二氏は如何といふに、原氏の勢力は今後著しく失墜して再び從來の如き勢力を黨内に振ふことが出來ないと見なくてはならぬ。何となれば原氏は其政治思想に於ては寧ろ官僚的思想を有して居るからして政府と政黨との妥協時代に於ては斯ういふ氏の如きものは政黨の首領として必要であり、又氏の如き人あるが爲めに妥協が今日まで行はれて來た譯であるけれども、一度政府政黨の妥協が破れて戰鬪狀態に入るに至つては妥協時代の產物たる原氏の如きは政黨にとつては寧ろ不必要の人物とならざるを得ないからして今日まで原氏に服せざる所の黨員は寧ろ原氏を捨てゝ犬養尾崎二氏の下に集ると見なければならぬ。從つて政黨内に於ける原氏は今日までの行掛上依然領袖の地位を占めるかも知れんが今日とは全く違つた意味の領袖となつて政黨内に於ける勢力は著しく失墜するであらう。此見地より見れば松田正久氏は老いたりと雖も原氏よりは尚多少有望であるかも知れぬ。即ち其不得要領なる點は犬養氏の如き若くは尾崎氏の如き機敏にして鋭利なる人材の間に立つて相互の衝突軋轢を豫防して、新民黨にとつて一種の安全瓣となり又消火器となるの働をなし得る希望がある故に、人物本位を以て今後の新民黨を豫想すれば、新民黨の實權は犬養、尾崎二氏によつて握られ、原氏の勢力は失墜し松田氏の地位は寧ろ今日よりも重きを加へ、而して今度の憲政擁護運動に熱心であつた岡崎邦輔氏の如きは事實上の參謀長となつて一働きをする時節が到來するであらうと信ずるのである。(一月十八日)

△閥族、政黨、國民皆初めて醒む

早川鐵冶

明治廿三年に憲法を實施した以來、閥族は政客の意氣地のないのに乘じて一歩〳〵憲政を退かせるやうな措置を取つて來た。即ち憲法實施の

時よりは段々憲法以外の手段によつて憲法の實行を妨げるやうな方法を巧みに取つたのである。之は閥族と國民と政黨と三つの責任であつて、漫りに閥族のみを惡くいはれないのである。閥族は何時までも政權を己れの手中に維持してゐたい。政客は一日も早く政權に近いて利益を受けたい。國民は自己を代表する議員を選むに當つて只々金の問題によつて極めるといふやうな有様であるから、單に閥族が惡いばかりでなく、實は政黨も惡く國民も惡いのである。

憲政が退歩したといふ事實を擧ぐれば、政府は初め憲法實施を酷く怖れたものだ。十八年官制を改革し、廿二年には行政整理をやり、鄕純造とかいふやうな、只事務に練達したといふ丈けの屬吏や、若くは閥族の因緣のみによつて繋がつて居るやうな奴は遂に其儘にして置くことが出來なくなつて、或は自ら退き、或は退けられた。そして非常なる警戒と用心とを以て議會に向つた。處が議會は案外にも意氣地がなかつたから段々に憲法上の權限を制限された。其著しい例は例へば陸海軍の經費などについては一種特別の制を設けて委任經理とかにして非常に餘地のある變なものを作つた。

それから陸海軍は陛下の御直轄であるといつて陸海軍の大臣には現役の大中將とした。それから樞密院も初めは條約改正の批准などを主とするものであつたが、遂には進んで官制までにも容喙することになつた。それから最も大切なる臺灣、朝鮮、關東州などいふ殖民地。此等の殖民地などは治民上拓植上いろ〳〵必要な施設も要る事で、立派な政治家の手腕に待たればならぬ事で、軍人のやうな單純なものには到底出來るものでない。而しこゝにも矢張り陸軍の中將大將を以て之に充つることゝし、又特別會計を設けて一般豫算と政變によつて總理大臣の政令が及ばぬ事にした。それだから日本の總理大臣は陸海軍と殖民地とを除く外の行政を總理する人となり、憲政の上からいへば、實施當時に比して寧ろ著しく退歩して居る。之は全く議會を見縊つたから起つたことで、議會も亦見縊られるやうな事をして居る。妥協だとか、肝膽相照だとか、情意投合だとかいつて閥族と結んで政權に近くことばかり考へた、見縊られるのも當然な譯だ。西園寺内閣も確かに見縊られたのだ。あんな腐敗した人民に選擧された、こんな弱い議員連の組織して居る弱い議會だから、ナニ何程の事もあるまいといふのが大御所あたりの意見でなかつたか。それで陸軍を焚き附けて西園寺をへコマス考であつたらう。處が之が測らずも政黨及び國民の癪に障つて此んな事をされて默つて置けば底止する所があるまい。之はどうしても此儘にはして置けないと初めて眼が覺めたのだ。西園寺の今度の遣り方は餘程よい。一方には行政整理、税制整理をやつて國家の財政と國民の負擔の改善を計り、一方には陸軍を抑へつけて自己の政策を遂行しやうとした。餘程よい態度だ。私は從來の政友會の妥協は不贊成であつた。今度で以て罪亡ろぼしをしたといつてもよい。閥族は久しい間政黨を見縊つて居つたので、斯うはなるまいと思つてゐたのが、測らずも今度のやうな騷ぎが持上つて、代議士よりも民間の方が矢釜しくなり、憲政擁護、閥族打破の叫びが津々浦々までも響き渡ることになつた。

一體今度の政變で元老といふものは、今迄の化けの皮をあらはし、悉皆估券がとれ、箔が剝げた。元老も自ら起つことが出來ず、又元老がいくら勸めても誰も起たない。そこで桂さんが出て來た。桂が出て來たのは詔勅の爲めもあらうが、誰もやり手がないし、又元來色氣のある桂だから出て來たのだらう。又桂の腹の中では世の中で閥族〳〵といふが政友會も隨分橫暴だ。おれが出て其橫暴を止めてやらう位の考もあつたかも知れない。是れ迄は政黨を利用して來たが、利用して居つては益々政

黨を大きくするばかりだ。寧ろ自分で政黨を作つてやらうと、政黨組織の必要を感じたてあらうと思ふ、そこで初めて國民も眼が醒め、政黨も醒め、閥族も醒めるといふ事になつた。憲政の發達の上には誠に賀すべき事である。

之から先きどうなるかといふに、桂内閣員は皆官界を順境に渉つて來た連中ばかりで、事務には通じて居るか知らないが、行政長官として國政を料理する政治家の資格あるものが少い。大臣の資格あるものは先づ桂と後藤、少々おまけ申して大浦、此三人位のもので、あとは皆屬吏も屬吏、片々たる刀筆の吏に過ぎない。いかに事務に練達しても國家とか、政治とか、國政とかいふ事はまた別だ。柴田とか何とかいふ連中に出來ることぢやない。顔附を見てもさうだ。とても／＼大臣になる器ぢやない。天下の群豪を集めて之を統御するなどいふ事は生れ變つて來なくては駄目だ。又桂さんもトン／＼拍子で公爵までも漕ぎ附けた人で、社會の裏面の事はよく分らない。故に見識の高いものは求めて先生方に近かうとはしなからう。近々ものは只鶏鳴狗盗の雄に過ぎない。貴公がおやりになれば天下風靡するだらうなどゝ諛言を呈するものばかりだ。一體實業家とか多額納税者などいふ連中に天下の事が分るものでない。實業家などは吾輩共から見れば青蠅に過ぎない。臭い所や利益のある所にのみ集る。鶏鳴狗盗の雄や、青蠅共を集めて、國家の事がどうして行くものか。現に伊藤公が政友會を組織した時はどうだ。公の下に馳せ加つたものが地方の金持などに隨分あつたでないか。そして今はそんなものは殆んどゐない。又伊藤さんの率ゐた刀筆の吏——伊東巳代治だの、金子堅太郎だの、都筑馨六だの——そんな連中は到底も野武士と一所に居れなかつたでないか。桂や後藤や大浦は分るとしても、あとの連中は皆生れながらの小供だ、此等は一回は黨籍に入つても末永くついて行けるものぢやないと思ふ。

今度解散をして、乃公が打つて出れば、ナニ出來ぬ事があるものかなどゝ思つて居らるゝか知らないが、今の政黨には皆夫れ／＼地盤が出來て居る。又此節の國民はずつと開けて居る。昔は大臣といへばヒドクエライものであつたが今は左程でない。局長や次官などは餘り有難くない。今は民間の人も人格も素養も出來た。金廻りもよい。如何に大臣で候と威張つても鶏鳴狗盗の雄や青蠅共を動かすやうな風に地方人民を動かすことは六つかしい。今の有様では桂さんの政黨組織の成功は覺束ない。

然し桂さんも已に政黨組織を宣言した以上は、進んで責任内閣の實を明かにせんことを希望する。然しこゝに一言したいのは、日本の内閣は議會によつて定るものでない。一に陛下の思召によるものである。故に桂さんが責を引いた後に、議會に關係なき他の人をお呼びにならうと再び桂さんをお呼びにならうと又議會の議をお容れにならうと一に陛下の思召にあるのであるが、桂さんたるものは此際責任内閣の態度を明かにし、憲政發達の實を示されたきものと思ふ。

桂さんは乃公起てば天下風靡せんと思つてゐるやうだが、之は大間違ひである。品川彌二郎、西郷従道の二人が國民協會を作つた時はどうであつたか。私は西郷といふ人をよく知らないが品川は涙脆い人で、天下國家の事を説き廻つて地方民などを動かすには極くよい人だ。此等の人がいろ／＼説き廻つて漸やく四十名か五十名足らずしか得られなかつたそれに今度桂が野に下らずして高きにゐて號令を下し金を撒き散らさうとしても、號令で動いたり金で動いたりするものが果して幾人あるであらうか。又金、金といふがいくらの金が出せるのか。成程十萬圓も出させて卅萬圓も儲けさせてやるといつたら慾に目のない青蠅共が出すかも

知れない。お國家の爲めとか憲政の爲めとかで金を出すものは彼等の中に一人だつてありやしない。そんな目腐金と雞鳴狗盗の雄と、刀筆の吏と集つて果してよく何事を爲し得るか。我輩は桂さんをして有終の美を濟さしむるには此際責任内閣の實を明かにし、憲政の發達に貢獻するの一事にあると思ふ。ナニ心配するに及ばぬ。お鉢は又其中桂さんに廻つて行きますから。(一月廿二日)

△七分三分の兼合

福本日南

自分は日頃から佛國大革命の際に見て、ナポレオンの言に興味を持つ者である。彼の大革命の際に當つては佛國を通じて王黨と革命黨との紛爭以外には、政治問題としては他に一物もなきやの感があつた。それで兩黨の爭は到る處に無數の都府を破壞し、又無數の人命を失つた。當時ナポレオンは未だ其地位を得ぬ時であるから革命黨の方面から身を起して來た。然しながら彼は此爭を見て苦々しき事に思ひ、一衝突を經る毎に彼はいつた。佛國の幸福は王黨にも屬せざれば革命黨にも屬せぬ。一日も早く親愛すべき此本國を兩黨の爭以外に救出するにあらざれば國運の發展は得て期せられぬといつたのである。極めて面白い觀察と思ふ。若もあの爭が尙後年まで繼續したならば、佛蘭西國なるもの一時滅茶々々になつたに相違ない。ナポレオン出てゝ兩黨の爭を過絶した爲めに後日隆々たる國運を見るには至つた。今日の我帝國は佛國當時ほどの慘憺たる形勢には至らねども、然しながら一國の政爭問題は官僚非官僚の爭以外にはまた殆んど一物をも見ないかの感がある。申さば之は帝國のお家騷動である。此お家騷動の繼續する間は國の發展は思ひも寄らぬ。されば何とかして此間から國を救ひ出さねばなるまい。

今日憲政擁護、閥族打破の聲が測らずも全國に響應したといふものは國民多數の希望には其れ以外に何物かあらうと思ふ。要するに早く此爭鬪から切り拔けたいといふのが土臺となつて、それが言葉を之に藉りて出したのに過ぎぬと思はれる。畢竟國民の政治思想がまだ〳〵餘り幼稚である故に自家の希望を充分にいひあらはすことを知らざるの結果であらう。斯樣な事は各時代を通じて屢々見る所である。例へば古來英雄色を好むといふ語がある。英雄は單一なデレ助の遊治郎ではない、非常なる精力を以て如何なる方面にも興味を有する、それを時代がいひあらはすことが出來ぬ。そこで時代の人の一番理解し易い色の一方から英雄を捉まへて色を好むとはいふたのであらう。

我々は明治の御世を縫ふ中に、明治五年の頃には一度百姓一揆に出逢つた事がある。海内到る處一揆の暴動を見ない事はなかつた。其暴動の根抵を叩けば農民の保守氣象が革新の氣運に逆つて一度之と戰つたのである。從つてそれはどん底に於ては有意義のものである。然し百姓の大分は其意義をいひあらはすことが出來ぬ。そこで其國の藩公の廢止に名を借りたり、血税の徵收に言を藉したりしたのであつた。今の憲政擁護閥族打破の如きも亦之れである。言はんと欲する所のものは別にある。然しそれをいひあらはし得るまでの程度に至らぬ。之が題目を月並に借れた所以であらうと思ふ。

扨今日の政爭當事者たる一方の閥族、他の一方の政友會、此兩者を嚴正に評論し來れば何れも昨日までの憲政破壞者である、閥族のみが憲政破壞者でも何でもない。若しもそれのみが破壞者であるならば何が故に

過去十年間政友會は其後へに從つて行動したか。改めて自家の走狗とせられて食を與へ餌を與へ、驅使せらるれば、首を俛し尾を垂れてそれに從ひ、一旦銜を離さるれば憲政擁護、閥族打破と咆哮する。憲政にして若し靈あらば同じ穴の狸ぢやないかと笑ふであらう。それで繰り返して今一度之をいふが、昨日までは前者も後者も何れも憲政破壞者である。此兩破壞者は今後果して何れの途から出て來やうとするか。先づ其寄手の方から一言しやう。

彼政友會が憲政擁護を、今更の如く呼號するのも誠に片腹痛い話である。然しながら覺醒は眞である。悔悟は善である。既往の諫むべからざるを悟つて來者の追ふべきに念到するならば罪障消滅としてそれも誠に賞すべきである。只彼果して臍の緒を堅めて現內閣の前に大決戰を爲すの勇氣ありや否や。昨今の騷ぎは賑かは賑か。然し此等は秋の稻刈後に於ける野火の類ではないか。遠近(おちこち)かけてポウッ／＼と火の上るのは壯觀でないでもない。然し其火は淺茅原をわたるのみで、人は山林にまで燃えつかせぬ。どうやら政友會の野守連中は野燒きに懲りさうな感じもする。イヤ決してさうではない、今度は必らず決戰する、數回の解散をも賭して決戰すると力まるゝか。如何にして決戰するか。議會開會後一月を經て尚未だ豫算を提出し得ずといふので當局を責めんとするか。其豫算を編成するを得ざらしめたるものは誰であるか。前年十一月の末までも豫算の大綱すら定め得ずして投げ出し來つた政友會ではないか。人間は神ではない。正月の半月かそこらで豫算の全部編成せられやう筈がない。若しも之で內閣を責めるとならば內閣員の答辯は極めて簡單。貴下方のお捨てになつたあと一ケ月間に如何にして浩瀚なる歲計豫計が編成し印刷して諸君の前に提出せられますかといへばそれ迄だ。さらば豫算の各綱目について質問を開始するか。政友會の諸君は三千萬圓を削出するといひながら、それすら出來ずして瓦解したのではないか。あとの先生は三千萬圓所ぢやない。五千萬圓の削出を期するといふ、諸君に對しては其上左衞門である。諸君たるものは之に對して有難く存じ奉るといふ外はなからう。それで斯樣なものでは戰爭は出來まい。戰はんと欲すれば實は自分等十年間非立憲と目する閥門の後へに隨從し來たのであるから申しにくいは萬々であるが、此處目を閉つて猪突的に政黨を基礎とせざるの內閣は眞の內閣にあらず。宜しく責を引いて其職を去るべしといふ位の簡單な所で戰を挑むの外はあるまい。實はといへば氣耻しい話であるが、然しそれでも國政發展の上から見れば一善事に相違ない。やれば之を提げて上奏と出かけるのである。そこまで遣り得れば憲政擁護も意義を生ずる。

それから受太刀の方の現內閣である。こゝに至るまで跡襲手段の妥協を用ひず、內閣の所信を何處までも一貫する。政友會の上奏案は我等が爲さんとする善政に對する國民の輿論と認めることは出來ぬ。それで議會を解散して當否を國民に問ふと出かけて、來るべき臨時の總選擧には堂々自家の大旆を押し立てゝ現內閣同趣味の議員を招徠し、之を集めて新たに一政黨を組織し、依つて以て政機を爭ふと出て來れば之も立派な憲政擁護論者である。すれば兩者共昨日の憲政破壞者が今後はまた何れも憲政擁護者となるのである。事茲に至らんか。過去に成立せる公私の諸團體は玆に各々遊離分解を初めるであらう。甲者を去つて乙者に行くものもあれば、乙者より出てゝ甲者に向ふものもあらう。官僚黨もなければ非官僚黨もなく、政友會もなければ、國民黨もない。貴族も貴族院も富豪も實業家も官僚も浪人も各々其好む所に從つて類を求めて相合するであらう。是に至つて初めて保守主義國權主義の一大黨と自由主義民命主義の一大黨とが對立するに至ることゝなる。斯くなり來れば國は其日か

ら官僚非官僚の爭鬪から出て、政治の爭は全く政策の爭といふ事になるのである。國運の發展は此下に隨つて來るのであらふと思ふ。願くは一日も早くそこまで漕ぎつけて貰ひたい。只恐るゝ所のものは寄手は徒らに野火を焚き、城にかゝつた大將は妥協の手を倚懷に收めてゐさうに思はれる。危さが七分、希望が三分。此處七分三分の綜合である。

（一月十六日）

△天に口無し、人をして言はしむ

竹越與三郎

憲政擁護の聲が天の一角より叫ばれて舊來の政治地圖及び政治兵法を悉く打ち破つて了つた。從來の政治地圖、從來の兵法は議院が二つの黨派に分れるといふことを想定して描かれたものであつた。桂等の策も之に基て描かれ、政友會の策士中にも之に基いて策を描いたものもあつたらう。又勿論國民黨の策士連も同じ事をやつたのである。然るに今回忽然として憲政擁護の聲が起り、疾雷耳を掩ふに遑なく、策士も策を施すの術なく、遂に今日の如き狀態となつた。此運動について予は少しく地方を巡遊して見たが、政友會の人も國民黨の人も皆等しく憲政擁護、閥族打破の叫聲に和して、恰かも古の尊王攘夷のモットーと同じ有樣である。

已に舊來の政治地圖、舊來の政治兵法が行はれずといふ事になつて來ては自ら新らしい人が働かねばならぬ事になる。是れ又各黨に於ける要素の代る時機といつてもよい。

初め此運動について世人は政友會の策士や國民黨の策士から出た事と見て居つたが決して左樣な事ではなく、交詢社などに遊びに來る若い實業家などから起つたのであつて、さういふ平常は政黨とか政治とかに熱心でない連中が、かゝる時節に當つて政黨の躊躇するは何事ぞと憤激して若い代議士などを刺激して、此刺激によつて遂に今日の如き大運動となつたのである。所謂天に口なし、人をして言はしむであつて、歌舞伎座に於ける憲政擁護の演說會の如きは、予は暫く門前に立て見て居たが、來會するものは有力なる會社の社員とか、有名なる實業家なども多かつた。予は門前に立つてゐたが爲めに入る機會を失はんとしたが、或實業家は「足下にして未だ入らんとは怪しからん」といつて自分の懷ろから切符を出して與れた。見れば其人は數枚の切符を持つて居る。之を以て見ても如何に義憤が國民の胸に燃えて居るかゞ分る。又長崎よりの歸りに朝鮮の實業家に逢つたが、萬一總選擧になつたならば、我々は海を渡つて投票に行かうと申合して居る。朝鮮に居る有權者の十中の六七は皆歸るであらうといつて居つた。若し一片の萍の流れ方によつて水の方向をトするに足るとすれば此等の事實によつて大勢を察することが出來やうと思ふ。

予が憲政擁護、閥族打破について語らんとする所は之に盡きた。此れ以上は勢である。何人が政黨を作るか、何人が內閣を作るかは予の知る所でない。予は平常肩を怒らし、怒れる聲を發することの嫌ひな一人であるが、今回は自分は一身を投げ出して戰ふ積りである。而して此時局を收拾するには天下の勢に任すの外はない。

然しながら自分の見る所によれば桂公の政府に入つたのは恰かも慶喜の大阪城に入つたと同じ事であつて、伏見鳥羽の役が已に近いと思ふ。若

し之によつて、四十餘年國民が望むんだ所の、議會に多數を制するものに非れば內閣に立ち能はずといふ事が成功すれば、予は之より政治運動を罷めて自己の好む所の著作文學を樂しみたいと思つて居る。（一月十八日）

△打閥護憲運動

石川半山

今度の憲政擁護、閥族打破の運動は、交詢社のストーヴの側から起ッた者だと云ふことだ、それ故に其の世話人の多數も慶應義塾に關係の有る人々で、其の中には是迄政治上の運動等には何の經驗をも有せざる新顏も有るが、然かしながら我輩共は誰れでも良い此の場合に此の如き運動を開始して吳れた人々に感謝し、其の驥尾に附して往く積りだ。

人を以て言を捨てず

世には毛嫌ひをする人が有る、多年藩閥の走狗で居た井上角五郎などが憲政擁護などとは、チヤンチヤラ可笑しい、人を馬鹿にして居ると云ふ者も有るが、昔から人を以て言を捨てずと云ふことが有る、井上君でも宜しい、閥族を打破して憲政を擁護すると云ふなら、我輩は贊成で有る、井上君も其の昔後藤伯の大同團結の時は、民黨の勇將で有ッた者だから、其昔に歸ッた者と見て、我輩共は其の言論を尊重したいと思ふ。

毛嫌ひは禁物

何でも良い運動が始まッたら、人の毛嫌ひなどは止めて、其の運動に參加する事だ、犬養君が原動力だから、良い運動だけれども、其の後塵に從ふのはイヤだと云て來らない者が、國民黨の中にも有り、尾崎君では未だ足らない、原君、松田君の出でる迄は、先づ傍觀して居る積りだなどと云ふ者が、政友會の中にも有ッた樣だが、アレは良くない事だ、苟くも天下の大事を論ずるに當て、私情を挾むと云ふ法はない、一身の功名などは考へず、各々應分の力を貢献して、藩閥退治に向ふべき事だ。

桂公の失態

我輩は政黨に關係を持て居ないから、政黨が良くない時は、遠慮なく政黨をも擊ッた者だが、今回の桂公の態度は、誠に良くなかッた、歐洲から歸て居て、內閣の崩壞するのを待て出でたのなら、コンなに不人望にもならなかッたらうが、宮中へ入て、四ケ月目に岡崎邦輔君の豫言通り、赤い信女が又孕んだのだから、世間が許さないのだ、之れで無理を押し通さうとしても、ソウは往かない、輿論が許さない、流石の手取り者も、今回は一本參るだらうと考へる。

政黨を作るべし

桂公も此際自分の政綱を揭げて、一黨を作るが宜しい、而して戰へるだけ戰ふて見るが良いと思ふ、政界の事は變化極まりなしだから、窮して後に通ずるの道も有るかも知れない。

桂公の窮境

我輩の見る所では、桂公は今や頗る窮境に居ると思ふ、其の最も苦痛とする所は、民黨の反對よりも、元老の反對に在る事と思はれる、山縣老公が桂公に對して厚意を持て居ない、松方侯も亦頗る惡感を抱て居る

井上侯も其の感情は決して以前の如く穏かでない、コウなッて見ると、桂公は殆んぼ四面楚歌の聲の裡に在る者だ、此の窮境を如何に切り抜けるかは、我輩共が注意を以て見るべき所だ。

巣の無い大狸

我輩共は獵夫で有る、攻め立てるゝ大狸はイツも巣の中へ逃げ込んで元老の羽翼の下に隠くれ、詔勅でも濫發して、獵夫を煙に捲いた者だが今日では巣の中の元老共が、以前の如くでないから、大狸は逃け込む所が無いワケだ、獵夫たる者、夫れ奮發せざる可けんやだ。（一月十七日）

△憲政の一大進歩

子爵　秋元興朝

閥族打破といふは可笑しな言葉であるが、なにしろ少數者が政權を壟斷して居るといふ事は國民の氣に入らぬものと見える。そして殊に立憲政治の本旨に違つて居ることはいふまでもない。之は善政とか惡政とかいふ事を論外として國民の氣に入らぬ事に相違ない。今の世の中に於て惡政といふものが行はれやうがないから、兎に角善政に違ひない。最善政でない迄も善政な事は疑ひない。徳川家でもさうであつた。さうでなければ三百年の政權を維持することが出來ない筈である。

然し今日では只善政丈けではいけない。立憲的の善政でなければならぬ。故に國民に基礎を有たない政府では今日の時勢に適する立憲的の善政のしやうがなからうと思ふ。官僚黨でもよい、非官僚黨でもよい。進步主義でも保守主義でもよい。又積極方針でも消極方針でもよい。何てもよいが國民を基礎としない内閣ではいけないと思ふ。日本は國柄が英國とも違ひ、獨逸とも違ふからそれ以上の事は強いて望まないが、立憲政治に共通なるそれ丈けの點は是非日本にも行ひたいと思ふ。

今回桂公が官僚黨を組織して政黨の土臺の上に立たることになつたのは兎に角憲政の一大進步で大いによからうと思ふ。それから先きは官僚黨が勝つか非官僚黨か勝つか各々其好む所に從ふであらうが、兎に角政黨を基礎として善政と惡政との爭をするのであるから、治蹟も之から本當に擧るだらうと思ふ。官僚黨と非官僚黨とお互に相研鑽し合ふ事が益々盛んになつて、玆に初めて具體的の案に力を入れるやうにならうと思ふ。

一體時代〳〵には其時代に必要なる政策がある。或は内治を專らにせればならぬ時もあり或は外交に力を用ひねばならぬ時もある。或は軍事、或は財政、其時代の力を集中すべき問題が變つて來る。或は諸外國との協商に重きを置くこともあらうし、或は支那問題に最も力を盡さねばならぬ事もあらう。一般の施政方針でも、又行政事務でも、玆に初めて民望を得べき具體的の案について爭ふ事が出來るやうになつた。官僚はなか〳〵腕があるんだから、其腕のある人が政黨の基礎の上に立つて善政をなさうとすることになつたのは喜ばしい事である。

私は非官僚黨であるから、非官僚黨の勝つことを希望するけれども、然し官僚黨にしても非官僚黨にしても本當に善政を行ふんでなければ民望を得ることが出來ない。私の多い政府は民心をして背かしめる。これまでのやうなやり方では、惡政とはいはれぬにしても、個人の私權とか、多少の私利を營む事がお互にあつた。處が政黨の弊は地方にあつて根本的といふよりも寧ろ枝葉の方に多いが、官僚の弊は中央にあつて、之は根本的のものであつた。改善といふよりも寧ろ撲滅しなくてはならない

方であつた。公平にいつた處で大いなる改善を要するものであつた。處が今度はいよ〳〵政黨の基礎の上に立つことになつたからして、さういふ弊害も改まるであらうし、又他から監督し鞭撻しないにしても自ら之をやるの外民望を得る手段がないから、三年五年の後には立憲の形式も精神も初めて備はるであらうといふ所まで漕ぎ附けたのである。早ければ一二年の後、晩くも五六年の後には今回の運動の花を開き實を結ぶであらうと思へば、日本の憲政の一大進歩として賀せざるを得ない。

實は夙うから斯うならなければならぬのであつたが、いろ〳〵の事情の爲めに斯うならずに居つたのだ。然し餘り急拵へにすれば恐らくは桂公の失敗に終るであらう。政友會で批難を受けたのも、早く内閣を取りたいと焦り過ぎた爲めである。桂公も急いでは蹉跌事を仕損ずる。何故なれば、これまでの桂公の經歷も、主義も、理想も捨てゝ了つて、政友會以上の民黨――政友會が却て官僚黨と見ゆる程の民黨――を組織することならば大いに人望を得るだらうが、桂公の立場としては到底之を許すまい。さうすると矢張り官僚黨を組織することになる。今日の如き民論の盛んなる時代に官僚黨の迎へらるゝ譯がないから、之は無形の主義ではいかず、實蹟即ち善政によつて民意を得るの外がない。實蹟を擧げるといふ事になればなか〳〵半年や一年ではいけぬ。どうしても二三年はかゝる。急に政權を以て政黨の地盤を覆すといふ事は出來るものぢやない。地盤を覆すには、地盤の人民を感服せしむる丈けの政治をして見せなくてはならぬ。威壓や懷柔では駄目だ。代議士や院外員などは動くかも知れないが、威壓や懷柔で動くのはいはゞ醜類である。醜類を獵り集めた所で永く續くものでないので駄目な事は分り切つて居る。又羊頭狗肉といふ事になれば尚損な話で、一方では國民の信用を失ひ、一方には元老や貴族院の反感を買ふ。故に玆は急がず憔らず、五年とか六年とかの先を考へて實蹟の上から行く方がよいと思ふ。解散して總選擧をやつて直ぐ過半數を得やうとしてもなか〳〵さう行くものではない。若し行つても憲政の進歩とはいはれぬ。私が談話會をやつた時でも、急がずにやる積りであつたのが、同志の中で少し急ぎ過ぎたものがあつたのでとう〳〵あゝいふ始末になつた。桂公は固より名望も地位も手腕も我々とは違ふけれども矢張りあの手では駄目だと思ふ。官僚の人は仕事が旨いから何處までも實蹟で以て國民の輿望に協ふやうにするのが上策である。然し今日の如き場合には、昔の儘で善政を行つた所で何にもならないが、政黨の組織の上に立つた以上は善政をさへやれば民心を得ることが出來やうと思ふ。五十歩を以て百歩を笑ふをさへ孟子は笑つてゐたが、今までのやうな官僚で政友會は五十歩逃げた。おれは四十五歩しか逃げないといふやうな四十五歩を以て五十歩を笑ふやうでは無論行けない。今迄の通りならば向ふが五十歩逃げたのに、こつちが五十歩進んだのなくてはならなくなつて來て居る。けれども今の時勢にそんな飛びはなれた藝當の出來ない事は分り切つた事である。然し今は桂公も政黨の上に立つことになつたから五十歩と七十歩位の違ひならば確かに人民を感服せしむることが出來る。我々は眞面目に桂公が急がず憔らず實蹟を以て徐ろに民望を得られんことを希望する。(一月廿一日)

△憲政擁護、閥族打破の運動と政界の變動

田川大吉郎

昨年末以來の此運動は、確に時人の心を動かしたに相違ない、誰しも皆、久し振に稍本氣な、狂熱じみた運動を見るとの感を有つ、一面から申せば、甚だ勇ましい光景である。然しながら果して、頼母しい現象であるや否やは、尚考慮を要する、而して其運動の內容は、どうしても、枯淡、空漠の嫌ひを免れない、その政界に及ぼす變動は、善かれ惡かれ今に於て測り難く、同時に、その多くを期し難いやうに思ふ。

先づ運動の第一目的たる憲政擁護に就いては、天下に異議のあらう筈は無い、尊皇愛國が曾て既成政黨の第一綱領たりし時、天下は之を意義のあることとの如くに解し、又意義の無いことの如くにも解した、それと同樣の通理である、憲政擁護のことたる各人皆の希望であるに相違ない、隨つて論は無い、運動の第二目的なる閥族打破に至つて稍意義がある。今日に處する新らしい意義、主張がある。

其意義は、まさか桂公は長州人だから、日本人で無いと謂ふのでは無く、その意味で長州人等を政治圈外に抛げ棄つべしと謂ふのでは無く、桂公等現內閣者に、その長州的朋黨藩閥の因緣を一掃して、公々然天下と共に天下を料理する正大の意氣に岱り來れと謂ふのであらう、若し、前者の如く長州人だから非日本人だと謂ふのなら、從來薩長の人が、平族にあらずんば人に非ざるなりとの故態を學んで、薩長以外の人士を、非日本人扱ひにしたのを憤慨したその人達が、咎めてその顰みに倣ふ、又薩長人士の故智を襲ふもので、彼の不都合の如く我も不都合である、故に、此主張には決してその樣な偏僻、嫉忌、我執の情は籠つて居ない筈だ、必らず後者の如く、天下の公心を開いて、天下の人と共に、天下の事を憂へよと謂ふ大なる規模、理想の主張たらざるを得ない。

果して然らば、此度の運動は、桂公等に向つて新政黨の組織を促がすものである、政黨を組織し、民心を後援とし、衆議院に相當の根據を有して立て、然らずんば、その衆議院に根據を有する黨派に、政權を讓り渡せ、更に願はくば、有ゆる政權の移動を、元老を基礎とせず、議會を基礎とし、衆議院を基礎として、民心の趨く所に、國事の歸結を化融せしめよと希望するのであらう、即ち、新內閣組織に對する　陛下唯一の御相談相手は、元老で無い、元帥で無い、當然に衆議院議長である。若くば貴族院議長である。その樣な例を開始し、以て憲政の發達に愉快せる天下民人の心に副へよと謂ふのが、今日の閥族打破てふ運動の第一要件に係るのであらう。僕は此意義に於て彼の運動を眺めて居る。而してこれを以て決して無理ならず、時代至當の要求だと解し、切にその成功を祈つて居る。

而して一方、桂公幕中の情形を觀察するに、僕は此希望に應ずる計畫が、豫てより桂公の胸秘に存して居ると信じて居る。そこで前段の桂公に對する政黨組織の催促若くば慫慂は、乾度此時に成ると信じて居ゝ。而して

解する者は曰く、桂公は先づ此議會を解散するであらう。而して總選擧の際に、並びにその後にその與黨を糾合するのであらうと（或は買收といふ語を羅列する人もあるが、僕は左樣な不快な語を用ゐない、用ゐずとも僕の議論は出來る）僕はそれがそうで無いとは謂ひ得ない、少くとも歷史は繰返すものとすれば、從來、幾度か其樣な例のあつたのだから、又そんな事が繰返さるゝだらうかと謂ひ得ないでも無い。然しながら僕の所見はその通りでは無い、僕を以て今日の時勢を見れば、洵に容易ならぬ時である。此時に際し大政燮理の任に當るものは、今迄よりも更に大きい、更に眞摯な計畫經綸を運らさねばならぬ。此際議會を解散し、天下を激動せしめて、而る後に與黨の糾合を謀るよりは、寧ろ議會の解散を大詰とし、政黨の組織を序幕とし、以て人心の一新を試み、勉めて議會の解散を避くるが捷徑でもあり、道理でもあり、大勢でもあり

而して局面の擔當に對する適切の責任である。故に、僕は桂公が、此際紛々の群疑を排して、斷然政黨組織の途に出でんたことを望むのである。而して僕のこゝに謂ふ此際とは、本誌世に出づるその前後の頃を指すのである。所謂不信任の上奏案か決議案かに對する、政府の展開的運動としてである、僕は政府のその際の展開運動が、此方面に振向けられんことを希望するのである。而して當今の政局は、たとへ局面迫切の觀はあるも、僕は此運動を容るゝ餘地、之を迎ふる氣勢は、十分に之ありと信ずるのである。同時に僕は、所謂閥族打破の運動者は、之をその初心に酬ゆる一齣の段落と爲し、その時期を合圖に、一と先づ亂律に近き今の運動を收束せんことを望むのである。此時それ以上を期しては、必らずしも無理と謂はざるも、人心の繼かざらんことを虞るゝのである。進むにも時あり、退ぞくにも時あり、僕は該運動者が躁狂の中に熟慮あり、大突擊の際に大同收の算あらんことを望むのてある。

然らば則ち、桂公は如何なる人々をその大傘の下に羅致すべきか。世人は、桂公は當然に政友會の敵なるべしと謂ふも、僕は然らず、僕は桂公と政友會の間には、依然として一脈の情緒の存することを疑はない、のみならず、それが至當の成行であることを信ずる者である。從つて僕は政友會の大部分、少くともその半數が桂公の下に趨るであらうと信じて居る。此觀測に對しては、世人は第一に原氏を云々するが、而して僕も亦原氏の縱橫の器略を十分に認識するが、然しながら、僕の此觀測は必らずしも原氏が此くするであらう、此くなるであらうと揣摩しての結果では無い。政友會が、大凡此くなり往くと共に、國民派中の一部、寧ろその半數は、又新政黨に歸するであらう。而して中央クラブの之に赴くべきことは勿論の沙汰である限り、僕は桂公の新政黨は、矢張り居然として一大政黨を成すに相違ないと信じ、桂公は、斯くいふ當世の幸運兒である、伊藤公と略ば相似た境を馳せて、略ぼ同樣の成果を收め得べき境に立つて居ると、僕は此く眺めて居る。

或は以上の觀測に反し、政友會は桂公に反對して立ち、國民派、中央クラブその他從來の非政友派が相合して桂公の下に集まり、政友派と二大黨派對峙の形を爲すと觀測し、爲さしむべしと主張する者もあることは此に謂ふ迄も無く、既に世上の喧傳する所であるが、僕は此を以てあんまり淺い觀測なりと爲し、且今日の黨人の心にも通曉せざる觀測だと思惟するが故に之に與みせず、自然にして以上の如き期待を有し、その落ち着く先を見ることを樂しんで居るのである。

更に僕にして桂公の政黨組織に、何等か望む所ありやと謂ふに、僕は更に無い、僕一人は、時折いふ如く、今日の政黨若くば政治に何等の望む所が無い。今日の政治は、僕の好ましからぬと思ふ方向に動いて居るのであるが、去りとて、之を今日に救ふ所以の力量は僕には無い。僕は今日の先輩諸君が思ふさま、その欲する所を爲さるゝに委する、而して好き結果を收められれば、それで結構である。僕は終に默して已むべし若し好き結果を收められざるに於ては、僕等が不敏といへども、又當に進んでその善後の計に腐心すべし。かゝる時來るか、かゝる時來らざるか。之を知るは只神のみである。固より豫言の限りで無い、只此樣な空氣心持なるだけ、今日の政黨組織には、何等の望みを起さない次第である。而して此の如きもの、恐らく僕一人に止まるまい、淡として、恬として、所謂輿情の外に立ち、その持てる一票を、最も公正に使用せんとする者は、他にいくらかは有るであらう。

然も、尙、一つの新政黨に對する望み、若くば桂公に對して望みたいと思ふのは、僕は桂公が思ひ切つて、自ら若い氣持に爲り、衆院の最少者と相提携せんことを望むのである。政府者に、所謂地方閥（長閥薩閥

の如き）もあらう、學系閥もあらう、若くば職業閥も（陸軍海軍の如き）あらう。その一方、政黨者の閥も亦太だ驚くべきでは無いか。彼の弊伐つべきならば、此の弊も伐つべきである。而して桂公は、必らずしもその黨派の弊を芟除すべき唯一の戰將とは謂はないけれど、桂公にして新政黨を組織せんとする限り、此黨閥の隙に乘じて、之を中斷し、以て天下の壯者を集めて、人氣の一新を謀るは、謀るに於て巧みなるのみならず、又時代の求めに應じ、その志を成すものであらう。僕はこれを以て、桂公の進んで用ゆべき最善の策だと信ずる者である。想ふに桂公は曾て元老の勢力を、實際の政局より遠ざけ得た經驗を有する人である。而して此度の內閣にも、稍若手を引き上げた器量を有する人である。公を以て黨界に對すれば、その手腕は一層自由に大膽に揮廻さるべき筈である、果して政黨組織の心あらば、此樣な考へも既に一再ならず、その腦裏に繰返された筈ではあるまいか。

而して若し能く此の如くならば、政界の變大に成る。桂公は此點に於ても、存外な名譽を博し得べき一人と爲るのである。看來れば人事總て塞翁の馬、何が仕合せに爲るか、不仕合せに爲るか分らない。但以上の觀側は、總て議會の解散せらるゝか、せられないかを拔きにして居る。而してその政局轉變の計畫が、甘く往くか、往かないか、直ぐ出來るか出來ないか、それらの曲折をも拔きにして居る。それらを一切拔きにして、而して要するに、こゝらがその落ちだらうかと思ふのである。

然も根本的人民の自由、合議政治の眞の活動、大正に於る新政の理想、主義に據る政黨の對抗、此の如きは當分は華胥の夢である。人民の胸中にも、所謂政治家の胸中にもこんな思想は確なる根據を有して居ない。いつ左様な夢想の實現せらるゝ世に爲るか、それは本論の外であるけれど、どうしても頗る遠いと考へねばならぬ。それが癪である、そこに倫敦タイムスの悲觀がある。而して深慨すべき我國の憂患がある。僕は今之を誰と共に議し、誰と共に謀らうかと惑ふのである。生意氣と謂ひ玉ふな、僕は人知れず之を思ふて居る。それだけ眼前口頭の事、西園寺侯が勝つか、桂公が負けるか、犬養氏が勝つか、大石氏が負けるか、そんな喙は僕に於て全然沒交渉である。それだけ僕は今日の政局を以上の如くアッサリ眺めて居るのである。

一月十九日、政友會の大會は、尙二月の後に在り、その向背は未だ明かならざるも、僕を以て西園寺、松田、原三氏の意中を忖るに、議會の初めに、所謂不信任案を拋げ着くる、强硬派の希望は、大槪その否認する所であらうと思ふ。然も情形此極に至る、今は如何とも回勒の途なし。西郷南州は、今は昔、其若者に擁せられて、本意なき擧兵に與みした如く、三氏者も亦その本意ならざる間に、到頭、上奏案の提出に一致するであらうと、僕は此く推測しながら此文を作つたのである。（十七日朝）

△二度の解散を賭して戰ふべし

小久保喜七

憲政擁護閥族打破の運動は、主として政友會の有志と國民黨の犬養一派との聯合共力に依つて爲されてゐる。是れが果して何處まで發展するか、今の場合に於ては何れも互に疑惑の念を挾んでゐる。政友會に對しては、現に運動に着手しつゝある尾崎、岡崎、杉田及び僕なども、桂公と西園寺侯原君等の關係上、結局は復たしても妥協に終りはしないだらう

かを危ぶんでゐる者がある。又國民黨に對しても犬養一派は成程彼の通りの運動を遣つてゐるが、大石河野は果して犬養と同じ考を有つてをるであらうか何うか。此邊の所を疑つてをる者も隨分有るやうである。又或一種の人は斯ういふ觀察を下してをる。即政友會が斷乎妥協を廢し、政府に對して戰を挑む曉には、政府は政友會を打破して、その中から議員の八十名は引抜くとが出來る。それに中央、國民の一部と同志會の多數とを併せて玆に政府黨を組織するならば、政府黨が多數の勢力を占むるとになりはしないだらうかと

私は此等二つの疑惑に對しては悉く見當違ひの觀察であると思ふ。今や天下の形勢は閥族打破憲政擁護の一點に傾き、地方の民心も非常なる自覺心を以て非立憲を排斥してをる今日、其潮流に逆らう者は自ら落伍者たらざるを得ないのであるから、私の觀察する所に因れば、原、松田も必ずや政府と決戰するとに其決心の臍を固めるであらう。然らば政府は奈何なる手段を弄しても政友會から一人と雖も之を連去ることは出來ない。國民黨も亦犬養と共に河野大石も手を携へて相俱に事を圖るに至るであらうと私は深く信ずる。

果して然らば政府と衝突する時機は何時を以て最も可とするか。一つは開會劈頭上奏案を提出せんとするものと、他は兎も角も豫算編成を俟つて徐ろに事を圖らうとするものとの二つに分れる。私自身は開會劈頭上奏案を提出するとに贊成するが、その點は果して孰れに決するかを豫め知るを得ざる所であるが、何れにせよ政府に對する不信任案の提出さるゝ事丈は明かな事實である。

さうすると其結果は又自ら二ツの豫想をなすとが出來る。政府は議會を解散するか、桂公は自ら其責を引くか、此うち二つに一つでなければならぬ。私は此場合桂公は必ず議會を解散するものと信じてをる。然しながら解散を命じても桂公は果して其後を何う處理するであらう。いかに干渉を試みても到底駄目、再度の選擧には民黨は合同か聯合か、今俄に之を斷定することは出來ないが、直ちに機運が熟すれば大合同は立所に成立するであらうし、よし熟せないまでも兩黨は聯合して競爭するとなしに選擧運動に從ふとになれば、官僚黨が候補に立つとも其間に乘ずる餘地があるまい。

然らば依然として解散後の議會は、政友國民兩黨の議員が大多數を占めるとになるは疑ひのない所であるが、只此時に當つて選擧運動に疲れたるを見すまし、野心を抱く議員の多いのを見込んで、政府は必ずあらゆる手段と金力を以て政府黨の扶植に取懸るであらうとは何人も同一の想像を巡らす所であらう。而も私は決して政府黨は議會の多數を制し得るものでないと信ずる。否其三分の一をも到底駄目であると思ふ。此場合に立到つては、立憲政體の本義から言へば、當然桂公は引退すべきであるが、嘗て伊藤公が二度解散を命じた事もあるからして、口を其慣例に借りて再び解散を命ずるに至るかも知れない。玆に到つて兩黨は全く合同の機運が熟する。憲法中止を敢てしない限り、桂公はこゝに辭職の外彼の執る道を知らないであらう。即内閣は明渡されるに決つてゐる。今に於て議員並びに國民は二度の解散を賭して戰ひさへすれば閥族の打破は易々たるのみである。一旦合同したる内閣が組織せられた曉に、其内閣は官僚といふ眼前の敵を失ひ、再び思想感情の爭ひから二分せられて玆に全く兩黨對立の形勢を取るに至るならば、それこそ吾々の望む所であつて、我邦眞の立憲政治はそこから始めて得らるゝであらうと私は信ずるのである。（一月十七日）

△憲政を創立せよ

武富時敏

今回の憲政擁護、閥族打破の運動が果して何事を意味するか我輩にはよく分らない。一體西園寺内閣が議會に多數黨を擁しながら内閣を投げ出したなどは如何にも無責任で且意氣地ない話で決して立憲的の仕打でないと思ふ。

又憲政擁護といふが、我輩の見る所によれば、我國に從來擁護すべき憲政があつたかどうか疑はしい。吾輩は寧ろ之から憲政を創立すべきであると思ふ。それについて桂公に一つの注文がある。兎に角斯くの如く民論が沸騰して居るから、公たるもの議會の劈頭に於て衆議院に向つて信任投票を行ふがよい。若し自分を信任する議員が多いなら、それこそ大威張りであるし、若し少いなら之を解散して更らに信任を國民に問ふがよい。こうしたならば、之れ全く立憲的の内閣であつて、實に憲政創立の基を成すものと思ふ。桂公は名位二つながら人臣の榮を極めて他に缺けたるものがない。缺けたるものは只憲政創立の事業のみである。我輩は此際非常の勇氣を振起して、此思ひ切つた擧動に出でんことを希望する。(一月十八日)

△只大勢を作るにあるのみ

古島一雄

今期議會の形勢が果して何ら開展するであらうか。是れは現在私が或目的に對つて其事に着手してゐる以上明言することは出來ない。或はそれが自己の先見の明を誇るの資になるかも知れないが、それでは自分の仕事の遂行を妨げる虞がある。

只吾々の執るべき方針は巳に定まつてをる。西園寺侯が内閣を明渡した今度の遣り口は、未だ例を見ないくらゐ立憲的の行動であつたとし、之を覆したものが甚だしく非立憲的であるといふことが明である以上、吾々の態度は自ら定つて來ざるを得ない。吾々の志す所は誠心誠意憲政擁護である。閥族を打破するとである。妥協を廢するとである。

今や時局が果して何ら發展して、何つちに轉ぶかといふ二つに一つの瀬戸際である以上、其場合に處する考案ぐらゐ有つてゐない譯では無論ないけれど、今の場合採るべき道は只吾々の目的に對つて驀進するの外にはない。政友會の心事を濫りに揣摩憶測して疑惑を逞うするが如きは政友會に對する禮でない計りでなく、吾々の仕事の進捗を阻害するものと謂はればならぬ。「斷乎妥協を廢す」といふ決議文を信ずる外はない。政友會が從來の妥協政治の夢から醒めて、飽く迄も憲政擁護の爲めに戰ふといふ以上、吾々は之を信じ之と共に吾々の目的を貫徹せんのみである。吾々の眼中區々たる黨派の別のある筈がない。

然しながら人の心といふものは銘々解つたやうで解らないものだから、今日一口に政友會の態度が何うの斯うのとは言へない。西園寺侯の方すは原、松田の連中と雖も能くは解るまい。國民黨にしても、犬養と僕とが今度の事に就て嘗て一度の相談をもした事はない、平素の意見なり行動なりに因つて以心傳心で吾々同志が相共に事を爲てゐるに過ぎない。國民黨の中でも只意見と立場の一致したものが暗々のうちに集つてゐるので、況して政友會の幹部と國民黨の幹部とが決議の上で今度の憲政擁護閥族打破の運動をしてゐるのではない。謂はゞ大勢が自らさら導いて

來たのである。であるから今度の吾々の行動に對して私に嘲笑してゐる連中があるかも知れない。政友會の中にも有るだらう。國民黨の中にも有るだらう。が要するに事は大勢に因つて定まる。大勢の趨く所一個人の力の能く支へ得るものではない。吾々は其大勢を作ればよいのである。果して吾々が嘲笑の的になるか、それとも嘲笑してゐた連中がゾロ／＼と大勢に從つて引張られて來るやうになるか、それは解らぬ。吾々は只誠心誠意憲政擁護の爲に、其大勢を作り出すことを力めねばならぬ。（一月十五日）

△何事も現狀の打破を要す

花井卓藏

憲政擁護の聲が憲法實施後二十餘年にして叫ばるゝといふことは決して偉とするに足りない、寧ろ恥ずべき現象と謂はねばならぬ。藩閥打破に於ける亦然りである。然しながら事實は事實也後れたりと雖も爲さゞるに優る。是れが爲めに國民强く自覺し、一派の人自ら立つて政黨を樹立せんと決心したるだけにても、此運動の收獲は大なるものと謂はざるを得ない。

吾輩の常に憂ふるところは、憲法の精神解釋論の、政界にも、學界にも多くの認識を得ないことである。凡そ法律には、憲法にせよ、刑法にせよ、其他の民法商法にしたところで、法自身に精神のあることを考へればならぬ。精神の有る國家國民を支配すべき法律に、精神の無き筈はない。然るに政界でも學界でも、形式解釋論のみ盛にして、精神解釋論の迎へられざるは遺憾とするところである。

それはそれとして、憲法の精神解釋として注意すべきは、形式的には規定せられてゐないけれども、精神的には政治的道德の觀念、政治的正義の觀念、政治的責任の觀念のあることである。眼中道德・正義・責任を見ざるの政治は決して憲法政治とは謂へないと思ふ。法の形式よりは寧ろ法の實質より觀て、此精神のある處を味はねばならぬ。國家の政權を獨り自ら恣にし、其礎たる國民の公論に問はざる如きは、道德的觀念の最も乏しきものである。之を正義の觀念としても亦憲法の欲せざる所である妥協交讓とか、情意投合とか、二人者若くは三人者の間に於て國家の政治を云爲するが如きは、決して責任の觀念あるものとは言へない。乃知る、久しきに亘りて憲法の精神は沒却せられ、形式的にのみ憲法は說かれてをつたのである。否行はれてをつたのである。此點に於て、彼等權勢者流が藩閥の城郭に閉籠つて、自ら威福を擅にしたる罪は素より恕すべからざるものであるが、顧みれば國民黨も政友會も、妥協に握手し、情意投合に握手して此禍源を醸したる罪亦大なりである。今始めて醒めたる如く、憲政擁護、閥族打破を叫ぶのは、時機甚だ晚しの感あるけれども、既往は咎めず。吾輩は國民の興奮之を促して、今日の趨勢を作り出したることは誠に愉快に感ずる。どうかものにしたいと思ふ。序ながら桂公の政黨も形式的憲法論を棄てゝ、精神的憲法論の下に二大政黨樹立の覺悟で以て行つて貰ひたいものである。藩閥官僚を對手としては失敗に終るといふことを苦言しておく。

權勢者流は現下の狀態に對して、或は群集心理の觀を以て迎へてをるかも知れぬが、それは大なる間違である。國民自身が眞に自覺して、强き決心を以て起つてをることは確に之を認めねばならぬ。それはその筈である。國家は國民の力に因りて立つといふことの認識力が著しく强くなつたことを認むるからである。憲法は國民に納稅の義務を課し、又兵役の義

務を課してをる。豐かならざる懐より血の出るやうな税金を拂ひ、慈しむべく愛すべき壯丁を軍隊に獻げてをる。此の懐の力と腕の力とが、日清日露の戰をして勝利を得るに至らしめたといふことを強く印象してをる。權勢者流や藩閥者流の力で勝つたとは思つてゐない。此觀念が近來著しく強くなつて來たから、義務の觀念は即權利の觀念なりで、我等の力國家を護れり、我等の力國政に當らざるべからずと言へる思想は著しく向上して來てをる。であるから、現在の趨勢を以て群集心理の發現などと觀るのは、大なる間違である。それが即吾等の精神解釋の憲法論より國家を見、國民を觀んことを要求する所以の最大眼目である。

扨第一戰として藩閥打破其目的を遂し、次ぎには政黨の宿弊を矯むべく、國民の奮起することを認め得らるゝ。政黨内の空氣を清くする事、政黨内の閥を倒す事、此等は既成政黨の最も心懸くべき點であらうと思ふ。利害の爲めに政黨に在る者の如きは、多くは實業家就中會社關係の者共であつて、何等政治上の閱歷、識見の有るにあらざれども、金錢的魔力は黨内に潜勢力を有してをるものがある。此空氣は新進氣鋭の士を迎ふるには大なる障碍である。芟除せねばならぬ。又天下の政黨に最高幹部――幹部――地方團體代表――陣笠と言ふが如きは、政黨界にも元老閥族の有るのと同じことであつて、國論に聽いて決すべき國家の問題を幹部一任などと言ふが如き今日の狀態は之を維持するに於ては國民の信賴を繼ぎ得られざる次第であるから、此等の事をも破られねばならぬ。否らざれば是れ新進氣鋭の士を迎ふる所以の道ではない。

要するに何事も現狀の打破を必要とする。扨此次ぎに起るべき問題は文官任用令の改正にもあらず。樞密院官制の改正にもあらず。憂ふべきは貴族院を如何にすべきかの問題である。言ふまでもなく、帝國議會は貴衆兩院に依りて成立すべきものであるから、貴族院にして事々に衆議院と意見を異にする場合を愼重に研究しておかねばならぬ。現下の趨勢は貴族院をして奈何にして現下の趨勢に伴はしむべきか。是れぞ吾儕の見て最も重大なる問題とする所で、又容易に樂觀を許さぬ問題であらうと思ふ。吾儕は私に此貴族院と闘ふべき時代の來ることを憂ふる所のものである。

尚貴族院に關しては今後大いに論ずる機會があらうと思ふ。今の場合吾儕の言はんと欲する所のものは、先づ以上の如くしてある。文責は君の方で有つて貰ひたい。(一月廿日)

△恐らくは桂公の失敗

岡崎邦輔

◎今度の憲政擁護運動が何處から起つたかといふのですか。交詢社のストーブの側から起つたとの説があるのですか。左樣、今度のやうな運動については交詢社の人は交詢社のストーブの傍から起つたといふだらうし、政友會の人は政友會のストーブの傍から起つたといひませう。又國民黨の人は勿論國民黨のストーブの傍から起つたといふに違ひない。詰りこういふ事は、さういふ人の數の多い程よいのであつて、發頭人と名乘る人の數多いのが即ち此運動の成功した所以であらうと思ふ。所謂元老が誰でも、みんな廢藩置縣の首唱者だといふと同じやうなものだ。さういふやうな勢でなければ物は出來ない。憲政擁護會の二三の人が一度口を開けば其聲忽ち全國に響應して、地方の末々、津々浦々に至るまで相唱和し、殆んど天下を風靡するの概あるものは、實に天下の人心期せず

して相一致したのであつて、單に交詢社や國民黨や政友會のストーブの傍に於て此事が語られたのみならず、又或は小さな商店の隅つこに於てまで囁されてゐたのであらうと思ふ。

◎運動を起す當初から今日の如き大勢力になるのを豫期して居つたかといふのですか。私は此運動の相談に來た人に向つて、我々は世間を見ず先鋒を見ず、只自分らの足元を見て步かう。仲間が多ければ固より結構だが、少ければ少いで行つて見やうといつたのです。

◎現在の所では此の運動の結果、桂公はどうしても政黨を組織しなくては政局に立たれないといふ所まで來た。之れ丈けでも先づ此運動の勝利といつてよいと思ふ。

◎所謂閥族黨といふものは從來野戰をしない。平原に兵を曝して戰ふといふ事をしない、何時でも要害に據つて身を掩うて居つた。極く堅固なる陸軍閥を抱へて、後ろに澤山の有力なるものを控へてゐた。そして木の蔭、城の蔭、山の蔭から鐵砲を打つた、どうも戰は公明正大でなかつた。然し今度はどうしても兵を引いて野に出でねばならなくなつた。だから戰も自ら公明正大になりませう。然し先生等は元來が下から起つた政黨で無く、上から權勢を利用して政黨を作らうといふ古來未曾有の政黨製造であるんだから此先きどうなるものか一寸判斷に苦まざるを得ない。昔西鄕侯と品川子が國民協會を造らうとした時も在官のまゝでなく野に下つてゞあつた。其前に井上侯が自治黨を造つた時も矢張り侯在野の時である。伊藤公は固よりさうである。然るに今度の桂公のやり方丈けが違つて居る。一體桂公の出處進退は民をして、疑はしむるものが多い。宮中より府中に出たさへも、桂公にいはせたら辯解もあらうけれども、宮中に於て運動して出て來たのぢやないかと人民は疑つて居る。又內大臣兼侍從長の重職にあつた人が、其重職を去るに當つて、自分の外に適任ないかの如く久しく缺官にし、遂に宮樣を煩はし奉つた。それ程の人が更らに政權を利用して在官のまゝで、政黨を作らうとするのである。人民が疑の目を以て之を見るも蓋し止むを得ざる數である。

◎然し兎に角桂公が政黨主義の人となつたといふ一事は今回の運動の結果であつて、之は確かに政界の一進歩として祝すべきである。只桂公が現在の地位を利用して政黨を作らんとするは吳々も公の爲めに惜むのである。況んや解散後に於て桂公が多數を得んとする方法は盡さゞるを得ない。其盡す方法に於て、總理大臣の權勢を挾んで政黨員を募集するやうな事があつたら必ずや物議を惹き起すだらうと思ふ。其物議の起り方又選擧干渉援助の手續萬端について反感を買ふ程度に於て不測の結果を起して後悔することがなからうかと心配して居る。

◎桂公は政黨を組織するに方つて、健全分子を以て組織する云々といつて居る。健全分子とは何の事であるか。若し政黨を作るに岩崎久彌とか三井三郎介とか、大倉喜八郎とかいふ人で組織するものならば、健全不健全は別として分子が別になるんだから吾々の批評の限りでないが、然し桂公の用のあるのは矢張り代議士であらうと思ふ。今日の代議士といふものは誰でも一人で出て來たものはない。皆國民の選擧によつて出て來たものである。それを不健全などいふのは實は人民を侮辱した話であると思ふ。何れにしても桂公の政黨組織は恐らくは失敗に終るだらうと思ふ。（一月二十二日）

△公正なる政治卽ち憲政の本義

時事新報主筆　石川幹明

憲政擁護、閥族打破といふ言葉の當否は分らないが、今回の運動が兎に角憲政の發達を助くべきことは誰の眼にも明かな事で、私は此運動は行く所まで行くものであつて、今は其道行の途中にあるものと考へる。

此問題は元來議會開設以來起つて居る。其爲めに政府が更迭した事もあり、議會が散解になつた事もあり、實にいろ／＼な騷ぎが持上つて居る。官僚の親玉であつた伊藤公が政友會首領となつたのも其爲めであつて、あの頃からドン／＼進んで行く筈であつた。處が玆に日露戰役といふ大事件、憲政の擁護所ぢやない、實に一國の存亡に關する大事件が起つたので、憲政運動も一時忘れられて了つた。それから戰後經營といふ眞面目な問題も出て來たし、又一等國となつたといふて戰勝熱に浮かされたりして憲政運動も忘れられて居つた。所がこゝに機會が來たのは、戰勝熱も追々に冷め、軍人の勢は次第に盛んになり、財政は益々苦しくなつて、國民の負擔も只々重くなる一方なるに加へて、こゝに一番注目すべきは先帝の崩御である。先帝は何と申上げてよいか、實に今古未曾有の明君で、憲法憲政の創造者であらるゝ。先帝の一言一行一擧一動は悉く憲政の發動で、先帝の御一身即ち憲法であると申してもよかつた。處が其先帝は俄かに崩御せられ、而かも一方には戰勝熱の冷却、軍人の跋扈、財政の窮乏、負擔の增加、元老の擧動等が益々國民の眠れる心を目醒して、憲政の前途何とも心元ないといふ感じを起させて來た。その結果今度のやうな運動も起つたのであるが、此運動は益々盛んになつて行く所まではどうしても行くだらうと思ふ。外國の有樣などを見れば此憲政運動がなか／＼盛んで、其爲めに血を流した事もあるが、日本はさういふ風にはなるまいと思ふ。元來愛國心に富み、且つ常識に富んだ國民であるんだから、一擧にして閥族を倒すとかいふて非常の手段を取るやうな事はなからうと思ふ。故に行き着く先は分つて居るにしても、一擧にして閥族を倒して、憲政が理想の域に進み切るといふ事が出來るかどうかは分らぬ。

今度の議會は不信任案で解散になるとして、果して民黨が多數になつて政府を組織するか、又政府が組織したとして、民黨が果して立派な政治をなし得るや否や之も私共にはよく分らない。多分之からいろ／＼な迂餘曲折を經るであらうと思ふが、然し一歩毎に憲政の發達を促がして行くといふことは確かである。現に桂公も新政黨を組織するといふ事を言ひ出した。さうすればどうしても政黨政治の世の中にならなければならぬ筈だ。それで進んで行く先はもう分つて居るが、其進み方は如何であるか。勿論外國のやうな過激な事はなからうし、又望ましくもないが然し餘りに進み方が遲過ぎると、人心が堪え難くなつて、却つて自暴自棄になる虞があるから政府も政黨もこゝは餘程注意しなくてはならぬと思ふ。

世の中には誰も憲政を破壞するものがないなどゝいふものもあるが、然し政治といふものは第一に公正でなければならぬ筈のものである。憲政の擁護といふは實は其れ丈けの事である。例へばこゝに民間の政治家があつて、議會に一身を委ね、其爲めに卅年運動して居る人があるけれども、其人たるや殆んど政權に近いた事なく、人格、識見、學問相當の人であるに拘らず卅年失意の境遇に沈淪し居るに反して、一方政府の方で

は學校を出てから屬僚になつて、段々鮟上りに上り僥かに十五年か廿年足らずの間に次官になり大臣になつたとする。之は誰が見ても不公平の甚しいものである。こんな不公平な事が何故行はるゝかといふに、政府といふ官僚城が出來て、民間の人が入られなくなつて居る。如何に多年政治に盡瘁しても政府には決して入れない。西園寺内閣の如く、そんな人が偶に二人かそこらも入れば、直きに衝き毀されるといふ有樣で、民間の人が政權に與かられぬといふのが、今日の實況である。全じ日本の國民が、全じく政治に盡力しながら、野にあるものは政權が取れぬ、政府に居れば屬官でも大臣になれるといふ事では、之はどうしても公平なものでない。民間の政治家といつてもなか〳〵數が多く、又運不運才不才の人があるから、皆が皆政府に入らなくてはならぬといふ事は勿論ないが、入り得られるの途は是非共開いて置かなければならぬ。其途の開かれてない政治は決して公正なものとはいはれない。憲政の發達は先づそこから行かなければならぬ。

今日は憲政の發達に於ける途中であるが、今や一代の人心激興して一歩を誤れば不測の困事を見ないとも限らない。若し此運動を無理に妨げんとすれば、憲政の進歩の遲々たるに自棄自棄して。脇道に外れるの虞がある。故に官民共に注意警戒して、正當なる憲政發達の途を進んで行くやうにしたいと思ふ。(一月廿一日)

△當さに是れ大正維新

やまと新聞主筆　高木信威

先頃の政變は之を大正の維新と呼ぶを適當と思ふ、帝國の政治史に一時期を劃したからである。第一之に依つて元老の政治的終末を確證した第二之に依つて政黨界革新の氣運を將來した、第三之に依つて國民の政治的自覺を深く且強くした、此の三者は實に先頃の政變の賜で、大正維新は斯くして血を見ずに行はれつゝあるのだ。

第一元老の政治的終末は事實に於て夙に久しき以前に到着して居たのである、唯だ周圍の事情から此の事實を示して元老に諦らめさせる時機が來なかつたから、元老自身も國民も其の勢力の强大なるもゝ樣に思つて居たまでゞ、實際は何時とはなく上野公園の枯木同樣に爲つて居たのである、斯る事を憶面もなく言ひ得るものがないから、國民にも誤解が起つて動もすれば元老の勢力を過大視して、無益の攻擊なども出て來るのだ、元老は過去の功勞者として之に尊敬を拂ふのは善い、現在の能力者として之を責むるのは氣の知れぬ沙汰だ、先頃の政變は即元老の自ら政局の擔當者たる能ざはると共に、又自ら欲する適任者を起たしめんとして最後まで之を斡旋するまでの實力に缺いて居たことも自然明瞭と爲つたのではないか桂公を宮中に入れたのは一は元老の要望であつた、四ケ月餘り立つか立たぬに公をして又出でて府中の人と爲らざるを得ざらしめたのは乃ち元老の無力を確證する、公を宮中に必要とせば何故長く宮中に居らしめなかつたか、之を不可能ならしむるが如き形勢を馴致したのは元老の政治的終末を明瞭にしたものである、桂公に非ざれば時局を救ふ能はずとしたのは既に元老の旋乾轉坤的手腕なきを遺憾なく暴露したのである、其れまでは四輪車上綸巾羽扇の木像を見て驚き走つた生ける仲達があつた爲に、死せる孔明も尙在りと思はれたまでゞ、實は先頃の政變に元老の爲には氣の毒ながら五丈原の喪を發したも同樣である、甚だ緣起でもない言ひ草だが政治的には其の際元老の爲の葬式が立派に濟んだのだ、今日では之を神靈同樣に高き處に祭つて尊敬すべきで、彼此

批評するは實は濟まぬ話だ、又過去の功勞者として其の恩を忘るゝも同然の取扱ひをするのは甚だ取らざる所だ、況んや矯激な言語を用ひて之を脅嚇し又は暗殺教唆に等しい事を行つて之に示威するなどは餘りと言へば物の道理の分らぬ絶頂だ。

第二桂公の内閣組織に禁で起つた憲政擁護、閥族打破の運動は、誠に時勢遅れの甚しいものであつたが、其の結果は案外な獲物を追ひ出した事と爲つた、憲政擁護といへば先づ憲政を破壞するか危害するかの非實がなければならぬ、彼の運動者流の言ふ所を概括すれば、陸軍が跋扈して前内閣を倒したのは非立憲だといふことが其の一、上原前陸相が西園寺前首相を差措きて意見を上奏し辭表を捧呈したのは非立憲だといふことが其の二、新内閣の成るに當つて桂公が自ら發して一は自分に一は齋藤海相に勅語を請ひ受けたのは國務大臣の責任を曖昧にして政治上の責任を至尊に嫁せんとするもので之が非立憲だといふことが其の三、衆議院に政黨を有せざる桂公が斯る不都合な段取爲る陰謀を以て政權を奪取したのが非立憲だといふことが其の四、隨つて政黨を有せざる桂公等は閥族だから之を滅さねばならぬといふ結論になるらしい。

（一）陸軍が跋扈したといふが、西園寺侯は陸軍問題に對して果して政治家として其の盡すべきを十分盡したか何うか、侯の取りたる策以外に取るべき策はなかつたか何うか、余輩は其の外に盡くすべき道、取るべき策は尚有つたと思ふ、然も侯は之を盡さず又之を取らなかつたのだ、憲法上陸軍の地位の如何なるものなるか、陸軍と一般政治との關係如何等を學理的に研究する前に、此の問題を解決すれば立憲非立憲の論を起すまでもない事である、即ち余輩の解釋に據れば陸軍は政治上より其の主張を枉げなかつたといふまでゝ、其事は毫も憲法問題ではない、之を枉げなかつたのに對して西園寺侯が更に互讓せしむべき道を盡さなかつたといふのも亦憲法問題ではない、共に政治問題である、毫も立憲非立憲の明文を爭ふ問題ではない、或は陸軍側が陸軍は天皇の陸軍たると憲法に存すと爲し其の第十一條及び第十二條を盾に取つたといふので議論が起つたのである様だが、國防上の內容に關した經綸と其の經綸に基く必要經費の議決とは自ら別問題だ、陸軍側が憲法第十一條及び第十二條を盾に取つたことは陸軍經費の議決に關する內閣の權能を蹂躪したことにはならぬ、若し之を蹂躪したかの如くに思つたならばそれは誤解で、其の誤解を基礎として之を其の儘に棄て置き、其處で盡すべき道、取るべき策を取らなかつたのが、即政治上西園寺侯及び其の幕僚の識見が徹底しなかつたのではあるまいか、若し假に陸軍側の彼が如き態度を非立憲なりとせば、之を許した侯の態度は又非立憲ではあるまいか、余輩はそんな誤つた議論は成立たぬと思ふ、隨つて陸軍非立憲論は毫も適切でないと思ふ。

（二）上原前陸相の辭表一條だが、是れも亦論のない話だ、國務大臣は帝國の憲法上皆同等同資格である、其の任免は均しく天皇の大權に由ること憲法の條章爭ふ可らざる所、即ち一に叡旨に出て首相は各相の進退を左右し得べきに非ざると同時に其の責任は直接に天皇に負ふべきである、故に上原前陸相が直接に至尊に乞骸捧表したればとて毫も非立憲ではない、世人が彼が如き議論を出したのは內閣官制上總理大臣は內閣各大臣の首班に在つて機務を奏宣し旨を承けて行政各部の統一を保持するの權限を有する所より、意見上奏も辭表捧呈も總理大臣の手を經ざる可らざるものゝ如く論ずるのであるが、總理大臣として彼が如き權限を有するのは總理大臣が官制上附與せられた資格に伴ふ所で、其の事に付ては即ち之を行政法上の論題とすべきを忘れたから起つたのである、又慣例上より言へば大概の政務は總理大臣を經て上奏することになつて居

り、而して之を便利とする、然も決して憲法上より論ずべき條件ではない、行政上定めた便宜の手段に過ぎない、其れも總理大臣が行政各部の統一を保持し得るの統制力を有する事實問題に依つて、行はるゝ事なのだ、前陸相の場合は此の統一が既に破れた後の事で、言はゞ總理大臣が總理大臣たる職任の實行不可能と爲つた曉の事である、行政上に於て總理大臣が其の責任を完くし難く爲つた後の事とすれば、前陸相の直接上奏及び乞骸捧表に對しては憲法上の理由は愚か、行政上からでも既に一言も挾まれぬ筋合である、西園寺侯の捧表も其の爲であつたらうと思はるゝが、さすれば毫も前陸相を責むる所はない、即ち侯は内閣不統一の一點に於て國務大臣として憲法上の規定に據り天皇に對し其の責を引いたのであらればならぬ、内閣の倒れたのは法理上から論じても、事實上から見ても上原前陸相の辭職前既に倒るべき原因が生じて居つたのでる、(政治上の直接原因を除いてさへも)決して前陸相が無理に之を倒したのではないといふ事にもなる。

(三)勅語問題も亦論の無い事だ、桂公が内大臣の任に在つたから勅語も恣に奏請したものだとの結論が先づ成立したらしい、併しながら是れは寧ろ危險な論斷だ、何となれば詔勅を下し賜ふは天皇の大權に屬する事柄であるから、實際の事情を確めずに議論なすると意外の結論を生ずるからである、先づ問ひたきは桂公が果して自ら賜はるべき勅語を奏請したか何うかとの事實問題である、是れは何に依つて解決するを得るかといへば、至尊と公との間に行はれた御下問及び上奏の内容が分らねば分り樣のない事柄である、勅語を恣に奏請したいといふ事實は畏れ多き事ながら至尊之を宣ふか桂公之を試るかに非ざれば分るべき筈はない、憲政擁護會の人々の中誰か之を承はり又は聞き出し來つたか、それから問いたいのである、それが明かにならぬ中は彼が如き論斷に輕々しく信ぜらるべきでない、更に之に反し其の勅語が事實に於て至尊の自由意思に發し、至尊は其の憲法上の大權を行はせられたに相違ないといふことば拒否すべからざる事としたら、彼の人々は何とする所存だ、畏れ多くも彼が如き場合必要ゝ瞥はせさせられて勅語を下し賜ふの大權行動を批判し來る事と爲るのだ、斯る事は果して不臣たるの行爲ではあるまいか余輩は洵に恐懼に堪へぬ次第と思ふ、或は齋藤海相に勅語を賜はつて内閣組織を容易ならしめた事情を、何故に上原前陸相の時に來さしめなかつたか、即ち桂公は當時内大臣として何故に勅語を前陸相に賜ふ樣に取計はなかつたと詰問する者があつた樣だ、余輩は之に反問したい、當の内閣の首班たる西園寺侯がそれを以て取るべき策としたならば、何故に之を將來すべき策を取らなかつたのか、侯は其の樣な事は非立憲だとして其の道を盡さなかつたといふが、そんならそんな問題を提げて未練らしい事を言ふには當るまい、又勅語を拜受するに至つたのを國務大臣の責任を朦朧したと論ずるのも可笑しい、桂公は其の時まだ國務大臣ではない、内閣組織の大命を承はつても事實上大臣たるの任命は拜して居らなかつた、隨つて其の事に關する責任は生じて居ない、或は天皇の神聖不可侵權を完くするは國務大臣として責任を國民に負ふが爲に然るを得るのであるのに、桂公が自分の責任で海相を留任せしむる事が出來ずに勅語を請ふたのは非立憲だ、袞龍の御袖に隱るゝのだ、皇室を民の怨府とするのだと非難するものがあると傳へられた、眞逆に事實ではあるまいと思ふが、事實とすれば忌々しき大事だ、天皇の神聖不可侵權は國務大臣の責任を負ふに由つて保たるゝといふは憲法學者の說で、敢て珍らしくはない、併しながら其の責任を國民に負ふといふに至つては亂憲だ、帝國憲法では其の責を天皇に負ふのだ、至尊は大日本帝國の統治權を總攬し玉ひ、總て文武官を任免し玉ふは其の大權の發動に由ることは敢て

擇を待たぬ所だ、國務大臣の責任は其の國の統治者たり、其の職の任免者たる天皇に對して負ふを外にして之を負ふべき所ありや、之を國民に負ふべきものだといふ者の如きは、既に帝國憲法を知らぬ者の囈語と評せざるを得ない、其れゝも遠つて其の說を主張するならば、之れは憲法を紛更せんとする者で、帝國の統治權をも陛より移して人民に奪はんとする者だ、革命を企つる者だ、論理上其處まで行く、其の樣な亂臣賊子が累を皇室に及ぼす者だとして他を攻擊するのは既に誠意のない事が分る、皇室を民の怨府とする所ではない、それより以上の大惡逆ではあるまいか、余輩は今日眞逆彼が如き考を抱いて居る者はあるまいと堅く信ずるが、口から出任せの議論をする者があつたと聞くから、其の聞いた儘の材料で國民の誤らざらんことを冀ふの忠愛心から序に此の事を一言して置かねばならぬ。

（三）衆議院に政黨を有せずして桂公の大命を拜したのを非難するのは一應尤に聞ゆるが、桂公は上院に多數の味方を有する事は事實だ、たとひそれが政黨と名が附かぬにしても其の多數は議會の一院を制する勢力だ、それで大命を受くる確信は出來たのであらう、又それがなくとも大命とあれば公程の政治家がこれを辭せられ樣か、辭すれば不臣の骨頂である、拜したのが至當だ、又政黨の存立は帝國憲法上の必要條件ではない、政治上の便宜問題だ、余輩は固より便宜問題として其の存在を尊重する、併しながら桂公が自ら之を有せざりしとして其の事が非立憲だといふ議論の起る道理を發見せぬ、何となれば帝國憲法を準とせずして帝國の政治上の事柄に立憲非立憲の區別を立て得べしとは思はぬからである、其の非立憲にあらずとする次第は即ち前陳の理由に外ならぬのだ、併しながら公も今回新政黨組織を實行することゝなつたので此の論は自然消滅に歸する事と思ふ、又隨つて例へば昨日迄謂ふが如く閥族であつたとするも、爾後閥族でなくなつた筈だ。

第三要するに桂公の內閣が立憲的か非立憲的かといふことを定めるのは爾後の問題である、前の憲政擁護、閥族打破の主張は、道理に於ては多く取るに足らぬこと前陳の通だ、併しながら其の運動の爲に前に述べた樣な結果が現はるゝと同時に、在來の政黨が稍々眞面目に其の地位を自覺し來つたのは、共に大なる進步で寧ろ豫想外の好結果を收めたものと言はねばならぬ、其の點から見て大成功といふてもよい、之と同時に國民が深い政治的自覺を得來つた事は又之を僥倖といふべきだ、是程の結果を見れば之を大正維新と呼ぶを適當とすると信ずる、其處で之を一段落として今後は何らか異同相切磋して健全にして穩止な進步を取り、永く國內の紛爭の爲に帝國の進運を妨礙する樣な事のない樣にしたいものである、即ち政治上の爭は主義政綱の上に於てし、妄に極端な感情論に走せない樣にしたい、若しそうでないと折角憲政擁護を叫んだ人々が憲政破壞者と爲り、イブセンの『人民の敵』の主人公ストックマン博士の樣に輿論を背後に起つた積で却て輿論に依り人民の敵なりとの投票を得ること ゝ爲りはすまいか、其の點の反省も亦必要だと思ふ、是れ余輩の衷心より切望する所である。（一月二十日）

△憲政擁護、閥族打破の運動と政界の變動

二六新聞主筆　中　村　弼

憲政擁護、閥族打破の運動の勃發したる近因は、閥族が增師案を提げ

て西園寺内閣を顚覆し、詔勅の煥發を濫奏して、國民の意思を基礎と爲さゞる桂内閣を組織し、桂内大臣兼侍從長の常侍輔弼の責任と、桂總理大臣の國務輔弼の責任とを回避したるに在りと雖、其の遠因は三十有四年前、國會開設の詔勅の降りたる當時に在り。初全國各地總代の國會開設を請願するや、其勢猛烈にして、閥族政府は到底之を防止し得べからざるを認め、遂に國會開設に同意したりと雖、其期を十年の後に緩うし、且憲法を欽定と爲したるは、讓歩の間に防護の方策を講じたる也、而して國民は欽定憲法に依り、國民の意思に依りて、國務を裁理することと爲さむと企てたりと雖、閥族は憲法並に附屬法律に依り、各地の總代を衆議院に網羅し、之に歳費を與へて其口を緘し、以て國論を抑制せむと企てたり。同一憲法に對する國民の思想と閥族の思想との相距る斯の如し、故に議會開設以來、憲法に對する此兩思想は、絶へず衝突と苟合とを繰返し、解散となり、聯合となり、提携となり、肝膽相照となり、妥協となり、情意投合となり、其間閥族の、一領袖伊藤博文公をして、超然主義を抛擲し、政黨を組織せしめたりと雖、政黨は提携妥協の行はるゝ毎に、閥族の奸策に陷り、政黨首領の政權を獲得したること、其幾回なるを知らずと雖、其政權を獲得する毎に、却つて閥族をして勢力を擴大せしめ、或は天皇直隸の官職を增加し、或は殖民地總督を軍人に限り、漸次内閣の權域を削小し、欽定憲法に依りて與へられたる國民の權利は、終に空文に歸するを免かれざらむとす。是れ憲政擁護、閥族打破の運動の生ぜざるべからざる所以也。而して此運動の熾なるに及び憲政破壞者を以て目せらるゝ桂公が、憲政の發展を期すと宣言するに至りたるは、一見奇異の感無きに非ずと雖、閥族の所謂憲政は國民の擁護せむと欲する憲政と其實質を殊にす。即ち閥族の憲政は議員を籠絡して、國民を屈服せしむるの義にして、國民の憲政と全然相反す。苟も此に想到せば、桂公の所謂憲政發展なるものは、非立憲政發展の義なるを知るべし。桂公は憲政發展の名に依りて、專制政治の實を擧げむと欲するもの世人の稱して憲政の賊と爲す、洵に當然と謂ふべし。今や政友會、國民黨、同志會所屬の議員即ち討閥聯合軍に、擧つて議會開會の劈頭に於て、桂内閣彈劾案を提起せむと欲し、桂内閣も亦議會解散の意を決したるが如し。解散後桂公は果して如何の態度に出づべき乎、聯合軍は果して如何に之に應戰すべき乎、是れ政界變動の因て生ずべき所たらずむばあらず。今桂公と聯合軍との抗爭の状を察するに、聯合軍は憲政擁護の大旆を飜して、桂内閣に肉薄せむとし、桂公は對支那政策、殖民政策、財政政策、内治政策を掲げて、之に應戰せむと欲す。即ち聯合軍は憲政の根本問題に就て奮戰せむと欲し、桂公は根本問題を避け、政策問題に就て應戰せむと欲す。根本問題に關しては、桂公は辯疏の辭を有せずと雖、政策問題を掲ぐるに於ては、世人を瞞過し得べき望無しとせず。從つて從來窃に心を桂公に寄する者、若くは誘惑を受くる者は、走つて其配下に集まるに至らむ。然らば則ち夫の憲政擁護者は、清めるもの昇りて天と爲るが如く、自から一團と爲り、桂公に心を寄する者は、濁れるもの沈滯して地となるが如く、自づから一團と爲り、政黨政派橫斷の實を現ずるに至らむ。然れども桂公は、徒らに變節漢を吸收するの、天下の望を繋ぐ所以に非ざるを熟知すべきを以て、從來の非立憲的行動を謝し、黨の敵たる聯合軍の首領と握手を試むるに至らむも亦未だ知るべからず。果して然らば桂公は閥族に死して、政黨に活くるの望無しとせず。何れにしても憲政擁護運動は、啻に閥族を打破するのみならず、政黨政派をも併せ打破するに至るべきを以て、閥族政黨政派は悉く解體して、恰も數珠の絲を引拔きたらむ如く、百八の珠は一つ一つに分離し、更に新しき珠を加へて、主義政綱の絲に依り繋かるゝに至らむことを望まずむば

あらず。幸に能く斯の如くなるを得ば、啻に多年對峙して我政局を惱ましたる閥族と所謂政黨とを一掃し、我政局を一新すべきや必せり。吾徒は閥族政黨政派が解體して更に之に新分子を加へ、以て立憲主義を基礎と爲し、其上に主義政綱を確立して、行動するに至らむことを希望するもの也。而して刻下の狀勢は、吾徒の此希望を徒爾ならしめざるべきを信ずるもの也。

△憲政擁護と國民的大運動

中央新聞記者　原田豐次郎

國民多數の信用を得、天下の輿望を荷へるものが進んで内閣を組織し然らざるものが退て野に下るべきは當然必至のことで、敢て玆に千言萬語を費すを要せない。歐米先進の立憲國、殊に英國の如きは、十八世紀と云ふ古き昔より、ホイッグ、トリーの兩黨存在し、後には改進保守となり、國民多數の信用を得天下の輿望を荷ふものが、内閣を組織して居る。是れは立憲國の通義にして、立憲國に行はれざる可からざる原則である。假令吾國が立憲政體を採用して以來、未だ二十餘年に滿たぬからと云つて、決して此除外を許すべきことでは無い。況して先帝陛下は吾國に立憲政體を採用せざる御即位の始に、既に業に五箇條の御誓文を發し給ひ、而も其冒頭第一條に「萬機公論に決す」云々と宣せられ、聖旨は炳乎として日星と光を爭ひ、吾が國是は長へに之に依つて定まつて居る。

西園寺内閣は一昨年九月を以て成立したが、爾來吾國の現狀に顧み、銳意熱心に庶制の改善を圖り、且つ財政を整理し吾國進運の基礎を牢固ならしむる方針で、諸般の調査に着手し、其事業は着々步武を進めた。天下の人心は翕然として西園寺内閣に嚮ひ、國民は西園寺内閣の前途に多大の望を囑して居た。然るに何ぞ圖らん、斯く信用あり衆望ある内閣が突如として總辭職をなすに至り、不人望極る桂内閣が竟に之に代て成立した。想ふに是れは國民多數の信用を得、天下の輿望を荷へるものが進んで内閣を組織し、然らざるものが退て野に在るべしと云ふ立憲國の通義、立憲國の大原則に背馳することで、玆に之を引用するは洵に畏多き次第ではあるが、先帝の萬機公論に決す云々と申す聖旨にも悖戾するのである。

西園寺内閣總辭職の原因が軍閥跋扈にあること及び桂公が宮中より出でゝ内閣を組織せし紆餘曲折の顚末は、改めて玆には述へないが、此政變の爲めに、西園寺内閣は深甚なる同情を得ると同時に、軍閥橫暴並に桂公一派の行動は痛く國民の憤怒を招き、國論は恰も鼎の沸騰する如くに起り如何なる邊陬の地でも、山村水廓到る所憲政擁護の聲を聞かざるはなく又た熱烈なる運動を見ざるはない。實に近年稀有の現象である。曾て英國で自由貿易期成運動の熾烈であつた時に、其勇將たるリチヤード、コブデンは先づ國民をインストラクトすることが其目的を達すべき最も有效にして最もエフエクチユアルな方法であると絕叫し、勇往邁進、同志と共に提携奔走して終に首尾能く其功を收めたことがあるが、吾國今日の狀態では憲政擁護を說き、之を教ゆるの必要は秋毫も無いと思ふ。何となれば、吾國民は前述の如く全國何れの地方を問はず又た何れの階級を論ぜず、誰人も皆なよく時局の眞相を了解し知悉して居る。憲政擁護の運動が目下の急務であることは、吾國民の最も痛切に最も切實に感じて居る所である。果して然らば今後憲政擁護運動の效果を收め憲政の完

備を期する爲めに、如何なることをなさざるべからざるかと云ふに、此際一大聯合團體を組織することが、最も必要且つ有効なる手段であると思ふ。予が所謂一大聯合團隊とは、半永久的のもので、政黨政派を論ぜず又た農工商を區別せず、各市各町村の代表者を網羅して打て一丸となすのである。即ち吾々が十分に憲政擁護運動の目的を達するは、決して短日月を以て能ふべきに非ず。故に現時に於ける國民の熱烈天を焼くが如き誠意と鋭氣とを維持するのみならず、益々其熱烈の度を昂め、大奮闘大奮戦を續行するには、古の大聯合團體を組織し、各地各團體が常に氣脈を通じて其進退を一律にするに如くはないと信ずるのである。現にリチャード、コブデン一派の運動も、此種の半永久的ユニオンを組織して、各市各郡の代表者が互に聯絡を取つて、多大の効果を奏したのである。

要するに大正新政の劈頭に於て、今日の如き大紛擾の惹起したのは、誠に國家の爲に不祥の事で、遺憾千萬の次第であるが、斯かる大紛擾の惹起せるを好機會に、此際此時、極力根本的の解決をなし以て吾憲政の擁護を圖り、吾立憲政體の基礎が確立するは吾々の責務で又た先帝陛下の聖旨に酬ひ、今上陛下の忠良なる臣民たる所以である。殊に近來西洋人中に吾帝國の前途を悲觀して『日本の隆昌は明治時代で、既に過去のものと成つた、大正の日本は最早や下り坂である』と迄て極端に冷評するものもある折柄であれば、吾々帝國臣民は層一層奮進激勵して、憲政の爲めに盡瘁し立憲國たる範を廣く世界に示すの大決心大覺悟を有し先進國並に後進國より輕侮を受くるが如きことありては相濟まぬ次第であると考へる。

△分解作用をして充分に且つ自然ならしめよ

國民新聞政治部長　杉中種吉

▲閥族政治存續の原因

政界の分野は、主義主張に依りて色別さるゝにあらざれば、憲政の進歩は得て望むべからず。然るに現下政界の分野を見渡すに、政友會と呼び國民黨と云ひ、中央派と稱へ同志會と名附けらるゝものゝ、其頭數の分量に於てこそ、多少の相違はあれ、其實質に於て果して幾許の差別やある。政友會を寄木細工と嘲らば、國民黨も亦爭でか、寄木細工たるを免がれ得べきや。同志會が、政界の日和見同志の、一時的雨宿に過ぎずとせば、中央派も亦、軒端の假集ひに過ぎず。所謂天下の大政黨を以て任ずる政友會も、所謂主義主張を以て立看板とする國民黨も、其政治的結合たるや、家庭の團欒にあらずして、其の雨宿たり、軒端の假集ひたる點に於ては、同志會及び中央派と、何等擇ぶ所なきなり。斯る狀態の下にありては、如何に頭數の大を以てするも、畢竟烏合の衆たるを免かれざれば、到底主義主張の爲め、一致の行動を取り、政黨の權威を發揮されざる限りは、閥族政治は依然として榮へ、悲むべし、憲法政治の畸形は長へに存在するなり。閥族政治の存續する所以は、閥族強きにあらずして、政黨弱きが爲めなり。政黨の優劣は、其數の多少よりも、寧ろ其結合力の強弱にあり、其實質の如何にあり。

▲黨界の現狀亦打破すべし

閥族固より打破せざるべからず。然れど閥族を打破せんと欲せば、必ず先づ、自から歴史に捉はれ、感情に捉はれ、動き度も動き得ず、爲し度も爲し得ず。心ならずも合宿的政黨に、一時の晏居を貪り、個人としても、團體としても、共に自在の行動を缺くが如き、黨界の現狀に向つても、打破の鐵槌を下さゞるべからず。一度此現狀にして打破せられんか、政黨政派は、玆に始めて其所信に基きて、政界の天下を、自由に横行濶歩することを得て、政黨の權威自づから發揮さるべし。其權威の一度動く所、閥族政治の存在を欲するも、亦得べからざるなり。縱しや一時的群集心理の氣勢に依りて、玆に閥族政治の衰亡を見るも、黨界の現狀にして打破せられざる限りは、憲政の進歩また望むべからず。其足下に心附かず、徒らに向ふをのみ見て、單に憲政擁護、閥族打破の、題目の絶叫にのみ依りて、憲政の進歩を期待するが如きは、恰も放火狂者に火の番をなさしめ、以て三更夢圓かなるの類なり。是れ憲政擁護、閥族打破の聲が、三十年一日の如く唱道せられながら、而も依然として、他力信者の唱名念佛に終る所以なり。

▲他力信心に極樂淨土あり

政界の沈滯鬱結を極むる、玆に年久し。天下何人乎局面の打破を欲せざる。政友會も然れば國民黨も亦然り。中央派も然れば同志會も亦然り。彼の所謂官僚派と稱せらるゝものも、亦決して多分に洩れざるなり。斯くの如く局面の打破は、政界多年の宿望にして、また天下衆望の一致する所なりと雖も、而も其今日に及びし所以は、平穩無事の下には、必ず人心の荒怠を伴ひ、黨界の人心をして自から起つて、此局面を打破せんとする、決心と勇氣を缺かしむるに至らしめ、吾も人も徒らに海路の日和を待ち、一日の安を偸みしが爲めのみ。啻に過去現在のみと云はず、將來に於ても戒むべきは、政界人心の荒怠にあり、また意氣の銷沈にあり。然るに這般の政變は、端なくも斯る他力信者に對する、恰好海路の日和となり、非政友の各派に取りては、局面打破の前提たるべく、之が政友會と官僚派とを決戰せしむる動機となりて、此動機を激成するの途は、唯憲政擁護、閥族打破の題目を高唱し、天下の人心を奮起せしむるにありとの、他力信心を起さしめ、政友會に取りても、是亦專心同一題目を唱和すれば、以て味方を增すに足るべしとの、他力信心を發せしむるに至り、玆に多年の沈滯に堅きに堅かれたる我政界は、時ならずも、御會式にも彌や優る、題目合唱の賑ひを呈するに至りし次第なり。世人は往々、其題目の陳腐を笑ふと雖も、政界の狀態依然として舊の如く、黨界の人心も、亦依然として他力信心にある限りは、其題目も亦依然として、舊の如くならざるべからず。殊に此他力信心の唱名念佛は、官僚派の最後の決心を促がす、結緣となりし以上は、無我夢中の唱名念佛の前途には、必ず極樂淨土は存するなり。然れば余輩は笑ふ者を非とし、寧ろ笑はるゝ者を是とし、且つ其勞苦を多とするものなり。然りながら唱名念佛者の中に、他力信心だになき、唄念佛の徒輩の存するを悲しむと共に、斯く念佛三昧に耽る群衆の、心々に描かれつゝある極樂淨土なるものが、殆んど十人十色にして、其念佛合唱や殊勝氣なりと雖も、互に知るや知らずや、其足並の亂次なるは、頗ゝ奇觀たり、余輩の笑ふ所は彼にあらずして此にあり。悲しむ所も亦此にあり、天下の民衆は他力信心を以てするも可なり、民心を指導すべき政治家たる者が、徒らに他力信心にのみ頼るは、斷じて不可なり。

▲既に凱歌の聲となれり

堂々たる政黨政派の信條は、固より斯くの如き、題目一圓の頑固法華

たるを許さじ。然れど冷靜に觀察せば、聊か馬鹿らしき點なきにあらざるも、現在の政局に對しては、斯る合唱者の多ければ多きだけ、其聲の高ければ高きだけ、豫てより時勢の進運に鑑み、機會だにあらば、自から官僚圏を脱出して、政黨を組織せんとの、野心を有せし桂公をして、一方には益す其決心と勇氣を促進せしめ、他方には、公の此發途を制肘せんとする、其四圍の勢力を牽制するに足るものありて、愈よ昨日を以て、公が最後の決心を、天下に公表せしむるに至りたり。閥族が其金城鐵壁と恃む、官僚圏内に立籠りつゝある以上は、之を退治する固より至難なり。然れば閥族を打破せんと欲せば、先づ彼等を其鐵壁より誘き出すにあり。世の閥族打破を唱ふる者の、思の玆に至らざりしは、厭ふべき政局を持續し來りたる所以なり。今や彼等は果して其鐵壁を出で、互に何等據るべき天險地物を有せざる、政界の一大平原に於て、其雌雄を決せんとするに至れり、是れ實に、憲法政治の一大進歩にして、之に依りて、所謂大正維新の業は半ば遂せられたりと見るを得べし。此戰や、閥族に取りては、不利不便たるゝ論なし。然りながら力法度、腕次第の赤裸々の合戰なり。若し政黨にして弱かりせば、或は閥族の勝利に歸せん。然れど其勝利や、既に閥族の勝利にあらずして、政黨主義の勝利なり、立憲主義の大勝利なり。勝てば固より勝利なり、敗くるも亦勝利なり。憲政擁護、閥族打破論者は、大正維新の伏見鳥羽の戰は、尙ほ今後に屬すると云ふも、余輩は伏見鳥羽の戰は、既に凱歌を以て終を告げたりと信ず、此點に於て、國民は憲法擁護閥族打破論者に對し、感謝の責任を有す。

▲日出後の提灯は須らく撤すべし

桂公が既に立憲的陣容を整へて、堂々陣頭に起ちし以上は、之に對す

ろ各黨各派も亦、立憲戰陣を張り、立憲政治の公道に於て、公明正大なる優勝劣敗を期せざるべからず。然るに現在黨界の分野が、前記の如く主義主張に依りて色別せられず、各黨各派の分子たる者が、或は歴史に捉はれ、或は感情に支配されて、其所信に依りて其去就を定むるの、決心と勇氣を缺き、獨り自からが動きの附かざるのみならず、集合體其者をして、亦右にも左にも、動きの取れざるの狀態にあらしむるに於ては兩軍の陣容互角の勢を缺くが爲め、桂公をして戰はずして勝を制せしむるにあらざれば、公をして再び其鐵壁に逆戻りせしむるに至るべし。然れば桂公が既に其決心を示せし以上は、玆に政界の日和見連中をして、自由に其雨宿や軒端を見捨てゝ、各欲する所の家庭に入らしむるにあり、戰陣に就かしむるにあり。即ち政友會中桂公に通ずる者あらば、須らく新政黨に就かしむべし、國民黨中政友會に意ある者あらば、速かに政友會に趨らしむべし。同志會も中央派も、亦其に其分子をして、各其欲する所に走らしむべし。此分解作用にして充分に、且つ最も自然に行はれざるに於ては、政界の革新的政戰は得て望むべからず。然れば憲政擁護閥族打破論者にして、眞に憲法政治の進歩發達に心ありせば、今や此分解作用をして、充分に且つ自然ならしむるに其力を効してこそ、始めて憲法政治の進步發展を望まるれ。尙ほ思の玆に到らずして、依然として舊感情に捉はれ、舊題目を株守するに於ては、群疑を排して所信に殉ずるの、決心と勇氣に乏しき今の黨員は、又もや其聲に惑ひて、心ならずも假りの宿に蟄居して、果ては其身と其居をして、共に動きの取れざるに至らしむべし。憲政擁護閥族打破の聲には、或は常平を失して、識者の首肯を得難きものもありしならん、然れど眠りを醒ますの聲は、急聲疾呼ならざるを得ず。警鐘は自づから亂打せられざるを得ず。余輩は此點に於て、既往に於ける彼等の聲の全部を是認す。然れど眠り醒めての急聲

疾呼や、火鑽よりての警鐘の亂打は、日出てゝ後の提灯と共に、聊か時代後れの譏は免がれざるべし。（一月廿一日正午議會停會の光景を見て之を記す）

△桂黨と非桂黨との對立

東京朝日新聞政治經濟部長　松山忠次郎

どうも今日の模様では政友會と桂内閣との衝突は避けられないと思ふ。政友會の方でも後へ引く譯に行かぬだらうし、引けばそれに服從しない分子が出て來てどうしても分裂を免れない。政友會が分裂を賭してまで妥協する譯はないから態度強硬に出るだらうと思ふ。さうすれば決議案を出すか上奏案を出すか。どつちかを出して不信任の意志を發表するだらうと思ふ。桂内閣は豫算案で爭ひたいんであるが、政友會の方ではそれよりも根本なる憲法問題で爭ふだらうと思ふ。

處が政友會が決議案を取るか上奏案を取るか、之が差當つての問題である。今日の所ではどつちを取るか分らないが、不信任の意志を發表するのは決議案の方が穩當だと思ふ。之は桂内閣を庇護する爲めに言ふんぢやないが其方が政友會が常に口癖にいふ立憲的である。政友會は元老が度々上奏をして累を皇室に及ぼすことを非難した。處が今議會が同じく上奏案を提出するといふ事は皇室に對しても畏れ多い事だと思ふ。いふまでもなく今の　天皇陛下は御踐祚後日が淺くて政治の事に餘り慣れられないのである。然るに元老は元老で上奏し議會は議會で上奏して皇室を政爭の渦中に捲き込むといふ事はどうも穩當でないと思ふ。政友會の平素唱ふる立憲的行動に反するものだと思ふ。元來相手が皇室でないのである。桂内閣であるのである。桂内閣に對して不信任の意志を發表すればよいのである。英國でも同じやうな事は度々あつたが、議會と皇室と意見を異にした場合には上奏もしたし、もつと甚しい極端な手段を取つた事もある。然し議會が政府と爭ふ場合には政府に喰つて掛るに止るのである、政府を信任しないと決議すればそれでよいのである。人或はいはん、決議の効力少くして上奏の方が有効であると。之は間違である。不信任の意志が强ければ効力は上奏案でも決議案でも違ひないのである。尤も桂内閣は衆議院が不信任の決議をしても知らぬ振をして默過して了ふかも知れない。若しさういふ横着な態度を取れば衆議院の方では桂内閣の提出する議案を悉く否決すればよいのである。信任しない政府の出す議案なれば否決するが當り前である。豫算は無論の事、法律案全部否決する。さうすれば桂内閣は否でも應でも議會を解散しなくてはならぬ。どうしても喧嘩の相手にならなくてはならぬ。さうして解散になれば上奏案を可決したと同じ事である。決議案は上奏案程の効力なしといふのは間違である、効力は同じ事である。そして立憲的である。私は政友會に決議案を取ることを勸める。今の内閣が非立憲的行動をした事は政友會と同感であつて之に對して信任しないのは政友會と同じ事である。從つて不信任決議が政友會の取るべき最上策だと思ふ。

いよ／＼議會が强硬だとすれば、桂内閣は之を解散するの外ないであらう。解散の後に桂がどういふ態度を取るか、之は我々傍觀者の頗る興味を以て見る所である。桂は或は解散後に新政黨を組織して議會に根據を有たうとするか知らないが、思ふに桂公は今日政治の正面に立つた事を非常に後悔して居るに違ひない。昨年八月宮中に入つて未だ數ケ月ならざるに再び政治の表面に立つことは桂公として非常の間違であつたのである。些か世人を愚にしたものであつて、輿論の沸騰するは止むを得

ない、處で桂公には自惚があつたのである。已れが出れば政友會の反對は丸く纏めて見せるといふ自惚があつたいである。處が事實さうは行かぬ。そこで桂は成程少し出やうが早過ぎたと後悔して居るに違ひない。實際もう四五年も宮中に大人しく引込んでゐて後に出る方が得策であつた。處が衆議院の議員にとつても解散は頗る苦痛である。總選擧毎に一萬圓二萬圓乃至三萬圓も金を使つて、そしてヤット代議士に出れば解散を喰ふといふ事は餘程苦痛に違ひない。そこで桂は此弱點に乘じて政黨を旨く操縱する積であるに違ひない。そこで解散の後には更らに新政黨を作つて桂自身一方の大將となつて戰線にあらはれるだらうと思ふ。さうすると之に從ふ者も必ず少くない。そして又從來の行掛や主張や感情等に於てどうしても桂と相容れないものもあるに違ひない。それ等は反對に立ち、さうして政黨が改良さるゝであらうと思ふ。さうなれば是に於て初めて日本の政界は落着く所に落着くのである。そして其爭も堂々たる政黨の爭となるのである。吾人は一日も早くさういふ事になるのを希望する。(一月十八日)

△政黨政治の段楷

報知新聞主筆　須崎默堂

今度の閥族打破運動といふものは、兎に角現在の政界を一變させる有力な原動力になるだらうと思ふ。それがどういふ風に轉回するかといへば勿論政友會の態度が一つの樞杆になるだらうと思ふ。政友會の腰が强くつて、不信任案でも出すといふ事になれば議會は直ぐに解散さるゝであらうから、さうすると、それと同時に、或は少し日が經つてから、桂が新政黨組織の計畫を發表するだらうと思ふ。或は計畫を發表せずに總選擧の間に其手心を用ひて總選擧の後に決斷の運びになるかも知れない。それ等の事は今よく分らんけれども兎に角桂が政黨を作るといふ氣運には向つて來ると思ふ。さうなると兎に角總選擧は桂黨と對民黨聯合の形になるかも知れない。然しながら其民黨聯合といふものは決して鞏固なものではない。其中で大分桂の新政黨に心を寄せて行くものがあるだらうと思ふ。それで結局の勝敗がどういふ風になるか勿論豫想することが出來ぬのであるが、さうなるといふと詰り大體は桂黨と對政友會といふやうな黨派上の爭になつて來て、之は確かに政界の進歩となるだらうと思ふ。

之に反して政友會の腰が弱くて不信任案を出すことが出來ぬとすれば、國民黨は出し拔いて不信任案を出すか出さぬか知らぬが、今迄の輿論を獨占して、其輿論を政友會攻擊に向けて行くことになるだらう。さうすると政友會は恰度今の閥族の身代りになるので、政友會は非常の苦境に立たなくてはならぬ、さうして其結果國民黨と桂黨と聯合するや否や分らぬが、兎に角國民黨の大分が桂黨の一部を作るは疑ない點であらう。之が政友會の態度によつて將來に生ずべき二大變化である。政友會が强ければ民黨聯合で桂黨に對する形となり、弱ければ政友會が國民の包圍攻擊を受ける形勢になるだらう。何れにしても政友會は非常に苦しい位置に立つ譯て、若し議會が解散になれば一部分を取られて桂黨になり、弱ければ世論の攻擊を受ける。それ故に閥族打破運動を起したのは政友會の得策であつたかどうか疑はしい。

けれど大體からいへば、どちらにしても政黨政治の段楷になることは疑ない。からして成丈け閥族打破の運動が强盛になつて、どうしても桂をして政黨を作らなくてはならぬといふ境遇に陷らしむるのを希望する

のである。（一月十八日）

△桂公に退隱を勸む

萬朝報社長　黑岩周六

今回の政治運動について私の意見をいふて見ると、閥族打破、憲政擁護といふ事は言ふまでもない事柄であつて、已に卅議會を重ねた今になつて、尚斯る問題があるのは、民間政治家の恥辱であるともいひたいが實は國家の恥辱であるかも知れない。今迄此二大事業の目的が達しなかつた所以は今更ら措いて問はないが、今に至て特に此問題が勃發した如き有様のあるのは、第一は閥族が末路に迫つて前途の光明が少くなつたについて、陸軍に籠城する計畫を實行せんとしたのが原因である。之は新聞紙などで何人も知る通りであるが、第二の原因は之よりも注意すべきである。それは桂公が人心に厭きられたのである。

本來桂公はなか〱の遣手であつて、難局を料理することはその得意である。此點からいへば、今の時局に必ずしも不適當な宰相とはいはれない。けれども宰相の資格の中には德望が重要なる地位を占むるものと思ふ。德望即ち人民の歡迎である。此一資格の缺けた以上は他に如何なる長所があつても適任とはいはれぬ。殊に今の立憲の世に於ては此德望が最も大切である故、若し此點に於て缺けた政治家ならば退いて人氣の恢復する時を俟つ外はない。桂公は自ら此事を知つてゐるかどうか。甚だ覺束ないと思ふ。

序ながら桂公の人となりを見るのに、彼の人は何事をか爲さずにはゐられぬ人である。角力でいへば恰度手取りのやうなもので、此手が行かねば彼手。彼手が行かねば又次の手と、何か爲なして人の歡心を得る。之が長所である。所が今は消極的の止むを得ざる時代となつて、手取りよりも寧ろ德望を以てすべき時である。お氣の毒ながら桂公は出る幕を間違ひたのである。此後積極的の時代が來ることは無論であるから、若しも桂公に於て自己の政治的壽命を自愛するならば、此度は速かに退隱して、自己の持ち役たる積極の幕の明く時を待つがよからう。即ち時代と自己の性格との喰違ひに心附ぬのは公の爲めに甚だ惜む所である。

此喰違ひがある以上は或は議會を解散するとか或は新政黨を作るとか、あらん限りの巧智を弄して見た所で、少しも現内閣の前途を滑かにするに足らず、益々勉めて益々不人氣を招ぐ位が落ちであらうと思ふ。（一月十九日）

△今一層剛健な偉大なモットーを欲す

讀賣新聞主筆　笹川潔

大正の新政は、明治の維新に恰當すべきものだといふところから、世間では此際幕府を倒したやうに、藩閥を根柢から覆へさうと敦圉く者があつて、憲政擁護とか、閥族打破とかいふ題目が生れ出たものと見える。

固より憲法國に棲息する以上、憲政を無視する譯にゆかぬ筈であるから、誰しも憲政の擁護に異存の有らう道理がない。而して閥族が獨り政權を壟斷するやうなことが有つては、憲法政治も型無しと評する外ない

次第であるから、之れを打破することに付きても、勿論異議の起らう道理がない。

然かし其の謂ふ所の憲政なるものは、如何なる意味のものであるか、又た其の閥族なるものは何を指すのであるか、少しく立ち入りて詮索をすると判かつてをるやうで、案外判らなくなつて來る。

今日、日本帝國の憲法には、學者の間にすら必ずしも解釋が一致してをらない、美濃部君と上杉君と既に鎬を削つてをる、今一つ遡ると、故穗積博士と一木博士との間にも、衝突があつた。つい先達手或る處で福澤先生の遺稿といふものを見たが、極端な欽定憲法論で、實に驚き入つた官僚主義の議論が書いてある、これで見ると先生は晩年になつて、非常な政黨嫌ひになつたものと見え、其内には政黨内閣の怪しからぬ事、政黨其者の日本に不必要な事抔が、思切つて書き立てゝある、到底今日の時事新報の論説や、貴族院の鎌田君の思想などゝは、雲淵も啻ならずといふ有樣である。

斯んな風であるから、一口に憲政といつて見たところで、鳥渡解釋に苦む、若し尾崎君の憲政なるものを具體的に示すことが出來たら、案外西園寺侯などは、澁面を作つて、其れでは困るといふやうな羽目にならぬとも限るまい。

飜つて又た閥族といふ文字に付ても、色々の疑問が起る、尤もこれは其の唱へる方面の資格に依る話だといふことを斷つて置く。例へば政友會が閥族の打破を叫ぶものとすると、其れは單に長閥を指すのであるかといふ疑問が起る、何となれば政友會内閣は現に薩派の庇護に浴したことが蔽ふべからざる事實であるからだ、先づ松田正久といふ人は若い時分に薩摩に遁れて、久しく造士館長も務めた縁故から、酷く薩人贔負になつて了まつた、又た原敬といふ人は、故中井弘氏と姻戚の關係があつて、其んな縁故で薩人の氣受が惡るくない、其樣な次第で、政友會の背後には始終薩閥といふ黒法師が絡まつて步るく、だから海軍は急務でも陸軍は不急だといふことになる、これでは折角の閥族打破も甚だ偏頗なもので、第三者たる國民はウッカリ其口車に乘て、騷ぎ立てる譯にゆかなくなる。

併かし閥族の專恣といふことは、決して跡形のない問題ではない、だから公平に之れを打破せんとする議論に對して彼是れ爭ふ餘地はないものと思ふ、而して其れには何よりも先づ文官任用令を改正することが急務だと信ずる、然るに政友會が内閣を造つてをる時分に、一向此改正を企てなかつたといふことは、實に迂濶も極つた話で、我輩は何とも挨拶の仕樣がないのである。

一體我輩の見る所では、明治維新の際に於ける題目は、積極的で雄大、で元氣横溢したものであつたが、若し大正新政の劈頭に於て第二の維新といふ位の意氣込があるなら、憲政擁護閥族打破の題目では、餘りに消極的で、物足らない、何か今少しく剛健な、偉大なモットーがなくては引立つまいと信ずる、我々の眼前には支那問題が横つてをる、近く巴奈馬の運河も開鑿せらるゝ結果として、國際政局の上に大なる變化が豫想せられる、而して一方内地には社會問題生活問題が刻々として險惡の傾向を呈してをる、之等に對する國民の考といふものが叫ばれて來なくては面白くない、今日は決して憲政擁護閥族打破位の題目を以て甘んずべき時代ではないと思ふ。

△憲政進展の歩武

東京日日新聞記者　大原里靖

一　西園寺內閣の擲彈

閥族官僚の陰謀秘策は、陸軍二個師團增設案となりて現はれ、終に上原前陸相の辭表捧呈となり、西園寺內閣を破壞し了れり。然れども其際に於て西園寺侯は閥僚と共に擲彈を閥族官僚の牙營に投じて、以て彼等に酬ゆる所ありたり。擲彈は輿論となりて爆發し、閥僚の專恣橫暴に對する批難攻擊の聲は、天籟の如く全國に響き渡りて、憲政擁護の叫ゝなり、其勢は恰も燎原の火の如く、必ず閥僚政治を打破し盡さずんば已まざらむとす。其斯の如きを致せる、西園寺內閣の崩壞に同情の表すべきありたるによると雖も、畢竟閥族官僚が、餘りに其勢力を濫用して我意を擇へる結果に外ならず。即ち彼等は時勢の變移を知らず、又國民の智識如何を誤解し、閥族萬歲の夢終に覺めずして、無謀の妄擧、却て倒壞の端を開きしのみ。西園寺內閣が、陸軍師團增設問題により、主義に殉して辭職せるに對し、閥族は頻りに泣言を並べ、西園寺內閣は無能にして自ら倒れしなり、其陸軍問題を云云するは、末路を粉飾せる政略のみと。吾人は言はむ、西園寺內閣の陸軍問題を云云するの政略なりや否やは問ふを要せず、現に之によりて閥族の專恣橫暴曝露せられ、輿論の奮起となり、國民の總攻擊となれる順序より考ふれば、西園寺內閣の崩壞は、假令玉碎の讚辭を呈するに足らずとするも、我憲法政治に一階段を進むるの原因となれるや疑なく、隨て吾人は其主義に殉せる總辭職が、閥族官僚に對する痛打たりしを思はずんばあらず。

二　元老無能の表明

元老何ぞ無能なる。後繼內閣組織者を求めて、會議を開くこと十餘回に及び、終に目前なる桂公を推薦するに至りて、椅子の持ち廻り漸く止まる。其間に於ける彼等の行動は、老耄を以て許するの外なきも、單り閥族擁護、相互爭鬪の秘策に至りては、寸時も其胸中に存在せざることなく、爲めに長きに至りて、至尊の宸襟を安んじ奉る能はざりしは、其罪斷して寬恕すべからず。元老は自ら忠誠無二を稱ふも、而も老獪にして、陰險、偏狹にして頑迷、其動くや憲法政治の本義によらず、出づべからざるに出て、干與すべからざるに干與す、憲政の爲め厄介千萬のものと云はざるべからず。而もよく速かに政局收拾の一事を果さば、尙ほ至尊に奉答するの體を得たりとせんも、今回の政變に關する諸元老の奔走は、全く何等の奏功を見ざりしとするの不可なきを如何せんや。然れども元老の無能が、爾く明白に立證せられ、國民の信望皆無となれる上は、彼等は最早唯高位榮爵に居り、優渥なる恩寵を荷ふて、宮中に最上の席次を占むる老人たるのみ。元老は元來無責任の位置にあり、猥りに政治に容喙し、政府當局者に掣肘を加ふるが如きことあるべからず。然るに彼等元老は恩寵の厚きに狎れて、往々にして政治を左右し、憲政の濟美を阻碍せり。今や自巳の無能を立證し、將來に於て政治に干與するの資格なきを表明せり。これ元老政治の滅亡なるなからむや。元老政治の滅亡が、即ち他面憲法政治の進步なるを知らば、吾人は元老無能の表明を喜ぶと共に、殘骸猶ほ老猾の策を弄し、以て君側に蟠居せんとするあらば、大に之が打破を主張せざるを得ず。蓋し、元老は兎に角閥族の首腦者なればなり。

三　桂公の非立憲的態度

桂公の出現に至りては、吾人實に言ふに忍びざるものあり。其事々に聖勅の降下を仰げるは、即ち政爭の累を　皇室に及ぼせるものにして、憲政國にありて、他に其類を見ざる所ならずや。桂公の宮中入りが公の本意にあらざりしや否やは、吾人の知るを要せざる所。唯將來一心に常侍輔弼の任に當らむと語れる、舌根未だ乾かざるに早く宮中脫出の機會を作らむとし、政變に當りて種々の術策を弄し、無能なる元老をして自己を推薦するの已むなきに至らしめたる形跡あるは、吾人決して之を看過する能はず。啻に是のみにあらず、公にして眞に時局の紛糾に鑑み、決然其收拾の任に當らむとせば、宮中より出現する、亦必ずしも不可なりとせず。何ぞ其際に於て　聖勅の降下を仰げりや。抑も其聖勅は何人の奏請に出でたるものなりや。出入に　聖勅を仰ぎ、以て其身邊を飾る、不遜も亦甚しからずや。此の如く非立憲的事態によりて宮中を出でたる桂公は、海軍大臣の留任に關して復　聖勅の降下を奏請せり。陸軍側は奇怪にも師團増設問題を提起せざるが如きも、若し其提起を見たらんには、桂公は或は更に　聖勅により之を鎭壓するの擧に出づるを思はしむるにあらずや。屢次　宸慮を煩はし奉るの恐懼に堪えざる次第なるに、かくては政治上の責任　皇室に及び、我憲政の根底を危殆ならしむるのみならず、金甌無缺の我國體に瑕瑾を生ぜしむるの虞ありとすべく、忠良なる國民の痛憤已み難き所ならずんばあらず。宜なる哉其非立憲的行動に對して輿論沸騰し、憲政擁護、桂內閣不信任の叫聲、之を聞く所に聞かざるなく、民黨の全軍、陣容を整へて一擧に政府に肉薄せんとすることや。桂公の非立憲的態度と、其野心を包藏せる陰策とは、將に民黨の爲めに致命傷を受けむとす。新政黨の組織によりて一條の血路を求めんとするも、輿論何時かよく之を許せん。桂公も今は死物狂たらざるを得ず、而もこれ公の自ら招ける所なるのみ。

四　政國兩黨の態度

閥族打破、憲政擁護の聲、一度天籟の如く帝都の中央に起るや、四方響應、國論忽ちにして一致せり。然るか若き、國民久しく閥族の横暴を憤り、官僚の專恣を慨せしによるものにして、適ま非立憲的行爲の甚しきに對し、奮然として起れるものに外ならず。此に於てか政黨は其態度を決せざるべからず。政友會幹部は、當初より强硬の意見を持し、大勢の馴致に力めたるが如きも、而も表面極めて不得要領を粧ひ、靜かに黨員の硬化し行くを期待しつゝありたるが如し。果然輿論の奮興は軟骨議員を戰慄せしめ、彼等をして解散敢て辭せずと叫はしむるに至れり。議員は前衞なり。國民背後にあり、劍を拔きて推し來る、退かば唯國民の劍に貫かるゝあるのみ。進め進めの喊聲は、怒濤の寄せ來るか如く、又猛風の吹き來るに似て、何人も之が爲めに凛然又惕然、終に總攻擊の段取となりし時、西園寺總裁は軍扇をさらりと揮れり、幹部は强硬の態度を表示せり。此に於てか爾來計畫せられし政友國民兩黨の聯合も亦堅きを持し、愈々突擊を開始せんとする廿一日、議會は停會を命ぜられ、風雲の變、二週日後に延期せられたり。然れども政友會刻下の狀態は、結束案外に良好なるが如きを以て、桂公の新政黨組織せらるゝも、這回の政爭に於て、早くも敵に降參する脫技は、吾人其甚た多からざるを信ぜんと欲す。政友會の態度現在の如くんば、結局桂內閣不信任の彈劾案提出せらるゝ曉、議會の解散は免れざるべく、來るべき總選擧は、即ち立憲と非立憲と、政黨と閥族との勝敗を決すべき第二の決戰なり。國民黨に至りては、其主義主張に見れば、最硬派として民黨の急先鋒ならざるべか

らざる筈なるに、黨中に異分子ありたる爲め、兎角紛擾を免れざりしが果然二十一日に至り、犬養氏を除くの外、領袖を以て目すべき人々悉く脫黨せり、更に之に隨從して脫黨するものあらむ。然れども吾人の見る所を以てすれば、かく國民黨を脫して桂公の新政黨に走るものは、從來同黨中の官僚系を以て目せられし連中に過ぎざるべく、如何に多く之を見積るも三十名を算するのみ。三十名を減じて六十名となるも、健全分子のみの國民黨は、威力に於て縮少せりとすべからず。又假りに官僚機關紙の豫想する如く、半數の新政黨に走るあるも、吾人は必ずしも國民黨の爲めに悲しまず。堅固なる健全分子の集團は、以て閥族に當るの爆彈たるに足らざらんや。况んや民黨の聯盟堅く、其合同の企圖せられ得べきなるに於てをや。要するに來る五日の議會開會迄に、桂公如何に其魔力を揮ふも、終に新政黨をして民黨以上の多數を制せしむる能はざるの明白なるに於て、議會は解散の外あるべからず。解散後の政界は即ち如何。

五　停會と新政黨組織

今回の議會停會は、停會とすべき何等の理由あらず。政府は豫算案の印刷出來上らず、其政綱を發表するに由なきを口實とすと雖も、此の如きは三尺の童子をも欺くべからず。政綱を發表するに、何ぞ印刷せる豫算案あるを要せん。停會は又議會の反省を促す爲めに之を行ふ、而も今反省を促すべき何ものゝ存する歟。停會の理由なきに停會を奏請す、これ豈非立憲的行動を繰返せるものにあらずや。蓋、桂公は此停會期間を利用し、其所謂新政黨の組織をなさんとするのみ。桂公が新政黨を組織する爲めに、其政治上の權能を揮ひ、故に理由なき議會の停會を決行せりとせば、これ實に恕すべからざる橫暴の擧にして、國民は益々其不法を鳴さざるべからず。抑も此の如き非立憲的行爲の下に生れ出でんとする新政黨の將來、亦知るべきにあらずや。更に其黨員糾致の手段に想到せば、吾人は政界の爲めに危惧の念に禁へず。桂公は主義政綱を以て、天下の同志に向はむと云ふも、公や由來辭令に巧にして實行之に伴はず且つ目下の時局に對して、急遽政黨を組織せんとするの動機を考ふれば公は唯政權と金力とにより政界を攪亂し、依つて以て有象無象を狩り集め、相當の頭數を得て以て民黨の氣焔を挫き、あはよくば無事に難局を切り拔けむとすべきのみ。政權の濫用と、黃金の撒布とが、如何に政界を腐敗溷濁ならしむるかは、吾人の言を待たざる所。大正新政の初に當り、此の如き惡辣手段を以て新政黨を急造し、閥族撲滅、憲政擁護を旗幟とする民黨に當らむとするゝ、固より其非望を遂し得べきにあらず。而も斯る手段の行はれ、政界爲めに動搖する傾あり、政界腐敗の虞なきにあらざるは、吾人の憤慨に堪えざる所にして、其立憲治下にあるまじき行爲により、合すべからざる異分子を狩り集め、之を閥族の擁護者とし、之を桂公の走狗となさんとするの陋策に對しては、飽く迄之が打破を圖らざるべからざるを信ず。桂公は已を得ずして政黨を組織せんとするなり。故に其已を得るに至りて、再び政黨本位を放棄し、閥僚本位に復歸するや疑を容れず。吾人は桂公の新政黨を以て、憲政本位と認むる能はず、強て之を云へば、中央俱樂部の形體を大にせるものあらむのみ。或は之を以て政界の縱斷なりと說くも、吾人は未た爾く信ずる能はず。何となれば、組織の動機明白にして、時機の非なるに關らず、強て之を決行せんとするの、即ち唯御用議員を糾致するの術策たるに過ぎざればなり。但し、桂公が已を得ざる迄も、自ら陣頭に立ちて政黨を統率せんとするは、一面政界の爲めに慶とするに足るものあり、政黨縱斷の端を開く點に於て吾人之を喜ぶ。此の如くならしめたるは、民黨の力にして、

恰も岩窟中より妖魔を燻し出したる觀あり。燻し出されたる妖魔は、白晝赤裸々の戰鬪に於て、よく其魔力を逞しくするを得るや否や。

六　議會の解散

桂公如何に其魔力を揮ふも、新政黨は到底政國兩黨の聯合軍に當るに足らざるべし。果して然らば一月廿一日より廿三日にかけて行はるべかりし決戰は、二月五日より七日頃迄延期せられたりと云ふの外、終に民黨聯合軍の優勢を以て行はるべし。次で來るべきは解散のみ。桂公にして民意を失へるを自覺し、輿論の重んずべきを知りて、眞に立憲的態度に出づれば、內閣明渡しの外あるべからずと雖も、吾人は桂公が此公明なる行動に出づるを豫想する能はず。但し吾人は一言せざるべからざるものあり。解散は輿望の如何を問はむとするなり、國民の信任如何を問はむとするなり。輿望なり、信任皆無の明白なるに於て、猶解散を決行するは、是亦非立憲的の甚しきものなり。桂公既に新政黨の組織をなす卽ち政府を政黨の上に置かんとするものなるべく、換言すれば、國民の輿望如何によりて進退するを期するならむ。此點は憲政の一進步として吾人の大に喜ぶ所。果して然らば、輿望なく信任なきの明白なる場合、解散迄もなく、直ちに辭職を闕下に伏奏すべきにあらずや。此時に於て至尊の御信任を云々するは、これ即ち非立憲の逆戻りなるのみ。然れども吾人は桂公の必ず解散の擧に出づべきを豫測す。既に新政黨を統率せるに對し、解散已むべからずとせば、解散後の桂公の政治運動は、特に注意に値すべく、公は內閣總理大臣の位置を以て、內務大臣大浦子、遞信大臣兼鐵道院總裁拓殖局總裁後藤新平男を左右の翼とし、果して如何なる行動を試み、以て解散後の總選擧に臨むべきか。政友會內閣の下に總選擧の行はれたると、何等の異なる所なかるべしと云へば其迄なりと雖も、少數なる新政黨を擴大せんとせば、而も不人氣の極に達せる場合に於て働かせんとせば、平汎なる手段を以て甘んずべきにあらず。然れども吾人は來るべき總選擧に於て、民黨依然多數を制すべきを疑はず。若し不幸にして民黨凋落せんか、これ國民の政治的腐敗なり、果して然らば、閥族未だ掃蕩すべからず、憲政未だ完美を望むべからず、憂國者は更に退きて國民の政治的敎育に從事せらるべからず。

七　桂內閣の運命

來るべき總選擧に於て、民黨再び優勢ならむか、執拗なる桂首相も、民黨の前に屈伏せざるを得ざるべし。或は第二回の解散を云ふものあるも、吾人は俄く信ずる能はず。何となれば大勢の未だ推移せざるに、幾度總選擧を行ふも、其結果知るべくして、徒らに天下を騷すに過ぎざればなり。桂首相頑強なりと雖も、目先の見えぬ愚物にあらず。吾人は總選擧の結果、民黨勝利、桂內閣の瓦解を豫想し、且つ切に然らむことを冀望するものあり。前途混沌、容易に判斷を許さずと雖も、國民の奮興一時的にあらず、輿論の沸騰泡沫的ならず、而して民黨の聯關渝るなくば、不信任なる內閣を顚覆し、横暴なる閥族官僚の根據を打壞し得る、決して遠きにあらざるべし。果して然らば亦、快ならずや。紛擾は畢竟一齊閥族官僚をして其勢力を喪失せしめつゝあり、卽ちこれ憲政進展の步武を進むるものにあらずや。（一月廿一日夜稿）



女八人

松崎天民

盛を過ぎた藝妓を書くこともあらう、中年增の娼妓を見ることもあらう、美しいお妾を描くこともあらう。時には老孃の女教師とも語らうし、華やかな女將と飲むこともあらう。或は悽慘な狂婦人に泣いたり、白服寒む氣な看護婦を哀れんだり、齡若い女優に微笑むこともあらう。明治三十六年から大正元年まで、大阪、京都、東京にて、十年の間に接觸した八人の女に就いて、其の個々の上に潛む運命を讀むのが、「女八人」の使命である。例に依つて、新聞記者生活中の副產物、雜報でも無く、小說でも無く、事實と空想の間を辿つて觀た人生探訪の一報告書たるに過ぎない。題して其の一を「板新道の一隅」と云ひ、其の二を「名代部屋の客」と云ひ、其の三を「最後の牛肉鍋」と云ひ、其の四を「紫の風呂敷包」と云ひ、其の五を「稻舟の四疊半」と云ひ、其の六を「十萬圓の奧樣」と云ひ、其の七を「廊下の曲り角」と云ひ、其の八を「荒物屋の二階」と云ふ。本號より每月の「中央公論」誌上に、連載する豫定であるが、身世事繁し、時に斷續する事あるかも知れぬ。これは前以て、編輯者と讀者各位とに、平に、お斷り申上げて置く。―一、一〇夜―

一、板新道の一隅

「其の女に就いては、種々の物語がある。」

と云つて、理學士は、靑いコップを一呼吸に飮み乾した。

「其の男に就いても、樣々の物語がある。」

と云つて、新聞記者は赤いコップを傾けた。

此の物語は、其の女と其の男との間に起つた、悲惨な戀のページに終始して居る。理學士が、其の女に關係があり、新聞記者が其の男の最期に關係があるだけに、二人は此の物語を、非常の興味を以て、語りもし聽きもした。

時は松の内の六日、所は京橋のカフエー××にて、小說家××××の渡歐送別の小宴があつた夜、十時から十二時まで――。

男にも女にも關係の無い連中が三人、正宗やら、ピールやら、ウヰスキーやら、ベルモットやらを傾けながら、熱心に聞いて居た。畫家と、外交官と、俳優と。

理學士の談話が、一段落を告げた時、新聞記者は突然頓興な聲をして、

「其の女、其の女、其の女に違ひ無い。每日、出社の途中、土橋を渡つた所の、江木寫眞館の傍で逢ふのは……。ウン、其の何とかいふ藝妓に違ひ無い。」

と云つて、次の樣な長い物語をした。

私の住て居る所――青山南町五丁目から、京橋の新聞社へ通勤するには、築地兩國行に乘つて、三宅坂から日比谷を經て、數奇屋橋で降りるのが、時間も速いし乘換も無くて一番宜い。然し、花の咲いた頃か、暑い盛の時分なら、赤坂見附から日比谷までの線路も面白いが、寒い時には淋しくて陰氣で、何う云ふものか彼の線が厭になる。私は乘換一度の手數と、時間の少し位遲いのは辛抱して、この頃では赤坂見附で乘換の外濠線で以て、山下町で下車するか、土橋で降りるかして、テク〳〵社まで步いて行くのを例にして居る。

舊外濠線の赤坂見附から土橋までは、御承知の通、賑やかで陽氣で好い。山王下や溜池からは、折々取すまアした藝妓の群が乘るし、土橋附近には、一帶に脂粉の香が漲つて居る。お互に電車に乘つた時、先づ車內を見廻して、然る可き美人が居なかつた時、或は野郞

ばかりてあつた時、少からず淋しさを感ずる樣に、人は折々妙な氣分になつて、淋しい所よりも賑やかな場所、蔭よりも日なたへ、暗い所よりも明るい所へと、好んて傾倒することがある。私の此の電車癖も、黑色よりは赤色に依つて、强い刺戟を受け樣とする一種の心理狀態に過ぎない。

午前十一時前後、土橋停留場の下車が幾日か續いた或る日のこと、私は橋の北詰て、美しく着飾つた一人の女に逢つた。誰が眼にもそれと分る藝妓の風姿をして居るが、勿論何家の何と云ふ妓か、別に氣にも止めなかつたが、それから三四日の間は毎日、土橋の附近て其の女に逢つた。或る時は意氣な銀杏返しに、黑襟の附いた縞物の綿着に、鐵色らしい縮緬の羽織を着て居る事があるし、或る時は大ハイカラに結つて、飛白の羽織に稽古屋通ひといふ風もある。背は高くないが色白の肥り肉て、妙に男の氣を引付ける樣な、嬌のある相貌が、不思議に私の記憶に殘つた。

男ても女ても、同じ時同じ場所て、相逢ふことと度重なれば、緣も因もない路傍の人ても、終には御辭儀の一つもしたり、互に微笑み合ふ樣になるものだが、其の女と私とは幾度逢つても口一つ利かねば、辭儀一つしたこともなく、唯チラとお互の顏を偸み見る位が關の山てあつた。何處の何子か、歳は幾つか、自前か分けか抱へか、所謂不見轉か何うか、そんな事も分らう筈が無くて過して居る內、或る日土橋際て、空車を曳いて通る二人連の車夫が、

「新橋三名人の一人だよ、彼奴が……」

「あれかい、よもぎ家の雪松つてえのは……」

と話し合ふのを聞いて、初めて其の女の素性が判つた。Y君(理學士)は、小若だなんて、宜い加減の假名て話したが、何うてす、其の女は、板新道の一隅に、老て益々妖艶なる「よもぎ家の雪松」と云ふんてせう。

新聞記者は、一氣に斯う喋舌つて、赤葡萄酒の杯を乾した。毎日の樣に土橋て逢つた彼の藝妓が、理學士

Yに關係ある女の一人かと思ふと、新聞記者は何んだか今まで欺されて居た樣な、變な氣持になつたと云つて、
「おいY君、先づ自己の艶福を祝して、三鞭酒を拔き給へ。ねえ諸君一本で宜しい。」
と云つた。凡ての弄ぶべき女の中で、殆ど理想的と云つても然るべき程の資格を備へて居るといはるゝ雪松の前半生に就いて、理學士は智識ある傍觀者であつた。Yは、
「今は最う袖觸れ合ひもせぬ路傍の人だから、生憎に拔くべき三鞭酒の理由も無いが……。然し僕の觀た雪松、理學士Yの雪松觀を語らしめよ。ビールの御馳走位は、敢て辭する所に非ずです。」
「兎に角、謹聽する事にしやうか」
と畫家が云ふと、外交官も俳優も、
「あてられるのぢや、無いですか。」
と笑ひながら、それでも興あり氣に、「謹聽〳〵」と、捲莨の煙を吐く。

理學士Yは、三十二歳だと云ふけれど、二十七八位にしか見えない。顔にも、態度にも、言葉にも、未だ二十歳時代の若やかさと元氣とが殘つて居る。赤煉瓦で包まれた彼の淋しい大學の講堂で、星座が何うの彗星が何うのと、冷たい天文學に人と爲つたが、瘦せて背高く、濃い眉、漆黑の髮、白い皮膚、血走つた眼の常に濕つて居る所など、寧ろ文藝の壇上に、聲名を馳すべき類の人らしく見える。

Yは、伊太利中世の偉人、レオナルド、ダ、ヴヰンチを崇拜して居る。彼にヴヰンチが「智は愛ヲ生ず、智いよ〳〵詳しければ、愛いよ〳〵切なり」と云つた、其の言葉が非常に氣に入つたと云つて、酒でも飲んで、醉少しく廻る頃になると、常に此の語を口癖の樣に云つて居る。自分は感情家らしい天性を有つて居るのに反して、努めて情熱家らしく無い事を言ひ、戀も、生活も、處世も、事業も、凡てを智識の上に築かうとし

て居る。智識即科學、彼は「凡てのもの皆、智識の上に立たずんば、廢亡する時あるべし」とまで、獨語し斷言して、一杯のベルモット、一切のパンにも、智識の匂と科學の味とを嗅がうとして居る。

こんな思想上の傾向を有つて居る若い理學士の日記に、ローマンチックな戀物語が無いのは、當然の事である。傍觀しての美しい感じとか、接觸しての肉感的とかでなく、智識を中心として、戀を眺め、愛を論じて居る樣な男に、其の半生を彩るべき情話の一節が無いのは、敢て不思議とするに足らぬ。

「僕の智識を滿足させる樣な戀は、先づ當分の間、出來ッこ有りませんね。」

Yは大學に居る頃から、決して謹嚴方正の君子人ては無かつた。牛屋から鳥屋、鳥屋から料理屋、料理屋から待合と云ふ風に、彼の遊びは漸を追うて進んだ。大學を出てからは、下谷、赤坂、新橋の空氣にも觸れたが、彼の女に對するや、極めて傍觀的て、其の女を持扱ふ態度なども、バーやカフエーて飮食する位の程度に過ぎなかつた。相應の男振を備へて居ながら、帝劇に連れて行くべき情人の一人をも有つて居ないことを、彼は別に淋しいとも何とも思つて居ないらしい。

「Yさんは、何がお樂みにお遊びになるのてせう。」

と云つた料理屋の女中もあつた。

「Yさん程、分らない方は有りません。」

と云つた待合の女將もあつた。

「Y君には、女と云ふものが判らない。」

と云つた同窓の友人もあつた。

「彼奴は、冷酷なる婦人研究者だよ。」

と、果は友人仲間ても、取沙汰する樣になつた。

其の理學士Yに、異性の情味を敎えたのが、板新道に自前の一人住居、「こんなのを」と云へば、直ぐ「彼の妓が」と云はれる、よもぎ家の雪松てある。

理學士Yは、興奮した樣子て語り出した。

全く其の雪松てす。――け若などと云つたのは、餘

り取沙汰されては、本人に氣の毒だと思つて、一寸假名を使つた譯てす——。其のよもぎ家の雪松に就いては、小說よりも哀絕なる事實、婦人雜誌ならば初段の大標題か何かて、「戀に泣く名妓の半生」と謳はるべき、一場の物語があるのてす。新聞の讀物にしても、二段拔きか何かて、「え丶夕刊一錢、新橋藝妓の哀れなる戀物語が詳しく分る、え丶只今出ました夕刊一錢」位の價値ある記事になりませう。

私が初めて逢つたのは、去年の秋も薄ら寒くなつた頃、智識を手近の同朋町に求めて得ずとあつて、遠く築地の待合「寒梅」に遊んだ時てした。同行者は雜誌×××の記者て、諸君も知つて居る彼のK文學士と二人ぎり。お酌も二三人來た樣てしたが、菊正二十幾本を倒しての氣焰競べに、何れも吉ちやんや六代目の噂も得せず、人形の樣に默つて居ました。振の上手や咽喉の好いのが、今ても一流の藝妓ださうてすが、僕等現代に呼吸する新人の群に、滿足を與へる樣な妓は、其の夜も一人も發見する事が出來なかつた。去年以來、僕には不漁（しけ）が續いて居るのてす。

紋付やら縞やら友仙やらが歸つたのは、十一時を過ぐる頃てした。駒込曙町までは、自働車ても遠い秋の初夜、K君も僕も泊る事に極めたが、大分醉つて居たから察して下さい。

「こちらの方には、增奴さんが好いてせう。溫和しくて、娘々して居て、それは可愛いんてすよ。」

と、女將は最うK君の方を極めたが、僕のは容易に來る氣配だにせぬ。醉つては居たし、何だか斯う孤獨の感に打たれて居ましたので、

「誰ても好い。頗る振つたのをね。」

と云ふと、待合の女將は、「頗る振つた」のを何う云ふ意味に解したのか、

「まアY先生、貴君はひだり一方のお方とのみ存じて居ましたのに……。何時の間に何處てまア、ほんとにねえ、今時の方は、隅に置けないよ。」

と云つて、ニヤリと妙な笑ひ方をしたかと思ふと、直ぐ帳場の方へ電話を掛けに行つた樣子てした。

暫時經つと、女中のお園と云ふのが出て、

「雪松さん、直ぐに參ります。」

と云つたが、其の時僕は横になつて居たのです。

女中は頻りに、褞衣に着換へよと云つたけれど、僕は雪松が來て、午前一時過ぎに歸るまて、脊廣を着たきりて居ました。如何に無藝無能にして、唯、枕席にのみ侍するに依つて、漸く藝妓としての月日を送り得る女ても、お客の口から不見轉だと罵しられ、娼婦同樣に取扱はれたならば、決して心持も快く無いてあらうし、口惜くもあらうと思ふ。初めて呼ばれたお座敷へ行つて、初めてのお客樣に逢ふ時、娼妓の廻つて來るのを名代て待つて居る樣な態度をして居たら、彼等の多くは何う思ふてせう。僕は其の心持に同情してね、彼等を擧動て以て侮蔑するのは、氣の毒だと思つたものてすから、窮屈な洋服も脱がずに待つて居たのてす。

案の定、雪松は入つて來ると直ぐ、

「おや、貴君は實があるのねえ、未だ御洋服て……。そんな方、妾、賴母しいわ」

と云つて、懷中から香水の匂がするハンカチーフやら、時計やら紙入やらを投げ出して、

「あゝ苦しい、妾、醉つてるてせう」

と云つて、兩手を顏に當てた。

其の時、實に其の時てす。紙入を投げ出した時、カチャリと音して、七八個を繋いだ鍵の紐が、女の膝頭に落ちた。見れば左の腕には、素ばらしい金の腕環を篏めて居るし、左右の手にも、金剛石らしい光のある指環が二つ三つと、花模樣らしい高刻のある指環が二つ三つ、此の女の生命てもあるかの樣にかゞやいて居ました。

此の數個の「鍵」と「指環」とに、よもぎ家雪松の痛烈な戀物語があるのてす。

理學士はこゝまて語つて、ウキスキーを飲んだ。

「段々戲曲的色彩を帶びて來ましたね。」

と云つて、若い俳優はチキン物の皿を平げて居る。

「小説家的の觀察だ、理學士に似合はない。」

と云つて、外交官は未だビールのコップを放さぬ。新聞記者は、ドムを嘗めながら、

「藝妓雪松の涙、と二號で置いて、傍標題は、四號か何かて鍵と指環に表徴された半生の哀史、と二行に立てるかね。一寸、面白さうな話らしい。」

と云ふと、Y理學士は、突然立上つて、

「おう、さうだ、さうだ、M君に話したい事がある。えいと、今から足掛四年前の春三月か四月、有名な××子爵の令息て法學士の德三と云ふ人が、支那へ出發する前夜、自宅の二階て剃刀か短銃か何かて、自殺した事があると云ひますが、勿論、當時の新聞に出たてせうね。」

「新聞記者の一年間は、普通人の五年間位に相當する。從つて早く耄碌もするし、早く老人にもなる。足掛四年前と云へば、先づ新聞記者暦にして二十年前の出來事てすね。二十年前の事件を斯う突然訊ねられては、おいそれと容易に思ひ出せる譯のものては無いが、私は緣あつて其の事件に關係があるのてす。社の新聞ては私が探訪に行つて取つて來た材料を、私が鹽梅して書いたから、今てもチヤンと覺えて居る。探訪に苦心した反比例に要領を得なかつた事件の一つとして、私の探訪日記の「失敗」の部に屬すべき重要な出來事てす。それが、何うか仕たのてすか？」

新聞記者が斯う答へると、理學士は、

「關係が有るも無いも……。法學士××德三君は、實によもぎ家雪松の戀物語に於ける、一方の大立物なんてす。德ちやんは藤澤淺次郎が演れば、雪松は左樣……先づ顏なら體格なら、喜多村綠郎と云ふ所てせう。雪松が今日あるを得るは、亡き××法學士に負ふ所が深いためて、××法學士の自殺は、其の遠因も近因も、實に雪松の一顰一笑にあつたのてす。當時の新聞は自殺の原因を何う云ふ風に書いたてせうか。」

と云つて、興奮した眼をかゞやかした。

今まで聽く人てあつた新聞記者は、勢ひ話す人にならざるを得ぬ。Mが椅子の位置を正して、斯う正面を

切つて腰掛けると、
「やア〳〵、思ひ起せば四年の昔……と云ふ格ですね。高田張ですか、秋月張ですか。」
と、人の惡い俳優は、チヽチンなんかと、口三味線て囃し立てる。畫家は先刻から、スケッチブックへ、何事かを描いて居る。
新聞記者の話は、何だかソワ〳〵して居た。

明治四十三年四月二十七日は、暮れんとする春の空晴れて、冬服の徒歩ては汗が滲み出る程に、ぽかぽかと暖かであつた。私等は、春でも秋でも、こんな日を「探訪日和」と稱へて、用件の無を有にしてまても、能く當も無く飛び出したものである。
其の日は例に無い早出て、九時半頃編輯局へ上つて、市内の各新聞を瞥見して居ると、何處からか電話が掛つて來た。特設通信員か通信社てあつたか、大に狼狽した樣子て、
「麻布鳥居坂署管内に、自殺事件があります。昨日早朝の出來事らしいてすが、一切秘密にして要領を得ません。身分は華族、日清戰役の當時か以前に○○公使てあつた××子爵の二男か三男だ、と云ふ事だけ分りました。分つたら、後から又電話します。」
と云つて、此方の返答も聞かない内に、電話は切れて了つた。彼是して居る處へ、部長のS氏が出社して、斯く〳〵と報告すると、
「誰も居ない、貴公に賴む、直ぐ、大に……。」
と云ふ事になつて、私は二人曳の車て以て、此の事件の探訪に出かけた。市井無名の老若男女ても、淺間山の噴火口へ飛込んだり、華嚴の瀧へ飛込んだりすると、珍奇な事件として取扱はれた樣に、剃刀て自殺した位の小事件ても、身分ある家柄、地位ある人になると、平凡な出來事ても、登場役者が好い爲めに、大向ふを唸らせる事が出來る。私はこんな事を思ひながら、月並ながら先づ所轄署へ行つて、署長さんの卓の前へ顏を突き出した。如何なる出來事ても、其の大小優劣を

論ぜず、新聞記者へ向つて打明けるべき責任と義務を有たない警察署は、其の事件が疑獄的色彩を帶びて居る時、また貴族名門の間に起つた場合には、一層嚴重に秘密を守つて、何事も語らないのが常である。事件の時、場所、人物、經過、終局に就いて、一警察當局者が秘密を嚴守するのは、法律上に有功な事であるのみならず、道德上にも美しい事であるに相違ない。然し多くの探訪記者は、常に此の秘密の嚴守に遭遇しながら、各自の手腕を揮つて、事件の眞相を捉へ樣と努力する。警察の遣り方を道德的と云へば、新聞屋さんの遣り口は、如何にも非道德的なるを免れないが、其の職分に關つては、知らせまいと隱すのと、知りたいと努力するのと、其處に何等の道德的衝突は無い筈である。

署長は人格の好い人であつた。そんな事件は有つたけれど、身分柄世間に知れては困るとの話であるし、また新聞に書いた所で、世の注意を惹く程の重大事件でも無いと思ひ、凡て秘密に附する事にした。と云つて、話を他に轉じ樣とする。私が先づ警察署へ行つたのは、事件の有無を確めるのが、其の主要な目的であつたから、署長とは世間話二つ三つして、直ぐ車を子爵家へ馳らせた。

××子爵の別邸は、麻布の高臺にあつた。大きな煉瓦造りやら、舊い土塀の續いた屋敷町だ、幾曲りかした坂の降り口で、華族樣の別邸としては、質素な別莊風の構へであつた。

馬車が一臺來て居ると云ふては無し、車が二三臺待つて居ると云ふては無し、邸の内外は穩かな春の日の景色に見えた。玄關にも靴が四五足並べてあるばかり、これが昨日の朝子息を喪つた子爵家の有樣とは、何うしても受取れない。私は其の玄關口に立つて、

「御免下さい、御免下さい、御免下さい。」

と、高く三聲呼て見たが、容易に返事も無ければ、誰も出て來る氣配がしない。こんな時には默つて腰でも掛けて、莨でも燻らしながら、中の氣配でも窺つて居るに限る。

二十分ほど經て、粗末な背廣を來た會社員らしい男

が出て來た。そして、
「君は何ですか」
と、立つた儘、私の顔を睨み附けた。
社名入の名刺を出して、先づ若様卒去のおくやみを云ふと、その男は變な顔をして、
「何處からお聞きでした、そんな事、有つたとも、無いとも申し上げられません。」
と、天下の新聞記者を、二束三文の探訪記者でも遇ふ様に、侮蔑した態度で云つた。
こんな時に烈火の如く怒る程に、私は最う若くも無かつたし、また素人では無かつた。
「はゝ、左様ですか。何でも桐ヶ谷の火葬場で、昨日午後、御火葬になりました相で……。」
と出たら目を云つて、對手の顔色を見た。
「火葬、さうです、桐ヶ谷でしたか……。」
こんな男を口車に乗せて、自殺の光景を探知するのは、全く朝飯前、顔を洗はぬ前の仕事である。それでも、此の事件の大眼目たる「自殺の眞因」だけは、何うしても要領を得る事が出來なかつた。況んや事件の裏に潜んだ女主人公に、其の「よもぎ家の雪松」が居た事など、何うして分り様がない。
無能か、左様では無い。其の日〳〵の時間に制限されて、探訪に從事して居る外勤記者の手帖に、「事件の絶對眞相」が記入されるのは、百年の後を待つても、不可能であらう。
新聞屋〳〵と一口に云ふ連中は、此の職業的苦悶を知らない大馬鹿者である。
Mの從事して居る新聞紙へ、「當時Mが書いた雜報には、次の様な事實を傳へてある。

××法學士自刄

▽子爵××氏の三男

麻布區×××町××番地なる子爵××××氏の別邸に於て二十六日午前三時頃子爵の三男なる××鐵道

會社運輸課員法學士德三(三十六)氏が鋭利なる西洋剃刀を以て咽喉を突き自殺を遂げたる椿事あり。

▲本日歸任の筈　××子爵は本年二月肺炎を病みて以來大磯なる本邸に歸臥し麻布の別邸には××××領事なる長男××(四十五)其の妻××(三十五)を初め其の子女及び森田國太郎と云へるが留守居せるが子爵の病氣危篤の報傳はるや二月上旬先づ長男××氏は米國より三男德三氏は清國より歸京して父子爵の病床を見舞ひ今日まで滯在なし居りしが子爵の病勢も幾分か快方に赴きたれば長男××氏は五月上旬歸任に決し德三氏も亦二十八日東京を發し廿九日神戸發の汽船にて歸任する豫定にて行李の準備を急ぎ居たり

▲自殺の現場　されば德三氏は去る二十一日大磯に赴きて父子爵と別れを叙し歸來麻布の別邸に滯在し居りしが二十五日は何れに赴きしか夜十時過ぐる頃例よりは遲く歸邸して二階六疊の一室に入り就眠したり此の時までは平生と何ら異る所なく家人も斯る事あらんとは夢にも知らず眠に就きしが翌二十六日は例も七時頃起き出づる德三氏が九時になるも起き出でぬため不審に思ひ長男××氏の妻女が二階に上り「德さん德さん」と呼び立てしも答へ無きこそ道理なれ此時既に德三氏は鮮血に染りて呼べども還らぬ黄泉の人なりき意外の椿事に驚きたる妻女は旨を良人に通じて德三氏の寢室に入り見たるに蒲團に掩へる白シャツには血汐漾い天鵞の括り枕の傍には鼈甲柄の附きし西洋剃刀が血に染りて落ちあるなど悲慘なる最期の樣目も當られず直に家人親戚を集めて善後の相談をなしたる末午後二時頃麻布署に屆け出て署長醫師等臨檢せしが西洋剃刀にて一突き咽喉部右の動脈を切斷せし事とて多量の出血あり左右の手とも空をつかんて蒲團の上に俯伏したる樣有りし世の而影尋ぬるに由無し。

▲原因は如何　××別邸にては此の事世に聞ゆるを大に氣遣ひ檢視を終へるや直に死骸を桐ヶ谷の火葬場へ送りて茶毘に附し長男××氏は廿七日早朝事の次第を父子爵に報ぜんとて大磯へ向け急行せり然れ

ば二十七日の××邸は斯る事件ありたる模様更に無く人の出入も常に異らず唯だ玄關先に列べたる靴の七八足が來訪者の常に無く多きを語り顔に見えたり親戚の人某氏は出て記者に應接せしも語る所多く要領を得ず唯死因は精神異狀の結果とのみにて詳細なること判明せず。

▲××へ入る　德三氏は三人兄弟なるが中兄は先年病歿し德三氏も亦性來多病の傾向あり其の學習院中學部に學べる頃は秀才らしき所ありしも激烈なる神經衰弱を病みて退學し府立中學より高等學校へ進む間には腦を病みて一ヶ月程入院治療せし事ありこれが爲め法科大學にては成績不良にして二回も落第せし事あり哀れ昔日の秀才も病氣のため鈍物となり漸く三十三歲にして去る四十年大學を卒へ二三ヶ月を經て××鐵道に入り大連に赴任して今日に及べり曾て妻(二十七)を娶り一子を擧げしも今は大連に獨棲し居たるなりと。

▲痛く父を懷ふ　腦病のため遲鈍になりし上性來小心の人とて父子爵の病氣を非常に氣遣ひ逢ふ人毎に向ひ「今度大連に行けば最う父の死目には逢へぬかも知れぬ何うか萬事宜しく賴む」と口癖の樣に語り居たりと云へば或は昔日の病氣再發して精神錯亂し斯る最期を遂げたるならんと云ふ手荷物初め室内を限なく搜したれど遺書らしき物は更に發見せず死因は遂に精神異狀と云ふ事に決したるが父子爵との折合ひ、兄弟の間柄及び家庭の間は至極圓滿なりしと云ふ病床の××子爵これを知らば大に痛心する事なるべし。

此の次へ向、德三氏の從事して居た鐵道會社理事の談話が、二三十行出て居たが、自殺の原因に就て、これと突き止めた話は一つもなく、人物が温厚であつたとか、會社の仕事に失敗した事は無いとか云ふ記事ばかりで、自殺の原因を知るに苦んだ探訪記者の顔が、徒らに思ひ出されるだけである。

「男の自殺を探訪した君が、其の關係ある女と土橋で逢つたのも奇緣なら、友人の理學士が、其の女と關係して居るのも、不思議な緣と云へる。世間は廣い樣で、極めて狹いものだ。」

外交官は斯う云つて、理學士に更に一杯の酒を勸めた。理學士は陶然とした面持て、

「僕の話は、これからが本題に入るのです。德さんと雪松の戀が、何んな風にして成立つたか。何んな徑路を經て、德さんは自殺する樣になつたか。德さんに依つて生きて居る雪松は、果して何んな女であるか。僕は雪松を本題にして、尙大に語らうと思ふ。諸君、謹聽してくれますか、イエス?ノー?」

「イエス、イエス、同情を以て拜聽しやう。」

長い間默つて居た畫家は、此の時、紅茶の中へウヰスキーを入れて、美味さうに飮んで居た。

理學士の話は、段々面白くなつて來た。

M君が探訪に行つた××子爵令息の自殺事件は、藝妓としての雪松の生涯に、一轉機を畫した重大な出來事の一つでした。

僕は築地の寒梅で、初めて雪松と初對面してから、其の後五六回は逢つたでせう。馴染を重ねること深くなつても、僕は別に雪松に戀したと云ふ譯では無く、始終傍觀者の態度で以て、彼の女の言ふ事や爲す所を見て居ました。雪松だつて、「戀」には最う手を燒いて居るし、また「戀」すべく餘りに齡を取り過ぎて居た。二人は、內に燃ゆる情火も無いに、若い男女の樣な痴態を盡して、或る時は、銀座通りを散步した事もありました。或る時は、女に丸髷を結はせて、鎌倉から江の島邊へ、遠出をした事もありました。

「妾は、貴郎を何とも思つて居ない。」

と、女が云へば、僕も亦默つては居らず、

「お前の樣な女に、思はれて堪るものか。」

と、絕えず口論をしながらも、二人は二月ばかりの間と云ふものは、好い氣になつて逢引して居た。果は女

の家――板新道の一隅に在る――よもぎ家の二階にまて入込んで、障子に日蔭の明るい眞晝間、飲んだり食つたりする樣になりました。けれども、僕は女に惚れなかつた。女も其の肉體を投げ出して居ながら、心の底までは斷じて許さなかつた。

其の雪松と云ふ女は、生え際の好い眉の濃い、色白の中肉中背、何ちらかと云へば、先づ肥滿して居る方でせう。傍近く接して見れば、額にも口許にも、細い皺が寄つて居るが、白粉をコテ〳〵塗つて居る上に、好んで大柄な縞物の座敷着を着て居るので、若く見て二十四五、老けても七八にしか見えない相貌です。此の女が明治十一年生れて寅の五黄、明けて三十六歳だとは、誰でも嘘の樣だと云ひます。

藝妓に爲つたのは、可愛い十七八歳の頃ださうで、踊れると云ふ譯では無し、唄へると云ふのでも無し、彈けると云ふ譯でも無いに、「兼中村のお蓮」と云へば、「うん、彼の妓か」と取沙汰される程に、能く賣れたものださうです。雪松は初の名をお蓮と云ひ、抱へて現れたのですが、出ると間もなく不思議な樣に能く賣れて、何處の待合でも「お蓮さん、お蓮さん」と調法がられて、三四年を夢か現の樣に過したと云ひます。――左樣、身體の恰好から、顔だちから、又その高い調子で物を云ふ具合など、本郷座で演つた「荒尾讓介」に、喜多村綠郎の扮した赤樫滿枝と思へば、大した見當違ひは無いでせう。

藝妓として誇るに足るべき美貌も有たず、藝妓として立行かるべき藝能も無いのに、お蓮は何うして流行妓に爲つたのでせう。聲名ある者を嫉み、技倆ある者を妬むのは、僕等男の仲間にも、有り勝ちの事ですが、殊に藝妓仲間には夫れが激しい。いろ〳〵の惡評をしてお蓮を熱罵する女達も現れて、お蓮の名は、一層、新橋界隈に出入する男の耳に、謎の樣に傳へられた。遂にはお客の仲間からも、

「お蓮は、理想的の不見轉である。」

とまで取沙汰される樣になつて、「兼中村お蓮」の噂は、人々の口から耳へ、或る秘密でも囁くかの樣に、奇怪

なる調子を帯びて、評判される様になつたのです。お蓮の二十歳の時代を彩るべき序幕としてこれを見る時、既に彼の女の運命は、幸福で無かつたのです。

××子爵の三男徳三氏が、お蓮に依つて異性の情味を知つたのは、今の雪松が、二十三四歳の秋であつたと云ひます。——

自殺當時の新聞にも出て居る通り、徳さんは大學を二度も落第しました。其の原因が、神經衰弱とあるのは、嘘か眞か、兎に角、法科大學を二度も落第したと云ふ裏面には、お蓮と云ふ女が居たのです。

M君の如きは、大阪、東京で、有力なる新聞社の社會記者となつて、十餘年をレポーターとして過して居るのに、彼の自殺事件の裏面に、「女」が潜んで居る事を看破し得なかつたのは、餘り褒められた話では無いと思ひます。探偵吏でも、探訪記者でも、中流以下の家庭に起つた事件は、其の「眞實」を或る程度まで捉へて、第三者に合點の行く様に説明してくれますが、富豪とか貴族とかの間に生じた事件になると、最う手こずつて了つて、容易に「眞相」を探究し得ないのは、何う云ふ譯でせう。殊にM君の書いた彼の雜報の如きは、徹底しない所が大分あるのに、徒らに同情を寄せる様な調子で、全體を誤摩化して居る風が見えるのは、感心した事で無いと思ひます。短時間の探訪と云ふ、無理ならぬ理由もあるでせうが、事情を知つて居る者が見ると、實に可笑しくて堪りません。

法學士たるべき將來を有して居た徳さんと、不見轉藝妓として一生を送るより他には、何の希望も無いお蓮との戀は、隨分猛烈であつた樣子です。未だ若かつた大學生と藝妓の戀ですもの、無分別もあつたでせう、無理算段もあつたでせう。男の方は講堂を外にして、待合の二階に流連するし、女の方は折角聘らせてくれる他の座敷を断つてまで、男の傍に附き切りと云ふ始末。春は永久に二人の上に狭ばめられて、世界は二人の上に長閑であつても、或る時は相抱いて泣き、或る

時は、摑み合の喧嘩までしたと云ひます。

けれども、お蓮の聲名は、朋輩仲間にも待合中にも衰へなかつた。不見轉としての彼は、歳月を重ねるに從つて、益その精彩を發揮して、此の種の藝妓を要求するお客の前には、何んな待合からも口が掛つた。お蓮は若い法學生と戀に落ちながら、戀そのものに全部を沒頭し得なかつたと見え、他の座敷へも、努めて顏を出したと云ひます。

その內、女が三十近くなつた頃、男は大學を卒業して、名刺に「法學士」の三字が殖えた。德さんは卒業すると間もなく、××鐵道會社に雇はれて、遠く淸國に旅立ちました。新橋を立つ前の夜、女に逢つて、

「何事も、今までの緣と斷念めてくれ。」

と、男は淚を流して因果をふくめ、若干の手切金を渡しました。女も長い間の好きな人と、遠く別れるのを悲しんだが、汽車は遂に出て行つて了つた。夢の樣な五年を追懷しながら、獨り淋しくプラットホームを歩いた時、お蓮は人目も恥ぢず泣いたさうです。

その手切金に依つて、お蓮は兼中村の抱へから脫れました。自前になるか、分けて出るか、彼の女の事だもの、何うせ藝妓が廢められるものか、と取沙汰されて居る內、お蓮は其の姿を隱して了つた。有名であつたお蓮は、それから一年餘の間、東京に居なくなりました。

「お蓮さんは何うしたらう。」

「彼の妓は、何處へ行つたらう。」

と、中にも此の種の藝妓にのみ依つて、生計して居る待合の如きは、金儲けの種、調寶な物を失つた樣に、取沙汰したと云ふのです。

理學士はこゝまで語つて、眼をかゞやかした。

「いよ〳〵大詰に近づいた樣ですね。」

と、外交官が云ふと、俳優は眞面目に、

「悲劇の大團圓、悲劇の大團圓！」

と、兩手を懷中にして反り身になる。

「雜報的色彩がある好箇の續き物！」

と、新聞記者は、感心した樣な顏をする。畫家は無言の儘、また、何か描き初めた。

給仕の女が來て、各自のコップへ、各自の好む酒を注いで廻る。最う十二時に近い。

「それから後の話は、凡て女自身の口から、直接に聞いたのです。曾てM君にお話した事があるから、今度は僕が聽者になつて、M君から承る事にしませう。詰り僕の提供した話材に、M君の感想と觀察を加味する譯なんです。雪松の口から僕が聽いたのよりも、更に概括的にして、更に感興的の物語となる譯なんです。諸君、謹聽しやうぢや有りませんか。」

理學士の勸めに依つて、今度は新聞記者Mが、話す側の人になつた。

こんな話をするには、相應しい夜である。

理學士Y君の話を、こゝて受賣する譯である。其の男の自殺事件を探訪し、其の女と土橋で逢つただけに、私には因緣が深い。

德さんと別れたお蓮は、お蓮と云ふ假の名から脫けて、お國と云ふ本名に復つたが、何うしても德さんの事を忘れる事が出來ない。藝妓をすれば、未だ大に賣れるべき怪腕を有つて居ながら、お蓮は何時の間にか東京を後にして、支那の港××に姿を現はした。

支那××は、德さんの勤めて居る鐵道會社の所在地である。藝妓を勤めて居た時とは反比例に、極めて地味な素人らしい衣服を着て、頭を大丸髷にして、其の戀しき德さんを會社の一室に訪れた時、××子爵の三男で、品行方正を賣物にして居た德さんは、何んなに驚愕した事であらう。

「何しに來た。歸れ、用は無い、馬鹿！」

と、一氣に怒鳴り付けたものゝ、情ある女の淚、嬌ある女の姿を見ては、有りし日の睦言が、潮の樣に寄せて來て、德さんは嬉しいやら悲しいやら。

「惡緣だ！。絕ち難い惡緣だ！」

斯う覺悟を極めて、德さんはお蓮を宿に連れ、幾日かを過して後、不如意勝な新世帶を持つ事になつた。子爵の息でも、××鐵道の一事務員としては、女に滿足を與へられるだけの生活も出來ず。日本を外にしての一年間に、二人は堪え難い窮乏と戰ひ、忍び難い困苦と戰つた。お蓮の持つて行つた物が、金に代へられる樣な日も來たが、それでも女は辛抱して居た。

「妾は辛抱します。何んな事をしても、夫婦になれるまでは、乾度、辛抱してよ。」

父子爵の名聞を思ふ時、德さんは心の中で泣いた。可憐なるお蓮よ、夫婦になるべくお互の世界は、餘りに懸け放れて居るでないか。

××の一年間に、苦勞を重ねた末、女は得心して東京に歸つた。時節が來ればといふ事を、唯一の賴みにしてか、又は凡てを斷念めてか、女は東京に歸ると間もなく、板新道の今の家に、よもぎ家の看板を揭げて、名も雪松と改めて褄を取つた。

昔のお蓮さんは齡老いたが、雪松には未だ捨難い色香がある。三十を越してのあの若さ、男好きのする嬌態に、相變らず艶名、妖名を謳はれる樣になつた。新橋三大不見轉人の一人として、彼の名は待合にも、藝妓にも、お客にも、好奇と嘲笑と輕蔑とを意味して取沙汰された。先天的娼婦、理想的不見轉たる雪松の過ぎ來し方に、斯んな痛烈な戀物語が有るとも知らず、雪松と云へば、たゞ一塊の腐肉團の樣に心得て、惡い意味の噂ばかりが、新橋中に傳はつた。

德さんに別れて、再び藝妓になつた雪松は、何と云はれても平氣に陽氣に、相變らず若づくりして、待合の門をくゞつて居た。

春はまた東京に來て、明治四十三年の櫻が咲いた頃、××に居た子爵三男は、父君の病氣に依つて歸京した。歸る頃から持上つて居た緣談は大方熟して、雪松の戀人德さんは、雪松以外の女を令室として迎へねばならぬ不思議の運命に捉はれて居た。

父君の病氣を思ひ煩ふ悲しさよりも、德さんの心には、此の新しい結婚談が苦しかつた。德さんは東京に歸ると間もなく、板新道のよもぎ家に雪松を訪ねて、絕えて久しい情話に幾夜かを過した。德さんも雪松も、戀に狂ふには餘りに理智が勝ち過ぎた中年である。二人は唯、學生時代の逢瀨、××時代の窮迫した世帶を回想して、兎もすれば醒めんとするお互の情熱を、過る日の思ひ出に復活させ樣と努めた。斯うして相逢ふ現在には、興さめ勝な對話が取交されても、二人の戀は過去に活き、既往に繫がれて激しかつた。

德さんは遂に結婚談を持出した。

「遙々××まで來て、貧乏世帶に苦勞まで嘗めさせたが、お前と俺とは、到底夫婦になるべき緣が無いのだ。何事も運命だと斷念めて、俺は思はぬ女を娶るかも知れない。お前も女として、未だ行末のある齡である。俺の樣な者を何時までも思はずに、身の振り方を考へたが宜からう。お前に依つて受けた今日までの好意は、俺は死んでも忘れない……。何にも今までの緣だと思つて、ね、宜いか……。」

男は斯うした言葉を、幾度か繰り返し繰り返し、嚙んで含める樣に云ひ聞かせた。

「妾も斷念めて居ます。けれども斯うして逢つて、斯うして居れば、妾、斷念められない……忘れられない。貴君に別れて了へば、妾はほんとの一人ぼッち、何だか世間が淋しくて悲しい。一生斯うして居たい、別れずに……放れずに……。妾、殺して下さいな。」

陽氣な調子で物を云ふ女も、この時だけは淚をハラハラと流しながら、思ひ詰めて云つた。

早咲の櫻はソロ〱散り初める四月二十六日の夕暮、德さんは例の通りよもぎ家に來て、二階の六疊に通つた。二十八日新橋を出發して、いよ〱歸任の途に就かうとする前夜、德さんの顏には、何時になく元氣があつた。金六亭から馳走を取寄せて、二人は別れの晩餐に、例よりは早く醉倒れた。

二人の姿を銀座通りに見たのは、其の夜の八時頃であつた。德さんは懷中から革の金入を出して、雪松に

確と握らせた。

「當分逢へまい。好きな物をお買ひよ。」

雪松はニコとした。金入の中には、百圓札が五六枚と、十圓札が五六十枚あつた。

女は天賞堂で、女持の金側時計を買つた。純金の光かゞやく腕環を買つた。金剛石のピカピカする指環も買つた。殘つた二三百圓の紙幣は、其の儘女の懷中深く抱きしめられた。

男は默つて、女の爲するが儘にまかして居たが、

「そんな物買つて、何うする？」

「貴郎の記念、指環も、腕環も……。」

二人は縺れ合ふ樣にして、再びよもぎ家に歸つた。男の顏は蒼く凄かつたが、女は醉ざめだと思つて、別に氣にも止めなかつた。

強い〳〵握手をして、徳さんがよもぎ家を出たのは、恰度その夜の十時であつた。

雪松は、土橋まで送つて行つた。

時計やら、指環やら、腕環やらを枕許に並べて寝た雪松は、翌日二十七日の四時頃まで、シク〳〵と泣いて居た。

よもぎ家の二階で、雪松が泣いて居た時、麻布高臺なる××子爵別邸の二階では、徳さんが西洋剃刀を以て、其の咽喉部を突いたのである。

「徳さんは、何うしてお藤澤さんの役柄ですね。雪松は喜多村さんと極まりました。悲劇ですね、二幕物か、三幕物に適い事件です。」

俳優は感極つたと云ふ調子で云ふ。

「未だ其の後日譚があります。」

と云つて、理學士は青いコップを飲んだ。

其の日の午後、よもぎ家へ子爵家から家扶が來て、

御當家御三男樣、長い間御身の世話になられた赴き、改めて御禮を申述べる樣にと、殿樣よりの御沙汰て御座る。就いては三男德三樣、眞に不慮の事にて、今曉三時より四時の間に、西洋剃刀を以ての敢ない御最期。一門人々の驚愕、眞に言語に絕したる次第、此の段特に御知らせ申す。思へば淺からぬ御仲合の由、何と申すべき言葉も御座らねど、何事も運と申すもの。此の品眞に些少なれども、當方御一同の御芳志、何卒御受け下さる樣に、拙者その爲の使者て御座る。

と呼吸も付かず述べ立たさうてす。

雪松は夢かとばかり驚くかと思の他、

「賤しい藝妓風情ては御座いますけれど、餘り馬鹿にして下さいますな。若樣とは昨夜お別れ申した今朝、自殺などゝは思も寄らぬ事て御座います。さうまてして妾を馬鹿にして、手を切れと仰しやらずとも、若樣とは最う得心づくて、泣いてお別れ申しました。よもぎ家の雪松は、果敢い藝妓ては御座いますが、斯樣なお品物かお金かを、頂戴致します譯は御座いません。」

とキッパリ云つて、其の使者を戻したさうてす。

然し、事實は遂に事實てした。二十八日の朝、都下の新聞を見た時に、咽松は何んなに驚いたてせう。身を慄して、一日終夜、泗鳴したと云ふ位ては、到底其の心持を云ひ現す事が出來ますまい。

雪松は今ても尙「新橋三大不見轉」の一人として、盛に不見轉を稼いて居ますが、よもぎ家の二階の一室には、德さんと自分の寫眞を額にして、月の二十七日には、必ず墓參をして居るさうてす。

「鍵」も「ダイヤモンド」も「腕環」も、雪松にとつては、忘れ難い戀の記念てす。

あんな女の半生にも、斯な物語があるのてす。

新聞記者の話は、これて終つた。

「尼になるだけの信仰は無いのてすね。」

「その男に一生を献げる心はあつたてせうが、尼になる樣な道義心は無いてせう。」

「藝妓を廢めても、立つ瀬はあらうに……。」
「廢められないてせう。失天的に娼婦として生れた樣な、妖艶な女だから……。」
「何を樂みに、稼いて居るんだらう。」
「今は最う、得た物を失ふまいとする努力より他に、この女の生命は無いと思ふ。」
「鍵を持て歩くのは、不思議てすね。」
「自分一人、女中一人の生活て、他に信頼する樣な男が無い。親切にしてくれる男があつても、自分の持物や何かを、奪はれはすまいかと思つて、容易に他に許さない風が見えます。」
「色男は、今は最う無いのてすか。」
「役者とか、若旦那とか、女たらしと云つた類の男に逢ふと、惚れられはすまいかと警戒して、逃げる樣な傾向が見えます。その肉體は男の喜ぶに任せても、心と財産とは、斷じて許さぬだけの覺悟を以て、稼いて居る樣子てすね。」
「死んだ德さん一人を思ひ出の戀人にして、世間の男は皆動物扱ひにし、自身も亦動物扱にされて居る樣子が見える所は、一寸面白いぢやないてすか。」
「何しろ風變の女てす。肉慾と物慾の他には、何物も無いと云つた風の顏をして居るが、德さんの事を語り出すと、ボロ／＼涙をこぼして泣き出すのてす。」
「失はれた戀の傷と、老い行く色香の衰へを思ふと、雪松にも涙があるてせうよ。」
「然し、彼の女に逢つて居ると、派手て、陽氣て、何だか斯う心をそゝられる樣て、一種の性慾的衝動を感ずるだけてす。」
「いろ／＼の意味に於て、新橋の名物たるを失はない。彼の爲に、健康を祝して遣らうぢやないか。」
五人の間には、こんな會話があつた。

外交官は三鞭酒を拔いて、この同情すべき雪松の爲に、乾盃の音頭取をした。
畫家のスケッチした五人の肖像へ、それぞれ署名し

て、「御身の知己より」と書き添へ、これを「よもぎ家雪松」に宛て投函した時、松の内の夜は、電車の「赤」に更けて居た。

―一、一七夜、片瀬の正岡藝陽邸にて脱稿―

何故の風俗壞亂ぞ

「斯くあるべき女」著者　青柳有美

『中央公論』が、風俗壞亂で發賣禁止になつたのは、今度で三回目なそうだ。僕の著作物が風俗壞亂で發賣禁止になつたのも、又同じく三回である。而も、それが皆な何れも桂内閣の時代なんだから、頗る面白い。警察官憲の間に行はるゝ術語に『常習者』なる言葉がある。刑事巡査などは、ヤレ『蝮の熊は賭博の常習者だ』とか『娘の銀は窃盗の常習者だ』とかいふ。青柳有美は桂内閣檢閲官の眼から觀ると、風俗壞亂の常習者とでもいふべきものだらうか。

然し、僕は決して桂内閣に敵意を挿み、特に好んで同内閣の施政方針に反抗し、善良なる風俗を壞亂しやうなどと心掛くるダイソレタ惡黨でない。憚り乍ら、桂大勳位公爵閣下第二の故鄕にして、カナ子令夫人の御生國たる尾州名古屋に官僚機關の旗色鮮かな『扶桑新聞』の使用人――毎日毎紙官僚の辯護に唯これ時の足らぬを覺ふる忠實なる文筆勞働者――平たく申せば官僚の走狗である。それにも御目を懸けられず、御用金を下し置かるゝどころか、發賣禁止に次ぐに發賣禁止を以てせらるゝとは、サテ〳〵つれないと申すもの。『假名手本忠臣藏』の師直ではムらぬが、此う言ひたく

なる。

徳川家の舊幕時代には、切支丹宗門御禁制とあつて、國々に制止の高札までも建てられたそうだ。この宗旨は、國家の治安を害するからとの御趣意に據ッたものてある。當時は切支丹とさへあれば、何れも皆な邪宗門の儕を以て目せられ、甚しきは十字架のお仕置にまて遇ッたものとか。それに比べると、桂内閣の御仁政は流石に難有いものて、如何に善良なる風俗を害する風俗壞亂常習者と睨まれても、著作物の發賣頒布禁止プラス印本の差押くらゐて鳧がつき、僕の生命に別條なくピン／＼シャン／＼、誠に以てアリガタ茄子の花が咲くといふものだ。然し、唯お氣の毒なのは發行者、幾千部と大した數の印本を押收されて、何千圓といふお金錢の損失。誠にハヤお氣の毒てある。

いま時に切支丹は邪宗門だなぞと申して、その宗徒の面々を死刑に處してもしたら、單に天下世界の笑ひ物となるのみならず、國家の一大騷動となる。然し、それても、昔は世間が怪まなかッたものてある。文明が進歩しなかッたからだ。

生活の動機となるものは、利慾てあるが、生殖の動機となるものは性慾てある。生活と利慾に關する問題は、既に／＼研究せられて、今や全盛の成功論や成功談乃至は成功法なぞいふものは、皆な此の生活と利慾とに關する研究に外ならぬ。如何に嚴格な桂内閣の檢閲官ても、此の種の著作物に發賣頒布の禁止を命ずるやうな事はムらぬ。之を以て善良なる風俗を害するものとの判斷を下すものは、天下に一人も無い。然るに、奇怪至極な事には、生殖や性慾に關する研究を公にした著作物を發行すると、忽ち、之が善良なる風俗を壞亂するものだと認められて、發賣頒布禁止の命に遭ふ。『中央公論』大正二年正月號が、僕の『斯くあるべき女』て發賣頒布を禁ぜられたのも、あの一篇て生殖や性慾に關する研究を公にした爲めてある。

山上憶良といふ萬葉の歌人は、世の中て第一の寶は子てあるとお詠みなされた。黄金や財寶は如何に之を山と積んても、兎ても子寶に及ばぬとは、憶良の歌の

意である。假令、憶良ほどの歌人ならぬ今日の俗人でも、子孫の貴いことだけは充分に知り抜いて、子や孫が生れると、お目出たいことだと、お互に祝辭を交換する。男女がイチャ〳〵手を握り合ッて銀座の人通り多い中を通行しても、警察官が風俗壞亂だとて警察署に同行を求めもせず、又、子を抱いてるものがあッたからとて、之を以て善良なる風俗を害するとて罵る者も無い。然し、子孫は天から降ッて來るものでも無ければ、地から湧いて出るものでも無く、男女の關係から生殖せらるゝもので、その生殖の動機となるものは、性慾だ。

結果たる子孫の生れることだけをお目出たいとお祝ひ申上げながら、之が原因たる生殖や性慾に關する研究は、何故に風俗壞亂だらうか。如何に桂大勳位は、僕等官僚派の親分たるにせよ、甚だ以て怪しからぬ御見解と恐れながら存じ奉る。生殖や性慾を研究し之を公にすることが若し風俗壞亂なら、人類の存在そのものが、更に一層大なる風俗壞亂て、人類を絶滅せなければ、善良なる風俗は維持せられぬことになる。サテ〳〵妙な論理も世の中にはあッたものかな。有らゆる階級の女が、僕が斯くありたしと望んだ如くに成ッたら、今の人類社會は惡るくなるだらうか。若し惡るくなるものなら、『中央公論』大正二年正月號の發賣頒布禁止も至當であるが、恐らく良くなるだらう。これにより、人類社會に、今よりも大なる幸福が將來せられるだらう。換言すれば、日本の社會風俗が善良になるだらうと思ふ。

そこに、お氣が附かれずに、生殖や性慾の事を書いたからとて、直ぐ風俗壞亂の名の下に、發賣頒布を禁ずるとは、餘りに御早計と申すものだ。これは、切支丹御禁制と等しく、後の世の物笑ひになるのみである。サテ〳〵日本文明の進歩遲々として進まず牛歩の如くなるには、驚きアキレざるを得ぬ。僕等官僚派の親分、桂大勳位は、文明の政治家である。文明の政治家たる桂大勳位の内閣時代に、餘り馬鹿な事をさせ度ない。後世の物笑ひになるやうな眞似をさせたく無い。こんな泣言じみた事を並べるのも之が爲めだ。

かくあるべき男（上）

田村俊子

少女に對する男――現在の新しい女に對する男――中年の女に對する男――寡婦に對する男――無知の女に對する男――社會的卓越の技能を持てる女に對する男――老嬢に對する男――自分と婚姻的關係のある女に對する男――放縱な女に對する男――人の妻に對する男――藝妓に對する男

○少女に對する男

男は少女に對して戀をしてはならないのです。たとへある一少女に對して戀愛を感じるとしても、その男は遂に少女の前でその感情を披瀝してはならないのです。男は責任をもつて少女と云ふものを重んじなければならないのです。少女に對して一種敬虔的の眞面目さを保つことが出來ず、又その心情を限りない溫潤の慈愛に浸らせて少女を慈しむ事が出來ないと自ら覺るものは決して少女の傍にも立寄る事を許されないのです。

女はいつの時代にあつても、この世界のある限り昔ナザレの聖者によつて讃美されたその愛と信仰の美しい性情を持ち傳へてゐるものだと思ひます。そうして其れはこの少女の時代において最も圓滿にもつとも美しい光りを持つてその胸の内に包まれてゐると思ひます。女の美しい情操、女のもつとも高き道德、それは凡べてこの少女の可憐な胸のうちに淸らかに芽ざゝれてゐるのです。女としての理想的の生涯――即ち一つの慈愛に取り縋つて犧牲的に情熱的に信仰的にその生を送り得べき用意は、神の手によつて永久にその少女の胸の内に蓄へられてゐるのであります。そうして其の美しい情操の萠芽を傷づくる罪惡は、いつも泥のやうな男の手によつて行はれるのです。

少女時代は何を見ても恐れおのゝいてゐます。少女の感情をもつとも强烈に色彩るその羞恥は、すべてに向つて著しい恐怖になつてその可憐な心を壓迫してゐます。その恐怖は又ある意味の拒絶になつてすべてに對して許さないと云ふ堅い信念を保たせてゐます。少女は誘惑の手に向つてもある程度までそれを却ける事の出來るだけのある强い力を持つてゐます。然し可憐な少女は、父母の抱擁から放たれたばかりのその賴りないうら淋しさの爲に、又いつともなく自分の心の前に空漠と開けてくる不思議な新らしい世界に對する異常な不安の爲に、その純な瞳子を凝らしながらも悲しい感激の底から常に限りない甘い慈愛をどこからともなく求めやうとしてあがきます。自分の心を溫く吸はれるやうなまことの慈愛——その慈愛に觸れやうとして少女の心は不安のうちに動搖しつゞけます。泥のやうな男は少女のその哀れな心の動搖に乘じて、ついに美しい情操の萠芽を傷づけて了ふのです。

少女の純潔を蹂躪した男の罪惡は永久に呪はれなければなりません。少女に對して男が戀愛を感じるやうな場合には、男は神の靈光を感じたやうな敬虔をもつて、その感情すらも少女の前に露骨にしてはならないのです。さうして女としての生涯をもつとも理想的に送らせる爲に、人道の爲に、男は少女に對して常に敎訓的の責任を感じながらそれを待遇しなくてはならないのです。少女は慈愛を求めやうとしてその周圍に甘へます。年の若い男性を恐れ嫌つて、比較的に中年の男になづく傾きのあるのは、その世間的に馴らされた男性の寬容の心に甘へやうとするからなのです。少女は可愛いゝものです。又人から可愛がられやうとしてゐます。男は少女に對しては遂に可愛がる以上に出てはならないのです。溫潤な慈愛をもつて少女の情操の萠芽を美しく庇護するほかには、男は少女に對して何事も考へてはならないのです。

○現在の新しい女に對する男

男は女を煽動する事が上手です、表面では女は女ら

しく柔順てあれ溫和てあれと云ひながら、猶やれそれと陰に廻つては女を煽てゝゐます。女は煽てに乘り易いものだと云つてはわあ〳〵と囃しながら煽てゝゐます。女が目覺ましい事をしてくれなければ我々の周圍が賑やかにならないと云つてはちく〳〵煽てゝゐます。感情の激烈な女はうか〳〵とこの煽てに乘つて遂突飛な事をやつて了ひます。然うすると男は得たり賢して手を拍つて、はやし、叫び、わめきます。一人がお前は新らしさうだと云つてある女を摘みだしてくると、多勢寄つて集つて、これは物になりさうだとか、これは眞似をしてゐるに過ぎないとか云つて品別をします。そうして物になりそうなのに對して、もつとやれ〳〵と煽てます。

現在の男たちは現在の女の口から大膽な告白を聞く事に興味を傾けてゐます。女が自分の心理の一端でも眞面目に漏らすやうな場合には、男はパンドラの箱を開けやうとする刹那のやうな不思議な興味を集注してそれに對します。そうしてその箱の中から、自己に對するある禍ひ――とまでゞなくとも男を損傷するやうなものが現はれたとしても、男は澁面を作りながら一時は兎に角その女を新しいと云つて推賞します。そうして一層煽てます。

然し、この煽動が兎に角現代女性の眼を幾分でも開かせたものであるかも知れません。覺束ないながらも自己を知ると云ふ覺醒に對する導きの火になつてゐるかも知れません。この煽動によつて一と度はしやぎ出した女性が先驅になつて、自己の力と云ふ事を思念する女が殖えて來たのかも知れません。所謂新らしい女は初めて自己を知り、そうして女としての新らしい自己の道を開く爲に、又女としての新らしい自己の世界を建設する爲に、孜々として努め初めました。新らしい女は凡てに對して奮鬪する爲にある絶大な力を與へられん事を望んで、弱い肉體を張りながら空中に兩手を擧げて叫んでゐます。男の惡戲的の煽動が現在の女を不思議な道に引つ張つてゆきました。そうして男は其所で女たちを突き放しましたけれども、女たちは初

めて其の迷路に立つて眞に覺醒し、自分の立場を考へ、自分の行くべき道を自から權威的に指示してそうして兎に角獨自の力をもつて歩き初めました。

もはや男は、新しい女が何をしやうとも、又何を云はうとも決して笑つてはならないのです。新しい女が愚にも付かない事を云ふにしても、その叫びの聲が一向力のないものにしても、兎に角これからの新しい女の唇から漏れる片言隻語にはある信念の影が潜んでゐるもの：して男は大切にそれに耳を傾けなければならないのです。反抗してはならないのです。侮蔑してはならないのです。嘗て惡戯に煽動した男たちは、今は新しい女の唯一の伴侶になつて、然うしてその前途に輝いた一とつの明るい道が見付け出してやる事に共力をしなくてはいけないのです。けれども現在の新しい女は男と離れる事を好んでゐます。男と共に在る場合と云つても、それは女性としての自身が男性よりは權威において一段上にある時の場合より外には考へてゐないのです。男性よりは一歩先んじやうと云ふところにのみ新しい女の信念がつながれてゐるのです。ですから新しい女に對する男たちは、その前において自分のすべてを現出にする事なしに、女の蔭に引き添つて注意深く監視してやる義務を考へなければいけないのです。まして新しい女と喧々と爭ふと云ふ樣な事はいけません。新しい女の行かうとする道に對して唯靜に默視して居さへすればいゝのです。新しい女に對して男はある義務を感じながら暫時口を噤んでゐなければいけません。

現在の新しい女に對して、遂に男の大々的に口を開くべき時期がくるまで、男はしばらくの間「長い目で見てやる」的の反感を持つた意味でなく、温い同情をその行動の上に注ぎながら當分沈默してゐなければいけないと思ひます。

○中年の女に對する男

女が中年になつて異性に對する時は、必らずその間に幾分の情味をもたらせて接しやうとする傾きが生じ

てきます。つまり若い時には異性との間に堅固な石のやうな墻壁をおいたものが、中年になつてくると薄絹の几帳を隔てにするぐらゐなところになつて來て、風の加減でその几帳の揺ぎたがるのを、その儘に任せておくと云ふやうなところがあります。

　中年の女はあらゆるものへその智識が普遍して萬能になつてきます。感受性が鋭くなつて物の解釋、判斷力が強くなつてきます。技巧的の外貌の美はこの年頃になつて最もよく現はれてきます。然うして凡てに對して愛着が濃やかになつてきます。自分に從ふものは殊に愛し、自分に逆ふものは殊に憎むと云ふやうに、感情が荒つぽく摺れてきます。さうしてその感情を誰の前にも明らさまにしてゐる事に就いて得意になつてゐます。狹いながらも自分の周圍を征服する意氣の充實が見られるのは中年の女です。

　中年の女は又男を好きます。女の生涯のうちでもつとも男性に對する理解があり、又男性に對していろいろな興味を感じるのはこの年輩です。單に話相手とするだけでも男性の世間的智識を一とつづゝ自身に受け入れる事を欲望的に悅びますし、その發達しきつた體力からくる敏感は自分より智識の勝れたものゝ上からすべてを吸收しやうとして絕へず活動いてゐます。この中年の女に對して男が常に保たなければならないものは威嚴です。異性との間に婚姻的の關係があつてもなくても、いかなる場合においても、すべての意味から云つて男性は中年の女に對しては威嚴を保たなければいけません。

　中年の女は男性に對するさま〴〵の興味を解すると同時に、所謂男性美にもつとも魅せられる時期なのです。男の體質から何う流れ出てくる力の壓迫かは分りませんが、中年の女は男に對していつも不思議な壓力を感じてゐます。その感覺は時として中年の女をついに淫奔的なものにさせて了ふことがあります。中年の女が異性との間に戀愛の感情を生じた時、その女の愛は放恣なものに違ひないのです。

　斯う云ふ女の感情をもつとも精神的に抑壓するもの

はそれに對する男の威嚴だと思ひます。中年の女の前に在つてその威嚴が保たれた時に、初めて男性の男らしい價値も生じてくるのだと思ひます。そうして一種の奔放に傾いてきたその性情を持つ中年の女が、男らしい男性の威嚴に打たれた時に初めて、堅固な節操と云ふ調和力がその全身に漲つてくるのではないかと思ひます。然しその威嚴は極めて自然的なものでなくては駄目です。拔け殼のやうな男が威嚴だけを假面にして中年の女に對したなら、それは結局は中年の女のいゝ玩みものになるだけの事だと思はなくてはなりません。

女八人その二「名代部屋の客」……松崎天民

三　奇　厄……楠本日南

女優の内幕を暴露せる　獨逸女優の日記……山本迷羊

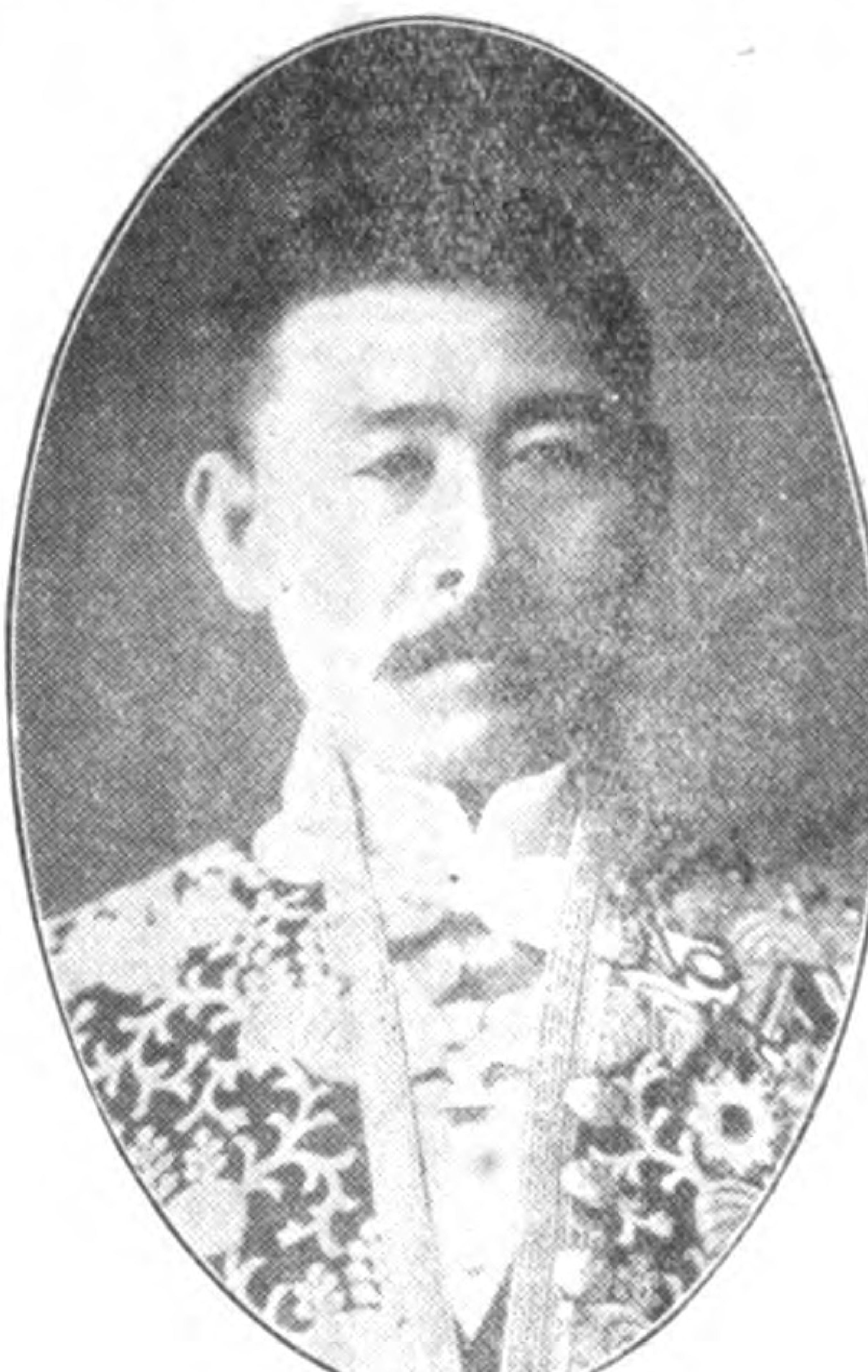
戲曲的見地より見たる　明治政局史……黑頭巾

斯くあるべき男……田村俊子

等は次號本欄の讀物たるべし

人物評論（三十四）

川上警視總監論



△川上警視總監

三宅雪嶺

國家は政府である、政府は官僚である、官僚は一種の閥である、といふ判斷の下にいろ〳〵の事が行はれて居る。少しの間違から大きな間違を生ずる恐あるものであつて、深く愼まねばならんのであるが、兎角踏

み外すことになつて居る。中にも警視廳は其甚しいものであつて、正當に解釋すれば其職務は國家に缺くべからざるものであると共に、惡しく解釋すれば禍を及ぼすこと少くない。火が利にも爲り害にも爲るのと同じ。明治政府が成立つて以來警視廳は一の疑問になつて居る。巡査は一日も無くてならんのであるのに初めの間殆んど人民の敵であるかに認められた。流行唄にも「いやだお母さん巡査の女房」といふが行はれた。元、人を保護するよりも人を責めるのが先きになつて居つたのであつて新たに幕府瓦解の後を受けて國民を鎭撫するには殆んど馬上天下を治むるの心得あり、何處からか謀反人が起りはせんかといふを氣遣つたのであつて止むを得ぬ所もある。政府が專ら謀反を心配して居る間、警視廳は已れに關係ある勢力家の爲めに計るを專らとする。勢力家の手先の最も主もなるものである。牛頭馬頭の役を務めるのである。薩摩の暴徒は餘り政府の組織なんかを解しなかつたが、目指す敵は大久保内務卿及び川路大警視としてあつたのは如何に内務省及び警視廳を不快に感じたかを示して居る。後にこそ陸軍は長の陸軍となつたが、初めの程陸軍は薩長の陸軍、寧ろ薩の陸軍ともいふべきであつて、之と共に治安の維持に關係ある警視廳も薩人ならでは治まらぬ調子であつた。いろ／＼と變遷あつて巡査も以前の如く世間から敵視されぬやうになつた丈け、警部、警視延いて警視總監も單に勢力家の爪牙たるばかりでない事となつたが、今以前の習慣が遺つて居つて、それが時として減じ時として增す。

西園寺内閣と桂内閣と或點に於て反對して居るものと認められて居るが、西園寺内閣の警視總監安樂氏は薩摩人であつて現桂内閣の總監川上氏も薩摩人である、が總監としての遣口は違つて居る、川上氏は任に就いて日が淺く、如何なる遣口なるかの明かでないが、第一次桂内閣の下に警視廳の一課長として日比谷燒打事件に與つたのと、近く京都市長より總監に轉ずる際人に向つて明言した所とを以て察すれば、安樂氏と趣を異にして居ることが推し測られる。同じく薩摩出身の總監でも相異つて居る。のみならず同じく桂内閣の下に前には龜井氏が總監であつて、其遣口は川上式と思はれる所と違つて居つた。安樂氏は川上氏と同じく警視廳出身であつて、いはゞ岡ッ引とか、めあかしとかの昇進したものであるが、人柄が違ふ所からしてか、些か大體を考へる形跡がある。總監は單に勢力家の爲めに計るばかりでなく、人民をして安心せしむるの必要にも氣附いて居つたやうである。龜井氏は別段警視廳と緣故あるでなく、總監に任ぜられて立派に其任を果さうと考へた所があるらしい。旨く行つたか行かぬかは別として只汲々として勢力家の爲めに計るのみでなかつた。單に勢力家の手先のみに甘んぜず、他にも目を配るやうでは、配り方が善いにしても惡いにしても其勢力家に取つて齒痒く感ぜらるゝ事がある。餘計な事をせずに、もつとてきぱきすれば善いと思はれる。若し勢力家が眞に國政の何たる、憲政の何たるを解して居るならば、却つて眞に總監たるの職務に忠實なるを賞したりするのであるが、さうでなくて政治は力づくである、勝てば官軍負ければ賊、自分等は勝つて官軍と言つたのであると考へるやうでは、只命維れ從うて奔走するものでな

くては役に立たぬと思ふ。

桂首相は强ち敵味方を分ち、何處までも敵を苦めねばならぬと思ふ程狹くないが、表門から攻めた〃搦手から攻めたりいろ〳〵と使ひ分けをする。大浦子を內相にしたとて之と全く意見を同じくして居るのではない。赤つ面も場所によつては必要であるとして之を備へて置くのである。大浦子はもと邏卒上りであつて舊式の警視總監に適して居る。內相としても舊式の警視總監的である。己れ內相として事務の繁劇なるが爲め己れの手足に使ひ得べきものを總監とせねば氣が濟まぬ。內務省の次官には薩人の押川氏を置き、警視方面には薩人の川上氏を置く。總監を以て一の次官とするのてある。己れに代つて舊式の警視總監の役を務めさせるのてある。內相の命を受けて働くこと川上氏頗る努めるてあらう。云はれ事は云はれたよりも多く努めるてあらう。然し總監の職務は何てあるかといふ事になれば、勢力家の爲めに骨を惜まぬといふ事に過ぎぬのである。現內閣の爲めに働き、分けて直接關係ある大浦子の爲めに働き、子は恐らく總監として川上の如きものなしとするてあらう。桂公もウイ奴と思ふ位の事はあらう。若し內相に於て反對黨を攪亂するの意向を洩らしたならば隨分際どい事をもするてあらう。遣れと云はれゝば滅法界な事もするてあらう。然し其處は桂が首相となつて居る。成るべく平地に波瀾を起す事を避けるに勉める。大浦に注意を與へもするし、大浦も邏卒上りといふものゝ多年の經驗もあり、且つ年齡も長じた爲め甚しく露骨な事をしやうともすまい。然し三つ子の魂百までゞ邏卒上りの魂性は全く一變して居るとはいはれぬ。場合によつては戰爭の積りで事を初め、川上氏もこゝが勇氣の現し所として穩やかならぬ事を敢てしたりしやう。或は面白い時が來はせんかとてぐすね引いて待つて居るかも知れん。

然し川上氏は本來極勇的の男といふべきでない。なか〳〵の上手者である。親分の爲めに働くべきものと心得、親分の指圖通りにするのであつて、親分の指圖次第如何樣にも變ずる。嚴にすべくんば嚴にし、寬にすべくんば寬にする。京都を出發する際に人に語つた所の如き、委しく內閣更迭の事情を知らず、總監といふの〃少々逆せ上つて輕卒をした所がある。東京府會で彼是いはれたので、口の滑つたのを悟つたらしい。失敗つたと思へば別の手を出す。强いて原案を通さうとせず、一先づ府會の決した通りにし、大人しく引込んだ所など、上官から注意された所あるにしてもなか〳〵如才が無い。硬軟の何れにもなる方であつて、そこが大浦子に見込まれた所でもある。若し良い人が良く使つたならば相應に良く働くであらうが、惡るく使へば惡るく働く。詰り舊式の警視總監なる大浦の代りに働くのであつて、大浦が以前の態度を變ぜぬ限り、警視總監は勢力家の邪魔になるものを處分することを任とすることになるであらう。政權爭奪の今日、さういふ事をも有り勝として、警視廳が盜賊豫防、惡疫の豫防、火災の豫防等大いに勉むべき事のあるのに或は頗る忽かせにするやうになる恐れなしとはせぬ。兎角一方に心を奪はるれば他を忘れるやうになる。此邊は龜井氏は成るべくよく勉めやうとした。安樂氏は大いに勉める方でないが毒にもならねば藥にもならぬ。川

上氏は根が如何樣にもなり得るのであるが、今度は藥になるか毒になるか。只勢力家の爲めにすればよいとして眞の職務よりも勢力家の意向に從つて働く方であれば聊か安心の出來ぬ所がある。けれども桂公の三度內閣を組織したのは只位置を得やうとするばかりでなく、今少しく立派な事をしやうとする氣もあるであらう。立憲的首相と爲る積りか、新政黨の組織に着手し初めた。前後を顧るであらう、人氣も取るであらう。大浦子も只喧嘩腰に出るのをエライ事と思ふよりも老練になつて居るべき筈である。川上に向て唯やつつけろといふやうな淺果敢な事をせんかも知れん。すれば川上もそれ相應の事をする。川上其人を蠻勇であるとか燒打事件の際に於けるやうになるであらうとか見るのはまだ早い。彼は如何樣にもなるものである。若し獨斷專行せねばならぬ場合に何程の能力あるかは分らぬ。親分無くては別段の事をなし得ぬのであるが、親分次第隨分手酷い事をも爲し兼ねぬ方である。

要するに大浦子の警察方面に於ける次官であり秘書官である。仕事の上で老人が遲鈍で若いものが敏活であるならば、川上氏は安樂龜井二氏の中間にある。現內閣が若いものを次官にした所から見れば、氏は割合に老人である。大浦子はこういふ方でなければ安心が出來ぬのであらう

△適當な後任者

安樂兼道

川上警視總監と私とは同郷の友人で、個人としても親しく交際つて能く其人を知つてゐます。十年戰爭の時分、私は警視廳の警部をしてゐたが、鹿兒島の私學黨勃發の報に接し、同鄕の友人の方向を誤らしめてはならぬと茲に同志を申合せて鄕里に出發した。その時川上はまだ鄕里に居たが、吾々同志の中に加入して、盛に正氣の歌を唄つたりなんかしたもんです。それが賊軍の爲めに誤解を受けて一所に捕縛されることになつた。それが始まりで知人(しりあひ)になつたわけです。何でも私共が賊軍の容子を探りに來たものだとか、大西鄕を殺しに來たものだらうとかいふ嫌疑で捕縛されたのです。其時分既に勢が非常に進んで居たらしいので、さうと知つて居たら何も好んで火中に飛込むやうな馬鹿な眞似は爲なかつたのですが……。

概して言へば、川上といふ人は非常に武士的な氣骨のある精神家で、主義節操を重んずる道德堅固な人です。天性もさうであつたらうが又修養もした。學問も相應にあるし和歌もやる。大して深くはないだらうが一應は心得てゐます。此頃非難のあるやうに今の時代を知らないと言ふこともありません。能く時勢に通曉した人です。只世間で謂ふ官僚內閣の下に働いてゐるので、自ら立場の上から色々な非難をも蒙るやうなことになるのでせうが、私どもの平生親しく交際つてゐる上から觀察すると今迄は兎も角、今後は甚だしく治安を害するやうな——例へば社會黨が興つたりなどする場合は無論チキハキ遣つてゆくでせうが——さうでない限りはさう無暗に民論を壓迫するやうな事は爲ない人だと思ひます。

中々思慮いある人ですからね。私とは政治上の立場が違ふだけで後任者としては至極適當な人と思つてゐます。

△露國式警視總監

鷺城學人

今度警視總監になつた川上親晴とかいふ男については、餘り多くを知らぬ。縱し知つて居るからとて論評する價値のある代物と思はぬ、が既に問題の人となつて居るし、當から警視廳は蟲が好かぬから、自分の知つて居る限りのことを述べて見よう。警視總監といふと偉さうに聞えるが平たくいへば巡査の總大將に過ぎぬ。巡査の總大將が政務官の性質を帶びて、内閣の更迭と共に更はるのは、ツマリ高等警察即ち政治警察が職務の一つになつて時の政府に都合の好い人物を置く必要があるからでもあらう。警視廳本來の性質からいへば、人民保護の直接機關であるべき筈であるのに、昔から或る特別任務を有つて居る。特別任務とは何であるかといへば閥族の爪牙といふことである。

警視廳がこれまで人民を苦めたのは一通りや二通りでない。今日はさう露骨なことをせぬが、政論勃興時代にはマルデ泥棒掏摸を追かけ廻すように民間の志士を壓迫したものだ。議會が開かれてからも志士論客の弱點を掘くつたり、探偵を附けたりして隱密に妨害するのを能として居る。我輩の處へも屢次探偵が政黨の角や有志家の行動を根掘り葉掘り聞きに來るがソレが報告される時には針のようなことでも棒のようになつて居る。低脳な刑事になると間違つたことを報告する、甚だしいのは辨當代や手當を取る爲めに好加減なことを捏造して報告する。警視總監がこれに依て色々な業をするのだから堪つたものでない。

政黨本部とか新聞社とかには必ず警視廳の間諜（スパイ）が居る。それは黨の事務員なり其社の記者に月々若干の手當を與へて秘密にさせるのだが、中には代議士で間諜をして居るのもある。曾て閥族反對であつた代議士や新聞記者が、今日グウの音も出なくなるといふも、ツマリ探偵政治の利目に外ならぬ。

警視總監は薩摩人でなければならぬ譯でもなからうが、不思議に薩摩人が多い。土佐人の田中光顯、佐賀人の關清英、熊本の龜井英三郎を除けば三島通庸、樺山資紀、大浦兼武、園田安賢、山田爲暄、安立綱之安樂兼道等は悉く薩摩である。警部や巡査も以前程多くないが、それでも可なりある。これは警視廳の元祖ともいふべき川路大警視が薩人であるので、其關係から自然さういふ系統になつたのと、一つには人間が野蠻で巡査向に出來て居るからでもあらう。

誰が警視總監にならうと、今まで餘り問題にもならなかつたが、今度の川上親晴は初めから非常な惡感を以て迎へられ、ダニか蚰蜒が舞込んだように思はれて居る。此男が意氣揚々として京都から新橋に着いた日に、東京府會で警視廳の機密費二萬圓を削つたなどは、一種の不信任決

議で、同じ隨人の肝付兼行が此間大阪市長に推薦されると、市民から碌碌だの天保錢だのと排斥されて居るよりも手厳しい。流石の川上もコレには確か面喰つたと見え、前總監の安樂にコボしたさうだ。其時安樂は同郷の誼で今おぬしが原案執行なんかを遣ると益々反抗を招ぐから、自分の不德だと思つて諦らめろと忠告したといふが、此位のことは有るべきが當然で、本來からいへばノコノコ東京に足踏みをさすべきでない。

川上は巡査上りだけに、人をフン縛つたり窘めたりする外に何の頭もない。警察署長か餘程好く行つて地方の警部長位の處だ。それが兎も角も警視總監になつたといふのは大浦の庇蔭で、大浦には恩も義理もあるから、親分の命令とあればドンナことでも遣る。一體大浦は高尙な政治の頭がなく、趣味が極めて低いから、碌な者を傍に置かない。遞信大臣になつても農省務大臣になつても警察といふ觀念を去らぬ。警視總監兼任の形である。殊に内務大臣になれば伺更鬼に金棒だ。見ろ警保局長の太田政弘でも、地方局長の湯淺倉平でも、警視廳の天降りで、今まで人材の驥北だといつて他省よりも一段高く止まりて居た内務省は警察本部のようになつて居るではないか。これは確に内務省の墮落だ。

歷代の警視總監で一番無茶を働いたのは三島であるが、或人の話によると、定めし將武者擧骨面をした男だらうと思つて會て見ると、全く反對で至て物靜かな優しい人だつたさうだ。川上が京都府の警部長をして居る時、我輩は仕事の必要から六七回も會つたことがあるが、鹿兒島人通有のムシヤクシヤした容貌でなく、執れかといへば男振りの餘り惡くない、而して應對振りなども極めて如才ない方で、迚も亂暴を働く人間とは思はれなかつた。博浪沙に鐵椎を振廻した張良も狀貌婦人の如しとあるから、面と行は全く違ふものと見える。

日比谷事件の亂暴は三島の眞似して見たつてあらうが、專制政府の民黨尅殺時代と違ひ、其時は立派に憲法も議會もある。而も白晝公然馬を乘廻して巡査を指揮し帝都の良民を斬つたりハツたりしたのは、マルデ露西亞の警察官が虛無黨を鎭壓する時の遣口である。其時は恰も我輩が樺太の戰爭から東京に著いた日で川上が人斬りの總指揮官だと聞て實は疑つた位である。處が當時の狂態を一廉の手柄のように吹聽し、世間の批難を受けるのは覺悟の前だといつて大膽勇發揮の豫告をして居るが、常識を具へた人間なら眞面目にいへたものでない。恐らく大浦の引立に與つて警視總監になつたのが嬉しくて堪らぬ處からお座なりの氣焰を吐いたのだらう。若し本氣にいつたとすれば大馬鹿者だ。

騷動の爲めに警視廳主事を罷められて富山縣知事になつたが、此處でも何か問題を起したらしい。和歌山縣知事の時も評判の好い方でなかつた京都市長になつたのは元と京都に居た關係から、大浦系の者が推したのであるが、市長などといふ品の好い役は此男の柄に嵌まつて居ぬ。

警視廳の奴等は新總監は偉い人だといつてるさうだが、岡ツ引連にはさう見えるかも知れぬ。要するに川上は智とか略とかのあるのでなく、全く氣の男だ。其氣になれば此後とて何をするかも知れぬ。併し無茶をすればする程、閥族の最後を早める結果に爲るのだから、精々やらして

置くが好い。

△熱心だが頭の古い人

小川平吉

私はあの日比谷事件の時に縛られた一人であるが、川上警視總監は其當時警視廳の官房主事をして居つた。其際に一二度逢つたし、其後も一二度は逢つたが固より深い交際があるでない。只警視廳に居つた時の遣り口でも、又和歌山の知事をした時の遣り口でも、なか／＼ハキ／＼したもので、確かに職務には忠實で熱心な人と思ふ。人間も私は餘程眞面目な人と思つてゐる。

只人物には何となくゆとりがない。反省したり熟考したりする所が乏しくして、只自分の思ふた所を驀地に實行するといふ方なので、動もすれば誤りを生じ易いと思ふ。

又其思想や主義に至つては我々とは著しく立場が違ふ。之は役人上りの人一般の弊で必らずしも川上氏其人ばかりでなく、親分の大浦子の如きもさうだと思ふが、どうも頭腦が古い。人民が昔よりもずつと進んで居ることに氣が附かない。人民といふものは仕樣のないもので、權力で以てグイ／＼推しつけなければならぬもの丶やうに考へて居る。處が我々から見れば今日の人民は總ての點に於て昔よりも甚しく進んで居る。役人の方が却て後れて居る。それだから下手をやると後悔しても及ばぬ事になる。川上氏はごく眞面目な熱心な人と思ふが、此考の間違つて居ることが、甚しく遺憾と思ふ。

△沒常識な男

肥塚龍

川上か、私はあの男は能く知らぬが、只一度喧嘩をしたことがある。例の日比谷事件の時さ。九月五日だつた。その日は市參事會があつて午前十時に皆んなが集つて來た。其席で其時分矢張り市參事會員をしてゐた農學士か何かの渡瀬と言ふ人が言ふには、警視廳が日比谷に柵矢來を結つて犬の子一匹も入れないやうにしてゐるとの事だ。聞いた私はムカムカと腹が立つた。

「何だと、日比谷公園は東京市民のものであつて、警視廳のものではない。それを何ぞや、東京市に一言の斷りも言はず、猥りに柵矢來を結ふなどとは不屆至極な奴だ」――何でもその時分豪さうに遣るのが僕で、亂暴なのは江間だつたし、怪しからぬと言ふので早速尾崎市長と渡邊助役とを呼んで、內務省と警視廳へ談判に遣つた。ところが十二時になつて待つても待つても尾崎と渡邊とが歸つて來ない。

もう是れまでだ。「柵矢來を打壞はせ」「宜しい」といふので、一方は御

濠の方から、私ども二三人は正門から、巡査の一人や二人は俺一人で澤山だと江間が。「そら打壞はせ」の號令と共に、大勢で推倒すと何のことはない梅矢來は滅茶々々さ。

ところで私が中へ這入つてみたが、國民大會が何處にあるか判らぬ。松本樓へ行つて見ると森閑としてゐる。が何うやら二階に人の氣配がするので上つてみると、河野を初めとして私の知つた者が三四人、今しも會議を開いてる最中だ。「斯んなことでは何處に國民大會があるのか判らぬから旗でも建てゝは何うか」と私が言つて旗を建てさせる。それから皆は新富町の演說會へ、私はその儘別れて家に歸つた。其晩私は書生を一人連れて見聞に出掛けて、内務省の前で巡査と激論を演つたりなんかしたが、結局警視總監から内務大臣の芳川までが悉く免職さ。

今度の川上が政友會征伐ぐらゐは雜作のないとだの何のと色んなとを言つたどかつて、私は馬鹿な奴だと思つてね、よし腹の中でさう思つたからッて、東京のやうな此麽喧しい所へ遣つて來て、其麽馬鹿なとを言ふ奴があるかと思つて、此間國民黨の片岡直溫に會つた時に斯う斯うだッてねと訊くと、片岡はソンナ事は無い、全く新聞が作つたとだらうと言つてゐた。然し何しろ京都を出發する時にも有志の者が寄つて送別會を催して呉れた席上で、市長の職といふものは實に面倒なものだ。自分は子孫に言傳へて市長の職は爲せぬとか言つた相だが、之で見ても、私は餘程馬鹿だと思ふね。沒常識極まるじやないか。いくらさう思つたにしても、親切に皆が送別會を催して呉れてる席上で、能くソンナ馬鹿なとが言へたものだ。

例の日比谷の一件で私が警視廳へ談判に行つた時も、外の部長などは、成程日比谷公園といふものが東京市のものであつて、警視廳のもので無い以上は、市の要求は正當で、いかにも理屈のあるとだと言つたが、何でも川上だけが苦情を言つたやうだ。あんな阿呆な男が又遣つて來たら、今度は何を遣るか知れぬが、何を遣つたッて構ふとはない。まかり違へば引裂り返して遣る迄だから。大浦といふ人は、あれで中々如才のない人だが、何故あんな男を使ふかね。矢張り薩摩出だから、要するに蠻勇を揮ひたがるのかも知れぬが、兎に角餘り悧巧な人ではなからうよ。

△存外小膽者かも知れぬ

南木摩天樓

◎天下分け目の大戰が今にも始まらうと云ふ今日、勇將謀士雲の如く控へて居る中から、何もとり立てゝ區々川上親晴を論ずるでもあるまい。

◎川上親晴と云へば何だか聞いた事のある名前だと思つて居る位で、どこのどう云ふ人だか一寸記臆から呼び起せなかつた樣の始末だから、隨分偉い人物かも知れないが、拙者には頓と意見も何もない。

◎聞いて見ると何でも今の內務大臣の大浦閣下と同じく鹿兒島の出で、

同じく警視廳の巡査上りで、同じく彼處此處の警部長やら書記官やらを勤めた上、燒打事件の頃は足立の下に警視廳官房主事をして居て、桂や大浦や內相芳川などの命令通り忠實に市民虐殺の方略を講じた男だと云ふから、桂內閣殊に內務大臣大浦兼武閣下の下の警視總監としては、最も適任であらう。

○何も警視總監は必ず巡査上りでなければならぬと云ふ譯でもなく、又必ず薩摩人でなければならぬと云ふ譯でもないが、大浦の下に警視總監たるべきものは、少くとも無學で向ふ見ずの男でなければならぬ。此點に於て川上と云ふ男は、大浦よりもモット無學で、大浦に輪をかけた程の向ふ見ずだと云ふ事だから、先以て官僚內閣には理想的の强總監と云ふものである。

○されば大浦の彼を信任することは大したものだと云ふことである。彼も亦、鄕先輩、官先進たる大浦を以て理想的人物として居るのであらう。さればにやその出處進退にも甚だ大浦のそれに類するものがある。

○大浦は熊本縣知事であつた三十一年に例の憲政黨內閣が出來て、突然宮城縣知事に左遷されたので、憤然として職を去つた。それから專心憲政黨內閣の破壞運動の下働きをして、それが成功すると直ちに山縣內閣の下に警視總監に上げられた。聞けば川上と云ふ男も燒打事件の功によつて富山縣知事になり、それから和歌山縣知事になつて居たのであつたが、一昨年西園寺內閣の成立と共に、大阪府の高崎親章等と共に官を辭して京都市役所に籠城し、天晴れ桂內閣に義理立てをしたのであつたが、今度大浦が內務に顯れると共に引き出されたのだそうナ。而して先に同時に官を罷めた高崎も、今度は頻に警視總監運動をやつたそうだが、無學と向ふ見ずとに於て彼は到底川上の敵でなかつたのみならず、大浦のお覺えが燒打事件以來殊に川上に目出たかつたのだそうである。

○一體警視廳と云ふものは、薩摩人が黨爭の責道具にする爲に構へた砲臺であつて、今銅像になつて厳然警視廳前に屹立して居る川路大警視などは、一時は此の砲臺でもつて長州の頭株連中を殲滅してやらうと計畫したものである。それが敗れて却つて川路が返り討ちになつたのは、實に今の內相大浦閣下が裏切りして長州系に之を內通したからであつた。斯う云ふ成り立ちのお役所であるから、初めから警視廳と云ふものは警察の本領たる保安の爲でもなければ人民保護の爲めでもなく、常に高等警察となん呼べる黨爭上の探偵威嚇の爲に存して居るものである。而して此の目的を最も忠實に實行したのが三島通庸と大浦兼武とであつた。彼の戒嚴總監足立綱之も表面それであるが、之は寧ろ前任者たる大浦の傀儡であつたのだから、實は氣の毒な話である。

○かるが故に、同じく巡査上りの薩摩人でも、前總監安樂の如く、御大葬の雜沓を手際よく取締つて秩序を維持したり、市民の希望を容れて畜犬の箝口を廢したりすることを善政と心得て、少しも敵黨の監視脅迫や、人權の蹂躙などを遣り得ない生温い手腕の男は、天で警視總監としての資格の無いものである。

○然るに川上親晴は安樂などゝは肌合が違つて、中々有爲の人物である。

彼が愈々警視總監運動に成効して京都に歸るや、嬉しさを抑み消し兼ねて市長室で放言したと傳へらるゝ所を聞くに、何でも世間の非難攻撃などを氣に掛ける樣では警視總監の職務は勤らぬものであるから、自働車にでも乘つて駈け廻つて思ひ切り蠻勇を發揮する積り。所詮世間から惡人視せらるゝ位なら五十歩百歩だから、寧ろ惡の極たるべく努力する覺悟であるそうだ。これある哉、これでなければ駄目だ。見よ三島通庸、大浦兼武、皆これであつた、そうして彼等は何れも功によつて子爵にまでなつた。

○東京府會議員はこれを聞いて膽をつぶし、そんな總監殿に飛び込まれては遣れ切れぬとあつて、伊藤痴遊の音頭取りで早速警視廳機密費を半分に削減に及んだそうだが、その尻の穴の狹さは別として、これを聞いた川上は又青くなつて、曩に京都に於て爲せる放言は、唯だ市吏員に對して物語つた一場の戲言に過ぎぬとか云ふ事を一生懸命辯解して居るに至つては、彼も三島彌庸と同じく、存外の小膽者であるかも知れない。

△謂はゞ一種の與力同心

秋山定輔

川上警視總監の事に就ては、私には一言も品評若くは論評する資格がない。見たこともなければ況して研究したこともない。私の關係してゐた二六新報と警視廳との紛擾も、警視廳そのものを對手に取つて喧嘩したわけでは決してない。私が個人として代議士の末席を汚して、あらゆる迫害抑壓に反抗して戰うたも、要は桂内閣に對する政爭であつた。非立憲的なる桂内閣をして到底存立せしむべからずとして、重圍の中に孤軍奮闘を續けたのは、一に桂内閣に對してゞあつた。二六が筆を以て戰つたのも、私が場に立つて聲を嗄したのも、要するに桂内閣に一撃を加へんとしたのである。警視廳を敵としたのでもなければ、大浦さんを目の敵にしたわけでもない。然しながら桂内閣の下に働いてゐる警視廳が撲滅を試みやうといふのも當然である。即警視廳を對手にせねばならぬ餘儀なき事情に立至らしめたのである。是れは何時の時代に於てもさうである。在朝と在野との爭は常に斯うなつてゐる。いかに志士が將軍御大老の施政に反對しても、常に差向けらるゝ所のものは與力同心である、時の將軍と直接の談判交渉はすることが出來ずに、徒らに與力同心に依つて苛められねばならぬ。在野の悲さはそこにある。吾々は大浦といふ名さへも知らなかつた。況してあの人が不良いなどとは夢にも思はぬ。不良いどころか職務に忠實な方だとさへ思つてゐる。桂内閣を擁護する上に於て、其政敵たる吾々にあらゆる手段を以て當たられたのも其情は恕すべしである。さういふ次第であるから其當時其部下で一部の長をしてをられた今の警視總監川上さんの事などは其當座お名前さへも存ぜなかつた。全く私には其人を評論する資格はない。

△精々精を出し玉へ

田川大吉郎

◎警視總監の位地は、今の際、注視を値ひする重力のある位地かといへば、僕は、强がちそうとも思はない、曾て貴誌が愛山山路氏の評論を掲げた時、或け、存外輕い人の評論を掲げるとの批評もあつたと聞いた、その時僕はその批評を首肯せずして、貴誌の擧を飽まで至當と賛した通り、その時の方針を以て進まるれば、他にも評論に値ひする幾多の人士があると思ふ、而して警視總監其人は、必らずしも與からないと、僕は此樣に認めて居る。

◎然しながら、新總監川上氏は、僕の注意人物である、僕はその人を全く知らないけれど、其人には平生稍注意して居る、一體、今の地方官中に僕の注意して居る人が二人ある、その一人は、先日まで長崎縣知事をして居た安藤謙介氏で、その一人は即ち君である、而してその注意する仔細は、兩人とも、黨派癖が强いからである、その我執、その意地つ張り、その姿態が、如何にも黨派的なるだけ、隨分果敢、峻烈の振舞となり、それが面白いおかしいと思ふからである、而して一方け政友會にかぶれ、一方は桂系にかぶれ、兩方とも、人民のための役人では無い、黨派のための役人である、原氏就職すれば、己れも當然に何かの端に有り附くが、原氏去れば即ち去る、大浦子入閣すれば、己れも必らず何かの裾分けに有り附く、それで、大浦子が去れば即ち去ると思ひ決して居り、一は大浦子が在る間の官吏であり、一は原氏が任じて居る間の吏員であり、共にその親分の爲に勵んで、おれは政友會に用ゐられたのだ、おれは桂系に用ゐられたのだと、その恩を感ずることが極めて深く、民に向つても公然その黨派の人たることを明言して、進退をその黨派の變遷にかけて居る、隨分、珍らしい地方官では無いか、面白いといふよりは、寧ろ厄介といふべきものかも知れない、それが、僕の注意を惹くのである、再言すれば、僕は、此樣な時勢を如何にするか、如何にすべきか、その成行は如何になるだらうかと思ふにつけ、兩人の出處進退に、不思議に氣を取らるゝのである。

◎加之、川上氏が、此度、東京に入るに就ての態度が、更に興味を刺激した、その京都市長の去り方が、あんまり無雜作であつたこと、あんまり不親切であつたこと、あんまり性急であつたこと、潔ぎよしといへば潔ぎよしだが、市民のために、京都のためには、永くも無い奉公の、央ばだ、モー少しの情味、熱情はあつても、よささうなものだと思つたこと、而して東京府會で、早くも面あてにその機密費を削減したといふこと、前の事よりも、後の事のために、君の、姓名は、一段鮮かに、世上に煽らるゝことに爲つた、僕の注意は、自然にして、より多く、そゝられたのである。

◎けれども、多くを語るまい、僕は、只言ふ、君は甚だ仕合せな人だ、君は、警視總監として、失敗することなく、反つて割合に成功するであ

らうと、ナゼならば、君の不評判が、度外れに甚しいから、最早、此上の屈辱を被り樣の無いこと〻、而してその不評判が、頗る頓興な、面白半分、からかい半分、戯談半分の動機から湧いて居るだけ、君のため、聊かにても有利なる新生面を開くことは何でも無いこと、決して難事といはるべき難事で無いと思ふからである、僕は、世に落ちて此樣な境遇に在る者のために、常に我知らずほゝ笑むのである、それを結構だ、福德だと羨み、喜ぶのでは決して無いが、如何にも、此樣な境遇は、蟬脫するに手間暇いらぬ、凡物で無い限り、昧者で無い限りは、誰でも容易にその途を開き得るのである、川上氏ともあらう者が、此程の世難に、辟易すべき筈が無い。

○現に、東府府會が、その機密費を削り去つた時、川上君は、それに構はず、原案執行を謀るだらうとの噂が、世上に滿ちた、僕は、此說が、誰の口から出たかを知らない、警視廳員の口からか、東京府吏員の口からか、抑も、府會議員の口からか、又、新聞記者の筆端のいたづらか、その由來、ゆかりは更に分らない、然も、川上君が、此く言はなかつたことだけは極めて確かである、川上氏自ら之を言はず、新聞紙上早くも此說を傳ふ、即ち、これは傳ふる者の言である、本人の言で無い、傳ふる者は、その心を以て、新總監の心を推したのである、即ち、傳ふる者の心持、その氣合、その觀察の程度が善く分る、それが川上君の此より接すべき人達である、此人達に接するの途、難いといへば難からうが、易いと思へば、易く思はれぬでも無いでは無いか、僕は、こゝに川上君の立ち場があると思ふのである、そこに綽々として餘裕があると思ふのである。

○川上君よ、しつかりやり玉へ、あせらずにやり玉へ、しよげずにやり玉へ、氣にせずにやり玉へ、警視總監の地位は太した位地では無いけれど、既に世人の注目を惹いて此極に至る、又以て少しく試むるに足る、而して少しでもいゝことをなすれば、今の、やんやと非議しつゝある者も、矢ッ張、脆く、君の名を謳歌するに至るであらう、何にせよ、此樣な時節だ、太して畏るべき意見の無い時節だ、所謂民黨にも、又吏黨にも、むつゝり、ねつゝり、しんねり强ゐ主張、意見、辛辣にして肺腑をゑぐる底の批評、觀察のない時節だ、石の上にも三年といふが、日本の事は、要するに人の噂も七十五日の方だ、折角勵み玉へ、但、それだからといつて、人世を見縊つてはならない、見縊らずに精々精を出し玉へ。

和歌

尾上柴舟達

○ 安井竹美

雪ふれば瞼のあたり血をあげてものを思ひし少年なりし

しをしをと夜霧にぬれてかへりきつ泣かるゝ事のしげきこひざめ

もはや逢はてふたりはつひに死になましかのをさなさをおもかげにして

○ 島の流人

おちつきし午後の氣分の明るみにひとつあかあか光れるもみぢ

山畑に植ゑし桑苗芽ぐみなばわれにも人の許されて來む

この島をのがれていづちゆく身かも海原海原よるべなき蒼

○ 白石紅陰

珠數を買ひてかなしきをりはさらさらとうち揉まむなど思ふ日もあり

逢ひがたき人を戀ふより路のべにまろぶ小石となるべかるらむ

こころにもあらで相見ぬこのごろの夜々を被ぐに重き夜着かな

君が家のまへの矮杉(こすぎ)もいまははやかかはりなげに見えわたるなり

○ 龜尾春醉

おもふまじおもふことなくたゞけふの旅をつゞけむ悲しきまゝに

はつ冬は君の姿のふくよかな小鳥とみえてなつかしきかな

抽斗をしのび心にあけてみるたはむれごともうれしきこのごろ

○ 尾崎青嵐

苦しみはわれの苦しみ妻と子と名のつくもののかかはりのなき

モルヒネのなくばこの世の一日も樂しからざる子に秋は來ぬ

わが心大き望にをとらせし大海がいまはたゞ黒
光る

○　　　　田中壽夫

會散じぬテイブルの上一鉢の蘭がさびしうガス
の灯を吸ふ

南天の實があざやかに蔭をする静かな室に針は
こぶ君

階段のうすら暗きに浮きて見ゆ白きローズの君
がかんざし

○　　　　村上夕人

音高き川瀬の上に千鳥など飛ぶと君指す夕あか
りかな

夕されば野べのかすめにまぎれ入りそのまゝか
へり來ぬ人となれ

黄櫻の小庭に立ちて涙しぬ少年の日ゝ物や思ひ
し

○　　　　伊藤錄

悲しき笛をまたも鳴らすかさりながら済子よひ
とりよくぞあそべる

ああ故郷故郷へかへるよしなきかはてなき空を
啼きわたる雁

つらあてに死にてやりたくなりまさる思ひの早
も涙となりぬ

○　　　　小林茂子

相見ぬを嘆き靴などみがきつゝうつら／＼とも
のを思へり

桃の葉の青きにつける泥(ひぢ)ほどのかなしみをして
十月に入る

さびし寂し何の故かは知らねども心ほろびてゆ
く如きかな

雪のうへにわがおとしつる手袋の薄茜こそなま
めかしけれ

○　　　　高添翠

眼に入るは海と空のみ甲板に人なし一人泣くに
よきかな

悔ならず疑ならぬこの心かゝる心を君も知るら
む

海少し静まれよかし衰へて兄にみえむは悲しき
ぞやよ

○　　　　今井紫郎

霜ふかき初冬の夜を心よく疲れて歩むうら安さ
かな

枯草の丘の寂しさ夕日さす木々の肌の白う光れる

日の入りて少さき海邊の町につきほと息をつき夜の海を見る

○　嘉手納順範

死ぬかゝる命にすぎぬものといふ神の掟の破りたきかな

のぞみなきもののやうにものぞみあるもののやうにも吾れは暮せり

○　中島紅夢

無造作に釘にかゝれるしをたれし小倉袴ゃ春は悲しや

子より先乳房ふくませ寢入りゆく姉の寢顏のうらさびしさよ

○　丸山英

亂心かわが爲すことの一々に人に異るものあるを愛づ

病室は今ぞ日暮るゝからくと針金はしる窓帷(カーテン)の環(くわん)

○　佐藤緑三郎

思ひ倦みひとり野に出てて何げなく嘯めばかなしもあまき秋草

あをざめて落葉かき居る人妻をしめやかにぬらし夕霧のふる

○　大木多喜男

しのびやかに雨の降る夜はわびしかり思はせぶりにこほろぎのなく

酒のめば心にわかによみがへる嬉しさにしも湧く泪かな

○　三島穂明

自らを僞りてありそれさへもひさしくなれし負債なりしかな

○　外島潮

午後五時の瓦斯の光りのやるせなきホールの窓のうす色硝子

いと長くのびたる髮をふと分けて見たしと思ひ湯屋を出でぬる

○　齋藤郁雨

獨居のこの尊さに梅の花うすくれなゐに咲きそめぬ今日

かにかくにわれ二十四となりにけり靑空靑空泪流るゝ

○　高桑義生

森ゆけば思はぬ方に足音のふとして止みぬ靜に鳥なく

勤め口さがさんとして日ごとゆく町の柳もちりそめにけり

○　鈴木俊郎

緑なる酒をぞ汲まむ若き日のその思ひ出の紅薔薇咲く

母逝きていたくも父の衰へが身に泌む冬の夜となりにけり

○　津田蘆風

かりそめの君が言の葉胸に秘めてひとりある日ぞおだやかにあれ

○　丸山政治

泣くまじと年來る毎に誓ひたる我少年の頃のゆかしや

○　橋川流泉

さくさくと白菜を嚙むこゝちしてひとりなぎさをさすらふ夕

○　中村紅夢

元日や炬燵にありて幼きにたわむれあれば心むなしき

○　黒田たつを

池の面鯉のはねたる水の輪のゆるく大きく暖かき春

○　三宅勇三郎

茫として柱に倚りぬ日のあたる雨後のしめりのこゝろよき朝

○　山田一雄

靜かにも又淋しげに笑む母をこの世にもてる淡きかなしみ

○　鳥敏二

春晝どきするどく心にあふれきてたまゆらにしてきえゆきし光

○　羽賀行果

冬の夜の風に吹かれて此の街を漂泊ふ吾れと往き交ふ人々

○　高木曉星

ふと目さめ暗らき座敷を見まはしてよく泣きしかな幼かりし日

○　鷲岡俊成

三日ほどはうたはてありし吾れなりきかの啄木

の死をきゝてより

○ 重永ひそむ

はらはら木枯の來て冬となるまたわが胸の閉づることかも

○ 叶ちはる

やるせなくカアテンあけし其の音にふとさびしさをおぼゆる夕

○ 月野濱路

ゆるやかに模型飛行器流れゆく空に秩父の碧き山脈

○ 藤原千代麿

わが名刺うす暗がりにつはぶきの咲ける座敷に運ばれにけり

○ 安江白雨

妻を得る日の近からんこゝろして午後の土ふむ小さきよろこび

○ 釜田芷蘭

あゝ遂に路傍の人となり果てむ二人に冬のいたいたしさよ

應募和歌は東京小石川區原町百十五番地尾上柴舟宛の事

俳句

寒梅　高田蝶衣選

寒梅や父の忌を弟子に酒飯して　月精
絮火勢ひて寒梅に宵の月出たり　同
臘梅に茶席よし窓を過ぐ帆影　同
水車開きに着きし荷か寒梅に積む　同
寒梅に訪ひ寄れば書陣張る一宇　明兮
坊舍統ぶる大寺や寒梅の園　同
寒梅や篆隷子酒壺かたむくる　同
高根颪に澄める寒梅詩軒かな　句瑠璃
冬の梅黄粱炊ぎ蓑を乾す　同
寒梅や蜂の古巣も腐す雨　同
遠客も待つ程に寒梅照り初めぬ　滿峰
寒梅ほのと浪も聞く病院の夕　同
粗衣つけてあれど品位や冬の梅　愛香
獨愁そゞろ寒梅に月澄む夜なる　同
生花のみに汲む溢れ井や冬の梅　黎白

水の月は寒梅の枝に遙かなる　同
寒梅や版元秘めて門閉す　楊杞子
寒梅に御用納めの六波羅や　同
馬首を君に落つ寒梅に別れかな　三光鳥
寒梅や灯さずに居る感傷の大　同
秘め槌の三槌うつ何を寒梅に　鬼州
香爐たく寒梅寺何の駕や來る　同
干網に湖近を知る山間冬の梅　國郎
朝掃きに淨き宮筋寒の梅　同
寒梅の宿淋し鑛山の煤匂ふ　春雨草
寒梅の大家あり桑園繞らせる　同
寒梅に招ず貴賓に茶事もあり　雨露人
髮毛捧ぐ祈り事月の寒紅梅　同
加持の火に寒梅と人と相映ゆる　茶の門
京の宿に年越す公事や冬の梅　同
筏唄の過ぐ窓や寒梅鉢に咲く　觀葉樹
寒梅や弼火山灰に雨云ふ泊り　同
孵化器据ゆる日和窓冬の梅匂ふ　三碧水
紙漉きが悲歌に灯のもる寒の梅　耳山
寒梅花詩に稜々の奇骨かな　銀杏庵
寒梅の雨に壽延の献立や　薫風

寒梅や行李おろしゝ河原寮　水馬
寒梅に何の碑ぞこゝら名所溪　浮碧樓
梨處の河原小屋寒梅も見つ　藍一星
寒梅を染む月や隔つ水眞白　一箕
寒梅に耕して遺孤育める　一兀
時候見舞ひて茶の甕に坐す冬の梅　不冠郎
寒梅の旭に水氣罩め鶯鳴く門　三石
晴れて靜けき寒梅に心春邊なる　紫雲郎
寒梅や爐の灰を更ふ狐雨の晝　逸鯉居
架橋兵の分宿や寒梅の鄕　紅影
小祭に簪しつ寒梅宮の道　蝸牛
習はざる鐵筆の枝も寒梅に　雲洞
長老が添書所望の寒梅に　朽葉
釘錆の壁紙に浸むや冬の梅　北斗青
寒梅のとゝな宮昔學府の地　小籟

冬雜吟

寒月や法燈に居る兄と別れ來て　月精
放歌白う寒月の雲と化せしにや　同
送り出てしが疎林寒月に灯消したり　同
貰ひ浴びしが月寒し棋に長居して　同

戀にせしべつたら市の灯も見來し　耳山
市に買て寺臭乏しき納豆かな　同
密談に灯細めば炭のはしる音　雨春草
笹鳴くや水汲めば肩の骨鳴りて　同
大霜の薬掻けば鳥の阿呆鳴き　鬼州
追ひ駕籠の小灯寒しかち渡り　同
瘠土系しるき見て運河鱈ぐ寒さ　邱婁
枯野路別れ來て疎林濕りある　同
凩に崖下の水車野犬吠ゆ　水馬
停電の町を凩雲の飛ぶ　同
藪に寺ありとの鐘か宿氷る　國郎
下江行の短日や奇巖見失ふ　同
小春日を洛陽に良き殿造り　楊杞子
濱小春正午の入船待つ艀舟　同
魚簗更も夜仕事に振る灯鳴く千鳥　浮碧樓
妓となりし經路水仙に聞く詫し　同
傳へ名の鞘當橋や柳枯る　皎々
物忌に茶粥の砂や歯に寒き　同
出濱なる鹽田煙らて冬の月　一箕
魅する眠をのがれて冬の月清し　一兀
昔爺の花咲かせ樹も落葉かな　小鐵

島の溫泉の火噴く日頃浮寢鳥　湖虫子
八十の隈手に君匿れませ冬構　銀杏庵
構鬪して寐早な棕櫚に雨を佗ぶ　蝸牛
拓植の小屋に土人と年暮れぬ　關東州　潮
背青魚の大漁や寒雁の濱　明兮

課題（竹　秋（十五句）淡雪（十五句）…二月五日〆切
櫻（廿句）新題（規定十二月號及新年號參照）…三月五日〆切
注意（各題別紙、淡路町釜口付高田蝶衣宛
用紙半紙、中央公論句稿と朱記の事）

新年號（第二百八十六號）が發賣禁止となり新年臨時號（第二百八十七號）を發行せし爲め、本號は第二百八十八號となれり、此旨讀者諸君に謹告す

評論

佛國大統領選擧

一

一月十七日佛國大統領選擧は、昨年一月以來首相たりしレーモン、ポアンカレー氏の勝利に歸したり。佛國々民は人格手腕兼備の良材を尋ねて、之を得たり、億兆歡呼、慶賀措く能はざるも洵に偶然にあらざる也、

顧みるに佛國大統領は七年を以て任期となす、大統領ファリエル氏は一九〇六年一月上院議長より擧げられ、期限滿ちて退隱、閑雲野鶴を友とせんとす、蓋し米國大統領に在りては、再選殆んど常例たりと雖も、佛國に在りては、制度上許せる再選を事實上決して實現することあらざれば也、是何故ぞ、恐らくは過去の佛國政事家が華盛頓の如く高潔淡泊ならず、又國內一般に帝政的傳說强きを以て、時に或は奈翁三世の再現を見ることを憂ひ、成る可く執政期を長からざらしめ、大統領の增長を防がんと欲せるにも依らん、或は一部に於ては大統領の任期が已に米國のそれに比し殆んど二倍に近きを以て此上再選の要無しと思惟せる人々もありたらん、斯くの如くにして八回上院議長に重任せるファリエル氏は、一期を以て元首の職を去りたる也、

茲に於て乎、上下兩院議員より成れる國民會議は例に依りウエルサイユ宮に於て熟議の結果、遂にポアンカレー氏を選定しぬ、勿論今日の佛國、人物必らずしも乏しきにあらず、左れども適材は則ち少し、前首相コムベ氏及同ブルジョワ氏は共に急進黨の元老として名望經歷共に高しと雖も、老齡最早や繁務に當るに適せず、デュボーは溫厚の君子、加ふるに政見又偏頗少く中正の地位に立つに適すれども、彼今や上院議長たり、前大統領ルーベ、大統領ファリエル共に上院議長より出づ、三度引續き上院議長を擧げんことは、各議

員の感情之を許さゞるを奈何せん、クレマンソー、雄と雖も、已にデルカッセと戰ひ、カイヨーと戰ひ、仇敵餘りに多し、カイヨー、アノトオ、リボー共に好候補たり、唯だ前の二者は私德に於て、後者は公德に於て多少の批難を免れ難し、過去に於て惡經驗を有する佛國民は、最早や寸毫にても德義上の批難を默過すること能はざる也、玆に於て乎幸運は五十三歳の法學者兼文章家の頭上に宿るに至れる也、

二

然らば則ちポアンカレーとは如何なる人ぞ、

彼は一八六〇年佛國バル、ル、デュークに生る、巴里大學に學び、辯護士となり、二十七歳の時選ばれて下院に入り、次て下院副議長となる、間も無く上院に轉じ、三十三歳の時文相に任ぜられ爾後藏相たること二回、文相たること一回、首相たること一回なりき、然かも彼は辯護士として名聲最も高く、昨年首相就任の際に於ける佛國最大の辯護士事務所は實に彼の事務所なりしと云ふ。即ち彼は昨年二十五萬圓の年收を抛つて年俸二萬圓の首相となりたる也、

左れど彼の長所は法律のみにあらず、文章に巧みに名著若干あり、故に先きに佛國學士院會員に擧げられたり、彼は朗々玉を轉がすの美音なれども、論理井然、且つ音聲高く、群衆喧噪の裡、能く其所說を聞かしむるの長所あり、是雄辯家の名ある所以ならん、然かも彼の美點は人物の高潔なるに在り、政治的理想の遠大なるに在り、政見の穩健なるに在り、之に加ふるに、手腕の卓拔なるものあるに在り、彼が勢力微弱なる進步黨の一員を以て、後進の身を以て、前首相ブルジョワ、同ブリアン等諸先輩を其內閣の一員たらしむるを得たるが如き、實に其人物の優美崇高にして、其政見の中正不偏なるに基因せずんばあらず、今回の當選亦固より然り、唯だ彼が政見、過激派を容れざりしが爲め、クレマンソォ一派の反抗を買ひたりと雖も、其罪寧ろ彼にあらずしてク氏に在るは、後者の平生に徵して疑ひを容れず、誰か之を以て彼を咎むるの愚をなさん哉、

之を要するに佛國民は好箇の新大統領を得たりと言ふ可し、而して亦た大に喜ぶ可きは、其の英佛露の關係の改善に貢献す可きこと是也、ポ氏深く外交に通じ平素三國協商の繼續を以て歐洲平和の基礎となす、是れ過去一年間首相兼外相として宣明せる所に照して明かなり、佛國大統領は米國大統領と異り、親しく政治を

左右する黨首にあらずと雖も、獨り外交に關しては活動の實例枚擧に遑あらず、況んやポアンカレー氏の如き雄腕の傑物に於てをや、從つて英佛露三國協商の前途は少くとも佛國の關する限りに於て、有望なりと言はざる可からず、同時に日佛兩國關係の將來も亦恐らくは同じく有望なる可きを疑はざる也、

英國の二大事件

一月の英國政界は二箇の重大事件に際會したり、自由黨の意氣俄かに之が爲めに揚り、統一黨の氣勢俄かに之が爲めに衰へぬ、二箇の重大事件とは何ぞ、曰く統一黨首領ボナー、ロー氏が關税改革問題につき北部の不平黨に降服したること其一、曰く愛蘭自治案の下院通過其二、

抑も統一黨內にはチェムバレーン派と非チェムバレーン派とあり、前者は由來保護關税の主張に傾けるに加へ、殊に英帝國統一の一策として、英國殖民地より來る產物に關税上特別待遇を與へんことを主張す、即ち其欲する所は、英國をして今日の自由貿易主義を放棄し、外國貨物に課税せしめ、以て殖民地貨物に特別の恩惠を與ふる機會を造らんとするに在り、後者は之に反し、自由黨程にはあらざれども比較的自由貿易主義に近く、就中外國食料品の課税に反對す、此兩派の爭ひは、實に一九〇五年バルフォル內閣の瓦解を促したる所以にして、爲めに一九一〇年總選擧の際の如き同黨領袖バルフォル氏は『關税改革は之を人民の直接投票に問ひて決定す可し』と聲明し、以て兩派の軋轢を防止したる程なりき、

然るに一昨年バルフォル氏退隱、ボナー、ロー氏代りて統一黨首領となる、ロー氏は熱心なる關税改革派也、依つて昨年十二月アシュトン、アンダー、リンに於て演說して曰く『我黨若し內閣を乘取らんか、殖民地の希望次第に依りては、外國食料品に課税す可し』と、食料課税反對論者は此說を耳にして狼狽しぬ、攻擊の聲は囂々として起りぬ、一月に入り彼等は一致團結首領ボナー、ロー氏宛の覺書に調印しぬ、その覺書の內容に曰く食料課税問題は第二度目の總選擧に訴へて之を決せよと、即ち彼等は殖民地の希望に依りて食料課税問題を決せんと言ふ首領の說を非認し、總選擧に於て人民の意見に徵せんことを主張し、然かも其機會を延期して第二の總選擧に於てせんことを求めたり

き、然るに首領は一月中旬迄に此提議を容るゝの止む無きに至りし也、

　思ふに英國が加奈陀及諸殖民地より輸入するものは重に食料品なるに、外國食料品課税行はれずとせば、所謂殖民地特惠策は、大部分空言に止らん、茲に於て誰か亦たボ氏の苦衷を憐み、統一黨の難境を憐まざらん哉、

　次ぎに注意す可きは、同國下院が一月十六日夜二百五十八對三百六十八の多數を以て愛蘭自治案を通過したることと是也、愛蘭自由黨は本誌昨年六月號に詳か也敢て茲に贅せず、然かも同問題は一八八六年グラッドストン内閣の顚覆を促がし、一八九二年又々ダ氏第二次自由黨内閣の辭職を來したるもの、自由黨に執りては、實に最大の事業の一に外ならず、而して昨年十一月同案中財政規定に關して一たび下院に敗れ、人漸く自由黨内閣の鼎の輕重を問はんとするものあるに至れるに、漸くにして此吉報に接す、同黨領袖の欣喜幾許ぞや、

　吾人は以上の二大事件の結果、自由黨内閣の地位が稍鞏固となりたるを疑はず、蓋し十一月迄自由黨を惱ましたる内訌は、統一黨に移り、其主張を鼠色となし終れる折柄、更らに新勝利を博するを得たるもの、何等の幸運ぞ、然かも是れ勢也、アスキス首相の功にあらず、ロイドジョルジ藏相の功にあらざる也

獨逸外相長逝

獨逸外相キデルレン、ウエヒテル氏、十二月三十日を以てスツットガルトに長逝す、スツットガルトは君が四十五年前誕生せる所、短命夭折は則ち惜む可しと雖も、人事匆忙の裏、幸ひに故郷に死するを得たるに至ては、寧ろ一大本懐にあらずや、

　然かも獨逸帝國の外交より言はん乎、君の喪失は無上の喪失也、蓋し君や思慮周到、張子房の略を有せるのみならず、事に臨みて遲疑逡巡せず、勝敗を一時に決するの實行的手腕、亦韓信に劣らざるものありき、就中其二年前迄ブカレスト駐箚獨逸大使として、巧みに羅馬尼亞を藥籠中の物となし、之を三國同盟の隸屬者となし終りたるが如き、其排露熱を鼓吹したるが如き將た外相就任以後、巴爾幹に活躍せるが如き、天下の知る所、何んぞ吾人の呶々を要せんや、

　遮莫君が逝去は、歐洲若くは世界の平和より見て、

必らずしも憂ふ可きにあらざるが如し、他無し、其後任と定められたる、現駐伊大使ファオン、ヤゴウ氏に至ては、是親英的傾向強き外交家、それ或は對英政策に於て見る可きの効績あらん、英獨の平和はやがて歐洲の平和也、歐洲の平和はやがて世界の平和也、

是何事ぞや

一月中旬、西班牙皇帝アルフォンソ十三世、共和黨領袖數名に謁見を賜ひ、領袖等若干の社會改良實行を條件とし、現政府を支持することを誓約したりと。

如何に西班牙國とは言へ、妥協も茲に至つて亦た甚しきに過ぎたらずや、夫れ共和黨は帝政顚覆を以て目的とするもの、唯だ時機未だ至らざるが故に、一時雌伏するの策を執れるのみ、之と陰然妥協するが如きは猶可也、白晝公然、帝王の尊を以て謀叛人を引見するに及んでは、ブルボン王家の面目それ孰くにか在る、

殊に驚く可きは、首相ロマノネス氏の措置是也、氏は極端なる共和黨反對家、一九一〇年二月モーレツト内閣が共和黨に接近せるを理由として之を顚覆したる張本人にはあらざりし乎、君子豹變の美か、君子豹變の美か、君子の多きは西班牙永遠の幸福にあらざる可し。

印度形勢の樂觀

印度總督ハルヂング男、十二月末デリー印度遷都式に際し、革命黨の爆裂彈に傷く、倫敦タイムス論じて曰く吾人が注意す可き要點は、兇漢が爆裂彈を投じたることにあらず、寧ろ總督の負傷が危險ならずと發表せられたる時、印度王侯貴人が欣躍歡呼したることに在りと、

是明かに印度形勢の樂觀也、然かも其樂觀や悲しき樂觀也、

本號の頁數豫定より超過せる爲め新刊批評は全部之を次號に廻したり此旨新刊書寄贈者にお斷りしおく

岡崎雪聲先生畢生の傑作

故乃木將軍鑄銅胸像の提供

美術界に嘖々の名聲を馳せる鑄金大家岡崎雪聲先生が其愛婿渡邊長男氏と共に學習院に於て同院教授諸氏の熱誠なる鑑査の下に粉骨の赤誠を捧げて製作せられたる故乃木將軍閣下の胸像は考證の密描寫の妙共に冠絶する逸品にして絶代の忠雄乃木將軍の英姿を千歳に傳ふべき至善至高の美術的影像として各新聞紙上筆を揃へて賞賛せられたる所也

就中深刻幽遠なる彫刻の美は青銅の色彩と相俟て一種崇高の氣を湛へ高傑なる閣下の風格と溫乎たる性情を偲はしむる所恰も生ける將軍に接するの感あらしめ追慕の念をして更に一層深からしむるものあり蓋し一基の胸像克く幾百卷の傳記に勝り遙に甚大なる教訓と痛切なる感慨を與ふるに充分也

賢くも伏見宮家　北白川宮家　東久邇宮家の皇族を始め奉り徳川侯爵家三井宗家東北帝國大學第十三師團司令部學習院其他全國各地方官公衙學校等の御買上を蒙り大隈伯の如き之を以て精神教育上無比の參考品として賞揚せられ偕行社本部に於ても各地方在鄉軍人分會へ推薦せられたるに徵しても其眞價を推知するに難からず

而も弊店の提供價格は眞に是れ實費の例外的廉價にして千金を以てするも容易に購ひ得ざる雪聲先生の傑作を極めて僅少なる代價を以て購求し得べき空前の機會に外ならず弊店は遠隔の希望者にして實物を見る便宜を有せざる諸君の爲に特に審美書院印刷に係るコロタイプ版美麗寫眞見本並に說明書無代にて送呈すべし

弊店が此の如き例外的特價を以て申込に應じ得べき數は極めて少數なるが故に機會を捕ふるに敏なる諸君は此際即時申込まるべし



頒布實費

● 第一號 高サ八寸 壹體箱共 金拾五圓也

● 第二號 高サ一尺 岡崎先生箱書付 金二拾五圓也

● 第三號 高サ一尺五寸 岡崎先生箱書付 金七拾五圓也

寫眞見本並に說明書は申越次第送呈

運賃 一號五十錢 二三號七十錢 申受

（中付の一）

頒布元 東京銀座尾張町二丁目十三番地 中村美術店 電話新橋二五三〇番 振替口座東京九三二三番


活世界に行く人！
同じ様に學問もあり、才もあり、經驗もあつて一人はズン〱光明に向つて進んでゆくのに……一人は後に〱と殘るのみか、却つて暗い〱方へと進んでゆく……この源因は何處にあらう？
曰はく……健康!!と……
虚弱!!
Somatose.
ソマトーゼ
全世界に著明なる滋養强壯劑ソマトーゼは食慾消化を進め、體量を增加し、元氣を旺盛にする故に虚弱者、衰弱者、精神過勞者に對する唯一の保護者なり
發賣元
バイエル會社
横濱市山下町一八三
神戸市明石町四七

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 吉田東伍新著

倒敘日本史

◀ 豫約出版 ▶

申込期限 三月末日【見本】申込次第送呈

全部拾卷 菊版布製舶來紙刷堅牢美裝 紙數四千餘頁（送本）四月より毎月二冊

歷史界に**雷名**高き**吉田博士**の最近著たる本書は其**形式**に於ても其**内容**に於ても凡て既出國史の**缺陷**を補ひ史學の**一大革新**を期して出づ**既出**の**歷史**は凡て上代に起筆し**學堂**の**教授**亦上代に開講す故に學堂に在ては歷史中殊に必要なる**近代史**に入らずして教授時間の盡くるを常とし史學專攻學者の間に在つては上代に精にして近代に粗なるを常とす**バルカン問題**の由來を解せざる西洋史家の多き若くは**元明**以下**徳川**以下の史變を知らざる東洋史家の多き畢竟之が爲に外ならず是れ本書が修史上の在來の形式を打破して**時代倒敘**の**新機軸**を出だし**最近明治**の國勢發展編、憲法制定編に起筆して上代に溯り殊に**近今代**の**精敘**に力を致して上下三千歲の國史を大成せる所以なり既出の國史には戰爭等の花々しき事項の詳細なるに反して**政治、經濟、社會**等の**人生**に**緊切**なる事項却て閑却せられたり是れ實に國史の大缺陷とす故に博士の本書を著すや企及し得ざる**銳利**の**觀察**を以て**埋沒**せる**秘密**を闡明し既出國史に缺如せる**新方面**の**研究**を發表して國史の面目を一新し遂に四千頁の大冊をなすに至る眞に**空前**の國史と謂ふべし其詳細は請ふ之を**見本**に徵せよ

豫約價

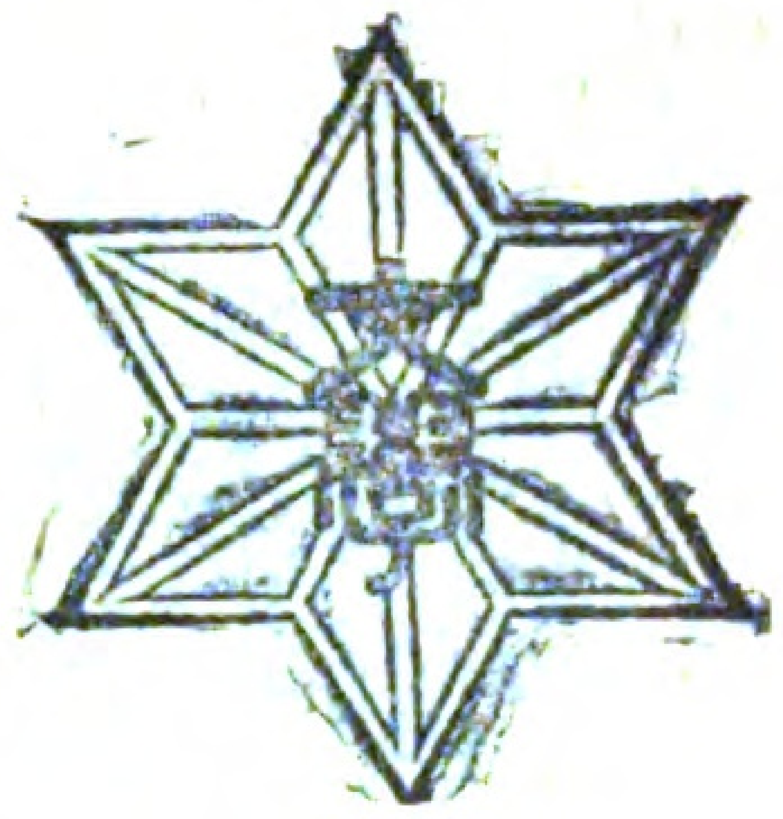
甲種（即納）	金八圓五拾錢
乙種（五回分納）	金拾圓

送料

	一回	全部
東京市内	四錢	二十錢
内地	十三錢	六十五錢
支鮮樺臺	四十二錢	二圓十錢

豫約元 牛込早稻田 **早稻田大學出版部** 取次所 全國各書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



本會員帽章



本會員徽章

文學講義錄

第四回新學期開講

此際入會者に限り種々の大特典を與ふ!!!

「本會に入會すれば」

本會員には大家の所論と會員の作品を滿載せる機關雜誌新文學を無代進呈す◉本會員には文章其の他無料添削の特典を與ふ◉本會員には各種の大特典を與ふ◉本會卒業生には學資貸與の特典あり◉本會卒業生には各新聞雜誌記者其の他に就職紹介の便宜を與ふ◉本會卒業生を會友とし會員同樣種々の便宜特典を與ふ◉教授法の最新講義の平易會費低廉短期の卒業之本會員の常に多とする所なり

講義錄見本附き
無代進呈
規則書申込次第

初等科 五ヶ月卒業

教授科目

論文、小說、新體詩、和歌、俳句、書簡文。國文。漢文。外國文學。日本文學。文學概論。新聞學。日本文典。創作百話。添削實例。雜科

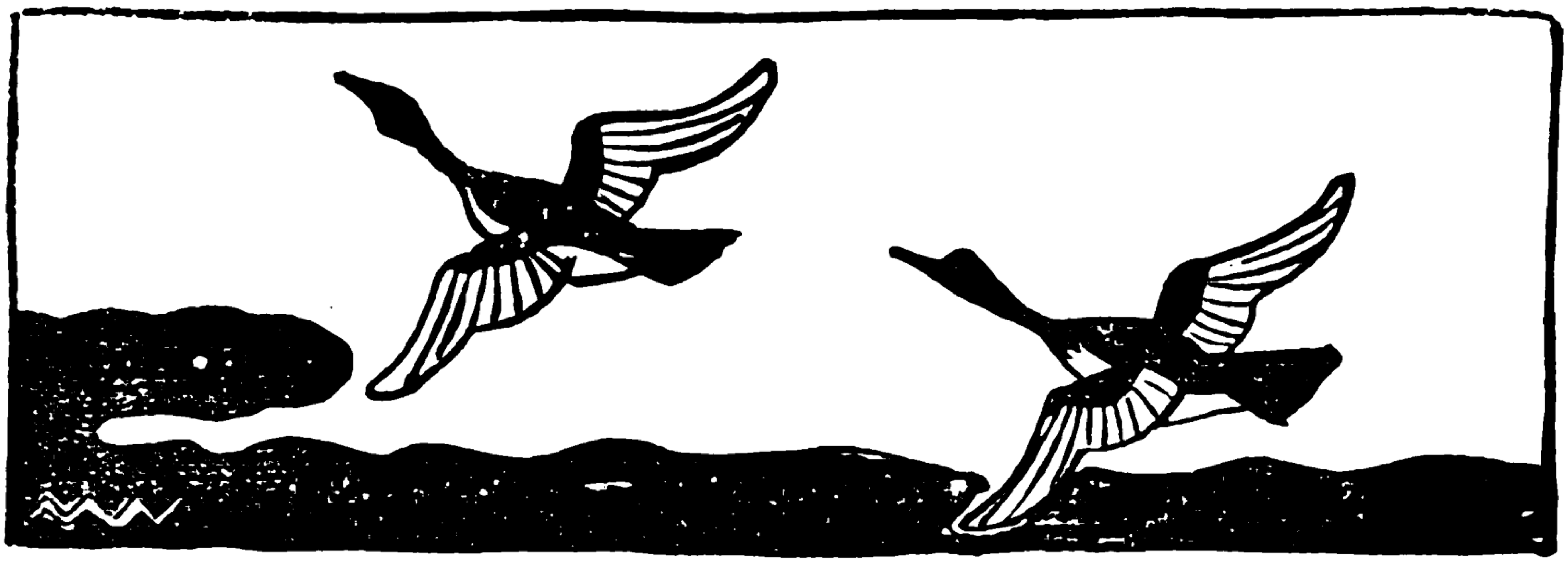
高等科 五ヶ月卒業

教授科目

近世文藝思潮史。藝術概論。哲學汎論。詩歌論。演劇通論。明治小說史。各國文學史。文章術。近世々界文豪傳。名著梗概。名文評釋。創作百講。

東京神田西小川町（電話本局四五四七番 振替東京五二一九番）

大日本文學會



沈默

島崎藤村

勝田君、すこし君の話をさせて呉れ給へ。妙な人を引合に出すやうだが、僕の兄貴の友達に和久井さんといふ人が有つた。兄貴の話に、和久井は奇體な男だ、是方が得意で居る時には決して寄り付きもしなければ訪ねても來ない、逆境と成ると『奈何だい』なんて言葉を掛けて訪ねて來る、和久井は左樣いふ男だと兄貴が言つた。丁度君がそれに似て居ると思ふ。勿論、君は君、和久井さんは和久井さんで、それに兄貴の話した場合と僕の言ふ意味とは違ふが、どうも其樣な風に思はれて成らない。

僕は君のことを忘れて過す月日もある。思ひ出さないことも多い。しかし、どうかすると君がこつそり遣つて來て細々と話相手に成つて呉れるやうな氣が

する

勝田君、斯様なことを僕が言出したところで君は何事も答へる人では無い。君と僕との隔りは死んだ者と生きて居る者との隔りだ。丁度君が病氣で亡くなつた時は、僕は東京に居なかつたから、君の葬式にも行かなかつた。鈴木君は感心さね。どつと君が牀に就いてからもよく訪ねて行つたといふでは無いか。君が死んだ後でも、いろ〱世話をしたよ。僕は鈴木君が雑誌に出した話を讀んで、君が病床の光景や、葬式の時の樣子を後で知つた。君の晩年に、ホラ、君の側で世話をした女の人——あの人に君が他から見舞の牛乳だか藥だかを取寄せさせて、鈴木君達の居るところで、君はそれを細い管で吸つて見せて、どうせ助かる見込の無い枕頭でも君は他人の厚意を無にすまいとするやうに、細い心づかひをしたといふでは無いか。鈴木君は近頃に成つて復た君の話をある雑誌に載せた。その中に君の葬式のことが出て居た。君の時ほど寂しい葬式を送つたことも無いが、又、あれほど人の死んだのを送つて行くといふ氣のしたことも無い、としてあつた。鈴木君の話は短いが、感じはよく出て居た。君の葬式はさも有つたらうと思ふ。たしか君の死體は火葬場の方へ送られて燒かれたやうに覺えて居る。君の戒名は寺島さんが撰んで、いかにも君に適はしいものが命いた。そのことは鈴木君も言つて居た．沈默：沈默：：君にあるものは唯沈默だ：：君は最早永遠に無言な人だ：：しかし勝田君、君が笑ふことも怒ることも出來た時分よりは反つて今に成つて餘計に君が僕に物を言ふとは、不思儀ではないか：：

勝田君、人は到底沈默に堪へられるものでは無い、僕はよく左樣思ふね。あの寂しい修道院の中に住

んて、牛を飼つたり野原を開拓したりしながら無言の行をやるといふトラピストの僧侶達ですら、必とお腹の中で叫ばずには居られなからうと思ふ。いつぞやも鈴木君が僕のところへ來て、あの話上手な人が、自分ほど物を言つて居ながら、これで何事も言はないやうな氣もするといふ話が出た。そりや左樣だらう、僕なぞも言ひたいことがムヅ〳〵するほど有つて、こいつを言つたらさぞ胸がスッとするだらうと思ふやうな時でも、さて口に出して見ると、何時でも後でボンヤリして了ふ。心が默つてる。でも、どうかすると獨語を言つて居て、自分で氣がついて噴飯すことがある。その話を鈴木君にしたら、

『獨語は僕もよく言ふよ。』

と言つて鈴木君も笑つた。

勝田君、君が僕のところへ遣つて來て呉れるのは、多く斯ういふ時だ。日がな一日佗しい單調な物音が部屋の障子に響いて來たり、果しもないやうな寂寞に閉される思をしたりして、しばらく人も訪ねず、日のあたつた黄色い壁なぞを慰みに獨りで靜かに座つて居るやうな時が有ると、復た君が細そりと背の高い體軀に黒い木綿の紋付羽織なぞを着て遣つて來て、何年となく忘れて居た僕の前に座つて、白い、神經質らしい、しかし器用な感じのする手で、長く垂れ下つた額の髮を掻き分けながら、

『苦髮樂爪とも言ふし、樂髮苦爪とも言ふね。』

そんな調子で君が話しかけて呉れやうとは思ひがけなかつた。

勝田君、初めて僕が君の手紙を見たのは築地の佐藤君の家の二階だつた。そりや君の名前は疾うから

聞いて居たさ。まだ君に逢はない前のことさ。君は小竹君の許へ會見を申込んだことが有るだらう。あの手紙を僕が封を切つて讀んだ。あの時分に僕等は鈴木君や佐藤君や小竹君なぞと一緒て雜誌を出して居たから、てつきり是は僕等の社の方へ來たんだ、左樣僕は一圖に思ひ込んで了つた。讀んで見ると、君から小竹君への私信だ。彼樣なそゝつかしいことをしたと思つたことは無いよ。丁度小竹君が佐藤君の家の二階へ見えたから、僕は顏を紅くして散々あやまると、小竹君はまた小竹君だ、僕等から見れば細君もあり子もある位の人だから、

「なあに、ラバアからでも來たんぢや有るまいし――」

左樣言つて、小竹君は輕く笑つて、君からの手紙を受取つた。

あの時は伊勢町の明石君も來て居た。君とラバア――小竹君の言草が面白いと言つて、明石君は手を打つて笑つた。小竹君は若い時から直く左樣いふところへ氣が付いたからね。

「小竹君――どうだつたね、勝田君に逢つて見て。」

と後で僕が聞いて見た。君と小竹君と顏を合せるといふのは餘程僕等の好奇心を引いた。君もまた小竹君の家へ行つて隨分默つて座り込んで居たと見えるね。多分君が小竹君に逢つたのは彼の時が最初で、そして終だつたらう。

小竹君は君を認めた一人だ。僕は左樣思ふ。その證據には、小竹君が君のことを書いたものを見ると分る。君もあれを讀んでから逢つて見る氣に成つたのだらう。まあ大抵のものなら、自分を認めて呉れ

たと思ふやうな人に對して、攻擊の態度には出ない。ところが君は激しい。君は後で小竹君のことを何と言つたね。小竹なぞは自分が泥溝の中へ陷沒ちて居て、他まで陷沒ちると言つて叫んで居る手合だ。眞實に、君には讓步といふことが殆んど無いのだね。君はまた彼の時分に羽振の好かつた人をつかまへて、毒吐いたことが有るだらう。比喩だなんて、何だ、これは。類の無い大きな鼬鼠を御覽じろと言ふから、見世物小屋へ入つて見ると、三尺ばかりの板に血を塗つて、それ鼬鼠〳〵と言ふやうなものだ。君のはあの調子だ。

去年の春、僕はある雜誌に君の話をして、もつと君は認められても好かつた人だ、君は誤解された人だ、反抗の心に充ち溢れて居た君はどうかすると忿怒をもつて世の誤解に酬ひた、これがます〳〵君の誤解された所以だと言つた。君の江戸趣味は迎へられても、君の神經質は世に容れられないものかも知れない。

勝田君、君の知つて居る頃から見ると、僕もこれで種々な話をするやうに成つたらう。一時は隨分僕も默つて居る方だつたからね。あの時分に今の僕だつたら、あるひは今日まで君があの時分の元氣で居たら、左樣思ふのが斯の生涯だらうか。そんな風にしてすべての知人や、朋友や、親戚や、それから情人などが過ぎ行くのだらうか。

もし、假りに君が斯の世に生きながらへて居るとしたら、奈何なものだらう。恐らく僕は君に面と向つて斯樣な風には話せまい。昔は僕も長い〳〵手紙なぞをよく書いたものだが、年月の經つに隨つて段

々短く成つて來た。用だけしか書かなく成つた。それも葉書で濟ませるところは成るべく簡短に。君から貰ふとしても、例の細い、特色のある字で、鈴木君と一緒に飯を食つてるが、やつて來ないか位に過ぎなからう。そこへ僕が出掛けて行つたとして、精々機嫌の好い君の口唇から酒の上の小歌の一つも聞いて、ヨウ／＼めづらしく出ましたねなぞと串談半分に戯れるに過ぎなからう。君が料理の通を振廻したところで、僕は聞いて居ることも有り、聞いて居ないことも有る。君は君で食ひ、僕は僕で食ふ。君は僕を奴隷にし、僕を弄び、僕の生命にまで食ひ入らずには置かなからう。それなら、もう澤山だ。

だから僕は死んだ君がやつて來て、しみ／＼と物を言つて呉れる方が可懷しい。孤獨の幻。今といふ今は何事でも自分の言ひたいと思ふことが自由に君に言へる。

君が知つて居る大學生で山村君といふ人が有つたらう。彼の若々しい眼ざしは君の記憶にもあるだらう。あの人も出世した。今では立派な御役人だ。しばらく僕も引込みきりで居るものだから、正月は一つ種々な家を訪ねて見やうと思つて、新年早々親戚廻りをして、根岸から谷中を通つて不忍の池の端へ出、あれから本郷へかへつて牛込にある親戚の家まで行つた。暮から降つた雪は殘つて、山の手の樹木の間から眺めて行つた時は、平素隱れて氣のつかないやうな、町々の屋根も白く顯はれ、何となく都會の眺望を變へて見せた。丁度山村君の家へも近かつたら、寄つて、二人で庭を眺めながら途次見て來た話をしやうとすると、柔い雪の印象の大部分は逃げて行つて了つた。どうも仕方の無いものだと僕は思つた。鈴木君も今では牛込の方だ。そこへも訪ねたいとは思つたが、日は短し、暮方で寒くは成つて來るし、

それぎりにして家の方へ歸つて行つた。御茶の水橋にさし掛つた。湯島の方から見ると、白々と雪の積つた駿河臺が甲武線の石垣のところでクッキリと黒く落ちて居て、まるで大きな城郭を望むやうに思はれた。あの雪の中についた線、石垣の色、薄くて暗い町々のゴチャ〱と面白い眺望は、死んで居る君にでも話さなければ、とても生きて居る君なぞに話さうとしたところで、言へもしない。僕の見る光は君の見る光……僕の感ずる空氣は君の感ずる空氣……あの時、僕は死んだ甥のことも胸に浮べて、甥に斯の景色を見せたら、と思つた……君は知るまいが、僕はあの甥の眼を見るやうな氣もした……

勝田君、僕が本郷の森川町に居た時分には君もよく遣つて來たね。あの古い庭に向いた部屋を借りて居た時分が、そも〱君が僕のところへ來始めた頃ではないか。

森川町には僕の學校友達が居る。あの友達のところへ僕が金を借りに行つた時、

「ほんとに貧乏な連中ばかりだなあ。何處を見渡したつて、金の有りさうな友達は一人も居やしない。」

斯う憐むやうに言つて、それからあの友達は君の噂もして、

「勝田には君、用心して交際ひ給へ。ウッカリすると彼の男には酷い目に逢ふぜ。」

左様言ひながら快よく金を出して貸して呉れた。

君が惡人だといふ評判の傳はつて居ることを、僕は全く君に關係の無いあの友達の家へ行つて知つた。

佐藤君や鈴木君に君が交際するやうに成つたのも、あの頃だらう。

「でも、勝田のやうに捨鉢に成れゝば、あれも亦た面白い。ナカ〱彼樣は成れないものだよ。」

斯う佐藤君なぞは一方で君のことを言つて居た。僕等と違つて、君は疾くに一家を成して好い年配だつたのに、相變らず妻も迎へず、釜土も持たず、下宿の二階に臥たり起きたりして居た。その中で、君が自分の弟に學資を貢いで勉强させて居たことなぞを知るものは、恐らく少數の人の間だけだつたらう。

君は僕が借りて居る部屋の外を廻つて、庭から上つて來て、時には長いこと默つて座つて居た。よく彼樣に默つて人の部屋に居られると思ふほど默つて居た。

僕の貧しい本棚には種々な書籍が雜然と並べてあつた。君はそれを眺めて居て、

「和洋折衷だね。」

何か君は言つて見なければ蟲の納まらない人だ。

「ホ、萬葉集が有るね。一つ借りて行つて見るか。」

と言つて君は僕のところから持つて行つたことも有るが、しかし僕が知つてからの君は讀むことはあまりしなかつたやうだね。

「本なんか讀んだつて、讀まないたつて、同じだ。」

左樣いふことの言へる君の下宿へ大學生なぞが押し掛けて行つて、君にカブれて歸つて來るのを見た時は、確かに君はエライと思つたよ。

君は一度來出すと、續けて何度も何度も來るが、來ないと成るとバッタリ來ない。ある日も庭から僕の部屋へ上つて、誰かの噂をした後で、

「話せないやうな人間なら、玩弄物にでもするより外に仕方がない。」

直ぐに左様だ。何だか君が薄氣味惡く成つて來たことも有つた。

「君は僕を弄ぶつもりかい。」

と僕が言つたら、君は笑つて居たてはないか。

君も異人には感心したと見える。君が木村さんのところへ行つて、「ファウスト」の梗概を聞いて來た時には、全く君も感心した顏付て、

「どうも異人はエライ。彼樣いふことを考へてる――實は僕も、惡魔といふものを書いて見たいと思つたが、異人はもう疾くにそれを遣つてる。」

全く西洋の書籍に親まなかつた君が斯ういふことを言ふかと思ふと、僕は面白いと思つた。ほんとに、君が小竹君だけの西洋の學問をして居たら、同じ君の洒落でも、もつと〳〵違つた言ひ廻しが出來たらうに。

「どうせ人間は一度は墮落する。同じ墮落するものなら、一人でも道連のある方が好い――」

「それて君は僕のところへ遣つて來るのかい。」

あの時の話には思はず君も苦笑したつけ。

「僕は君、冷いかねえ――世間ではよく其樣なことを言つて僕を攻撃するが。」

と君が言葉を繼いて、輝いた眼て僕の方を見た時は、僕のところへ話し込みに來る君の心がいくらか通

じたやうな氣もした。でも、僕には君が熱いとも冷いとも言へなかつた。君のは一緒こただから。
話の途中で、君は僕に紙を呉れと言つたらう。何をするのかと思つて僕が見て居たら、君はその紙を丁寧に細く疊んで、羽織の紐の乳のところに結び着けたらう。
「斯うして置けば大丈夫だ。」
と君は言つた。君は何か思出したことを後で忘れない爲に、さういふところへ細く氣の付く人だ。君の記憶力は非常に好かつた譯だ。
勝田君、君と佐藤君と僕と三人で目白の方まで歩きに行つたのは何時分だつたらう。あの時分の郊外は今から思ふと別の世界だ。目白には君の知らない學校などが建つし、家はドシ〳〵出來るし、驚くほどの開け方サ。あの日は隨分歩き廻つた。畠の中をぐる〳〵歩いたかと思ふと、杜のあるやうなところへも出たね。
君は人を馬鹿にして、
「深林の逍遙。」
すると佐藤君も噴飯して了つた。
世間見ずの僕には君の無遠慮な仕打が内々口惜しくて堪らなかつたから最初君に逢つた時分には「先生、先生」と君を呼ぶことにして居た。見給へ、君だつて「先生」と呼ばれてはあまり好い心地はしなかつたらう。だから僕はわざと呼んでやつた。斯の智慧は僕は小竹君から敎はつた。それを君に應用し

たのだ。尤も『先生』と呼ばれて君が迷惑するよりも、僕の方が先に草臥れた。郊外へ一緒に歩きに行く時分には、それは止しにした。

何處を奈何歩いたかと思ふほど歩き廻つて、僕等は赤羽の停車場へと出た。たしか左樣だつたらう。あの停車場は赤羽だつたらうと思ふ。乾いた土、葭簾掛の休茶屋なぞはまだ僕の眼にある。君は休茶屋に腰掛けて居る客を見つけて、しばらく話しに行つて、やがて復た佐藤君と僕の立つて居る方へ戻つて來た。あの時、葭簾の影から君を見送りながら出て來た客の姿を眺めて、僕は一代に盛名のあつた人の末路を見た。何となく人目を避けて居るらしく、可傷しく見えた。過ぎし春を忍ぶ老鶯の風情、僕は左樣思つた。でも君や僕等のやうな粗末な下駄は穿いて居なかつた。

『あんまり流行兒に成るから左樣だ。』

口にこそ出さなかつたが、君の眼付は確かに言つた。あの時ほど僕は君の平氣て居る樣子を見たことが無い。

佐藤君と言へば、あの溫厚な人が一頃書いたものは餘程激しいところを帶びて居た。一時は明石君や僕なぞと一緒にロセッチの愛の歌に讀み耽つた人が、

『ラブなんてものは飯を食ふやうなものだ、』

と言出して來た。その調子は一步〳〵君に近づいて行つたかとも思ふ。しかし、もと〳〵佐藤君と君とは足場が違ふ。君は愛を無視して掛つて居るし、佐藤君のは愛を看破しての論だ。だから佐藤君は左樣言

ふだけにして止めて置いた。

「ほんとに、勝田のは飯でも食ひに行くやうだ。」

と言つて、佐藤君は君の態度の冷靜なのに感心したやうに僕に話した。丁度禪宗の坊さんでも褒めるやうに。

勝田君、君が人を褒めたのをめつたに僕は聞かない。誰に新體詩が解るものかの、誰はまるで殿樣だの、君の眼中には殆んど人が無かつたやうだ。實際、君はまた左樣信じて立つて居たんだらうね。君も寺島さんだけは褒めた。「寺島は感心だよ、」とよく君は言つた。

「大抵のものは途中まで行けば引返さないが、寺島だけは引返す。」

佐藤君が君に感心したとは別の調子で、君は寺島さんに感心して僕に話した。

本郷は君の下宿のあるところで有りながら、君は酷く本郷を嫌つた。嫌ひながら住んで居たところが君だ。あの頃は僕等の仲間は大抵本郷に居た。

ある日、君は僕を誘ひに來て、一緒に大學の前へ出た。

「オイ、車夫、何處でも好いから本郷を離れて吳れ。」

と君が辻待の車夫に言ひ付けて車賃も定めずに引出させやうとした時は、車夫は酷く面喰つた顏付て、

「旦那、何方へ參りませう。」

と言つて、車の上に乘つて居る僕等の顏を見上げたてはないか。

「何處でも好い。本郷を離れさへすれば好い。」

君の注文には車夫は一寸當惑の體で、僕等二人を乘せながら梶棒を揚げた。二人乘といふ車はあの時分には簡便なものだつた。

君はよく彼様いふ氣紛れなことをやつたね。車夫は本郷の通を引いて行つて、やがて切通坂を下りた。あの時、君が僕を案内して呉れたは隅田川の見える前川の下座敷だつた。あの駒形の鰻屋は僕は初めてだ。もう夕方で、燈火が點いた。女中が注文を聞きに來た。左樣、左樣、君は懷中をさぐつて、これで鰻を燒いて呉れと言ひながら紙幣を女中に渡したらう。一寸したことだが君の遣り方だ。

前川を出た頃は暗かつた。

「――そこいらをブラ〳〵歩かうぢやないか。」

と君が言ふから、僕も一緒に歩いて、淺草田町の蒲鉾屋の前あたりへ出た。一頃僕が三輪に住んだ時分はよくあの蒲鉾屋のある長い通から土手へかけて往來したものさ。寂しい貧しい感じのする、ところ〴〵に灯の泄れた、暗い人家の續いたところを横手に見て通つて、そのうちに明るい町へ出た。仁和賀のある頃には僕も三輪から踊り屋臺を見に歩き廻つたが、その見覺えのある高い幾層かの建物なぞが僕の眼に映つた。種々雜多な影が僕等の眼の前を往つたり來たりした。中には人の前に立つてはしこく案内顔に過ぎ行くものも有つた。君の洒落は宵闇と酒の醉とに紛れて入り込んで來たやうな人達だの、帽子面深に冠つた男だの、自分で自分のものを奈何使はうかと思案顔な若者だの、それらの人の中を極く

平氣で見て歩いた。あの時僕等は西鶴の物語なぞを引合に出して細い小路から小路へと話し〳〵見て廻つたてはないか。舊い芝居にでも有りそうな眩目しい色彩が行く先に展開したてはないか。時には格子先に取りついて人を呼ぶ鋭い聲を聞いたてはないか。散々君の御供をして歩き廻つて、終に淺草公園の方へ出た。君に言はせるとあれも矢張散歩かね。

駒形には君の死んだずつと後に成つて、僕の甥が住んだことがあつた。あの邊の町は君の氣に入りそうなところだ。あの古い鰻屋へも僕は行くことはあるが、いつでも二階の座敷へばかり通つて、欄から直ぐ下の棧橋に繋いであるいけす舟や、流れて行く川の水なぞを見ては歸つて來る。去年の八月のはじめ、法事の歸りに客と下座敷へ集つて見ると、そこが初めて君の案内して呉れた部屋らしいのさ。その時は佐藤君も來て呉れた。あの床の間から部屋の間取の工合から、そこに置いてある白い衝立の古風な錦繪まで、一切江戸づくめな夏座敷て、佐藤君と君の噂をした。隅田川も最早君が知つて居る時分の隅田川ては無い。白魚も居ない。でも涼しい川風は座敷の内へ通つて來た。瀟洒なとは言つても、今の都會風の建て方から見ると、どこか無骨な、ガッシリとしたところが有る。彼樣いふ純粋な江戸風の殘つた家は今ては東京の中でも左樣たんと有るまいと思ふよ。

勝田君、君には諸方の飲食店へ連れて行つて貰つたね。いつでも君にばかり奢らせた。君は殆んど僕の方て金を出さうとする餘地すらも與へなかつた。左樣言へば、鈴木君や佐藤君と四人連て、公園て柔い牛肉を煮て食つたことが有るてはないか。ヂリ〳〵甘そうな音のする中て、煮へるそばから氣の立つ

やうなやつを皆な盛んに食つた。二人づゝ牛鍋を控えて、鈴木君は佐藤君とさしむかひ、君は僕とさしむかひだつた。見て居ると、君は食ふばかりでなく煮るのが樂みといふ風で、白い葱を鍋の片隅に丁寧に積上げて見たり、白瀧は白瀧、燒豆腐は燒豆腐とそれ〴〵寄せて煮し、紅い生の肉が段々色の變つて來るのをヂッと見て居たりした。あれから僕等は二人づゝ車で本郷の方へ歸つて行つた。あの時は僕はすこしばかりの酒に苦しく成つて來て、君と一緒に乘つた車の上で吐瀉したことが有つた。

しかし勝田君、あの時分の血氣壯んな群の中に君を置いて考へるといふことは面白い。佐藤君の下宿へはよく連中が集つて話したが、どうかすると君は默つて……氣味の惡いほど默つて、佐藤君の黄色い机の側に座りながら皆なの話を聞いて居た。山村君などは大學の帽子を手にしてやつて來て、若々しい調子で話し込んだ時はそこに居るものゝ耳を傾けさせずには置かなかつた。

默つて山村君の話なぞを聞いて居た君は終に何を言出すかと思ふと、

『さん〴〵物を思ひ給へ。』

それが君の言草だ。

何時だつたかも、山村君は君の噂をして、僕に向つて、

『あの勝田君の眼を見給へ——あんな恐しい眼が有らうか。』

と言つたことが有る。

君のやうに靜かに、しかも確かに斯の世を歩いて行つた人を僕はあまり見掛けない。——どうかする

と、音もしないほど靜かに――忍び足で――

その調子で君は椎名のお茂さんの家へも訪れて行つたのだらう。

「まあ後學の爲だと思つて、一緒に來て見給へ。」

なんて君が僕を誘ひに來て言つて、夜更けて椎名の家の戸を叩いたことが有るてはないか。

お茂さんはあの時奈何して居たらう。もう病氣で亡くなつた後だつたらうか。左樣だ。居ない筈だ。

お母さんとお菊さんとから僕等は何か御馳走に成つた。

「ほんとに勝田さんは面白い。」

とお母さんが言つたことを僕は覺えて居る。椎名の家のためには多少君も迷惑を掛けたことも有らうが、しかし盡したこともよく盡したね。

お茂さんの葬式を出すといふ前の日かに僕は一寸椎名の家へ弔みを言ひに行つた。なんでも君が怒つて了つて手が着けられない、と言つてお菊さんは途方に暮れて居る。そこへ僕は飛び込んで行つた。話を聞いて居るうちに、露西亞煙草の粉が膝へ落ちて、僕の着物へは燒穴が出來た。では奈何すれば可いと言ふんですか、兎に角出すものは出すやうにするが好いぢや有りませんかと僕が聞いたら、女の一量見にも行かないとお菊さんが言ふものだから、その足で僕は君の下宿へ行つて見ると、君は君で勝手にするが好いといふ顏付で、說が行はれなければ退くより外は無いと言つて居る。それから僕は君を椎名の家へ引張つて行つて、お茂さんの棺の置いてある側で、君等の間へ入つたことが有つた。

それぎり僕は君等の處置に任せて置いて、口嘴を容れなかつたが、後に成つて君が僕のところへ來て、

『印紙の貼りッ放しはヒドい。』

と言つて笑つたらう。

あゝこれ、僕はお菊さん達の女らしい、自然なところかとも思ふよ。年を取つたお母さんのことも考へて見給へ。女ばかりの世帶でよくあれまでにやつたと思ふね。

勝田君、君は僕の家で新花町の角へ引移つてから訪ねて來たことが有らう。君が來て話して行つた隣の部屋には年增の女の笑ひ聲がした筈だが、君は氣が着かなかつたか。田舍の女には似合はないほどの洒落者だ。

『どうして、彼の人は苦勞人だ……』

と君が行つた後で、その女が君のことを評したよ。見る人が見れば、左樣いふものかしら、と僕は思つた。苦勞にも、君、いろ／＼有るから。

僕はあらゆる藝術を味へるだけ味はうといふやうな若い量見をもつて、いくらか取つて居た教師を辭し、東北の方から歸つてもう一度一書生の身に返つた。それが初めて君に逢つた頃の僕さ。僕がヴアザリの美術史などを開けて以太利の文藝復興期時代の文學と繪畫の關係を尋ねたいと思つたは、もうずつと以前からだ。詩人であると同時に美術家であつたP.R.B.社中の運動などは餘計に斯の心を深くさせた。君に逢つた頃はまた、しきりに文學と音樂とを並べて考へたい時代で、シユウマンの「音樂と音樂者」な

ぞはあの當時僕が讀み耽つた書籍の一つだ。一度思ひ立つたことは兎も角もそれを試みないでは居られないのが僕の性分だ。そこで僕は音樂の世界へもいくらか足を踏み入れた。僕は上野の音樂學校でそこに藏つてある圖書を獵ることを許された。バハの傳などが有つて、借りて讀んで見た。

斯ういふ僕の位置は我儘な氣樂なやうでも、苦しいことも多かつた。僕はあまり自分の爲たいことを爲ると言つて非難されると同時に、一方では眞實に自分をショパンやワグネルまで連れて行つて呉れるやうな人も見當らなかつたから。

もし僕が金に窮るやうなら助けやうか、と君が佐藤君を通して言つて寄して呉れたのも、あの新花町に母や兄と一緒に居た頃だつた。そりや君の厚意は感謝したさ。けれども僕だつて君が高利貸に苦められて居たことを知つて居る。左樣いふ深刻な性質の金で君が僕を助けやうと言つて呉れても、それは僕の本意で無いと思つたから、そのことを佐藤君に話して君に斷つた。

君は佐藤君に、

『どうせ僕だつて足りないさ――足りない序に、何とか仕やうぢやないか。』

と話したさうだね。

彼樣いふ君の行動は何となく今に成つて思ひ當る。君が椎名の家の方へ歩いて行つてお菊さん親子の力に成らうとした心は、やがて僕を助けやうと言つて呉れた心ではなかつたらうか……それほど君の心は寂寞を極めたものでは無かつたらうか……斯うして音のしないほど靜かに、忍び寄る雨のやうに、復

た僕のところへこつそりやつて來て吳れるといふは昔ながらの無言な君ではないか……

姉さんが亡くなつてからのお菊さんも氣の毒なやうだつた。しばらく何處かの屋敷づとめなぞに行つて居たことも有るてはないか。秋葉の大將が心配して、獨りて椎名の家を立て通すなんて譯にも行くまいから、いつそ緣付いて、お母さんを安心させた方が好からうと成つたのだらう。それから君の方へ話が有つたのだらう。君も斷る位なら何故最初からお菊さん母子に彼様に親切を盡したのかね。そこが君だ。君なら賴母しいと思ふやうな人てもなんても、君は極く冷然として答をしたのだらう。

妙なもので、散々苦勞を仕拔いたお幾さんが今ては立派な旦那さんが有り、子福者て、家は榮えて居る。お幾さんもなか／＼やり手だね。安心し給へ。

同じ本郷の中ても君が動いた下宿の二階へ僕は訪ねたことがある。日がカン／＼部屋の障子へ射して朝といふよりは晝の方に近いほど明るい光の中て、

『今漸く起きたばかりだ。』

と言ひながら、君は小さい長火鉢の前に座つて、例の長い髮を掻き上げた。朝寢て疲れたらしい君の容貌にはまだ夢の中の心地が殘つて働いて居るやうにも見えた。

部屋には飾りらしい飾りも無かつたが、ても瀟洒と取片付けてあつて、好い心地がした。君は何を待つとも無いやうな樣子て、長火鉢に掛けてある鐵瓶の湯を汲子に移して、朝顔なりの茶呑茶椀に茶を注いて僕の前に置いた。

勝田君、あれぎり僕は君に逢はないだらうか。それとも、ホラ、鈴木君や佐藤君と四人一緒に成つた時君は低い沈着いた聲で小歌か何かを口吟んで、なぐさみに僕等に聞かせたことが有らう。爽やかな笑ひ聲が君の神經質な口唇から泄れる度に、病人のやうにデリケエトな君の手まで動いた。あれが最後だらうか。

僕が東京を去るやうに成つてからも、一時絶えて居た君と鈴木君との交通が復た長く續いたやうだね。

「勝田は彼様いふ男だけれど、復たやつて來るところが面白い。」

といふ意味の言葉を、たしか鈴木君の口から僕は聞いたやうに覺えて居る。

「何かにつけて思出すところを見ると、矢張彼の男には變つたところが有つたと見える。」

近頃に成つて鈴木君はそんな風に君の話をある雜誌に出したこともあるよ。

地方に行つて、僕は一度君の洒落を聞いた。三橋さん——誰が言出したのか、あの人は以前から若い翁のやうに呼ばれる——あの三橋さんが雜誌を出した時、昔のよしみに僕にも何か言へといふから、三橋さんも大變若返つたものだと僕が書いて送つた。するとその次の月の雜誌を手にして見ると、君の洒落が載つて居る。君は僕の書いたものを引合に出して、彼の男があんなことを言つたが、三橋老人は決して若返つたとは見えない、彼の男も今では田舍の居候だ、山猿にしてはちと色が白過ぎるまでだ。あれを讀んだ時は、ア、勝田君はまだ〳〵達者で居るナ、と左様僕は思つたよ。そして君の洒落を難有く頂戴した。何故といふに、僕の心は自分をあらはすに適當な清新な形式を探し求めて居る時だつたから

――勝田君、君も小田原へ行く頃には最早全く默つて了つた人のやうだつたね。戰士のやうに强い君の聲は段々短く、きれ〳〵に成つて行つて、終に僕の耳には聞えなく成つて了つた……深い深い雪の中に埋められた聲のやうに……

勝田君、あれほど强情を言ひ通して居た君が到頭降參して、世話する女の人と一緒に晩年を送つた、その話が近頃に成つて復た鈴木君と僕の間に出た。

「でも、勝田のやうな男が最後に極く平凡な女を見つけたところは面白い。」

と鈴木君が言ふから、

「成程ねえ。大きに左樣だ。」と僕は鈴木君の言葉に感心した。

鈴木君は僕の顏を見て笑ひ出すぢやないか。「前に君の言つたことなんだよ。」

「左樣かナア。僕がそんなウマいことを言つたかナア。」

と言つて僕は半信半疑で笑つた。

どうも僕は自分で言つたことのやうな氣がしない。矢張鈴木君の言葉としか思はれない。よしこれが鈴木君の串談でないとしても、そのために長いこと思出しもしなかつた君の晩年が復た僕に光つて見えて來たとしたら、誰の言葉でも好い。

勝田君、僕は今、柳橋に近い町の中に住んで居る。種菓子屋の隱居さん夫婦がもと住んだといふ家を

借りて居る。僕がこゝへ引移つて來た頃は、周圍は割合に閑靜な町で、古い商家のある町々に續いて、昔のまゝの板葺屋根さへつい此頃まで二階から見られた。僕の家の裏には常盤津林中のおかみさんも居るし、前には英一蝶の子孫の住む家もある。一つ通を置いて古い漢方醫の多紀の家のあともある。一中節の家元、長唄の師匠、その他音曲にたづさはる人々の住家も多い。斯ういふ町々に殘つた空氣はあるひは君の心を悅ばせるものが有らうかと思ふ。

しかし柳橋も變つた。船宿の窓の灯が裏河岸の水に映つたといふことなぞは、もうずつと昔話に成つた。舊兩國の夜見世は淺草橋の通へ移り、橋も掛け替り、以前の廣小路の跡には君の知らない小さな公園が出來た。その爲に一部の狹斜の街は取拂はれて、僕が今住む方へ流れ込んで來た。町の三分の一は見る間に新しく建て直つた。僕の隣には待合が出來、筋向ふには藝者屋が越して來た。暗かつた細い路地々々は急に明るく成つた。何時の間にか僕の二階は三味線の音で取繞かれた。

こゝへ來て僕は君の口からそく平といふ藝者の名を話のついでに聞いたことを思出した。君は若い時に、人に連れられて來て、斯の土地で多くの榮華と凋落とを見たといふ話を僕にしたことが有らう。山村君の所謂恐しい君の『眼』は左樣いふ中で早く開いたのではないか。そく平といふ女の名も今では極く僅かの人の口に殘つて居る。私がお酌の時分に、もうそく平さんは立派な姉さんでしたといふ女を見れば、白髮を染めて居るやうな女は恐らく居まい。一頃兩國橋の畔に近いところに增田屋の看板が出て居たが、近頃ではそれも見えなく成つた。

勝田君、君は世と戰ひ、當時の文學者と戰ひ、迫り來る貧しさと苦痛とも戰ひ、しかも冷然として死んだ。斯樣な風に僕は君の一生をある雜誌に書いて見た。君は微笑むだらうか。鈴木君の話に、勝田は陋巷に窮死したやうなことを世間では言ふが、どうして亡くなつた本所の家へ行つて見ると、勝田は勝田らしい家を見つけて居た、と僕に話したことも有るよ。

ある年、まだ僕の甥が生きて居た頃のことだ。いかに言つても僕は今の住居が狹くて困るものだから、河一つ越して本所の横網の方へ家を探しに出掛けた。河岸からすこし折れ曲つた町の中に、往來に向いて面白い窓のある、屋根の高い平屋を見つけた。裏の方へ廻つて見ると板塀で圍はれて庭も可成廣さうに見える。大屋さんも近いものだから、寄つて聞くと、部屋の數も相應にある、しばらく明けてあるからもし借りて呉れるなら屋賃はまけて置くといふ。大屋さんの娘は裏口の木戸を開けて僕を案内して呉れた。外から見掛けたより廣い家で、片隅の一部を仕切つて誰かに貸してある。庭の植木の間からそこに住む人の居ることが分る。戸を開けて上つて見ると、往來に接して窓のある部屋は茶の間に成つて居て、細い古風な戸棚なぞが壁の中に造りつけてある。何の部屋へ行つて見ても實に好く出來て居るが、なにしろ薄暗い。壁なぞまで黑ずんだ綠色に塗つたところさへある。そのうちに、しばらく人も住まないやうな陰森な感じが身を襲ふやうに遣つて來た。

何となく身内がゾーとして來て、僕は獨りで暗い戸棚なぞを見て居られなかつた。恐しさのあまり、その空屋を飛出した。

『奈何いふ家だらう。』

と僕は日の映つた裏の板塀の外へ出て、種々に想像して見た。

あまりに部屋々々が好く出來て居るので、それに僕は心を引かれた。歸りに大屋さんの家へ寄つて話して見ると、そこの娘の口から君の名が出て來た。

勝田君、君が最後に移つて住んだのは僕が見て來た家の一方に仕切つてあるところなんださうだね。僕はそれとは知らずに君が枕した部屋の隣を歩いて居た。尤も壁は厚くて殆んど隣の物音は聞えもしないほどヒッソリとして居たが。

それから二三日經つて、どうもまだ僕はあの家を斷念することが出來なかつた。甥を連れてもう一度一緒に見に行つた。甥の意見をも聞くつもりだつた。

『まあ、來て見給へ。』

と僕は甥を誘つて行つた。

『へえ、こゝが勝田さんの亡くなつた家なんですか。』

と甥は僕と一緒に往來に立つて隣の方の窓を外から眺めた。甥は君のことも蔭ながら知つて居たからね。

復た大屋さんの娘に戸を開けて貰つて僕等は表の入口から入つた。

『表の見付は何でもない家のやうで、内へ入つて見ると實に凝つたことがしてある――昔の人は考へ

て造つたものですナア。」

と言ひながら甥も見て廻つた。

「惜しいナア。いかに言つても暗いね。」

と僕は部屋々々へ甥を連れて行つた。その暗さは普通の暗さでなくて、妙に朦朧とした暗さだつた。身體の震へて來るやうな暗さだつた。

「下屋敷にでも造つたものだらうか。變に陰氣な家だね。」

「さうですねえ。」

「一寸、君、向ふの方を見給へ。何か芝居にでもあるお孃さんが長い髮の毛を垂げて立つて居そうぢやないか。」

僕は茶の間の横の暗い突當りにある白い古風な襖を甥に指して見せた。甥も見て笑ひもしなかつた。

「暗い。暗い。」

と甥も深い廂から日の光の射した縁側の方へ出て言つた。

「叔父さんの神經で厭だと思つたら、御止しなすつた方が好いでせう。」

斯う甥も言ふものだから、僕等は互に顔を見合せて、やがて復た二人で心地の好い日の映つた家の外へ出た。到頭僕は借りることを見合せた。

君が以前住んだといふ隣の家の勝手口からはおかみさんらしい人が顔を出して、僕等の方を見て居た。

勝田君、甥も今では君と同じやうに最早斯の世には居ない人だ。それから復た僕の家では人數も小勢に成り、住慣れた今のところに落着くやうにも成つた。

夕日は二階の部屋に滿ちて來た。壁も、障子も、僕の眼前にあるものは何もかも深い色に輝いて來た。一度聞えなく成つた君の聲は此節復た僕の耳に聞えて來た。下座敷には今、遠い旅から歸つて來た人が居る。十年の餘も音信を聞かなかつた人が居る。その年老いた客のために、僕は夕飯の仕度をさせやうと思ふ。

左樣言へば勝田君、君は以前とすこしも變らないではないか――殆んど舊のまゝだ――君よりはずつと年少であつた僕なぞが、髮の剛い故か、餘計に白いやつが目立つと此節では言はれて居るのに、君の長い髮の毛は何時までも黑々として見える――

――(をはり)――



雛勇

長田幹彦

松岡さんが愈々歐羅巴へ旅立たうといふ二三日前の晩であつた、幼馴染の村上さんと、京へ來て初めて昵懇になつた私とは永の別れを惜しむために上の木屋町の春月といふ席貸しで心ばかりの小宴を張つた。その晩は遠い旅路に出てゆく人と、それを送る人とのしんみりした心持ちを殘りなく汲みあふために、態と若い藝妓や舞妓達の賑やかな座もちを避けて、松岡さんが長年の間贔負にしてゐた春之助と云ふ老妓と、それに同じ年頃の妓樓(ちやや)の女將をその席へ招んだだけであつた。そして西石垣(さいせき)の千茂登からひねつた食べものを仕出させてそれを肴に苦茗を啜るやうな改まつた氣持ちで盃を汲みかはした。

酒の弱い松岡さんは色白の美しい頰をほんのり染めながらいつになく口健めに語つた。伯林、倫敦、巴里と見も知らぬ遠い國々の都の話から、話題は幾度か懷かしい京の街の思ひ出に歸つて、しまひには涙の滲むやうな哀深い言葉が一座の人々の脣に溢れて來た。そして更けまさる夜とゝもに興趣は益々凝つて東山のなだらかな頂に研ぎだしたやうな冷たい片破れ月が浮び出る頃にはいつの間にか誰も彼も皆浮世を忘れたやうな賴りない氣持ちになつてゐた。

「なあ、松岡さん。雛勇が伊勢へ賣られて行つた晩もこんな晩やつたなあ。」話の途絶れた時、村上さんはふとものに打たれたやうにつかぬことを云ひ出した。

「おゝ、そや、そや。矢張月のある寒い寒い晩やつたなあ。もう長いことになるなあ。」と、松岡さんは遠い昔の幻を凝視するやうな慘ましい眼眸をしながら云つた。

それを聞いた春之助と女將はこれも急に昔を思ひ出すやうな心持ちを顏色に現はしながらじつと松岡さんの顏をみてゐたが、やがて女將は先づ口をきつて、

「ほんまにもうひと昔になりますえなあ。あの頃は松岡はんもまだお若うおしたわ。」

「さうとも、まだ二十二やつたからなあ。」

「ほんならもう八年も前のことになりますかいなあ。澤市の云ひ草やおへんけど、月日の經つのは早いものどすなあ。」

「ほんまにいな。」と、春之助はのべの細い煙管をはたきながら感に耐えぬやうに云つて、「せやけど、あん

たはんと、雛勇はんの噂もえらい久しいものどしたえなあ。ほんこの頃まで祇園では話の種に出ましたえ。私もせんど長いことで萬壽小路のお師匠はんに逢ひましたらな、どないにしとゐやす云ふてなあ、あんたはんのことをきつう問うてやはりましたえ。ほしてな、あの人が祇園で初めて雛勇はんをひいて出やはつた時の話が出ましてなあ、何やしらきつうしゆんてやはりましたえ。」

松岡さんは眉ひとつ動かさずにじつと飲みさした盃を見てゐた。黒い瞳の底には折々悲しみに彩られた深い心持ちが靜かな焔のやうになつて映つたり、消えたりした。

女將はそのさまを見てゐるうちに身につまされてか、やがて村上さんの方を顧みながら、ひそやかな聲で、

「ほんまに今夜のやうな晩どしたなあ。もうあすは伊勢へ往ぬちうて、雛勇はんがきつう泣かはりましたやないか。ほ、夕方から私の家の離れでお炬燵をして、皆で別れのお盃をしたやおへんか。」

「さうやつたなあ。あの頃は春千代もまだ舞妓やつたなあ。」

「ほして、春千代はんがもう一生逢へんちはゝつて、聲を立てゝお泣きたもんやて、皆にはかに悲しうなつてなあ、松吉はん姐はんにきつうひかられましたえ。私よう覺えてる。」と、春之助はその時の有樣を思ひ起こすやうに眼を細めながら云つた。

「さう、さう、さうどしたなあ。ほんまに何處ぞ遠い遠い外國へでも行かはるやうに云ふて、泣きましたそなあ。」と、薄く笑ひながら女將は云つて、松岡さんの方を顧みながら、「あんたはん覺えとゐやすか。」

「覺えとられんてどうする。あの晩のことはいつまでたつても忘れやへんぜ。」と、松岡さんは平常とまるて違つた感傷的な調子て答へた。そして耐らなくなつたやうに盃を執りあげながら、「今頃はどないにしてるやろなあ。もうこの二年ほど少許も消息もないが……。」

「それがな、私達もどないになつとゐやすかちよいとも知らなんだんどつせ。ほしたらな、ほん十日ほど前どした、私ふつとな、君蝶はんからあの人のこと聞きましたえ。」と、春之助はその言葉と一緒にひと膝のりだして、「せんど君蝶はんがなお客さんに連れられてお伊勢はんへ詣らはつたんどすて。その折な桑名のお茶屋て雛勇はんに逢はゝつたさうにおつせ。何たら云ふた、菊菜はんやつたかいな、そんな名て出てやはつてな、町てもええ藝妓はんのうちやさうにおつせ。」

「誰やつたかもそんな話をしとつたが、そらほんまの雛勇か何や分らんぜ。僕はどないにしてもあの女はもう死んでしまうたやうに思はれて叶はんのや。」と、松岡さんは眞顔て春之助の顔を見つめながら云つた。

「阿呆らしい。そんな驗の悪いこと云はんとおゝきやすな。そらほんまの雛勇はんちう話どつせ。自分て私は祇園にゐた雛勇どすて君蝶はんに云はゝつたんどすさかい、此れより確かな證據はおへんわなあ。」

女將は幾度か合點いた。

一座はそれから雛勇を中心に置いて、松岡さんと彼女との間に起つたさまざまの哀深い戀語りに耽つ

た。十四の時から思ひそめて、十八の冬伊勢路へ身を賣られてゆくまで互に思ひ思はれた奇蹟のやうな二人の運命はいつまで語つても語り盡せないやうな話題を次から次と與へて行つた。

私は丁度濃淡のけぢめも分らないやうになつた昔の絹卷ものを繰りひろげてゆくやうな懷かしい心持ちて、その話に聞き入つた。それからそれと場景が移つてゆく度に、私の眼の前には數限りない幻が湧き上つて、まだみづみづしい顏色をした若い松岡さんと、見も知らぬ美しい舞妓の雛勇とが四條河原の涼みや、祇園の夜櫻や、蠟燭の火影や、優しい行燈を誇りとした時代の祇園を背景として種々に織り紡いた運命の絲が私の眼には此の上もなく美しく映つて來た。私は昔の話に耳をかしながらいつか夢のやうな幻影を虛空のなかに見出してゐた。

………もう夜の十一時を過ぎて後のことである。若い松岡さんは最後の都踊りの幕が落ちる少し前に慌たゞしく立上つて、ひとゝ蒸息にむされた觀客席から人氣の薄い下足場へ出て來た。そして年老つた下足番の老爺が水鼻汁を啜りながら差し出す駒下駄をつッと爪先へ突懸けてそのまゝホテルの車が梶棒をならべてゐる小路をぬけて、曲角のとつゝきにある樂屋口の方へ回つた。そして燃えつきた篝火の光に照らされながらしよんぼり土塀の際に佇んで都踊から歸つて來る舞妓の雛勇を待つた。

圓山の枝垂櫻がもうちらほらと散りそめやうと云ふ頃なのに、京の街にはまだ冬が名殘りをとゞめて、

宵々ごとにはしつとりとした寒氣を含んだ風が何處からともなく人の層に迫つて來る。その晩もさうした風が靜かな嘆息のやうに吹滿ちて、篝火のかすかな焔を舐めると一緒に戀に燃えた松岡さんの胸にもしみじみと滲み徹つて來た。しかし彼はまだ醒めきらぬ夢のやうに織り出されては消えてゆく踊りの場面の艶やかさに醉はされて、そのなかでゝ殊に美しく粧つた雛勇の舞姿が眼の底に鏤りつけられて離れない。そして幕があく少し前に、花道の溜りの揚幕の陰から雛勇が臙脂の燃えた頰を斜につき出して、にっこり笑ひながら、

「雛勇どつせ、分つてますすか。あのなあ、歸りに門で待つてとくれやすや。」と、小聲で呼いたその言葉が耳の底で幾度となく繰り返へされて、彼には今宵の逢瀨が何とも知れぬ甘い魅力に充ちた心持ちを以つて待ち設けられるのであつた。

場内では祇園囃しの太鼓と鐘の音が遠く幽かに鳴りだした。それとゝもに三味線の音色と唄聲が急に賑やかに縺れて來て、そのぞよめきに送られて花環のやうに美しく搖れながら引込んでゆく舞妓達の姿を思ひ續けてゐると、やがて下足場の方で歸りを急ぐ觀客の騷々しい動搖が聞え出した。早いものはもうぞろぞろと群をなしてほの暗い篝火のなかを歸つてゆく。

「おかあはん、あてえのこぼこぼがみえんわ。何處へいたんやろ。」と、甘えるやうに叫ぶ聲に驚かされて、ふと樂屋口を覗きこむと、小行燈の點つた細路次の彼方には踊りから歸つてゆく舞妓や、藝妓の姿が幾人となくみえだした。

「春勇はん。あんたはん何處え？」
「あてえなあ、萬竹はんへいて、それから大勝はんへ廻らんならんの。」
「さうか、えゝことなあ。大勝はんやつたら川島はんて寄せてお貰ひるのやろ。あてえも知らして欲しいわ。」
「きつい氣えなあ。あとてさう云ふて知らして貰らうて上げますわ。」
などゝ口々に小鳥のやうに囀る聲が聞えて來る。
松岡さんは俄かに破れるやうな激しい胸の動悸を覺えて、思はず壁際へぴたりと體を押しつける。と、その時、門口からは幾人かの舞妓が苧姆(おちよぼ)や、婢衆(をなごしゆ)に連れられてこぼこぼの優しい鈴を踏み鳴らしながらついと歩み出て來る。前髮いつぱいに挿しかざした花簪の青や紅を美しくゆらめかして、人形のやうに濃く彩つた臙脂や、白粉をほの暗い篝火の前に浮き出させて、しんなりと羽織つた縮緬の羽織も此のうへなく艶かしい。
「ほ、松岡はん。先日はおほきに。何しとゐやすの。」と、一番最後に出て來た一人の舞妓はつゝッと松岡さんの方へ走り寄つて來て聲をかける。
「お、小菊はんか。」と、松岡さんは不意を喰つたので、言葉も出ないほどどきまきしながら、「もう踊りは濟んだのやな。」
「いま濟みました。こんな處へ立つて何しとゐやすの。」と、その舞妓は思惑ありげな笑ひを口のほとり

に漂はせながら云つた。

「なにて、待つてんならん人があるもんやさかい……。」

「ふん、雛勇はんどつしやろ、まあ、どうえ。きつい氣どすえなあ。」

「そんな大きな聲で云ふたら人に聞えるがな。」と、松岡さんは周章てゝ掩ひかぶせるやうにその言葉を抑へる。

「人に聞えたかて宜ろしいやないか。」と、小菊は可愛い、脣をつぼめて笑ひながら、「もつと大きな聲で云ふてあげまへうか。ほゝゝ。そやけど雛勇はんもうぢつきに出て來やはりまつしやろえ。せいぜい待つといてやす。」

そこへまた樂屋口から七八人の藝妓と、舞妓が賑やかに笑ひ崩れながら歩み出て來た。見知り越しの誰彼は松岡さんがゐるのを見附けると一人二人づゝ周圍へ寄つて來て、小菊とさゞめき合ひながらたつた一人の松岡さんを嬲りだした。彼は幾度かそれをはづさうと試みたけれども到頭駄目だつた。舞妓達の優しい言葉はあるかなきかの蜘蛛の巢のやうに體のまわりへ絡みついて、松岡さんは憐れな囚人のやうに肩をすぼめながら益々土堺の方へ身をすくめた。

と、なかでも一番柄の大きいひとりの舞妓は突如松岡さんの袖をとつて、

「松岡はん。えゝこと云ふて上げまへうか。雛勇はんはなあ、ほんまにいけずどつせ。今な、大勝はんから逢ひに來やはつてな、木屋町へ行かはりましたえ。旦那はんに寄せて貰ふのや云ふてな、きつう嬉

しさうにしとゐやしたえ。」と、云ひさして、すぐ傍に立つたいま一人の舞妓に眼顔で相圖をする。と、その舞妓は急に眞顔になつて、

「ふん、さうどしたえなあ。ほんまに惡い人どすえなあ。私等やつたらどないにしたかてあんなてんがうは晴れがましうて云へんわ。」

「さうどすとも。そやさかいにもうあんな怪體な舞妓はん待たんとおゝきやす。ほして私等と一緒に往にまへういな。」

松岡さんは恥かしさと、氣拙さに頭が混亂して、返事をすることさへ出來なかつた。唯默つて、俯向きながらふらふらと歩み出した。そして舞妓の群に包まれたまゝ花見小路から低い甍の續いた賑やかな四條通りへ出た。

ほの暗い行燈や、紅提灯や、約ましやかな店明りに飾られた狹い街筋には夜更とも思はれぬ雜踏が流れてゐた。夜櫻から歸つて來る人々は醉ひの出た顏を薄闇のなかに浮き出させながら、行きずりの女達に戲言を浴びせかけたりなぞしてゐた。そして萬亭の角から四條大橋までの間は都踊歸りの人の群も交つていやが上に賑はしさを添へてゐた。

松岡さんはともすると迷れさうになる舞妓達の後からとぼとぼと歩いて行つた。後髮をひかれるやうに今思ひ捨てゝ來た樂屋口が頻りに氣になつてはゐたが、と、云つて今更後へ引返へす譯にもいかず、强い力に誘なはれてゆくやうにひどく氣を落してついて行つた。そして心の底では取留めもなく雛勇の

美しい姿を追ひ求めて、木屋町へ行つたといふことが何だか夢のやうでまるつきり信ぜられなかつた。
「なあへ、松岡はん。ちよつとお勝さん姐はんの處へ寄せて貰うたらいきまへんか。」と、云ふ聲に驚かされて、ふと顔をあげると、彼はいつのまにか祇園の細い小路を横へきれて絃歌のさんざめきの充ち溢れた街へ來てゐた。小松といふ彼のいきつけの妓樓の行燈がすぐ鼻の先に見えて來た。
「行てもえゝけど、今夜は忙がしさうやから又の時にせう。」と、松岡さんは氣が進まぬやうに呟いて、それとなく遁げやうとしたが、舞妓達はなかなか承知しない。
「そらさうどつしやろ。雛勇はんが來やはりまへんさかいなあ、早う往にたうおつしやろ。」
「早う往んで夢でもおみやしたらえゝわ。」
「ふわあ、きつい氣。」
三人の舞妓は家のなかへ聞えよがしに聲をあげて囃したてた。松岡さんも今更否みかねて到頭その儘妓樓の覗り戸をあけた。
それから半時ばかりの後、松岡さんは小松の奥座敷で嘆きわづらふやうな寂しい白川のせゝらぎに聞きとれながら頻りに深い思ひに沈んでゐた。座敷に殘つた二人の舞妓は蠟燭のほの暗い火影に華やかな姿を浮きたゝせながらそばに人のゐるのも打忘れて多愛のない噂話に耽つてゐた。その時、門口の方でふと甲高な女の聲が聞えた。人と云ひ爭ふやうな、激した調子で頻りに何かぐとぐとと訴へてゐる。耳をとめてきくとその聲は正しく雛勇だつた。

「ほ、雛勇はんや、松岡はん、來やはりましたえ。嬉れしうおつしやろ。」と、舞妓達はぴたりと話をやめて笑ひながら松岡さんの方を見た。そして暫らくの間聲をひそめて聞いてゐると、やがて廊下を渡る足音が近づいて來て、仲居の後から雛勇がひどく浮かぬ顔容をしてしよんぼり入つて來た。

「松岡はんのいけず。よう覺えとゐやすや。」と、彼女は座敷へ入ると突如松岡さんの傍へ摺り寄つて、恐い眼眸をしながら彼の肩を强く打つた。

「あれ、雛勇はん、何をおしやすのえ、阿呆らしい。」と、仲居が慌てゝとめるのも聞かず雛勇は又手を振りあげて、

「ほんまに貴方はんのやうないけずなお方私（あて）知らんわ。あんなに待つてとくれやすや云ふてるのに、小菊さん達と一緒に往んでしまはゝつて、……」と、急に涙聲になりながら振りあげた手で長い友禪の袂を握つて、「私、貴方はん好いてんのと違ひまつせ。もう貴方はんのやうなお方厭どす。」

「何いふてんのえ。なんぼ待つたかて貴女が出て來やへんのやないか。」松岡さんは、餘りの劍脈に驚ろかされて、妙にてれた笑ひ方をしながら辯解らしく云つた。

「嘘どつせ。嘘どつせ。私ちやんと知つてます。貴方はん小菊はん好いとゐやすさかい、私たつたひとり置いて往んでしまはゝつたんにやわ。」と、雛勇はその儘傍を向いて激しく歔欷しだした。

仲居も、ほかの舞妓達も呆れて、そのさまをみてゐた。松岡さんも手の出しやうがなくて、悲しげな顔容をしながら彼女の眞白な襟脚をみつめてゐた。と、雛勇は泣くだけ泣いてしまうと、今度は急に冷

たい顔容になつて、仲居の方を顧みて、

「姐はん、えらい濟まんことッすけど、私（あて）もう往なして貰ひますわ。」と、きつぱり云ひ切つた。

「又出さはつたえなあ。そんな阿呆らしいこと云ふたかてあかしまへん。あんたはん舞妓はんやないか。」

「そやかて、そやかて、……」と、彼女は駄々をこねるやうに肩を揺りあげながら呟やいたが、やがて又傍を向いてしくしく咽び泣きしだした。そして今度は何と思つたか、溢れ出て來る涙て指先を濕めして、眉根にひいた臙脂や、脣の濃い紅を矢鱈にひきのばして厚く化粧した白粉の地へまるて切られ與三のやうにさまざまの醜い線を描いた。そして疳が昂ぶつて來るやうに時に激しく肩をふるはしては聲を呑んて泣き續けてゐたが、暫らくするとその儘ついと立ち上つて、燃えたつやうな美しい友禪の裾をしどけ踏みしだきながらばたばたと座敷を出て行つた。

一座は呆氣にとられて唯ぼんやりその跡を見送つた。そしてひそやかな足音がぷつりと消えてしまうと、仲居は先づ口をきつて、

「怪體な人どつせなあ。どないせうちうのやろ。」と、獨語のやうに云つたが、やがて松岡さんの姿をみて、

「あの人のやんちやにもほんまに困りますえなあ。怒らんとおゝきやすや。いつでもこれどすさかい。」

「怒らへんけど、……なんぞ氣にさわつたことでもあるのやろか。」

「さうどつしやろな。ちよいとかて思ふやうにならんと、誰方はんの前でもあれどすさかいなあ、舞妓はんにしては少しいきすぎてますわなあ。」と、仲居は嘆息をつきながら云つて、「あんな氣やつたら今にきつと苦勞しやはりまつせ。藝妓はんにならはつた後かてあの氣象がなほらなんだらきついめに苦勞しやはるに極まつてます。世の中ちうものはさう思ふた通りにいくもんやおへんからなあ、ほんまに損な性分どすわなあ。」

「そやけど」、と、松岡さんはその言葉も碌々耳へ入らないやうにそわそわして、「また何ぞ無茶をしやへんかしら。一寸後を追うていて、惡いところは謝る云ふて呼び返へしてんか。」

「そんなに心配おしやはんかて宜しいがな。もう放つときやす。今に歸つて來やはりますがな。」

「いや、頼みやさかい連れて來てんか。」と、松岡さんは眞實を頰にあらはして云ふ。

仲居も到頭その言葉を否みかねて、座敷を出て行つた。そして暫らくすると帳場の方から袖で顏を掩ひながらせぐり泣いてゐる雛勇をなだめつ賺しつしながら連れ歸つて來た。

「さ。もうそんなやんちや云はんと、ちんと涙をふいて面白う遊ぶの。舞妓はんは舞妓のやうにしとらんと人が笑ひまつせ。さ、こゝへ來てお坐りやす。」と、仲居は彼女の肩を抑へて松岡さんの傍へ坐らせる。そして袖をひいて、そつと顏を差し覗かうとすると、彼女はその儘紅友禪の八ッ口をだらりと小さな膝の上にこぼして、眞白な手で突如顏を掩つた。散々描きちらした紅や臙脂はいつのまにか涙で溶けて、面長な眼の細い顏は何とも云へないほど滑稽けてみえた。

「まあ、まあ。怪體な顔やなあ。」と、仲居は思はず噴笑だして云ふと、雛勇はなほ固く顔を掩つて、今迄とはまるで違つた冴えざえした聲で、

「そんなにお見やしたら、晴れがましうて叶はんわ。」と、云つた。そして白魚のやうな纖細い指の間から見える玉蟲色の小さな脣にはいつかもう優しい微笑みが綻びてゐた。……

かうした取留めもない幻を追つてゐるうちにふと私の耳にはまたひそひそと呟やく女將の話聲が聞えて來た。雛勇の昔語りから深い情感が一座の人々の胸に滲んで、ほの暗い蘭燈の火影のたゆらぐ間内の氣勢は何處となく行きつめたやうな悲しみに喘いてゐた。

女將は訴へるやうな低い調子で猶ほも語りつゞけて、

「桑名といへば近いところどすさかい、お立ちやす前に一遍逢ひにお出てやしたらどうどす。また逢い度いとお思ひやしたかて、遠い遠い外國からやつたらなあ。……」

「さうどす、さうどす。ほんまに逢いにいておやりやすな。」と春之助も眞面目な調子で云つて、「雛勇はんも永いことどすさかい、どないに嬉しうお思ひやすか知れまへんえ。」

「そやなあ。」松岡さんは腕ぐみをしたまゝ考へ深い眼眸をしてゐたが、やがて喉のからむやうな低い聲て、

「そやけど、永いこと逢はんのやから、お互に境遇も違うてるし、また心持ちも違うてるしなあ、今度めに逢うたら却つて怪體なものになるかも知れんぜ。」

「そらなんとも知れまへんけど、……雛勇はんやつたら決して貴方はんのこと忘れとゐやすやうなことはおへんえ。あゝ云ふ質の人は體はあんじようにしてゐたかて、きつう執着の强いものどすさかいな。」

松岡さんはそれを聞くと微かに肩をふるはしたやうだつたが、やがて熱のこもつた調子で、

「しかしまあ逢はん方がえゝやろ。逢ふてつまらん思をするよりも、今迄のことを私の胸に大切に藏まつて置く方があとで後悔せんて宜しいわ。いつ思ひだしてもえゝ夢やつたからなあ。」

一座はその儘口を噤んでしまつた。

私も何となく引き入れられるやうな氣持ちになつて、彼等から顏をそむけて、障子の腰硝子からすぐ下に廣がつた加茂の磧を眺めた。

月はいつしか西へ廻つて、朧ろげな冷たい光だけが霧のやうに四邊にたちこめてゐた。薄黑く浮き出した東山の山影や、對岸の低い家並みや、處々に瞬く小さな燈の光も霜夜の靜けさの底に凍てついて、何處をみても春の思ひ出を懷かしませるやうな溫かさが潛んでゐやうとは思はれなかつた。そして磧には灰色の小砂利が裸に現はれて、す枯れつくした河原蓬の原には二三日前に降り積つた薄雪が斑のやうにところどころに消え殘つてゐた。そして川水がその間にきらきらと銀鱗を碎きながら流れて、靜まりかへつた大氣の底に優しいせゝらぎの音だけが綿々と咽せんでゐる。

女將は暫らくすると又聲をひそめて、

「そやけど、ほんまに今頃はどないにしとゐやすやろな。こんな月のえゝ晩には京のことやら、松岡さんのことやら思ひだして、どないに辛い思ひをしとゐやすか知れんわなあ。」

「ほんまにいな。あんな性分の人やさかい、私らにはようその心のうちが察しられますわ。……今の身では京へ戻るちうたかて叶はんやろしな、桑名から又その先々と流れていて、末はきつとようないにきまつてまつせ。私も若い時分から隨分いろいろな人にも逢うて知つてまつけど、あんな性分の人は大方難儀な身の上に落ちやはるものどつせ。」と、春之助は年寄りらしい愚痴つぽい聲で云つた。

「ほんまに可哀さうな人どすえなあ。」女將はそれを聞くと涙ぐむだやうな賴りない聲でしみじみ云つて、その儘低く首を垂れてしまつた。……

椽先には松の小枝をそつと搖るがせながらひそやかな風が音もなく吹いて通つた。と、その途端に廣い磧の何處かで二聲、三聲續けざまに寒さうな千鳥の聲が聞えた。

「ほ、千鳥が啼いてますえ。」と、春之助はそれを機に燈から顔をそむけて、袖口で人知れず涙を拭いた。

私はその時、「河風寒く千鳥なく……。」としめやかな聲で唄はれる端唄の心持ちを思ひ起こして、美しい舞妓だつた雛勇の面影と、遠い旅路に出てゆく松岡さんの心とをしみじみ胸の底で繰返へしてみたが、そのうちにいつともなく寂しい影が心にたち添つて來て、口には云ひ盡くせぬ哀愁が次々と限りなく湧きあがつて來た。

（をはり）

暗夜

小川未明

一

吉郎は冷かな夜の風に吹かれると急に氣が靜つて全く別な心持となつた。頭は明瞭に善惡の判斷が出來て、惡酒にても醉つたやうに氣を焦立たせた感情の熱りが何處ともなく消えて、後には穩しい思ひやりのある人柄となりて殘されてゐるのを見出した時に自分ながら心の變化を怖しく思つた。意識を超越した自らの力で押へることの出來ない盲目の感情の發作を後になつて顧みると、恰かも白刃の上を踏んで來たやうな心持がする。

『よくあの時、氣が狂つて相手を殺さなかつたものだ。』と彼は心のうちで考へると覺えず身を戰かした。

薄い金屬の摺れ合ふ音のやうに、木立は夜風に吹かれて闇の裡で鳴つた。吉郎は血の氣の失せた頬を此外界の荒々しい空氣に晒して道の上に立止つて頭の上の木枝を眺めた。黑い天蓋のやうに空間に擴がつた常盤木の枝は一種の暗い怖しい影のやうに空虚の胸に射し込んで心の上を押へた。彼はどんな形をしてゐるかとこの刹那の感じを、もう一度考へて見やうと思ひ返した時には、たゞ曾て繪畫の書物で見たベックリンの描いた死の島の木立を眼に思ひ浮べたまでゝある。しかしこの遠い處を探して來たやうな比喩は心に滿足を與へなかつた。こんな風に時々神秘は自己の姿を人間の眼に見せるけれど、人間は其の姿を見て捕へやうと意識する時にはもう其の姿は消えてゐる。而して人間は其れを言ひ表はす言葉を知らない。僅かに乏しい智識を探ねて、極めて似付かない比喩を擧げて其の氣持を解釋しやうとする。吉郎は暫らく闇を透して木立の黑い影を見詰めてゐた。自然は人間の行動と無關係である。自分が今どんな心を抱いて歩いてゐるかといふことについて、何等關係しやうとしてゐないことを知つた。

彼は今頃ランプの下に火影をうけてうす黄色な顔をしてゐる妻の姿を思ひ浮べた。自分が罵つて出て來た後で妻と自分との關係を考へて見た。二人の間にはやはりこの木立に對すると全じい相解することの出來ない差別がある。二人は決して全身でない二つの別々な動物である。然るに自分が暴威を逞うして妻を罵り、飽迄自分の犧牲にしてしまはうとしてゐる其の行爲を顧ると淺ましくも思はれた。ちやうど吉郎は淋しい暗い自分の心持をも知らずに、空しく風に吼えてゐる木立があるやうに、今夜ランプの下で悲しい、怨めしい思ひを訴へる人もなく、獨り心に悶えて坐つてゐる妻のあることを考へもせずに

自分は全く自分のために何等かの興味を求めて歩いてゐるといふことが分つた。

二

其日吉郎はたゞ淋しく、腹立しく、また堪らない程悲しい氣持を經驗したのである。これといふ程の原因もなしにこんな氣持になるといふことは、極めて神經質な少しのことにも鋭く感じ易い彼には是迄もたび〳〵あつたことであるが、そんな時分には全くなんて此世に生きてゐるのだらうといふやうな味氣ない心持になつた。而して灰色の壁に向つて眼を閉じながら、靜かに思ひを廻らして希望の緒口を探ねて見たけれど、疲れた鬱いだ心に飛び立つやうな感興を與へるものもなければ、勇氣を振ひ起して大膽に進めと命ずるやうな前途に輝く目的もなかつた。彼は時々茫然として其の人の一生を支配する目に見えぬ力である幸運と不運といふことを考へたのである。而して此の果しない沙漠を歩むに等しいやうな單調な生活を破つて灰色の中に色彩を施し、生命に油を灑ぐと共に常に缺乏を感じて苦しむ物質的の方面にも滿足が出來るやうな幸福の日を送るためには自から進んで運命を作るやうな——破格な事業をしなくてはならないと思つた。而して僥倖にもそれが成功するのでなければ、どうしても今の苦しい貧しい境遇から少しでも脫することは出來ないと思つた。世間の精神的に、また物質的に成功をした人々を見ると、みんなこの生活の習慣を破つて進んだ人である。其れが思つたやうに行はれて、空想が甘く實現せられたのであつた。自分では偶像破壞者であると信じてゐても、まだ習慣に囚はれてゐて、憶病で、其上心からの道德家である自分にはそんな怖しいall or nothingのやうなことが出來なかつた。つき

纒ふ疫病のやうに兩親や、妻子の顏が念頭に浮んで、意氣地なしと言はれても、いつしか心のうちで舊い生活と新しい生活とが妥協してゐる。それで容易に自から境遇を變へて、思つたり空想したりしてゐるやうな冒險を實行するやうな氣にもなれなかつた。

自分では自からを無自覺な衆愚と別けて考へてゐても、其の實やはり衆愚と步調を合はしてゐる弱者であつたのだ。而して頭では何と考へてゐても、行てはやはり昨日と全じいやうに單調な危けのないやうな途を步いてゐて、一日を送つてゐた。また明日になつても少しは今日と變りがあらうとも思はれなかつた。自分の一生も分つてゐる！　から考へると心のうちでは何となく慌しさを覺える。而して徒らに腹立しく、また堪らなく悲しくなつて來た。

秋も次第に老けた。四邊の濕つた靜かな午後である。

空は曇つて、障子紙にはうす暗い光線がにじんで、煤けた處がうす黑い斑點となつて見えた。吉郎が物を凝視する時には、視神經の衰弱は、ゆら〳〵と體が船に坐つてゐて搖れるやうに不思議な幻覺なしには見得られなかつたのである。室の裡に獨りて坐つて、机に向つて茫然として考へ込んでゐると、冬に近づいたといふことが靜かな沈默の自然を透して感じられた。そればかりでなく刻々に暗くなりつつあつた、夕暮方の光線を見詰めてゐると一滴づゝ重く、重く胸に積り行くやうな黑い悲しみを感じたのである。たゞ遠くで鳴らしてゐる豆腐屋のラッパの音色が、この寂寞とした空間を賴りなく泳いで來

る。彼は何をしやうとも思はずにしばらく其の頼りなく消えて行く音色に耳を傾けてゐた。其の音は淋しい灰色の野原の方に消えて行くけれど、あの音の聞えて來る方には、曇つた空の下に黒い建物の頭を並べた賑かな町のあることが考へられた。……

やがて日が暮れてランプを點ける時刻になつたけれど、家の裡はうす暗く其の儘となつてゐて音もなかつた。此時妻は長火鉢の前に坐つて、手を額際に當てたまゝ沈んでゐたのである。吉郎は額際に深い皺を寄せて、机の前から起ち上ると共に深い溜息を洩らした。

「あゝ、こんな家庭なぞ造るんぢやなかつた。」と感慨に堪へられないで叫んだ。この尖つた言葉が妻の耳に響いた時には急に心が暗くなつて不快を感じさせた。けれど妻は死んだものゝやうに押し默つて俯向いてゐた。吉郎は自分でランプを點して居間に下つてゐる釣金に吊した。全く火の氣の消えた長火鉢には鐵瓶が冷え切つてゐた。室の裡がぼんやり明るくなると寒げに眠つてゐるやうな光りを此の金屬から反射してゐた。彼は障子にはまつてゐる硝子板を透して、外を見るといつしか鼠色の夕闇が足音を立てずに窓際に忍び寄つてゐるのを見た。

「夕飯の仕度はどうなつてゐるのだ？」と吉郎は、聲を鋭くして妻の前に突立つたまゝ言つた。而して眼を眤と女の頭髮の上に据えてゐると、瞳は一種の憎惡の念に燃えて怪しい輝きを放つてゐる。女は男のかういふ言葉も感情も受けるのは豫期してゐたといはぬばかりに冷かに顏を上げた。

「私は食べたくありませんから、今あなたのだけいたしませう……」と物憂さうに言つて、妻は痛々し

い關節でも動かさなければならぬやうに、迷惑さうに體を起したのであつた。吉郎は齒嚙みながら女を其處に突き倒さうかと心で思つたが、無理に堪へて、其の代りに冷かな嘲笑を顏に浮べて眺めてゐた。彼はせめても自分は皮肉に復讐をしてゐるつもりでゐた。

もう幾日か妻の氣分が勝れずに、こんな樣子で、一家には笑ひ聲一つ洩れずに送られて來た。

「あゝ厭になつた。なんて家庭なんぞ造つたのだらう……」と吉郎は前より一層腹立しく大きな聲で叫んだのである。今度は妻に聞かせるといふよりは自分に聞かせるといふやうな調子であつた。

けれど妻はこれに答へなかつた。常なら『私だつてさう思つてゐます。そんならいつでも離緣いたしませう……』と言ふのが口癖であつたが此時は何も言はなかつた。彼は心のうちで豫期してゐた言葉が聞かれなかつたので張合が拔けたやうに感じた。而して默つて立働いてゐる妻の姿を見ると思ひ切り罵つてやりたいと心の騷ぐうちにも多少の憐れみが感ぜられたのであつた。

三

吉郎は默つてランプの下で自分獨り膳に向つて飯を食べた。妻は彼と共に飯を食べずにやはり默つて長火鉢の傍に坐つて鬱ぎ込んでゐた。吉郎は心のうちで妻が先刻自分は食べたくないと言つた言葉に對してもかうして食べずにゐなければならぬのだらうと思ひながら、自分獨りまづさうに食べてゐた。而してもう自分の食事が終る時分になつて、

『お前も食べないか?』と言つたのであつた。何となく心が淋しかつたので、家庭の空氣を滑かに和げ

やうとしたのである。

「いゝえ、私は食べたくありません」と、妻は言つた。この氷のやうに冷かな言葉は彼の溫かに燃え始めた心臟を締め付けた。彼には飽迄妻が意地になつてゐるといふことが分つた。妻は急に氣分の勝れない樣子を造つた。吉郎の瞳は二たび銳く光つてこの故意らしい妻の樣子も、彼女の刹那の心持も明かに讀み取らうとした。而して一層激しい反感を惹き起したのであつた。此時彼はかう思つた。家庭を造つても、かうして妻が病氣であつたり、氣が合はなかつたりして不快の日を送るやうなら、一層家庭を破壞して互に自由の體となつた方が好いやうに思はれた。こんなに苦しい、面白くない日を送らなければならぬやうなら始めから家庭といふやうなものは造るのでなかつた。

吉郎は膳を傍に押しやつて、默つてゐる妻に向つて簞笥の抽斗から金を出すやうに命じた。彼は冷たくなつた手で火箸を取り上げて灰を搔いた。其金は妻が其月の經費のために貯へて置いた金であつた。

此時二人は互に途上の人のやうに極めて冷膽な感情を意識した。

「己は、外に出て快樂を求めて來るのだ。お前は何も此の事に對して言ひ得る權利がなからう……」と

彼は妻の顏を睨んで言ひ迫つた。

「行つてゐらしやいまし。」と妻は小聲で僅かに言つて、身を起して簞笥の前に來て坐つた。而して小抽斗を開けて中から香水の箱を出した。其の空箱の中に幾何かの金が紙に包んで入れられてあつた。妻は紙を開きながら、

『幾何上げますのですか?』と急に怨めしさうに言つて彼の顏を見上げた。ランプの光は妻の眼の中に溜つた涙に染んだ。

『三圓ばかり寄來せ。』と彼は强いて聲に力を入れて言つた。しかし其の聲は自分で思つたよりも低く、戰えてゐたのを感じた。而して妻の手から金を奪ふやうに受取つて、袂に入れると、急に悲しくなつたが吉郎は心のうちでこれではならぬと思つて、手荒に障子を開けて玄關に下りた。

振り向いて妻の顏を見ると、青白い顏をランプの光がうす黃色く彩つてゐた。彼は何となく良心に濟まなく思つたので、早く此場を脫れやうとして戶外に走り出た。

四

吉郎は寂しい暗い道を、明るい町のある方へと步いて行つた。たへず後髮を引かれるやうな暗い思ひが一步每に遺されたのであつた。家を出て來た後で妻は火鉢の傍にゐてどんなことを思ひつゞけてゐるであらうかと思つた。やはり膳を出した儘にして火の氣の消えた長火鉢の前に坐つて茫然として考へ込んでゐる姿が浮んだ。吉郎は妻の心持をはかり考へて見るにつけて、自分と彼女とは其の始め何等の關係もない個々の人間であつたといふことを知つた。たとへ今共になつて一つの家に生活をしてゐても、常に二人は別なことを考へてゐるであらう……たとへばこの社會の生活に對して思つてゐることも全じてない。自分にはもはや希望はないが、彼女にはそんなものがあるかも知れない。自分には、欲しいものもないが彼女には欲しいものがあるかも知れない。而してそんなことを常に思つてゐるかも知れない。

而して吉郎は死んで此世を去つて行く時にも、決して二人は共に行くのでない。何れか一人は此の世界に止つて尚ほ喜びと悲しみを經驗して生活をつゞけて行くのだと考へた。

畢竟人間は常に孤獨である。此の世界に自分と同じい考へを抱いて、自分と同じいやうに生活をしてゐるものは一人もない。全く誰しも同じいやうに孤獨の生活を送つてゐるのである。このことは獨り妻と自分との關係ばかりでない。親と兒と雖も全く別な生活を送つてゐるのである。かう考へて、今自分が妻を迫害して家を出て來た有樣を思ひ浮べると、自分は弱い者を自分の犠牲にしやうとしたのであつた。何となく自分は猛惡な野獸のやうに考へられた。自分の心の慾望を追はんために、自分より弱い而てし生活を異にしてゐる人間を壓迫しやうとした行爲は野獸に等しいものでなければならぬと考へられた。『さうだ。人間も野獸も何處に差別があらうぞ。』……と吉郎は口のうちて言つた。而して淋しいやるせない心を抱いて暗い坂を下つて前方に廣い野原を見渡すことの出來る河邊に出たのであつた。

此時都會には、怖しい虎列剌が流行してゐたのであつた。吉郎は毎日朝刊の新聞と夕刊の新聞とに其の疫病の處々に突發するのを知つて不安を感じてゐた。遙かに見渡すと、曇つた灰色の地平線の彼方には都會のさま〴〵な建物が眠つてゐる。彼はほのぼのと曇つた空を鈍色に染めてゐる脚光を眺めて、暫らく耳を傾けて路の上に立止つた。

この東の都會に、遠く西の印度支那のあたりから犯して來た惡疫が、眼に見ることは出來ないけれど幾百萬の人々の身の上を襲ひつゝある事を思へば一種の恐怖が其の脚光の反映にも潜んで見える。吉郎

は河の流れについて暗いぬかるみの道を歩いて來た。空模樣を仰ぐと雨は今にも落ちて來さうである。

土手の上に立ち並んだ、家根の低い二階家の燈火が、雨上りの溢れんばかりに漲つてゐる河水の上に美しく輝いてゐた。暗の底を水は幽かに音を立て悠々と流れて行つた。やがて堰に近づくと急激になつて瀧壺に飛沫を上げて凄じく轟き落ちた。瀧壺の底は暗くて分らなかつた。たゞ濕氣を含んだ寒い風が吹き上げてゐる。彼は暫らく枳殼の木蔭に蹲踞つて音を立て流れて來る水の瀧壺に落ちるのを眺めてゐた。一軒の料理屋の前に立つてゐる軒燈の火影は水の流れに浮んでたへず搖れつゝあつた。さながら赤い糸を引いたやうに火影が水の上に長く漂つてゐた。

濕つた夜の空氣を震はして、其の一軒の料理屋から洩れて來る三味線の音色がある。其の音色は彼の心に淡い悲しみを誘つた。其他其處にあつた二三軒の飮食店にはいづれも若い女がゐて心も肉も荒み果てたやうなだらしない風をしてゐたのである。

吉郎は自分はなんのためにかうして此處に來たかといふことをしみ〲と考へた。決して自分の心は浮いてゐないと思つた。其てなければ三味線の音色を聞いて心が浮き立たなければならないのに少しも愉快を感じてゐなかつた。寧ろ此の刹那頭の中では家を出る時に罵つて來た妻のことを考へて憐れを催うしたのである。而して自分のした行爲に對して後悔すら感じてゐた。けれど、またたとへさう思つたからとて二たび此儘家に歸らうとは欲しなかつた。吉郎はこの矛盾した心のうちを自から考へたけれど分らなかつた。たゞ窮りない哀愁と焦立しさと一種の苦痛とを感じたばかりである。彼はこの自分に

も分らないいら／＼とした心持を何うすることも出來なかつた。しかし自分の行爲をもとより罪惡とは思はれなかつた。また正當とは考へられなかつた。たゞ家に病み疲れた憐れな妻のあることを忘れなかつた。また此處に何物かを得て苦痛を忘れんとしてゐる矛盾した自分のあることを意識した。彼は第三者の地位に立つて、自分の哀れな悶えてゐる姿を眼の前に眺めることが出來た。吉郎は闇の中に立つて銳利な自覺と公平な批評力とを働かして、自分を誰れ憚るものもなく最も醜惡な人間に解釋しやうと試みた。

頭が不自然に働いて神經は過敏になつて、しかも精神的に疲れ果てゐる彼にとつては、かうして家を出て、淫らな病毒に染んだ女の處へやつて來るのはたゞ肉慾を追うためばかりでない。今現に彼れ自身は何等の肉慾の衝動を感じてないのにも分る。さらば好奇心のために來たのであらうか……それとも自分の秘密な病的の色情狂的の行爲のためであらうか……自分はまだ色情狂といふものゝ心理狀態を知らなかつた。しかしこの廣い世間には、たゞ何等の自覺もなしに動物的の慾情を遂行してゐる野獸のやうな人間が幾何もある。彼等の中には曾て良心の苛責もなく自覺もなく、精神の覺醒もなく、强健な肉體の要求から、飽くことを知らないまでに盲目の本能に動物的に發達した身體を委ねてゐるやうな男も女もある。これに比べると自分は少なくとも、そんな卑しむべき無自覺な種類の人間でないと考へたのである。

さらばといつて、ある快樂を得んために此處に來たといふことを自分ながら打消すことは出來なかつ

た。

『女に興味を求めて！』と吉郎は口のうちで言つた。

五

吉郎はすべての哲學を疑ふことが出來ても、此の自然界に男女の兩性が分たれてゐるといふ事實が無意味でないといふことを否定することが出來なかつた。而して何のために分かたれてゐるかといふ意味について考へずにはゐられなかつた。性慾の問題はすべての本能のうちで最も力强い、否定することの出來ない事實であると知つた。男性が女性を知りたいと思ふ慾望は、理性では容易に押へることの出來ない力である。既に是迄幾人かの女を知つてゐる吉郎にとつて此上女を知らうと欲するのは、或は一種の興味に過ぎないかも知れない。しかし自分では動かすことの出來ない根底のある興味である。この興味に惹かれて、彼は到底古來から人々が解くことの出來ない惑溺の深淵に陷らうとしてゐるのかも分らなかつた。而して彼にはこの終りない深淵に陷つて溺れて死ぬことをせめても人生の探究者として甘ずるといふやうな氣があつた。たゞすべての女性を知りたいといふことを興味といふのは間違つてゐる。吉郎にとつては少なくも眞面目な自分でどうすることも出來ない要求である。人生の殿堂についてゐるすべての窓は彼の眼には疑ひのあるものとして閉じられた。たゞこれだけは疑ふ餘地もない人生の事實である。

多くの友人や、學者が他の方面に研究の手を擴げて勉强してゐる間に、吉郎は、人間の墮落として捨

てられた路を、卑しむべき男と見られながら歩いて、最も人生に顯著な異性間の消息について成べく多くを知り、深く考へ、而して人生といふものゝ眞の味ひを知つて見たいと思つた。而してこれが最も原始的に人生を知るためには間違ひのない見解の如く感ぜられたのであつた。

彼は痛切に生活を感ずるやうな智識を自からの經驗に基いた發見に求めやうとした。而して率直に人間に向つて盲目的に出來るところまで打當つて見やうと欲した。同時にすべての人がさうてある如く誰しも人前では隱してゐるやうな性慾に關してたゞ二人女と對する時に野獸のやうな自分自身の淺ましい姿をも見詰めたいと思つた。

此時彼には頭を占領してゐた思想の空隙から射し込んで來たやうに妻の姿があり〳〵と眼に浮んだ。彼は其の顏を搔き消さうとして頭を頻りに振つたのである。何となれば青い妻の顏は彼に精神的の自覺を與へたからである。神經が過敏になつて肉體の衰弱を感じてゐる彼には此の場合肉慾の實感を興奮させるやうな刺激をもとめて、其の方に空想を走らしてゐたからであつた。夜の風は河を隔てた對岸の黑ずんだ林に鳴つてゐる。河の水はちら〳〵と火影を亂して流れて行つた。三味線の音はたるんだ皮を叩いてゐるやうに、寂寞とした夜の空に躍つてゐるやうに聞えて來た。

吉郎は無意識に戰く足に力を入れて濕つぽい枳殼の木陰から出るとぬかるみを大跨に歩いて明るく燈火の差す料理屋の方へと憧がれて行つた。

彼は快樂を追ひながら心のうちが頻りに淋しく悲しかつた。たゞ今夜を愉快に送りたい。自分の曾て

經驗しなかつた、また想像のつかないやうな事件に觸れて見たかつた。このやうな事件を造るためには彼はあらゆる男性の權威も擲つて、羞耻をも忍んで見る氣であつた。而して彼は今迄の自分とは全然違つたやうな自分を數分間の後に見出すことが出來たのであつた。

「今晩は……」と吉郎は料理屋の紺色の暖簾をくゞつて中を覗き込んで言つた。白粉を顔から頸に厚く塗つた女が、誰かといはぬばかりに此方を向いた。而して全く見覺ひのないのを自分が忘れたのでないかと頭を傾けてまだ手から三味線の撥を糸に當てたまゝ放さなかつた。

「どなた……」と少したつてから張合のぬけたやうな、疑ひを含んだやうな聲で言つた。

「もう忘れたのかい……」と吉郎は極めて平氣を裝つて言つた。こんなことをかう自然に口に出すのは昔の自分のなし得なかつたことだと感じた。而して心のうちて女が自分を知つてゐやう筈のないことを思つた。

「お上んなさいよ。……」と女は尙ほ疑ひの瞳を此方に向けて、記憶に殘つてゐる人々の顔を探して考へてゐるらしかつた。吉郎は大膽に、たび〳〵來た家の如く二階に上つて行つた。而して六疊の室に坐つた時に始めて來た室の裡を注意深く見廻した。何處にもかういふ種類の家には特有の濁つた空氣のうちに頽頽と逸樂との快い氣分を感ずることが出來た。間もなく眞白な顔の女は階下から鼻唄をうたつて上つた來た。而して吉郎の前に來て飯臺を狹んでさもしかつめらしく坐つた。

「お誂は、何にいたしませう……」と女が言つた時、吉郎はこんな境遇に身を落した女にも、まだ不斷

の警戒がゐるといふことを知つてしみ〴〵と女の顏が眺められた。而して何處に此の女の顏に其の言葉の與へたやうなしかつめらしい貞操の名殘の影があるかと探したのであつた。

吉郎は曾て見もしなかつた、まだ知りもしなかつた女と向ひ合つてゐた。しかし曾て知つた其等の女と何處に異つたところがあらう。幾百人の女は畢竟女にしか過ぎなかつた。物質の前に肉を賣り、肉の要求のために精神を踏み付けて來た女に過ぎなかつた。今かうして二人は何となくよそ〳〵しくして坐つてゐる。これは二人の間に目に見えない恐怖が横はつてゐるからでないか。禮儀とか羞耻とかいふものはかういふやうにどん底まで墮落し切つてゐる女にも、また自分に於ても、もうとつくに失なつてゐる筈であつた。

社會の表面だけを見てゐる時には人間といふものは美しいものであるといへるが、一歩裏面を見たらどうであらう。其等の人々の毎日思つてゐることは何であらう。其等の人々が隱れてなしつゝあることはどんなことであらう……其處に人間と野獸と幾何の異つたところがあらうか……或者はそれよりももつと殘酷である。或者はそれよりももつと姦淫を恣にしてゐる。禮儀とか羞耻とかいふ觀念は彼のロマンチック時代の名殘にしか過ぎなくなつた。この世紀末の現實生活に打ち當るなら、容易に其の紫の霧のやうな幻影が打ち壞されることの出來るものであつたことを知つた。今此處にかうしてゐる男と女との間には、たゞ互に知らなかつた森を通る時分に感ずる位の恐怖心以外には何物もなかつた。もし、

此室に點つてゐる電燈を消して、互の眼の中に閃めく疑ひ深い瞳の光りを見ぬやうにして、二人の心から强いて恐怖心を消し去つてしまつたなら、二人は恰かも野獸と化し去つてしまふのであつた。

吉郎は常にかう思つてゐた。人間の思想程赤裸にして見ることが出來たなら怖しいものはない。他人の思想は、他人の眼に見ることが出來ない。だからどんなことを互に考へてゐるか分らない。もし見ることが出來たならいかに殘忍であるか、醜惡であるか、淫亂であるか、利已的であるか、思想を其儘行爲に現はしてゐる野獸に比して決して讓るものでない。人間の思想を制限してゐるものは、即ち自からの肉體である。肉體を安全に保護するには、思想を赤裸に示すことが出來ない。かうして靈と肉とは人間の行爲を制限して惡魔とはしないばかりである。人間は肉のために悶えるばかりでない。最も怖るべきもの、最も殘忍なるものは彼等の抱いてゐる思想其者である。吉郎は女がどんなことを考へてゐるかと思つた。

彼は女に酒を强いて、自分も頻りに酒を飮んで、思想を朦朧たらしめることにつとめた。二人の心から、恐怖を去つて――むしろ此の場合女の心から恐怖を去らうとして――嵐のやうに體をめぐる本能を赤裸に實現したいと思つた。これが即ち吉郎にとつて人生の僞らざる經驗であると考へられた。動物として、本能を能ふだけ實現することは即ち幸福である。

窓の外には風が暗い空を横ぎつて吹いてゐる音がした。風の音に混つて、河水の轟きが聞き取られた。女が酒を取りに起つた後で、吉郎は窓際に出て障子を開いて、遙かに複雜してゐる建物の黒く浮き出た

町の方を眺めた。飴色に夜の空は、都會の燈火を反映してゐる。而して南の方は靜かに青味を帶んだうちに、一脈の明るみを湛へてゐる。たへず小さな音樂のやうなうめきを上げてゐる都會は巨大な動物が其處に横はつてゐるやうな氣持を與へた。而して吉郎はこの夜が腐爛して行く裡にこの巨大な動物の胎内を疫病が處々に黑い染みのやうに犯しつゝあることを思ふて恐怖を催うした。明朝の新聞を見るまでは、幾人今夜のうちに疫病に斃れてゐるか知ることが出來なかつた。

彼が魘されるやうな空想に耽つて、遠く飴色の空に見とれてゐる時に白粉を濃く塗つた別の女が上つて來て、體を揺るやうにして窓の外の物干臺に出た。女は雨風の吹く闇の中に立つて竿から、濕れてゐる洗濯物を外してゐた。風は、しきりに吹いて女の取り外しにかゝつてゐる濕れた布に當つた。パタ〳〵と鳴る布の吹かれる音が何となく暗い陰氣なわびしい感じを彼の心に與へた。女は默つて洗濯物を外すと窓の口に頭を出した。其處までは燈火の光りが僅かに泳ぎ付いた。亂れた髮は風に嬲られて、女の顏には青白い疲勞の色があつた。

『ひどい降りになつたね。』と吉郎は闇を見詰めながら女に話しかけた。

『左樣でご座います。』と其の女は言つて洗濯物を固めて脇の下に抱へながら下に急いで行つた。

彼は二たびチャブ臺の前に戻つた。而して暫らく耳を澄して風の音を聞いてゐた。冷かな夜氣はしみ〳〵と室に迫つて來て、秋の老けて行くことを思はせた。彼の心は、冬の前に差し迫つたといふことを感ずると共に傷んだ。連想は遂に故郷の枯れ果てた寂しい山に老ひたる兩親のゐることに思ひ至つた。

また病める妻が、今夜寂しく燈火の下に思ひ沈んでこの木枯の聲を聞いてゐることを考へた。斯く自分の周圍の人々は、苦しみを味はんがために此の世に生きてゐるやうに考へられた。人生とはかうしたものであらうか?

吉郎は二たび女が階下から上つて來た時に全く氣を換へて相對することが出來た。而して心に思つてゐないこと、また頭にて考へもしないことをたゞ口の先で面白く言つて見た。女もまた心にもないことを言つて、二人はかうして兎も角も此の場を面白く見せるのが互に世情を解してゐる人のなすべきことのやうに考へたのである。

彼はどんなやうに今夜が新しい經驗によつて送られるであらうかと思つた。而して自分の身を出來るだけ其の新しい經驗に觸れしめたいと思つた。其れには今夜をこの女と共に送つて見なければならぬと思つた。而して此家から何處かへ女の行く後に從つて行つて見なければ、其處にどんなやうに生活に苦しめられてゐる一家が、私等二人の宿をするであらうか分らない……其の家は、町の何處にあつて、どんな人々が住んでゐるであらうか……全く想像も出來ない境地に自分の身を入れるためには、自分は暫らくこの女の前で柔順に、新しい經驗の前に沈默でゐなければならないと考へた。一方にはまた吉郎は作家であつたから、自分が其等の人々の社會を描く時に、覺えてゐなければならぬことだといふやうな利己心のあつたからである。

「十二時が過ぎたら、またいらしやいね。」と女は幼兒にでも言ひ聞かすやうな物の言ひ方をした。

外は黑い幕を垂れたやうに眞暗であつた。風は募つて、雨が益々降り出した。吉郎は疑ひ深い眼で女の瞳を見た。いかなる秘密をこの女が持つてゐるだらうかと考へながら、而して暫らく默つてこれに答へなかつた。

『いゝてせう……何處かへ行つてゐらつしやいよ。而して十二時が打つたらいらつしやい……あなたうなさいよ。』と言つて、女は艶めかしい風をして、男の意識を晦まさうとしながら男の體に摺り寄つて來た。しかし吉郎の冷めた心持は、女の媚びた身形や言葉つきで何ういふやうにも動かされはしなかつた。

『こんな暴風雨に出て行つて、己は何處を歩くのだ。』と吉郎は暫らく考へてから女に訴へるやうに言つた。

『だつて、今からぢや早過ぎて困るのですもの……』と、急に女は愛想のない言葉つきになつた。吉郎には女が誰か來るのを待ち憧がれてゐるやうな樣子にも見えた。而して兎も角此夜をこの女と共に過して見るのには、自分は此の場合すなほでなければならぬと考へた。自分の心は今何に饑えてゐるてあらう……肉てあらうか? それとも單に興味てあらうか?……たゞ自分はこんなことを考へる間にも淋しかつた。而して此の世界の何處かに、自分を抱いてくれる親切な女を欲しいと思つたのだ。

『ぢや、また來るとしやう……』と言つて、吉郎は煙草に火を點けて帽子を手にとり上げた。

此の時階下て、男の聲が聞えた。女は耳敏く、熱心に下の樣子を聞きとらうとしてゐる。而して吉郎

の其處にゐることを忘れてしまつた。吉郎は階段を下りかけて女を振り向いた。

「この寒い晩に、これから何處へ行くだらう‥‥十二時になつたら來るよ。」と言つて、女の顔色を覗つた。

女はたゞ默つてゐた。未來といふものは‥‥次に來るべき經驗といふものは‥‥全く彼の思考を超越して戰える程嚴肅なものであつた。

吉郎は外に出ると、雨の沫きが横さまに來て熱つた頰に當つた。何方を向いても眞暗で風が强くて進むことが困難であつた。彼はこれも一つの自分といふものを造る上の仕事であると考へて、泣きたいやうな思ひて下のぬかるみを軒燈の火影で拾つて此の料理屋の前を離れた。（完）

○定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但淸國を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但　新年號春秋二期附錄號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替　にて御送金の場合は　**本鄕西片町十番地反省社**　と指定し拂渡局を　**東片町局**　と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金　口座は**東京三十四番**なり、これにより御送金の方は外に**登記料一錢**を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより殘金は端錢となりて却て面倒となるべし

一郵券代用　必ず**一割增**の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、**座ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委托料及送達料）

一受領證請求　は必ず返信料金を要す

大正二年一月廿九日印刷納本
大正二年二月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日 第三種郵便物認可
大正二年一月廿九日 印刷納本
大正二年二月一日發行（毎月一回一日發行）